

奈良文化財研究所学報第72冊

奈良山発掘調査報告 I

— 石のカロト古墳・音乗谷古墳の調査 —

独立行政法人 文化財研究所

奈良文化財研究所

2005

奈良文化財研究所学報第72冊

奈良山発掘調査報告 I

— 石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査 —

独立行政法人 文化財研究所

奈良文化財研究所

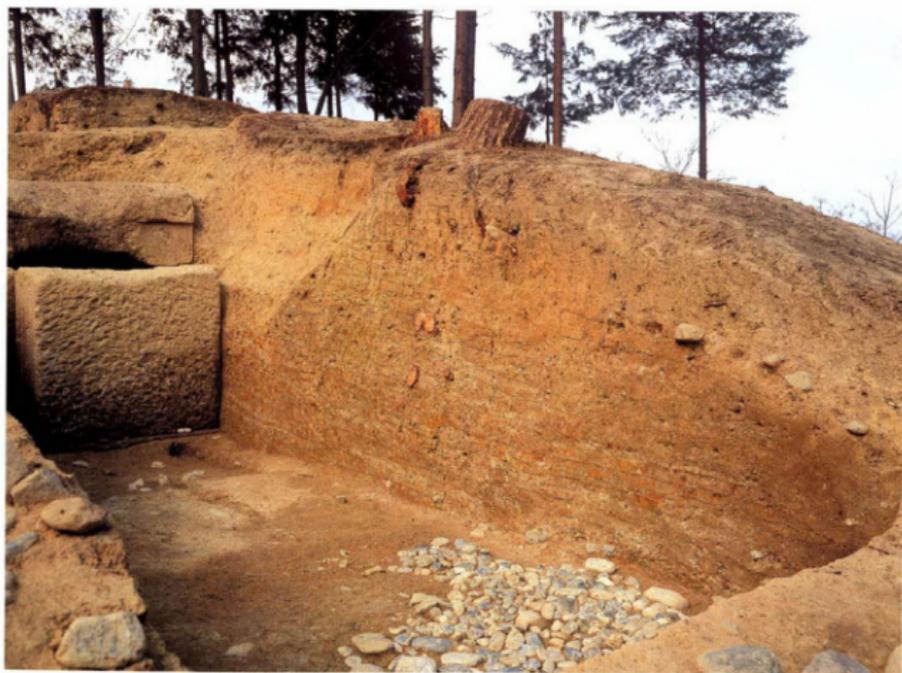
2005



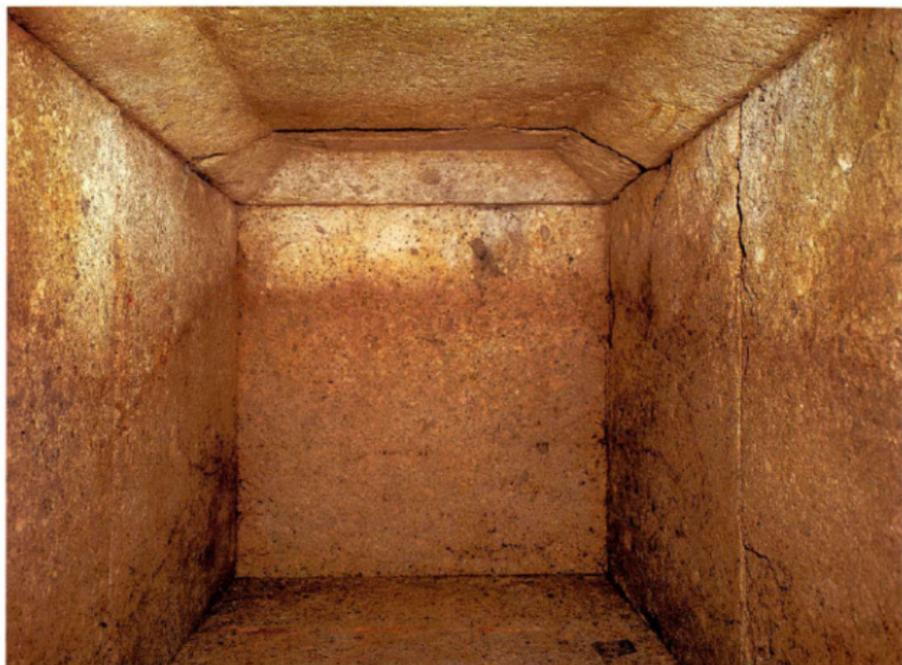
石のカラト古墳 全景



1 石のカラト古墳 墳丘と排水溝



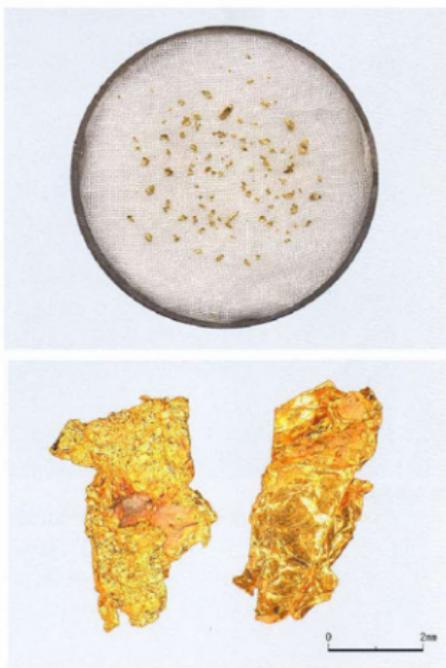
2 石のカラト古墳 墓道と墓道埋土



1 石のカラト古墳 石柩内部



2 石のカラト古墳 出土遺物



3 石のカラト古墳 金箔



音乘谷古墳 出土埴輪

序

奈良盆地の北方に控え京都府と奈良県にまたがる奈良山丘陵は、1970年代に日本住宅公団による大規模なニュータウン計画がもちあがり、それに先立つ発掘調査が奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部に依頼されました。試掘調査・本格調査をへて、瓦窯や工房を中心とした生産遺跡をはじめ、平城京と密接に関連する重要な遺跡がみつかりました。しかし、調査した遺跡は生産遺跡にとどまらず、古墳時代以後の各時代の遺跡があります。それらの調査記録はいずれも貴重なものでありますが、本報告書ではそのうち古墳に関するものを選んで報告することにしました。

なかでも国指定史跡「石のカラト古墳」は、飛鳥時代から奈良時代初めに築造された終末期古墳と呼ばれるもので、今日、壁画の保存に対して当文化財研究所が鋭意取り組んでおります奈良県明日香村の高松塚古墳とキトラ古墳によく似た構造をもつ類例のきわめて限られた古墳です。この古墳に対して実施された発掘調査の成果は、考古学や歴史の研究に留まらず両壁画古墳の保存についても有効な参照データを提示できる今日的課題を背負ったものと言えます。特殊な上円下方墳というその墳丘形態についても近年ようやく類例が増加し、この方面からも調査成果の詳細な報告が要望されているところでした。本書はこれらに対して少なからぬ寄与を果たすものと確信しております。

また、石のカラト古墳の次に扱いました音楽谷古墳は、出土した埴輪の検討作業により、これまで低調と見られてきた古墳時代後期の畿内の埴輪を見直す必要を迫る多彩な形象埴輪群をもっていたことが明らかになりました。横置りの馬をはじめ、東国独自の発展と評価されがちな6世紀代の埴輪が実は畿内に対比資料が存在していることを示すことができました。

奈良文化財研究所では日々の発掘調査とともに、こうした過去の調査成果の新たな見直しも絶えず続けていく努力を続けております。今後も、同様な作業により新たな発見や考え方の修正が迫られることもあるでしょうが、過去の成果を十分に受け止め、今日の調査に臨む姿勢を忘れてはならないと思います。本書がその主旨に少しでもかなうものとなれば幸いです。

最後に調査以来、各種の便宜をはかっていただいた京都府・奈良県両教育委員会をはじめ、発掘・資料整理など各方面でご援助いただいた関係の皆様方に厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

独立行政法人文化財研究所
奈良文化財研究所
所長 町田 章

奈良山発掘調査報告 I
— 石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査 —

目 次

第 I 章 序 言	1
1 調査のあらまし	1
2 奈良山周辺の歴史的環境	2
3 調査組織	5
第 II 章 石のカラト古墳	7
1 研究史	7
2 発掘調査の経過	9
A 発掘区の設定と調査の経過 ... 9	
B 調査日誌	11
3 遺跡の立地	16
A 地理的環境	16
B 発掘調査前の状況	17
4 発掘調査の成果	19
A 遺 構	19
B 出土遺物	43
第 III 章 音乗谷古墳	46
1 古墳の立地	46
2 発掘調査の経過	46
A 発掘区の設定と調査の経過 ... 46	
B 調査日誌	49
3 発掘調査の成果	52
A 音乗谷古墳の現況	52
C 出土遺物	63
B 遺 構	52
第 IV 章 第 13・15 号地点	104
1 調査の経過	104
A 調査の概要	104
B 調査日誌	106
2 第 15 号地点の調査	106
A 古墳の立地	106
C 出土遺物	109
B 遺 構	108
D 古墳の復元と年代	110
3 第 13 号地点の調査	111
A 発掘調査の成果	111
B 出土遺物	113

第V章 考 察	115
1 石のカラト古墳の築造過程の復元	115
2 石のカラト古墳の規格	119
A 墳丘規格	119
B 石櫛の規格	121
C 上円下方墳の規格論	122
3 終末期横口式石櫛墳の比較	123
A 墳 丘	123
B 盛土構築方法・外表施設	126
C 石 櫛	127
D 棺と副葬品	128
E 金 箔	130
4 石のカラト古墳出土品の科学的分析	132
A 金・銀	132
B 琥 珀	134
C 漆および繊維	136
5 音乗谷古墳の埴輪の特質	138
A 馬形埴輪	138
B 牛形埴輪	139
C 双脚輪状文形埴輪	141
D 玉杖形埴輪	144
E 音乗谷古墳出土埴輪の評価	144
第VI章 結 語	149
English Summary	151

図 版

巻頭図版

- | | |
|---------------------|-------------------|
| 1 石のカラト古墳 全景 | 3 1. 石のカラト古墳 石櫛内部 |
| 2 1. 石のカラト古墳 墳丘と排水溝 | 2. 石のカラト古墳 出土遺物 |
| 2. 石のカラト古墳 墓道と墓道埋土 | 3. 石のカラト古墳 金箔 |
| | 4 音乗谷古墳 出土埴輪 |

PL.

石のカラト古墳

- | | |
|--------------|--------------------|
| 1 1. 奈良山丘陵全景 | 3 全景 |
| 2. 復元整備後 | 4 1. 調査区近景 |
| 2 1. 遠景 | 2. 調査区近景 |
| 2. 調査前 | 5 1. 調査区近景 墓道埋土除去後 |

第13・15号地点

39 第15号地点古墳

1. 調査区

2. 周溝

40 第13号地点

1. 第5トレンチ

2. 第4トレンチ

3. 第3トレンチ

4. 第1トレンチ

41 第13号地点古墳

1. 円筒埴輪列

2. 円筒埴輪列

42 第13・15号地点古墳出土遺物

PLAN

石のカラト古墳 80分の1遺構図

挿 図

Fig.

石のカラト古墳

1 奈良山周辺の遺跡 ……………	3	12 第4トレンチ平面・断面図 ……	30・31
2 トレンチ配置図 ……………	10	13 第8トレンチ平面図 ……………	32
3 検出遺構全図 ……………	15	14 第9トレンチ平面図 ……………	33
4 周辺の地形測量図 ……………	16	15 第2トレンチ断面図 ……………	35
5 墳丘測量図 ……………	18	16 墓道および石槨 ……………	36
6 第1トレンチ平面・断面図 ……	20・21	17 石槨外面実測図 ……………	38
7 第2トレンチ・墓道埋土断面図 ……	22	18 石槨内部実測図 ……………	40・41
8 第6トレンチ断面図 ……………	24	19 石槨内堆積土断面図・平面図 ……	42
9 第7トレンチ平面図 ……………	24	20 石槨内出土遺物 ……………	44
10 第3トレンチ平面・断面図 ……	26・27	21 出土土器 ……………	45
11 第5トレンチ平面・断面図 ……	28		

音乗谷古墳

22 付近遺跡分布図 ……………	47	29 D区埴輪 ……………	56
23 調査区地区割り図 ……………	48	30 石室床面検出状況 ……………	57
24 墳丘測量図 ……………	51	31 石室排水溝平面・断面図 ……	58
25 遺構配置図 ……………	53	32 排水溝蓋石除去後 ……………	59
26 墳丘南側掘削り断面図 ……	54	33 石室内副葬品出土位置図 ……	60
27 長方形土坑平面・断面図 ……	54	34 墳丘断面図 ……………	61
28 C区埴輪 ……………	55	35 馬形埴輪 (1) ……………	64

2. 墓道
- 6 1. 下方部葺石
2. 下方部隅
3. 下方部斜面葺石
4. 下方部テラス
- 7 1. S D 0 7
2. S D 0 3
3. S D 0 4
4. S D 0 6
5. S D 0 4
- 8 1. 第4トレンチ
2. 第5トレンチ
3. 第1トレンチ
4. 第9トレンチ
- 9 1. コロレル抜き取り跡
2. 墳丘下礎敷
3. 墓道埋土断面
4. 墳丘断面
- 10 1. 石槨扉石
2. 石槨奥壁
- 11 1. 石槨東側石と天井石
2. 石槨天井石見上げ
3. 石槨西側壁中央
4. 石槨南西隅
- 12 1. 石槨南半
2. 石槨礎石上面の加工
3. 石槨北側外面
4. 石槨天井石上面
- 13 1. 大刀装具・玉類
2. 琥珀玉
3. 漆片
4. 須恵器皿
5. 須恵器蓋

音乗谷古墳

- 14 1. 遠景
2. 調査区近景
- 15 1. 調査区近景
2. 長方形土坑
3. C区墳頂埴輪出土状況
4. D区墳頂埴輪出土状況
- 16 1. 主体部
2. 石室底面の礎敷
3. 石室床下の排水溝
4. 排水溝全景
- 17 1. Y軸墳丘断面
2. X軸墳丘断面
3. X軸墳丘断面
- 18 馬形埴輪 (1)
- 19 馬形埴輪 (2)
- 20 馬形埴輪 (3)
- 21 馬形埴輪 (4)
- 22 馬形埴輪 (5)
- 23 馬形埴輪 (6)
- 24 動物埴輪 (1)
- 25 動物埴輪 (2)
- 26 人物埴輪
- 27 双脚輪状文形・盾形埴輪
- 28 玉杖形埴輪 (1)
- 29 玉杖形埴輪 (2)
- 30 玉杖形埴輪 (3)
- 31 蓋形埴輪
- 32 蓋形・家形埴輪
- 33 その他の形象埴輪
- 34 円筒埴輪 (1)
- 35 円筒埴輪 (2)
- 36 円筒埴輪 (3)
- 37 須恵器
- 38 金属製品・管玉
1. 武器・工具
2. 馬具・管玉
3. 馬具・管玉 (X線)

36	馬形埴輪 (2)	65	49	玉杖形埴輪 (2)	85
37	馬形埴輪 (3)	66	50	玉杖形埴輪 (3)	86
38	馬形埴輪 (4)	67	51	蓋形埴輪 (1)	88
39	馬形埴輪 (5)	68	52	蓋形埴輪 (2)	89
40	馬形埴輪 (6)	70	53	その他の形象埴輪	91
41	馬形埴輪 (7)	71	54	形象埴輪円筒部	92
42	馬形埴輪 (8)	72	55	円筒埴輪 (1)	94
43	馬形埴輪 (9)	73	56	円筒埴輪 (2)	95
44	動物埴輪 (1)	76	57	須恵器 (1)	98
45	動物埴輪 (2)	77	58	須恵器 (2)	100
46	動物・人物埴輪	79	59	鉄製品	101
47	双脚輪状文形埴輪	81	60	馬具・管玉	102
48	玉杖形埴輪 (1)	83			

第13・15号地点

61	第13・15号地点付近地形図	105	65	第13号地点 遺構平面図	112
62	第15号地点古墳 検出遺構	107	66	第13号地点 南北トレンチ断面図	113
63	第15号地点古墳 墳丘断面図	108	67	第13号地点 出土埴輪	114
64	第15号地点 出土遺物	109			

考 察

68	石のカロト古墳 墳丘築造過程	116	75	試料 (内側) の蛍光スペクトル	135
69	石のカロト古墳 墳丘規格	120	76	漆の赤外スペクトル	137
70	キトラ古墳 墳丘規格	124	77	繊維状物質の赤外スペクトル	137
71	マルコ山古墳 墳丘規格	125	78	牛形埴輪	140
72	正六角形作図手順	126	79	双脚輪状文形埴輪	142
73	試料(透明部分)の赤外スペクトル	134	80	第9号地点SK17出土埴輪	145
74	試料(微粉末部分)の赤外スペクトル	134			

表

Tab.

1	終末期古墳の比較	131
---	----------------	-----

奈良山発掘調査報告 I

— 石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査 —

第 I 章 序 言

1 調査のあらまし

この報告は、京都府相楽郡木津町・精華町と奈良県奈良市にまたがる地域に計画された平城ニュータウンの造成に先立っておこなわれた発掘調査のうち、古墳に関するものを抽出して正式報告書として刊行するものである。ニュータウン計画は、延べ600haに住宅18000戸を建てるというものであった。

これら一連の調査は、京都府教育委員会と奈良県教育委員会が日本住宅公団から委託を受け、それを奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ依頼したものであり、費用は日本住宅公団大阪支所が負担した。

発掘調査に先立って、1964年と1965年に分布調査がなされている。これは、以後の調査及び保存計画を立案するための予備調査であり、若干の周辺部も含めて事業地内に所在する遺跡に対して通し番号をつけることとなった。その中には、従来から遺跡名のついているものや、この調査の成果を受けて新たに名づけた遺跡名をもつものもある (Fig.1)。

調査計画

このうち第8号地点については、1970年に奈良県教育委員会内に平城団地内第8号地点調査委員会を設けて、同年7月から8月にかけて発掘調査を実施し、瓦窯3基を確認した。これが奈良山第53号窯である (八賀・西村1971)。ただ残念なことに、この遺跡は保存協議中に破壊されてしまった。

その後、1972年度には、両府県にまたがって7月3日から翌年1月12日まで予備的な調査が実施された。それは、計12の地点で実施され (第2号地点の押熊瓦窯跡では瓦窯6基、第12号地点の歌姫西瓦窯跡では瓦窯6基と須忠器窯2基)、そのほか5ヶ所の遺物採集地点の踏査もおこなわれた。このうち、4ヶ所は事業地外にあり、別の1ヶ所は所在が不明となったので、予備調査はおこなわなかった (奈良県教委1973)。

1972年度の
調査

このときの調査のうち、本報告の対象となるのが、第20号地点の音乗谷古墳と第13号地点・第15号地点の計3遺跡である。

続く、1973年度の調査は10月18日から11月16日までおこなった。内訳は、奈良市歌姫町で散布地を3ヶ所、京都府相楽郡木津町で2ヶ所 (うち1ヶ所が第9号地点の音如ヶ谷瓦窯) であるが、その中には本報告の対象となる遺跡はない (奈良県教委1974)。

1973年度の
調査

1978年度の
調 査

その後、造成工事の遅れにもなって発掘調査もしばらく中断していたが、1978年度によってようやく調査が再開された。調査の対象となったのは、前2年度にもれた地点と再調査が必要とみなされた地点であった。未調査地としては第6、7、14号地点、そして、再調査として第5、9、13号地点がとりあげられ、1979年1月8日から3月31日にかけて6地点で計2800㎡が調査された。そのうち第9号地点の音如ヶ谷瓦窯では1973年度の成果とあわせて瓦窯と排水溝、作業場等の関連施設など生産遺跡の全体構成が明らかになった点が大い（京都府教委1979）。

1978年度の調査の中で本報告の対象となるのが第7号地点の石のカラト古墳の調査と第13号地点の補足調査である。

2 奈良山周辺の歴史的環境 (Fig.1)

木 津 川

奈良盆地の北に位置する平城京のすぐ北側は、低い起伏の豊かな奈良山丘陵が広がっている(PL.1-1)。三重県伊賀地方から西へ流れきた木津川は、この丘陵の前あたりではほぼ直角に折れ、田原池池へ向かって北流する。この屈曲点付近へと南から流れ込む鹿川、西から流れ込む山田川などによって奈良山丘陵の北東に狭いながら沖積地が形成されており、丘陵裾部からこの沖積地にかけて多数の遺跡がみつまっている。

なお、奈良山の範囲に現JR関西本線が裾を走る東側の丘陵も含める立場もあるが(京都府埋文1999)、本書では奈良山丘陵といえば鹿川以西を指す名称として用いることとする。

奈良山丘陵に、古代の瓦窯をはじめ多くの遺跡が存在することはかなり早くから知られていたが、ニュータウン造成に先立つ調査によって平城京に関連するさまざまな遺構についての知見が大幅に増加した。そして、その後も主として京都府側での調査が進み、木津地区内の東側の丘陵を含め一帯の様相がかなりわかってきた。それらも含め最初に、周辺の遺跡の様相を概観しておこう。

このあたりの土地利用がさかんになるのは弥生時代からである。その中心は音乗谷古墳のすぐ東に広がる大高遺跡で、弥生時代中期の竪穴式住居や方形周溝墓がみつまっている。その西側には扁平鈕式銅鐸が出土した相楽山遺跡がある。その後の後期の住居址は上人ヶ平遺跡でも確認されている。

古墳時代に入ると、木津川の対岸に椿井大塚山古墳、少し離れて稲荷山古墳、平尾城山古墳などの著名な前期大型古墳が造られるが、左岸での目立った古墳の造営はそれらに遅れ、4世紀後半の瓦谷1号墳を嚆矢とする。これは、右岸の造営主体とは系譜を異にする勢力による造営と思われるが、使用している埴輪は奈良山丘陵を挟んだ反対側、佐紀盾列古墳群西群で使用されている埴輪と同一のものであり、そこからの供給を受けたと考えた方がよい(京都府埋文1997a)。

独立の古墳としては目立ったものはその後しばらくなくなる。しかしその間も瓦谷遺跡で佐紀盾列古墳群において使用されている埴輪と同工の埴輪が埴輪棺として搬入され続けていることから、両地域の関係は継続していったことがわかる。なお、2005年度に調査された内田山B1号墳をはじめ、5世紀前半の中小規模古墳なら瓦谷遺跡よりさらに北側の丘陵上に営まれている。



Fig.1 奈良山周辺の遺跡 1:40000

- | | | | | |
|-------------|------------------|--------------|----------|---------------|
| 1. 得所瓦窯跡 | 2. 乾谷瓦窯跡 | 3. 押熊瓦窯跡 | 4. 中山瓦窯跡 | 5. 奈良山51・52号窯 |
| 6. 社師七ツ塚古墳群 | 7. 樋ノ口遺跡 | 8. 相楽遺跡 | 9. 曾根山遺跡 | 10. 八ヶ坪遺跡 |
| 11. 大高遺跡 | 12. 音如ヶ谷瓦窯跡 | 13. 歌姫西瓦窯跡 | 14. 弓田遺跡 | 15. 歌姫瓦窯跡 |
| 16. 瀬後谷瓦窯跡 | 17. 上人ヶ平遺跡・市坂瓦窯跡 | 18. 瓦谷遺跡・1号墳 | 19. 西山遺跡 | 20. 葛仁京右京 |
| 21. 八後遺跡 | 22. 木津遺跡 | 23. 上津遺跡 | 24. 泉橋寺跡 | 25. 高麗寺跡 |
- No.7 石のカラト古墳 No.20 善樂谷古墳 ×銅鐸出土地点(相楽山遺跡)

No.1～No.18は平成ニュータウン予定地内調査地点。明治45年発行大日本帝國陸地測量部作製 2万分の1測量図を元に作製。

木津地区の
遺 跡

5世紀中ごろになると、再び瓦谷遺跡に隣接する上人ヶ平遺跡で古墳の造営がさかんになる。これは群集する形態の中小規模墳であるが、規模に比べて埴輪が豊富である。そして、それらの埴輪を焼いた窯も同地区でみつかっていて、瓦谷遺跡で3基、上人ヶ平遺跡でも3基が調査されている(京都府埋文1991)。細かな供給関係は不明だが、木津地区の丘陵上が5世紀後半にはひとつの埴輪生産地となっていたともうである。ただし、それは6世紀まで続くものではない。

この埴輪窯跡と関連して、弓田遺跡が注目される(京都府埋文1997b)。流路から多量の埴輪が出土した遺跡で、古墳ではないことから埴輪の製作、出荷に関係する遺跡であった可能性が指摘されている。

これらとほぼ同時期に精華町側では木津川が北流を開始する地点の左岸で吐師七ツ塚古墳群が築かれる(梅原1933)。これは、帆立貝形古墳と方墳からなる古墳群で、上人ヶ平古墳群とは異なる勢力の墓域とみなされる。

ところで、第13号地点と第15号地点で見つかった古墳は、これらとほぼ同じか若干遅れる5世紀後半～末に築造されたもので、JR関西本線と国道24号線が抜ける鹿川の狭い谷を挟んで上人ヶ平古墳群と指呼の間にある。後に試みるようにその関連性は、弓田遺跡出土品とともに埴輪の分析によってある程度明らかにできるであろう。

その後、木津町内では顕著な遺跡が少なくなるが、第20号地点の音楽谷古墳がまさにこの段階の遺跡を代表する存在として出現する。本例を除くと歌姫横穴をはじめ丘陵南側の陶棺出土遺跡が目立つくらいで(小島・北野1959)、6世紀から7世紀前半にかけての古墳の動向については丘陵内においてはほとんどわからなくなる。

奈良山丘陵
の生産遺跡

そして、7世紀中頃から地域の様相が一変する。すなわち、奈良山丘陵内に須恵器の窯が築かれるようになるのである。歌姫西地区に位置する第10～第12号地点での調査例が該当する(奈良県1973)。主として都城へ供給する瓦の生産が活発におこなわれるようになるという当地域のその後の歴史を考える上で、まず須恵器窯が都城の形成に先立って営まれていたことは重視すべきだろう。ちなみにこの時期と思われる方位が北で西に25度振れる大規模な建物遺構が西隆寺周辺で平城京の下層で検出されている(奈良市2001)。

この前史を受けて、以下で報告する石のカラト古墳と相前後する時期から、一帯での遺跡が濃密になる。石のカラト古墳を除くと、丘陵地内では圧倒的に瓦の生産遺跡が多いが、いっぽう低地部に集落遺跡も見られるようになる。窯跡は奈良山丘陵内では、得所瓦窯跡・乾谷瓦窯跡群・押熊瓦窯跡群・中山瓦窯跡・奈良山51・52号瓦窯跡などの丘陵地の西側や中ほどに位置する遺跡と、音如ヶ谷瓦窯跡群、歌姫西瓦窯跡群、歌姫瓦窯跡など丘陵の北東裾に築かれたものに大きく分布が分かれる。そして、鹿川を越えて、沖積平野の東に展開する丘陵裾にも瀬後谷瓦窯跡群、市坂瓦窯跡などが築かれた(京都府埋文1999)。

奈良時代初期には西側の窯跡で平城宮で使用する瓦がもっぱら焼かれたが、時代が下がるにつれ東側の諸窯跡でも官所用瓦が焼かれるようになり、東側の木津地区では京域や特定寺院に供給する瓦が生産されるようになるということがわかっている。

集落遺跡としては、前述の大島遺跡と弓田遺跡で奈良時代の遺構がみついているほか、上津遺跡では平城京への物資の運搬に関わる官の木屋所がみついている。この上津遺跡を含むかたちで、恭仁京跡計画ラインが丘陵間近にまで広がっていることが知られる。

3 調査組織

調査は奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が担当した。以下に本書で取り上げた発掘調査に関わる責任者と担当者を明示して掲げ、他の参加者は一括して記載する（*が担当者）。

- 第7号地点（石のカラト古墳）** 所長 坪井清足 部長 狩野久 金子裕之*
伊東太作 岩本正二 岡本東三 木全敬藏 佐藤興治 清水真一 立木修 西村康
- 第13号地点** 所長 内山正 部長 坪井清足 黒崎直*
井守徳男 小笠原好彦
- 第15号地点** 所長 内山正 部長 坪井清足 黒崎直*
小笠原好彦 真木礼子
- 第20号地点（音楽谷古墳）** 所長 内山正 部長 坪井清足 高島忠平*
伊東太作 井守徳男 岡本東三 小野昭 佐原真 佃幹雄

報告書作成のための整理作業は2003年度から2ヶ年計画で実施した。遺構、遺物の考古学的整理作業と検討については平城宮跡発掘調査部考古第2調査室が担当し、金属製遺物や玉類の観察や分析については埋蔵文化財センターの保存修復科学研究室・飛鳥藤原宮跡発掘調査部の協力を得た。遺物の写真撮影については写真資料調査室が担当した。

本書で報告する内容は、すでに京都府教育委員会・奈良県教育委員会より石のカラト古墳については「奈良山-Ⅲ 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報」1979、音楽谷古墳と第15号地点については「奈良山 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報」1973、そして第13号地点については上記2冊で逐次概要が報告されているほか、石のカラト古墳については巽淳一郎「石のカラト古墳の調査」『奈良国立文化財研究所年報1979』でも概要を載せている。また、石のカラト古墳の調査成果を広く人々に知らせることになったのが、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館で1979年9月に開催された飛鳥時代の古墳展であり、猪熊兼勝・大脇潔・津村広志の編集による図録「飛鳥時代の古墳」が刊行されている。

本書の編集作業は、平城宮跡発掘調査部長岡村道雄の指導を得て同部考古第2調査室の高橋克壽がおこなった。執筆は文末に記名した第V章の4を除いて高橋がおこなったが、第2章については調査の担当者であった現飛鳥藤原宮跡発掘調査部長金子裕之の所見を聞きながら進めた。実測は高橋のほか、今津朱美、橋爪朝子、宮崎美和が担当し、図面の製図は大半が橋爪の手によるが一部高橋がおこない、宇野隆志（京都大学大学院生）・森下智恵（立命館大学大学院生）が補助した。

執筆に際しては、以下の所属を付記した方々をはじめとして多くの方々のご指示を得た。

相原嘉之、西光慎治（明日香村教育委員会）、小笠原好彦（滋賀大学）、井上裕一（早稲田大学）、江口桂、塚原二郎（府中市教育委員会）、黒崎直（富山大学）、辰巳和弘（同志社大学）、坪井清足（元興寺文化財研究所）、橋口達也（九州歴史資料館）、古屋毅（東京国立博物館）、江浦洋、小栗明彦、上林史郎、岸本圭、車崎正彦、杉井健、谷正俊、田畑基、筒井崇史、中居さやか、中島彰、中島

雄二、藤井幸司、藤沢敦、穂積裕昌、宮崎康雄、森田克行（敬称略）

なお、石のカラト古墳発掘調査中の主な来訪者は以下の方々である。

秋山日出雄、網干善教、有光教一、石野博信、泉森峻、上田宏範、小野山節、亀井正道、河上邦彦、川西宏幸、工藤雅樹、梶国男、小出義治、小林行雄、進藤秋輝、末永雅雄、関川尚功、堤圭三郎、藤間生太、澄田正一、菅谷文則、伊達宗泰、田辺昭三、都出比呂志、直木孝次郎、中谷雅治、西山要一、樋口隆康、前園実知雄、松下正司、木村豪章、森浩一、和田晴吾、渡辺誠（50音順、敬称略）

参考文献

- 飛鳥資料館1979「飛鳥時代の古墳」飛鳥資料館図録第6冊
梅原末治ほか1933「吐師七ツ塚古墳発見品」『京都府史蹟名勝天然紀年物調査報告』14
奈良県教育委員会1974「奈良山-Ⅱ 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報」
京都府教育委員会1979「奈良山-Ⅲ 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報」
京都府埋蔵文化財調査研究センター1991「京都府遺跡調査報告書」第15冊 上人ヶ平遺跡
京都府埋蔵文化財調査研究センター1997a「京都府遺跡調査報告書」第23冊 瓦谷古墳群
京都府埋蔵文化財調査研究センター1997b「弓田遺跡第2次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概要』第74冊
京都府埋蔵文化財調査研究センター1999「京都府遺跡調査報告書」第27冊 奈良山瓦窯跡群
奈良県教育委員会1973「奈良山 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報」
小島俊次・北野耕平1959「奈良市歌姫町横穴」『奈良県史蹟名勝天然紀年物調査抄報』第12輯
奈良市教育委員会2001「西隆寺跡発掘調査報告書」
奈良市史編纂審議会1968「奈良市史」考古篇
八賀晋・西村康1971「奈良山第53号窟の調査概要」平城団地第8号遺跡調査委員会

記

・第7号地点（石のカラト古墳）は、平城第115-4次調査6SNR-7にあたり、6PIKの遺跡略称をもつ。これに対して第20号地点（音乗谷古墳）、第13号地点、第15号地点は平城数次外調査であり、それぞれ6SNR-20、6SNR-13、6SNR-15にあたるが、音乗谷古墳だけは4POJの異称をもつ。

・奈良山地区の図面等管理用に遺構にふられた台帳番号を以下に記すが、本文中では使用していない。

石のカラト古墳：石櫛→SX01、墓道→SX02、墳丘→SX03、外周平坦面→SX04、墳丘下暗渠→SD05、最外郭溝→SD06、外周平坦面上溝→SD07。

音乗谷古墳：石室→SX10、排水溝→SD11、墳丘→SD12、掘削り→SX13、長方形土坑→SK14。第15号地点：墳丘→SX15、周溝→SX16。第13号地点：埴輪列→SX17

・石のカラト古墳は1987年に復元整備がなされ（PL1-2）、1996年に国史跡に指定されている。

第Ⅱ章 石のカラト古墳

1 研究史

● 石のカラト古墳は奈良県奈良市と京都府相楽郡本津町にまたがっている。そのため、奈良県側では「石のカラト古墳」と呼ばれ、京都府側では「風灰（カザハヒ）古墳」という異称があるが、今日「石のカラト古墳」には統一されている。

● そこは享保9年（1724）の「五ヶ村惣図」によると大和側が勝利したことにより、所領するにいたった北に張り出した大和領域と京都側との境界となっている。この山論は豊臣秀長が大和治領の時に超昇寺郷と山城国相楽郡との間で起きたものであり、超昇寺郷が勝利したので「神裁場字別当ヶ平」の名称がある。

「石のカラト」の由来については諸説あり、「日本書紀」に忍熊王子が戦いの際、石を集めて造った石畳の跡だとか、石塚に投げ込んだ石がカラカラと音を立てるからだとか言われるが、カラト＝唐戸、すなわち柵を組んで間に板を入れた扉のことであるから、早くから石塚が盗掘にあって露出していたことに起因するものであろう。

● この古墳が広く知られるようになったのは1920年に長江正一「京都府相楽郡相楽村の方形墳」によって、墳形と石塚の図面が検討されたことに始まる（長江1920）。この段階ですでに上円下方墳の予測がなされ、石塚の詳しい記録がなされそれが珍しいことが指摘されている。その後、梅原末治が「相楽村ノ方形墳」として報告している（梅原1925）。そこでは、1段構成の方墳とみて、埴輪はないが葺石の存在することを指摘している。そして、石塚を家形の組み合せ式石棺の一種とみて、その「喰ひ合せ」に注意を喚起している。なお、石塚内の礫石についてはもともと引かれてあったものである可能性も指摘している。埋葬施設の形態から、後期の方墳とらんだが、石室がなく直接石棺を埋めていることを珍しいとする報告がなされた。ところで、長江・梅原らが京都の遺跡として報告したのに対して、坪井清足は遺跡地の大半が奈良市に属することを指摘した（坪井1948）。この指摘があって開発に先立ち調査をおこなうことになったことは明記しておかなければならない。

この後しばらく詳しい報告は見なくなったが、1968年刊行の奈良市史（奈良市1968）では一部石塚の再実測に基づく考証や「五ヶ村惣図」の紹介がなされている。時期については、古墳時代末期で、奈良時代に近いころと考えられるとし、今の基本的な年代観が提示された。この時は、墳丘について円墳としている。

その後、本調査がなされ、ただちに概報が作成された（京都府1979）。そのすぐ後で、遺物の遺漏分をも補って『飛鳥時代の古墳』（飛鳥資料館1979）が展示にともなって刊行され、本古墳の重要性はあまねく知られるようになった。それから、この2冊に基づいた数々の論が展開されて今日に至っているのである。

京都府の
報 告

発掘調査
と 概 報

横口式石櫛

石のカラト古墳が古墳時代の終末期を考える上で欠くことのできない古墳として、重要性とともに詳細なデータの提示の声が年々増加していったのには次のような理由がある。ひとつには上円下方墳という特異な墳形を採用していることがあげられる。だが、それにも増して、研究者によっては石棺式石室とも呼ばれる横口式石櫛が、飛鳥地域の壁画古墳と類似しており、飛鳥時代から奈良時代にかけての代表的墳墓としての要件を具体的にそなえていることが認識されるに至ったからである。飛鳥地域の壁画古墳は多くの研究者が世論を巻き込んで被葬者論や系譜論が盛んになされ、その都度、石のカラト古墳が引き合いに出されてきた。

そのなかでも、被葬者を絞り込むためには避けて通れない年代をめぐるもっともさかんに議論が続いている。今日まで墓道や墳丘周囲から出土した須恵器を高く評価して年代を奈良時代に下げて考えようとする意見と（近つ飛鳥2003）、飛鳥地域にみられる類似石室との比較や火葬の開始年代などを考慮して、7世紀末～8世紀初頭とする意見とに大きく分かれていると言えよう。支持者の多い後者は、土器の年代を直ちに古墳の築造時期に結び付けまいとする「飛鳥時代の古墳」の見解を襲っているとみることができる。これらの年代をめぐる議論はいっほうで宮都と葬地をめぐる議論とも結びついて展開してきた（金子2004）。

壁画古墳の調査

こうした歩みがあったところに、近年になって、高松塚古墳とキトラ古墳の両壁画古墳がその保存問題を契機に本格的に調査されるにいたり、石のカラト古墳の全容をいち早く公表することの意義はいよいよ高まった。なぜなら、墳丘についての調査は両古墳ではこれまで不十分であり、石のカラト古墳では墳丘についての多くの情報が得られていたからである。例えば、古墳の盛土に土嚢を用いた痕跡を確認していたことなどは、早くから研究者に評価されており（江浦1998）、墳丘構築過程を考証できる格好の資料を提供してきた（石鳥他2003）。そして、壁画はもたないが他の要素においても壁画古墳に対比され、いっほうで敷石をもつ点で唯一石のカラト古墳と共通性をもつマルコ山古墳の墳丘調査も2004年度から開始された。

上円下方墳

また、飛鳥地域の終末期古墳だけではない。石のカラト古墳が最初の例となっていた上円下方墳は、1985年に確認されその後調査された静岡県沼津市清水柳北1号墳（沼津市教委1990）で見つかってからしばらく類例がなかったが、2003年から2004年にかけて国内3例目となる上円下方墳の東京都府中市熊野神社古墳が調査される運びとなった（塚原2004）。大型の石室をもつ上円下方墳の発見は、石のカラト古墳に先行する可能性が高く、その先後関係についての議論は東国の古墳の系譜を考える上でも重要視され、その意味でも本報告書の作成が急がれるようになったのである。

さらには、ここ2、3年のうちに大阪府の平石谷古墳群におけるシシヨツカ古墳、アカハゲ古墳、ツカマリ古墳などの終末期大型方墳や奈良県御所市ドント垣内古墳など、関連する終末期古墳が相次いで調査され、終末期古墳時代研究はにわかに活況を呈するようになってきた。平城宮跡発掘調査部考古第2調査室では、ちょうど音楽谷古墳出土遺物の資料整理を進めていたが、こうした機運を受け、合わせて石のカラト古墳についても詳細を報告することにした。したがって、本書は今日展開されている数々の議論を展開することよりも、客観的な事実をいち早く共有させることを第一義とした。発掘後25年のときを経て、失われた情報もけって少なくないが、可能な限り多くのデータを提示することは、終末期古墳の調査方法や成果をよりよいものにするのに役立つと確信する。この点を踏まえ研究の未消化な点をぐ寛恕願いたい。

2 発掘調査の経過 (Fig. 2・3)

A 発掘区の設定と調査の経過

はじめに、伐木をおこなってから平板測量によって現況の地形を把握した。伐木をおこなったのは調査の対象となる西側で、等高線の間隔は墳丘部分で0.2m、周囲は0.4mとした (Fig. 4)。その後の発掘調査中に使用した座標は、住宅公園が墳丘の北面に配ったB.M. (ベンチマーク) 6を(0, 0)を原点とし、そこから南北にX座標、東西にY座標を設定して各地点をとらえた。しかし、ここではその際用いられた各地点のXY座標ではなく、奈良山全体の測量に対してかけられた国土座標を基準とする座標 (日本測地系第6座標系の $X = -144,000$, $Y = 21,000$ を原点としてXY座標の目盛りを切ったもの) を第6座標系に換算した数値を使用する。

発掘調査は現状での墳丘の中心を通過して東西南北に延びる十字形のトレンチを幅1mで設定することから開始した。東から時計回りに第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチ、第4トレンチと呼ぶ。

このうち第2トレンチから第3トレンチを通過して第4トレンチに至る墳丘上部分は面的に広げて調査をおこなった。また、第2トレンチは墳丘前面の排水溝検出にともない適宜拡張した。第5トレンチは、最初周溝と考えていた外周平坦面のさらに外側の状況を確認するために、第3トレンチとはほぼ平行に設けたものであり、また、第9トレンチは古墳から南に離れたところにある土手状の高まりの性格を確かめるために設けたものであるが、それ以外のトレンチは墳丘周囲の排水溝の確認のためにあけたものである。

発掘の進行はほぼ以下のとおりになされた。

1979年1月17日より第1～4トレンチをあけたが、掘削早々、墳丘周囲の周溝 (以下、外周平坦面と呼ぶ) を予測させる地形や葦石が確認された。当初、東西南北で外周平坦面の幅や石の形態などに差異があるように認識されたのだが、これは、墳丘の段の比定間違いが絡んでいたため、全体的にはシメトリーであることが後にわかる。

このトレンチ調査の結果、墳丘第1段のテラスが東西と北で幅約1.8mであることが確認され、これを受けて、墳丘部について最初に西南4分の1をめくことにした。それにより、方形の第1段の上に円形の第2段をもつ上円下方墳であることが確定した。そして、2月13日から墳丘の西北部4分の1についても墳丘を露出させることになった。

墳丘周囲の調査も墳丘本体と並行して進めた。

北と東では外周平坦面にある石は本来のものでなく、墳丘からの転落である可能性が浮上し、本来の姿についてはしばらくの間ははっきりさせることができなかった。墳丘南側については周溝状の外周平坦面が回る様子ではなく、かわりに下方部墳丘に潜り込むかたちの幅0.6mの排水溝SD02が検出された。

また、墳丘西側に第3トレンチを拡張するいっぽう、さらに北側に併行して第5トレンチを設定し、墳丘西側の様子を調べた結果、もともとは現在見られる地形の段差はなく緩やかに上がっていただけであることが確かめられた。同様に東側や北側でも旧地形を調べ、北側でも地

測量調査

十字トレンチ

墳丘西半
全面調査

外周平坦面

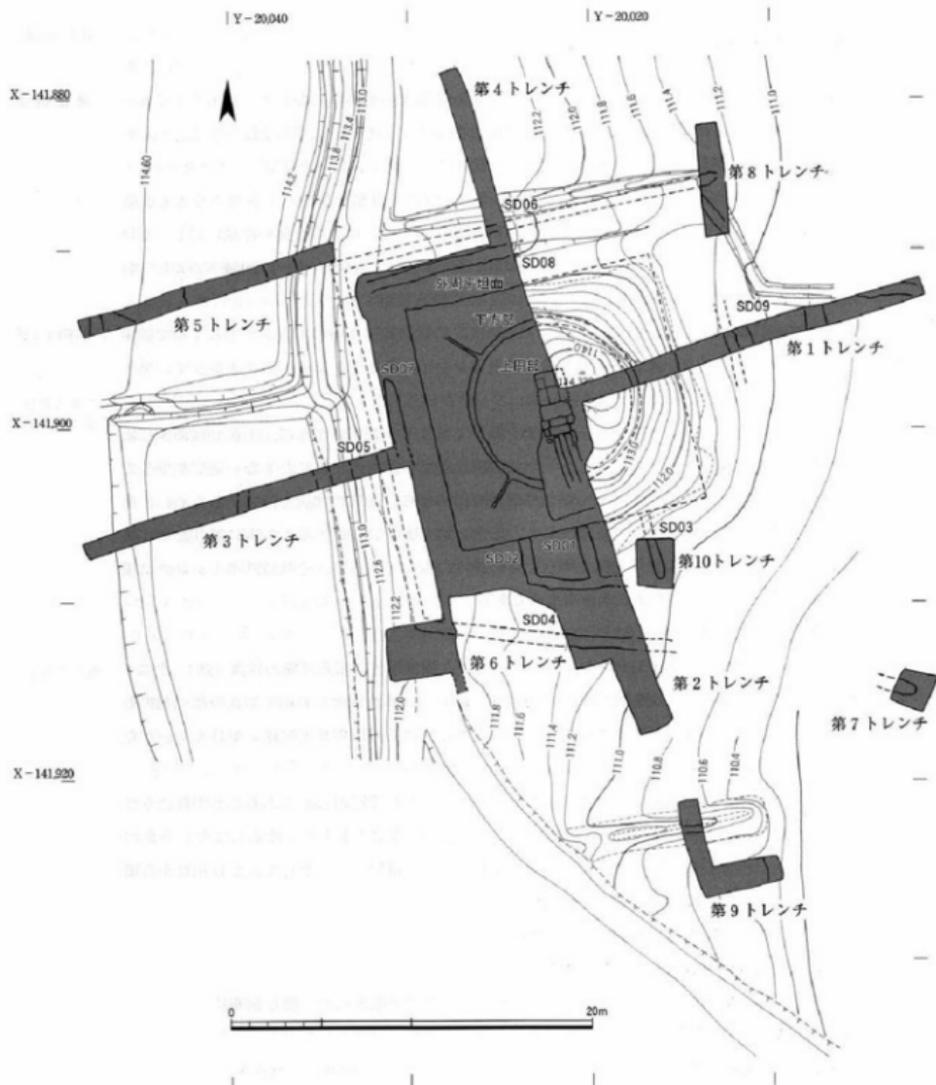


Fig.2 石のカラト古墳 トレンチ配置図 1:300

形が緩やかに高まっていくことが知られた。

墳丘南側では第2トレンチを拡張し、第10トレンチ検出分を含めて南北方向排水溝を計3条確認し、西南外周平坦面コーナーでは第6トレンチでもっとも西よりの排水溝SD05が約105度に折れてSD04になることが確認された。そして墳丘南北軸から約14m東南に延長した第7トレンチでSD04の続きを確認するとともに、墳丘南北軸から約12m東側の地点の第8トレンチでSD06延長部分を確認した。

いっぽう、墳丘からさらに南に遠く離れたところにある土塁状の高まりについて第9トレンチをL字形に入れて調べたが、性格は明らかにできなかった。

2月14日からはすでに墳丘調査と並行して盗掘坑を掘り南半を露出させていた石部内部の本格的調査にかかった。奥壁近くの堆積土からはかわらけが出土したが、流入土を除去すると、ほとんど有機物の層や遺物がないまま床面が露出した。終了近くに飾り大刀資金具や漆残片が出土した。また、これらを包含する土を水洗選別したところ、漆片や、金製、銀製の玉、金箔片などがみつかった。

石部内部の
調査

2月20日から、墳丘裾回りの外周平坦面部分や墳丘裾について断ち割りをおこなって構造を調べた。その結果、掘形をともなって基底石を縦位に使って据えていることや、墳丘北側のトレンチ北壁よりのところにも外周平坦面を切るSD08が確認された。いっぽう、西側の暗渠SD07の断面を見ると、肩までは石が詰まっておらず、両脇のバラスが落ち込んだように観察されるのでこれら2条の溝が開渠であった可能性が出てきた。

主体部の調査のうち、墓道部分の調査を3月8日より開始した。墓道埋土を除去していくと、石部前の墓道底面には2条のコロレールの抜き取り跡がみつきり、それらを埋め戻してから南面の墳丘外表を完成させたことが確かめられた。そして墓道埋土観察用ベルトの下からは礎敷の墓前祭遺構がみつかった。また、石部底面前面にも礎を敷いた様子が確認されたが、これは地山上に石部範囲にあわせて敷いたものの一部とわかった。

最後に墳丘本体の断ち割りを石部後方に対して実施し、墳丘の築成状況を確認した。調査後、1979年3月29日に石室開口部には板状のコンクリート2枚をかぶせて閉塞し、すべて埋め戻して終了している。調査面積は313m²である。

B 調査日誌

1月9日(火)

伐採開始。

1月11日(木)

トラバース。

1月12日(金)

平板測量開始。

1月17日(水) 晴れ

慰霊祭。墳丘を中心に東西南北に幅1mのトレンチを設定。第1トレンチでは一部、腐植土下に葦石が遺存していた。墳丘周囲には周溝(注 本書でいう外周平坦面)がめぐる。墳丘は黄褐色の山土を積むが、版築の痕があるかはわからない。

1月19日(金) 晴れ

第3トレンチでも墳丘裾に葦石を確認。テラス

があって立ち上がるもよう。外周平坦面は西肩が未確認であるが、幅5m近いと考えられる。道路縁の崖までいくのか。第4トレンチで外周平坦面の北肩を求めるが、最終的に未確認。第2トレンチでは墳丘裾から5m南に性格不明のバラス面がある。ここには外周平坦面がないのか、土色の変化がみられない。

1月20日(土) 晴れ

外周平坦面の様相が各トレンチで異なる。東側は墳丘裾外に幅約1.5mのテラスをもち、その外に幅の狭い溝SD09がめぐる。溝肩はグラグラ上がり、溝内の端には小石が集中する。第3トレンチでは、墳丘は溝底から1m立ち上がって幅1mのテラスを設け、さらに立ち上がる。

1月22日(月)晴れ

北にも東西と同じくテラスがつく。第2トレンチの石柵周囲はかなり大きく掘られているらしく、南から2個目の天井石が露呈。第1トレンチの溝を掘り上げるが、底に石は全く見られない。墳丘西南1/4に設定したトレンチの調査を開始。

1月23日(火)晴れ

墳丘の東・西・北テラスを掃除。上段の上がりには石がなく、柱穴か大きな石があったものが抜かれた可能性もある。3方のテラスのレベルはおよそ同レベルである。このテラスのレベル・幅が3面とも同一とするなら、東側裾のテラスが解釈できる。すなわち、傾斜地において方形で、テラスを水平に基礎を造るためには、東側にテラスを造り調整する必要があったのであろう。

1月24日(水)晴れ

西南調査区上段の土を2/3程度除去した結果、残っていた葺石面の状況から上段の墳形が円形に近いことがわかった。下段南面は一部しか検出してないが石の面がやや低く、東西に直線になる可能性がある。上段下り墳が。第2・4トレンチの清掃を続行。外周平坦面はもともと石を敷いていなかった可能性が強まった。石柵上の盗掘坑を一部清掃。盗掘は棺に当たる前に墓道部と考えられる部分を掘り、その後、棺に当たったらしい。南から2枚目の天井石の面まで下げ、それから南端の天井石を破り、はずしている。

1月25日(木)晴れのち曇り

西南調査区でコーナーを検出。下段が方形であることが確定した。石柵前面の盗掘坑はかなり大規模であり、閉塞石の前面にまで及んでいる。外周平坦面が南側に戻るかどうかは未詳である。

1月26日(金)晴れ

石柵前面の盗掘坑を掘削。西南調査区の下段コーナーは、基礎石から2〜3段は完存するものの上部は崩落している。少しずつ転石をはずす。南辺では墳丘下にもぐり込むことで幅0.6m、長さ3mにわたって小礫を詰めたSD02を検出した。南北方向に延び、南は切れるもよう。排水溝の可能性もあるためトレンチを西側に拡張して追求する予定。

1月27日(土)晴れ

墳丘裾部の葺石清掃。

1月29日(月)小雨

墳丘上の作業は雨天のため中止。西南のトレンチを拡張。明日の見学会の準備。

1月30日(火)曇り一時雨

昨夜の雨のため外周平坦面の発掘は中止。西側斜面に第5トレンチを設定し、調査を開始する。この結果、当初考えていたよりも西側斜面の傾斜が緩やかであることが判明。

1月31日(水)曇り

西側斜面の第2・第3トレンチを掘削する。SD04西南コーナーを出すため3m×3mのグリッドを第6トレンチとして設定。西側外周平坦面の西壁際に排水溝を掘った際、礫を詰めた排水溝SD07を確認。

2月1日(木)曇りのち晴れ

第1・3・4トレンチを各2〜3mずつ延長。

2月2日(金)晴れ

土曜日の写真のために掃除。下段テラスの葺石は、コーナー部分が溝状にあげられている。

2月3日(土)晴れ

写真のため掃除をおこない、2カット撮影。

2月5日(月)晴れ

墳丘南側に外部施設を求め、第2トレンチを3m×2mに拡張。外周平坦面の状況は今までと同じ。SD01は自然になくなるのかと思われたが、墳丘西南コーナーから3.5m東で検出した排水溝SD02は墳丘から約3mで東に折れ、SD01に合流することをボーリングにて確認した。第6トレンチでは、SD04の西の立ち上りはわかるが、南側の上がりが見えない。溝がさらに南に続くか。溝が浅く、周囲の堆積と同じゆえかわらないか。公園側の松の木を伐採。

2月6日(火)曇りのち晴れ

排水溝をさらに下げる。外周平坦面西南コーナーについての解釈は一応は暗茶褐色土を南の壁とするが、疑問が多い。清緑の石列は比較的厚い。墳丘南面で検出した暗渠SD01とSD02は後者が前者を横切るように合流する様子を確認。墳丘の南西は掌太のバラスが一面にある。

2月7日(水)晴れ

暗渠・葺石の目地を掃除。外周平坦面周辺にある暗渠は、一本は南東に、もう一本は南西にまわると考えられ、南東方向SD04はボーリング調査によって14m余り続くことが判明。この付近に3m×2mで第7トレンチを設定。西南のものはボーリングでは明らかにしがたい。

2月8日(木)晴れ

写真測量のセットとそれに備えた掃除をおこなう。第7トレンチにて墳丘の外側をめぐる石詰暗渠、SD04東端を確認。SD06はボーリングの結果、第8トレンチの東側でも石に当たる箇所があるが幅が狭く断続的である。明確ではないがこれでは東端を検出したと思われる。この第8トレンチにて暗渠を検出した層がバラス混じりの黄褐色であったが、これが地山とすると、墳丘東西の溝は地山を凹めただけで墳丘築成時以前のものとするべきか。

2月9日(金)快晴

写真測量、半分終わる。平面は半分のみ、立面は全カット終了。残りは明日。土塁状の高まりの

性格を明らかにするため、周囲の廃土を除去し、東西は1.5m、南北は1mの幅で第9トレンチを設定する。

2月10日(土)曇りのち晴れ

降雨で写真測量中止。来週水曜日頃実施予定。墳丘南側にある土塁状の高まりは、ほぼ積み土の状況がわかるが、遺物その他はなく、時期も決定できない。拡張予定の西北1/4の測量を2月19～22日の間に実施できるように作業を進めることとする。「五箇村惣図」の件で県立図書館の広吉氏に電話。歌郷地区の区長が保管のはず、とのこと。山陵地区の図は虫食いがあるとか。

2月13日(火)晴れのち曇り

写真測量を登過ぎに終了。墳丘の西北1/4を測り始める。作業を容易にするため、第3トレンチ北壁のセクションをとる。西側の石を詰めた暗渠SD05は一部開渠であった。灰色粘土が石を覆っている。

2月14日(水)曇り

石柵内の掃除が進む。表面の腐植土を除去。下に散葉土の崩壊した明堀土がある。河原石・礫が多量に落ち込んでいる。墳丘西南部第1段目は、葦石の2/3程度が現れるが、裾部未検出。

2月15日(木)晴れ

墳丘西北1/4の遺構検出が済む。松根に手開取る。石柵の掃除。奥壁近くの茶褐色・灰褐色から中近世の土器片が出土。盗掘時期を決める。石柵の中央部は盗掘後のかなりの期間、オープンの状態であったらしい。床に有機物などの層はない。

2月16日(金)晴れ

石柵内の掃除。墳丘西北部と周辺の遺構検出。石柵内は床面まで約5cmに達し、一部底面を出したが、依然、有機物の層はみられず。棺材その他は絶望的。墳丘の裾まわりは、写真測量のことを考え若干拡張、ほぼ石の面に達する。墳丘の葦石はコーナー部分を残してだいたひ露出させた。

2月17日(土)曇りのち小雨

石柵内の掃除。拡張部分の遺構検出と排水溝掘り。石柵内は底面を約3/4露出させる。有機物の層もなく、目ざましい遺物もなかったが、終了間際、銀袋大刀の資金具が1点出土。中の土には漆製の破片も付着している。底面に竹が数本貼り付いている。石柵底面は天井石と略同じ枚数・寸法で、合わせ目も天井石とそろえているようである。

2月19日(月)晴れ時々曇り

石柵内の掃除終了。漆の破片が出土。棺の破片か。木貨の結果、布目の棺紐2種がある。金箔も検出。墳丘裾部の遺構検出。西側は、玉石の下にバラスが一面あり、これに連なる形で南北方向の暗渠があるが、西北部分ではバラスがあるのかどうかわからない。やはり、暗渠と一体になる形で石・バラスが幾層かに敷いてあると思われる。墳丘の角

石を基準にエスロンテープで一辺長を求めたところ約13.62mであった。

2月20日(火)

墳丘裾周りの遺構検出。築造時はバラスのみか。但し、完成時にはその上に玉石を乗せたとも考えられる。暗渠との関連からすれば、バラス・玉石がセットになるか。墳丘第1段目と第2段目の境に玉石が並ぶが、性格等は不明。

2月21日(水)

写真測量とそのための掃除。立面写真を実施。2:30頃、朝日新聞社のヘリ飛来。

2月22日(木)

写真のための掃除。樹木伐採と、昨日倒した松の処理。

2月23日(金)

強雨のため中止。午前、県立図書館へ行き「五箇村惣図」の件を広吉氏に尋ねる。

2月24日(土)

雨のため中止。石柵流入土中に何かないか、見廻りを兼ねて来る。直径8mm程度の金の玉1個を発見。土を袋に入れたまま持ち帰る。

2月26日(月)曇り時々晴れ

午前、掃除とヤガラ組み。午後、写真。

2月27日(火)曇りのち晴れ

写真。外回り・細部など31カット。

2月28日(水)

測量点打ち。各トレンチのレベルはB.M.6を(0.0)としている。要換算。

3月1日(木)曇り時々雪

午前中、測量。午後、山陵町南本宅にて五箇村惣図を実見。

3月2日(金)

実測。3時から皇龍寺のスライド会。

3月3日(土)

実測。壁面を削り、一部セクション作成。

3月5日(月)

セクションと墳丘の裾を若干切る。基底石は長さ25cm程のものを縦に立てて用いる。小ぶりのもはやり立てている。掘形はバラス面から20～30cm。墳丘南側の葦石をはずす方針となったので、ステレオフィルムに移っていない範囲を実測する必要がある。

3月6日(火)

墳丘南の葦石実測終了。各セクション大略終了。第1トレンチの墳丘裾、断ち削り裾を掘ると、基底石が手前には大きく倒れていることがわかった。今までは倒れた小口を見ていたことになる。

3月7日(水)晴れ

墓道検出開始。平面で削ったがよく分からないため、西の壁に向かってトレンチを入れる。発掘区北壁下に見える礎は、東西暗渠SD08となった。西側暗渠SD07のセクションをとる。開渠

であった可能性も否定できない。

3月8日(木) 曇り時々小雨のち晴れ

墓道を本格的に掘り始める。東西のセクションをとれるよう土手を残す。墓道の西側は側壁の小口部分で曲がっているようである。光線の具合もあり、墳丘との境は見難い。墳丘北側の暗渠SD08は略規模がわかる。墳丘西側の暗渠SD07とは接続しないようである。きちんとしたところは幅0.6m程だが、途中から0.2mくらいだらしくなる。この状態からすると、SD07は外周に接続せず途中で消えるか。石櫛の掃除。

3月9日(金) 晴れ

墓道の調査、石櫛の水洗ひ。現地説明用に切り株の処理。墓道のはは底に至った。墓道埋土は上面1/3は小バラスをまじえた明褐色の粘土・砂を搦き固めるが、以下は灰色・褐色の粘土に砂をまじえる。この粘土層は閉塞石の下端から2~3mのところまで突然、明褐色砂・灰黒砂の層に至る。ここには礫が多く、割れ部分は緩やかに上がり、やはり礫が顔をみせている。扉石は床面に完全に乗り、薄い小石3枚を下端に挟んでいる。墳丘南、石櫛下にもぐる暗渠を中心に、東西に暗渠があるか確認のため第10トレンチを設定する。中央の暗渠SD01から東3.5mに暗渠SD03を確認。SD07とSD08を掃除。

3月10日(土) 雨

墓道の調査、石櫛の掃除。裾まわりの礫の掃除。現地説明会用枠切り。墓道の下底面、石櫛前面には幅10~15cm程度の溝が2条南北に走る。墓道底面に礫敷が現れたが、性格は不明。基底付近をのぞき第1段目の扉石をはずし、掘り始める。この付近では墓道は石櫛前よりも広がっている可能性がある。土層の切れ目がつかない。

3月12日(月) 曇りのち晴れ

墓道の調査、石櫛の掃除、外回りの整備。墓道の東西セクションを2本とり、その後これはずす。墓道の南北セクション調査。

3月13日(火) 曇り時々晴れ

墓道の調査。午後、石櫛の写真。墓道の発掘はセクション壁を取り払って後、墓道の底面を出した。結果、礫敷を広く検出。位置からして墓前祭に関連した施設か。石櫛前面に走る溝は、コロレール痕跡であった。

3月14日(水) 曇り時々晴れ

石櫛・墓道を含む写真測量。明日の写真のために掃除。

3月15日(木) 晴れ時々曇り小雨

写真及び現地説明会の準備。写真は石櫛前面を残す。第8トレンチでSD08実測開始。

3月16日(金) 晴れ

石櫛、墓道南北セクション、暗渠実測。石櫛実測はレベール・トランシットを用い、基線をはる。

墓道南北セクションについての所見①墳丘の裾付近は墳丘の積土とは違う砂を入れこにしている。②その後、扉石のセツトのためか、大きく挟んで明褐色質土を別に付け足す。寺の基壇などで階段をつけるのと同じか。③④は墳丘側の断面にも認められる。墓道の両側に見られるこのセクションは墓道の埋設後、扉石据え付けようにおこなった地盤と考えるが、その場合、墳丘の扉石は墓道の埋設後に同一手順でおこなったか、墳丘南面以外は先に扉石を葺き南面のみ墓道の埋設後に葺いた。このどちらかであろう。

3月17日(土) 曇りのち雨

石櫛、暗渠SD08の実測。午後2時より現地説明会。準備した資料200余部全てはける。

3月18日(日) 曇り時々晴れ

本日空撮、無事終了。

3月19日(月)

墓道西側、石櫛のセクション。暗渠SD08の実測。

3月20日(火) 小雨のち曇り

墓道の壁にみえる墳丘のセクション。暗渠のレベル落とし。

石櫛実測。平板測量。午後2時から写真。

3月22日(木) 晴れ

墳丘周囲の埋め戻し開始。墳丘断ち割りトレンチ設定。暗渠SD01・02・03の断面図作成。墓道、扉石前面の1mを少しずつ削り下げる。板抜き溝らしきものを検出。この位置は、墓道掘り下げたときに見えた溝の位置と同じである。

3月23日(金) 曇りのち晴れ

墓道のコロレール抜き溝検出。墳丘断ち割り。石櫛天井石の掃除・実測。コロレールの抜き溝は2条を検出。溝は石櫛中軸より西に振れる。西溝は扉石前付近で“穴”に切られているのか、ハッキリしない。南端は墓道南端の礫敷の下にもぐりその付近で消えるのか、礫敷の南端に浅い落ち込みがみえる。東溝はトレンチの壁下にもぐり込み、溝底もハッキリしない。墳丘北側のセクションは南側とやや異なるか。

3月24日(土) 曇りのち雨

班全員に断面の説明。記念写真。墓道のコロレール抜き溝は2条、柱穴は1基であることを複数の目で確認。コロレール抜き溝を一部掘り下げ、暗渠SD01を出す。墳丘北側の断面図、一部作成。

3月26日(月) 晴れ

墳丘上方部北側のセクション終了。はは埋め戻す。墓道・コロレール抜き溝・墳丘の断ち割り、石櫛天井部の写真終了。石櫛前面のみ扉石の幅に合わせて石を敷いているのか。石櫛底面の目地に尺をさし込み、23.5cmあたりがあることを確認。床石も天井同様、相欠きとしていたか。

3月27日(火)晴れ

墓道補足調査終了。石柩床石底面まで整地土と
考えられる。石柩写真はキャビネ・16mmともに終
了。埋め戻しは下方部葺石に及ぶ。

3月28日(木)

石柩の補正実測。石柩前面の暗渠SD01は、
石柩床石南端から約1mで止まり、床石周囲はパ

ラス敷きとする。埋め戻しは墓道に及ぶ。第9ト
レンチの土層を断ち割るが、顕著な所見なし。

3月29日(木)晴れ

埋め戻し。石柩にコンクリートの蓋2枚をする。
隙間にパラスを詰め、全体に厚く粘土を塗りこめ
る。

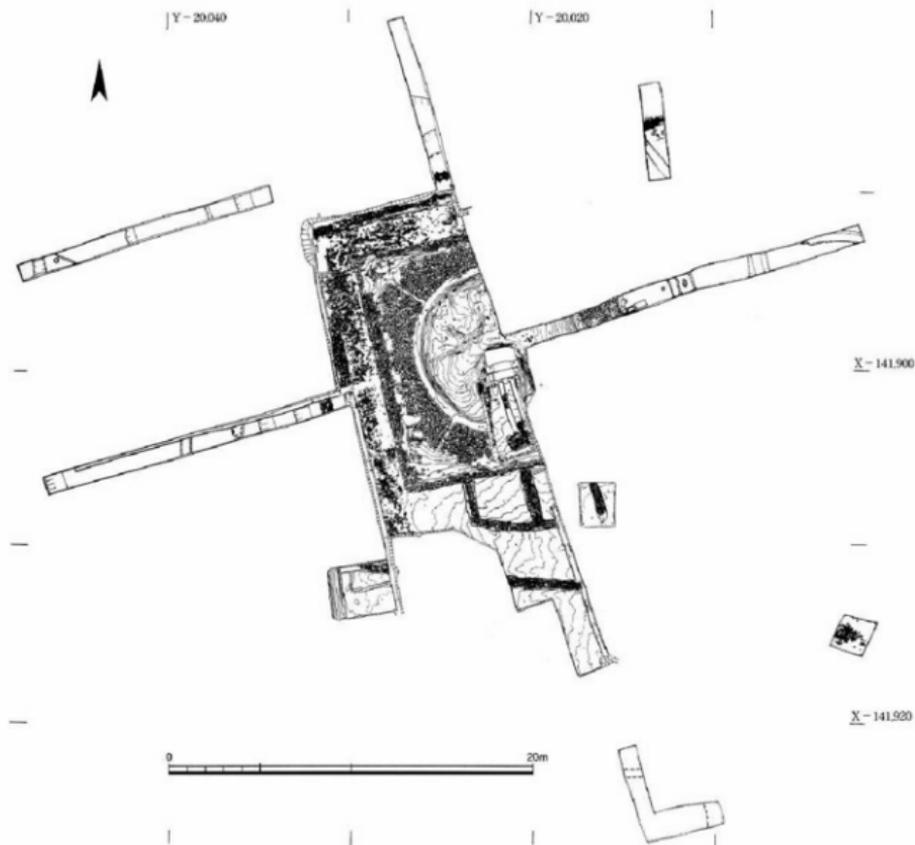


Fig. 3 石のカラト古墳 検出遺構全図 1:300

3 遺跡の立地

A 地理的環境 (Fig.1・4)

今は一部の緑地を残しかつての景観をほとんど残していない奈良山（平城）ニュータウンの中で、もっとも標高の高いエリアは、丘陵の中でも北西の端に寄ったところにある。最高点の

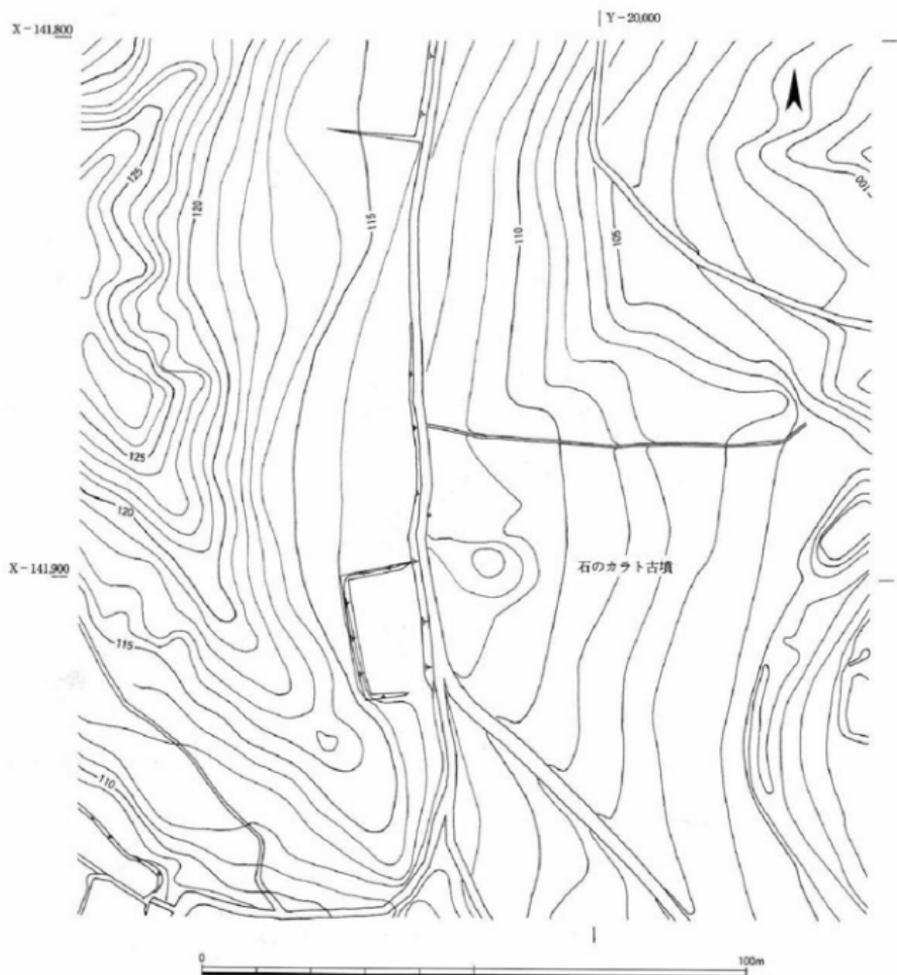


Fig.4 石のカラト古墳 周辺の地形測量図 1:100

標高は136.6mを計る。石のカラト古墳はそこから0.5km南に位置するが、当丘陵内ではまだかなり高所に位置していると言える。

奈良山丘陵
での位置

古墳を取り巻く丘陵は、北側では最高点を越えると山田川の東流する谷へと急激に下り、西側もすぐに押熊の平地へ向けて降下している。ただし、微視的にみれば、古墳から西側へ約30m離れたところに、北から南に向けて細長く延びる比高10m前後の支丘があるため、古墳から西側への眺望は北側同様よく効かない。これに対して、墳丘の東側はしばらく緩やかに下降し続けたのち、段丘状に5mほど下がる地形となっており、南側もまた緩やかに下降し続ける地形になっているので、奈良山丘陵の裾を遠く木津川河床まで見渡せる。つまり、丘陵の高い位置で平坦な地形が比較的広く確保されたところに西側に山寄せで造られた古墳と言える。この位置から北にずれると傾斜がきつくなるし、南にずれると西側の尾根に東へ押しされ、同じように十分な平地は稼げず、斜面に造らざるをえなくなる。

西側へ
山寄せ

B 発掘調査前の状況 (Fig.5、PL.2-2)

墳丘の調査前の形状は、2段築成であることが容易に読み取れる比較的良好な残存状況で、周囲に周溝状施設ないし平坦面がめぐりこも推察できた。最高所が標高114.339mの墳丘は墓道部分から石櫛前面にかけての範囲が盗掘により大きく削られており、石部の天井石が1石はずされ、長く開口したまま調査時まで至っている。方墳の上段の隅角が流れたと見られなくもないが、測量してみると上門部と下方部の形態はそれぞれよく等高線に現れている。

測量図の
読み取り

ただ、南側に墳丘が一部張り出たように見えているのが、図だけを見ると造り出しにも見えなくもない。しかし、これは上段の抉れに対応し、盗掘の際に掻き出した土砂の堆積を示すものと考えてよいだろう。調査によっても特別な遺構は確認されなかった。

墳丘の周囲は西側と北側に明瞭な地形の整形跡が見て取れる。西側がもっとも顕著であり、墳丘裾から約4.0mの一定の幅で南北に長い平坦面が確保され、そこから1m近く段をもって土手状に地形が上がり、畦畔の西側に幅10mほどの水田面が続く。この状況から西側は旧地形を直線的に削り出していることが推測されるのである。しかし、この段はやや蛇行しながらそのまま古墳の北側まで一連で続いていくので、古墳の築造に際して削り出した段差に重なるように、比較的近年に可耕地にするための改変が加えられたものと考えられる。

西側の整形

西側はほどではないが北側も同様に一定幅で平坦面が確保された形跡が認められるが、裾から2mのところまで小さな段が認められ、さらに2mほど離れたところで再び上昇する。しかし、この外側の段のところには東から溝が入ってきており、等高線が大きく乱れている。西側の観察結果から見ても、ちょうどこの部分までが平坦面が確保されており、古墳の周りを削り出して段になったところに後世の溝が重複して付けられたと思われる状況である。ただし、北側の平坦部は土地の形状を反映してか、墳丘裾の平坦面、段の上ともに東に緩やかに下降している。

東側の整形

以上から、北側平坦部も西側同様旧地形を直線的に削り出して成形されたことが推測できたが、その東端はどの付近までなされたかについては地表からはわからない。

地形の高い西側や北側に対して、東側や南側では明瞭な削り出しのあととは地表からは観察できない。ただし、南側はもともと北東—南西方向に傾いて走る等高線がX=141.910—141.915付近にかけて不自然に南北方向に走る部分があるので、ある程度の平坦地の造成がこの付近に

まで及んでいたことが考えられた。また、東側でも墳丘裾を反映する110.4mの等高線よりさらに低い110.2mと110.0mの等高線が、本来ならば斜めに横切るはずなのに、墳丘裾と平行に走っていることが読み取れる。これも盛土による整地などの造成の痕跡である可能性が考えられた。



Fig 5 石のカラト古墳 墳丘測量図 1:300

4 発掘調査の成果

A 遺構

(1) 墳丘周囲

墳丘周囲の形状に関する調査は、現地形の観察に加え基本的に墳丘を横断する4本のトレンチと第5トレンチによっておこなった。ただし、調査の進展にともない排水溝の延長部分の確認のために何ヶ所か壺掘をしたところがある。以下、調査区ごとに述べていくが、墳丘本体にかかる部分は後述する。

①墳丘東側 (Fig.6、PL.8-3)

第1トレンチは幅1mで墳丘南北主軸から最終的に20.5m東へ延ばした。

第1トレンチ

土層断面を見るとまず、墳丘裾から3mほどのところにわずかに下がるところがある。この間、敷石の痕跡はない。そしてそこからさらに0.5mほど離れたところで逆に1段上が見えるところがある。調査記録を全体的に見たところ、このくぼみのあたりは調査時に正しく掘れていないと判断でき、平面図にある溝SD09が断面図にどう見えているかわからない。調査段階では掘り過ぎが認識されていたが、SD09以東はむしろ十分に掘れていなかったか分層を誤った可能性もあろう。

しかし、概報作製時には注意していなかったが、遺構検出段階で幅0.5m、深さ0.2m前後のSD09が確かにみつげられている。そして、くぼみを越えて1段上がっているのも確かであろう。そしてこの段にまたがって存在する9層は地山ではなく、古墳築造以後の堆積層であろう。ただし、これにはバラスがほとんど含まれていない。これに対して、墳丘側は7層までが地山で、その上の6層と5層は整地層とみなせる。墳丘東側が低くなっていることに対する処置とみられよう。この整地の範囲の東端に沿ってSD09が設定され、その埋土が10層や11層になっているために、不自然な層序が記録されたと考えられる。このうち11層は地山の表層近くが10層の影響を受けて変化しただけにすぎず、10層だけが溝の埋土であったかもしれない。

SD09

ところで、さらに外側に4mほど離れたところでも、0.2mほどの溝状のくぼみがみつがっている。当初これについては性格がわからなかったが、9層の上から切り込まれたものであるので、古墳とは関係ないと判断される。その外側には現代の畑の排水溝が斜めにかかっている。

第1トレンチでは墳丘外側には明確な敷石の痕跡はなかった。ただし、3層にはバラスが多く含まれていて、葺石に由来するものだけでなく、外周平坦面の敷石に由来するものも含まれているのかもしれない。だが、9層に含まれていないのはやや問題である。9層と10層の層位関係如何によっては、9層が地山になる可能性も残されている。

外周平坦面

以上の第1トレンチで検出された古墳に関する遺構はSD09とそれによって画される外周平坦面だけである。溝心まで墳丘基底部からは約3.2mである。幅0.5mでトレンチに直交して検出されたが、先にも述べたように正確な断面形はつかめていない。礫を詰めた痕跡も認められない。

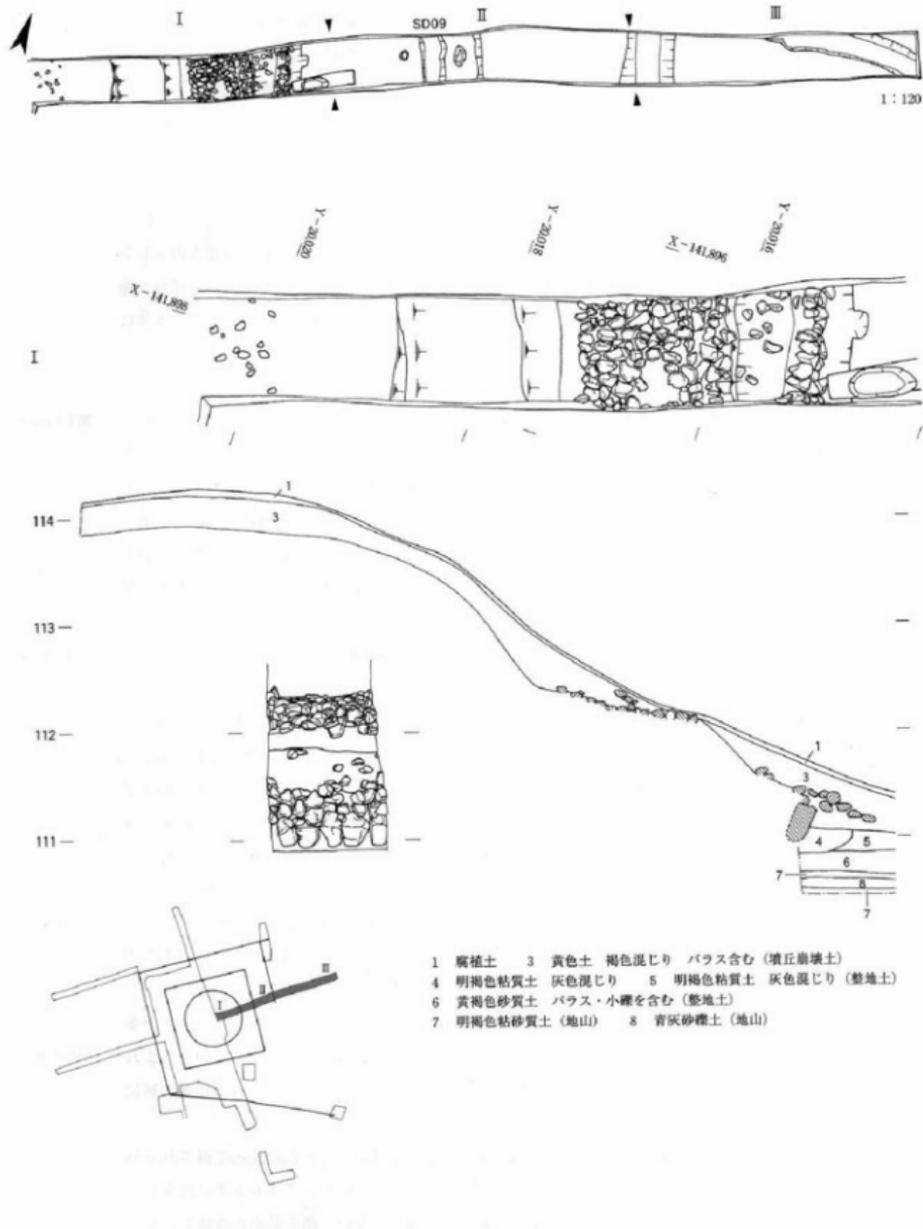
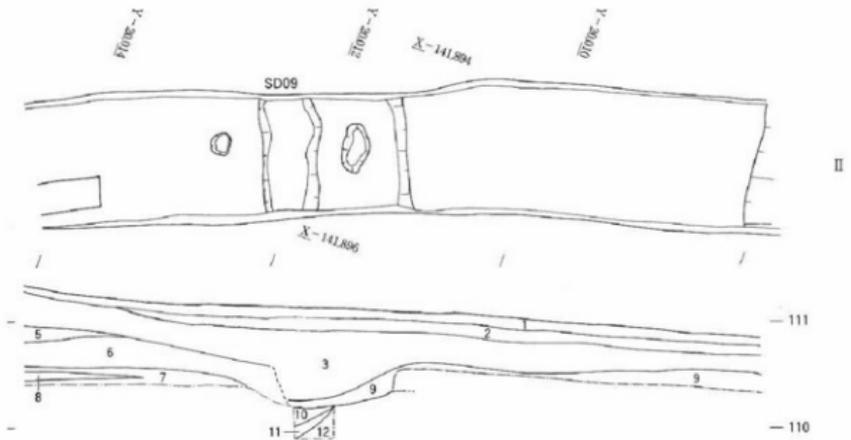
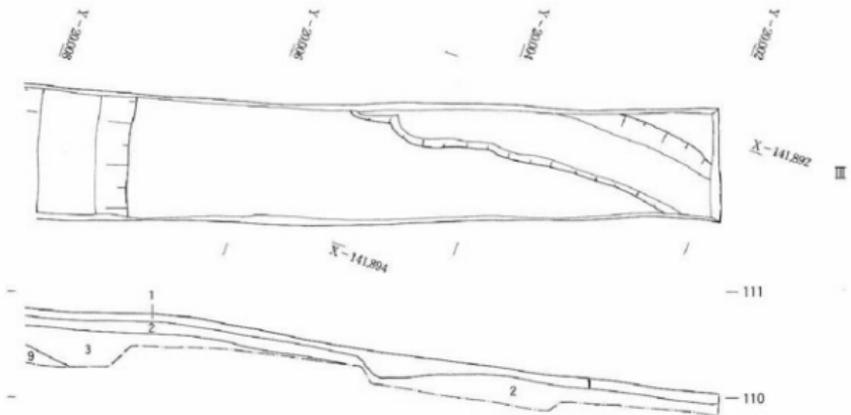


Fig.6 石のカラト古墳 第1トレンチ平面・断面図 1:50



- 1 腐植土 2 黄色土 3 黄色土 褐色混じり バラス含む (墳丘崩壊土)
 5 明褐色粘質土 灰色混じり (整地土) 6 黄褐色砂質土 バラス・小礫を含む (整地土)
 7 明褐色粘砂質土 (地山) 8 青灰砂礫土 (地山) 9 明褐色粘砂質土
 10 灰色粘土 褐色混じり (SD09埋土) 11 灰色粘土 (SD09埋土?)
 12 灰色粘土 褐色混じり (地山)



- 1 腐植土 2 黄色土 3 黄色土 褐色混じり バラス含む (墳丘崩壊土)
 9 明褐色粘砂質土

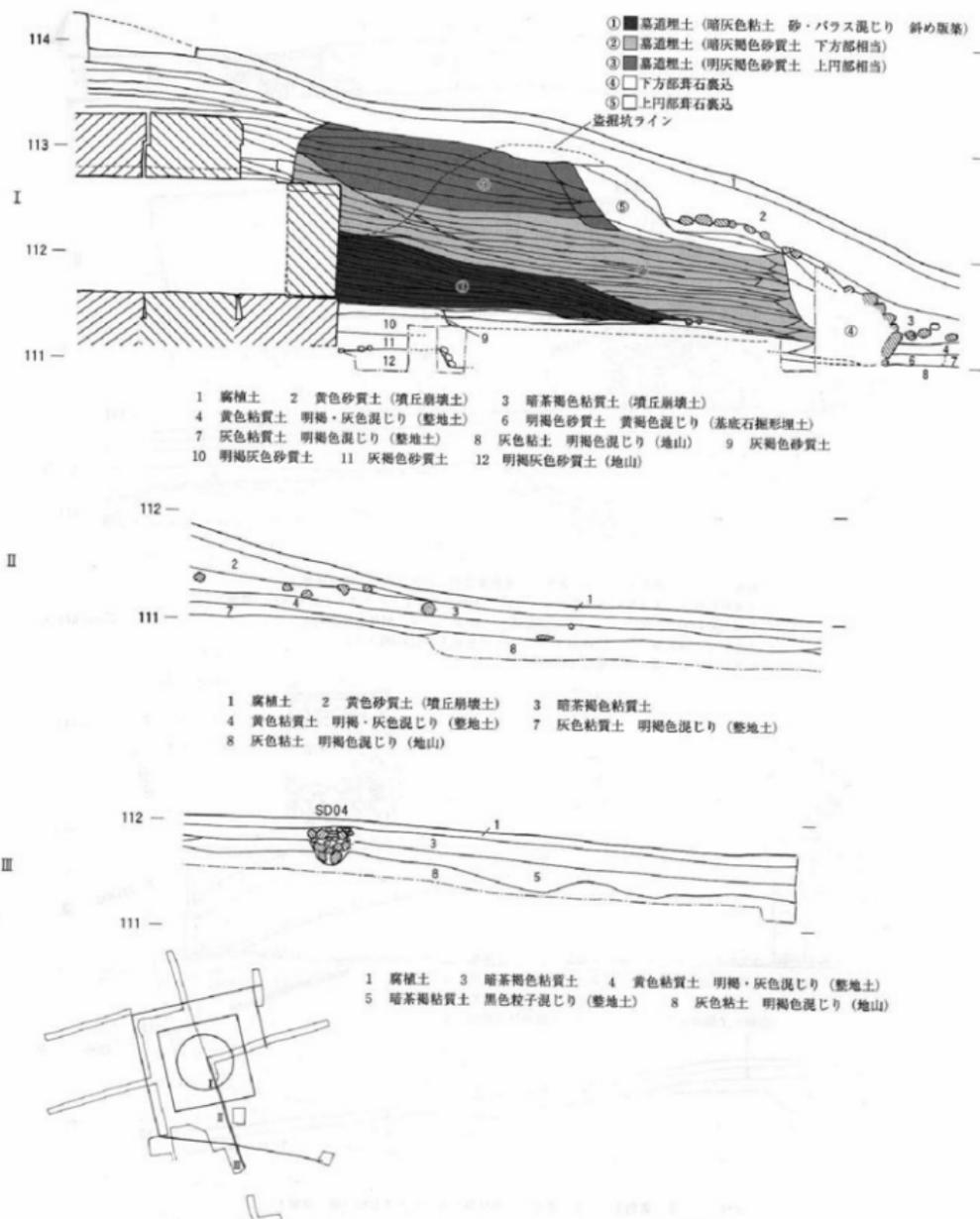


Fig.7 石のカタト古墳 第2トレンチ・墓道埋土断面図 1:50

②墳丘南側 (Fig.2・3・7~9, PL.4-1・7-2・7-3・7-5)

墳丘の南側に延ばした第2トレンチは墳丘中心より19.2mの長さで、幅は排水溝の検出にともなって2m、4mと適宜拡幅した。また、北半は墳丘西半部の全面調査のためにさらに広げられた。その過程で、捉えられたり、予測されたりした排水溝の存在を確認するために、第6トレンチ・第7トレンチ・第10トレンチがつけられた。

第2トレンチは、ちょうど墓道にあたる部分を断ち割った形で入れられたが、墳丘裾部分だけは遺構の保全を考えて残してある。まず、土層について見てみると、墳丘外は8層が地山で7層に加え黒色粒子をまじえる暗茶褐色粘質土の5層と黄色粘質土の4層が整地層と考えられる。東側同様、地形が低くなっていることとともに、南側に広い平坦地を用意することが意識されたのであろう。平面図との対応を考えると、トレンチの東壁にはSD02とSD04がともに現れるはずであるが、SD02については断面ではとらえられていない。また、SD04は、他のトレンチでもままた観察されたが、礫を詰めているため、まわりの土が流れて土手状に礫が残ったように見えている。

第2トレンチ

平面で見ると、第2トレンチを拡張する前に、すでに排水溝SD01がみつかっており、墳丘南西部分を広く掘る中で、平行して走るSD02が途中で折れてSD01の南端を斜めに横切ることがわかった。墳丘裾からその接続地点までのSD01の長さは約2.8m、幅は平均0.5mを計る。SD02の南北辺は2.2m、斜めの辺は5.0mほど延びて、第2トレンチの東の壁に沿う。幅は0.4mを計る。

墳丘下排水溝

また、SD01をはさんでSD02の南北辺と対称の位置に排水溝の有無を確認するために第10トレンチを設定した結果、SD03を検出した。おそらくSD01同様、墳丘の下から続いているものと思われるが、トレンチ内では長さ1.9mほどで礫詰が途切れ、本来それより南に延びていたかどうかわからない。幅は0.4mである。ただし南東に走るSD02の続き具合からすれば、それと合流するように作られていたと見るのが妥当であり、後世にその部分が流れてしまったものと思われる。

第10トレンチ

これらはSD01が墳丘主軸上に築かれ、その東西に心で3.5mずつ離れてSD02とSD03が平行に設定されたもので、すべての水が、南東向きのSD02に流れ込み、より速くへ排水されるしくみになっていたことがわかる。

第2トレンチではさらに南でSD04を検出した。これも詰められた礫が土手状に盛り上がって残っていたものであった。幅は0.5~0.6mで、トレンチ内いっばいに4.2mの長さにわたって続いていた。この延長を東西で確認するために第6トレンチと第7トレンチを設定したのである。

第6トレンチ (Fig.8) は後述の墳丘西側第3トレンチで検出したSD05とSD04が合流するとみられるところに方形にあけたもので、想定どおり礫の詰まったSD04がトレンチ北辺に斜めに重なるようにみつかった。そしてSD04にはほぼ平行に数十cmの間隔を置いて、南側に段差がわずかにつけられていることが確認できた。それは西の端では北に向きを変えているように観察され、SD04の礫詰はそれを越えることなく、SD04は検出できたもとも西の端でSD05に接続するように設定されていたことが考えられる。北壁の断面図からは、そのすぐ西から地山が急に上昇していくことが読み取れる。

第6トレンチ

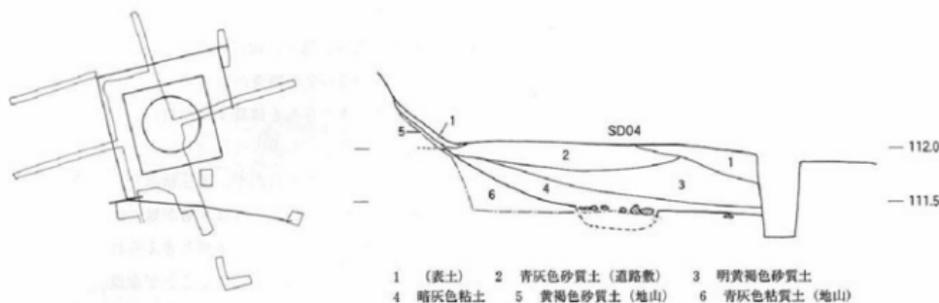


Fig.8 石のカラト古墳 第6トレンチ断面図 1:50

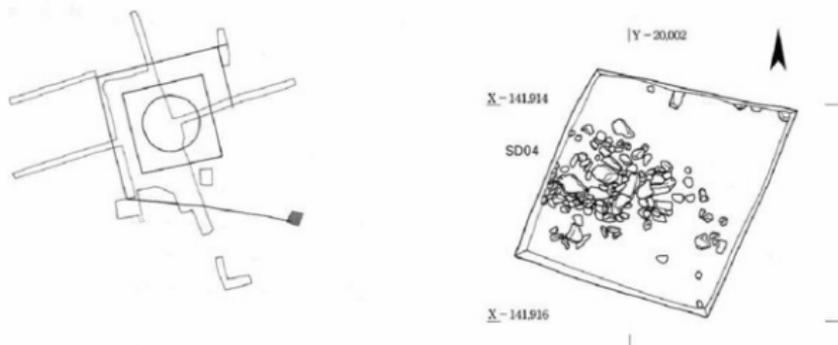


Fig.9 石のカラト古墳 第7トレンチ平面図 1:50

第7トレンチ

SD04の反対側の端は第7トレンチで確認した (Fig.9)。しかし、そこでは礎石が崩れて失われかけている様子が検出されたにすぎず、本来さらに延びていっていたものと考えられる。その範囲までのSD04の総延長は27.6mとなる。全体として見ると、墳丘の中軸ライン付近で、やや向きを変えているようにも見える。SD02同様、この南東方向の向きは地盤の等高線に対して直交する方向を選んで決められたのであろう。

墳丘南側に
敷石なし

ところで、墳丘の南側一帯には敷石の痕跡がなく、第1トレンチで調べた墳丘東側の状況と変わらない。しかし、各排水溝の礎だけが露出してその回りはすべて整地土が剥き出しになっていたと考えるのは不自然であろう。正面から見て背後にあたる北面や西面の外周平坦面だけが舗装されることも理にかなわない。したがって、本来あった敷石が失われたと考えたい。

③墳丘西側 (Fig.10・11, PL.7-1・8-2)

墳丘西側の様子を確かめるために、平行する2本のトレンチを設定した。それらの間隔は約10.5mである。第3トレンチは墳丘中心から西に向けて総延長26.5mにおよぶ長いもので、第5

トレンチは墳丘周囲の平坦部のさらに外側部分についてのみ調べたものである。第3トレンチの墳丘及び外周平坦面部分は第2トレンチ同様のちに拡張された。

まず第3トレンチの調査成果から見てみよう。そこでは、まず意外なことに墳丘裾から約4m西側にある土手状の高まりが、その外側を水田にしたときの改作によるものであり、その真下には何ら盛り上がるような遺構が残っていないことが明らかになった。図で3層、4層、7層、8層、9層と分けたものが整地層である可能性も完全には否定できないが、トレンチ西端の1.5m以上の大きな地山のカットを見れば、この部分は削り出しによって成形されたものとみられ、上記各層は地山の中の細分とみなす方がよいだろう。トレンチほぼ中央付近に溝状の遺構があるが、断面を見ると幅の広いものであることがわかる。おそらく古墳とは関係ない。

そしてトレンチ西端の大きなカットも古墳の造営とは関係ないと考えられる。おそらく、今では水田面となっているが、もともと丘陵斜面であったところを水田か畑地などの可耕地にするときに改変した比較的新しい時期の所産であろう。実際に古墳を造るにあたって、外周平坦面を確保するために削り出された地山が、トレンチ中央付近から東に広がる7層で、その上面の傾斜がよりきつくなる13層西端付近が古墳造営のためのカットが入ったところで、10層が露出するところまで削り込まれたのであろう。この10層を切り込む幅0.3mのSD05とその内側に幅0.8mのSD07を検出した。

第5トレンチでも第3トレンチ同様、土手状の盛り上がりは旧地形を反映したものではないことが確かめられた。西半を見ると水田に関係する2層の下は、かなり複雑で中ほどで1段東へ下がるとしばらく地山が安定する。しかし、それが古墳時代の造作かどうかは不確かである。古墳に関係する可能性のある造作は、10層から11層にかけての法面であるが、東端のレベルは古墳の周囲の平坦面よりもかなり高く疑問を残す。全体のプランを考えると、この第5トレンチには墳丘周囲の平坦面は及ばないことが明らかなので、レベルから言っても第5トレンチ東端付近のⅡ層上面の地山面はもう一度トレンチ外で下降しなければ外周平坦面へ連続しないことが予測できる。

さて、墳丘西側の外周平坦面には先に述べたようにSD05とSD07の2条の南北方向排水溝が検出された(Fig.2)。SD05は第3トレンチの当初の幅での検出であったが、その南への延長が第6トレンチのSD04の西端にちょうど一致することから、墳丘裾から約3mの一定幅をあけて直線的に設けられていることが想像できる。西側からの水の流入に備える目的があったのだろう。中には礫が充填されている。

これに対して、SD07はその北半が拡張した墳丘トレンチの西壁に沿うように検出されたため、きれいには掘れていない。その理由のひとつに壁際に設定した発掘用排水溝がSD07に重なってしまったことがある。そして、南半についてはその排水溝によって壊してしまった部分が多く、まともに検出さえてきていない。

さらに、外周平坦面全体に敷かれた敷石がこの検出を難しくしていた。この敷石を残すために、実際に検出したのは4.4mほどであった。しかしこの範囲であっても、墳丘裾と平行していないことがわかる。

断ち割りの結果、SD07に詰まっている礫は周囲の敷石が落ち込んだとも受け取れる堆積状況であった。つまり、開渠であった可能性がある。そして、SD05に比べれば二次的な排

第3トレンチ

西側の
カット

第5トレンチ

SD05

SD07

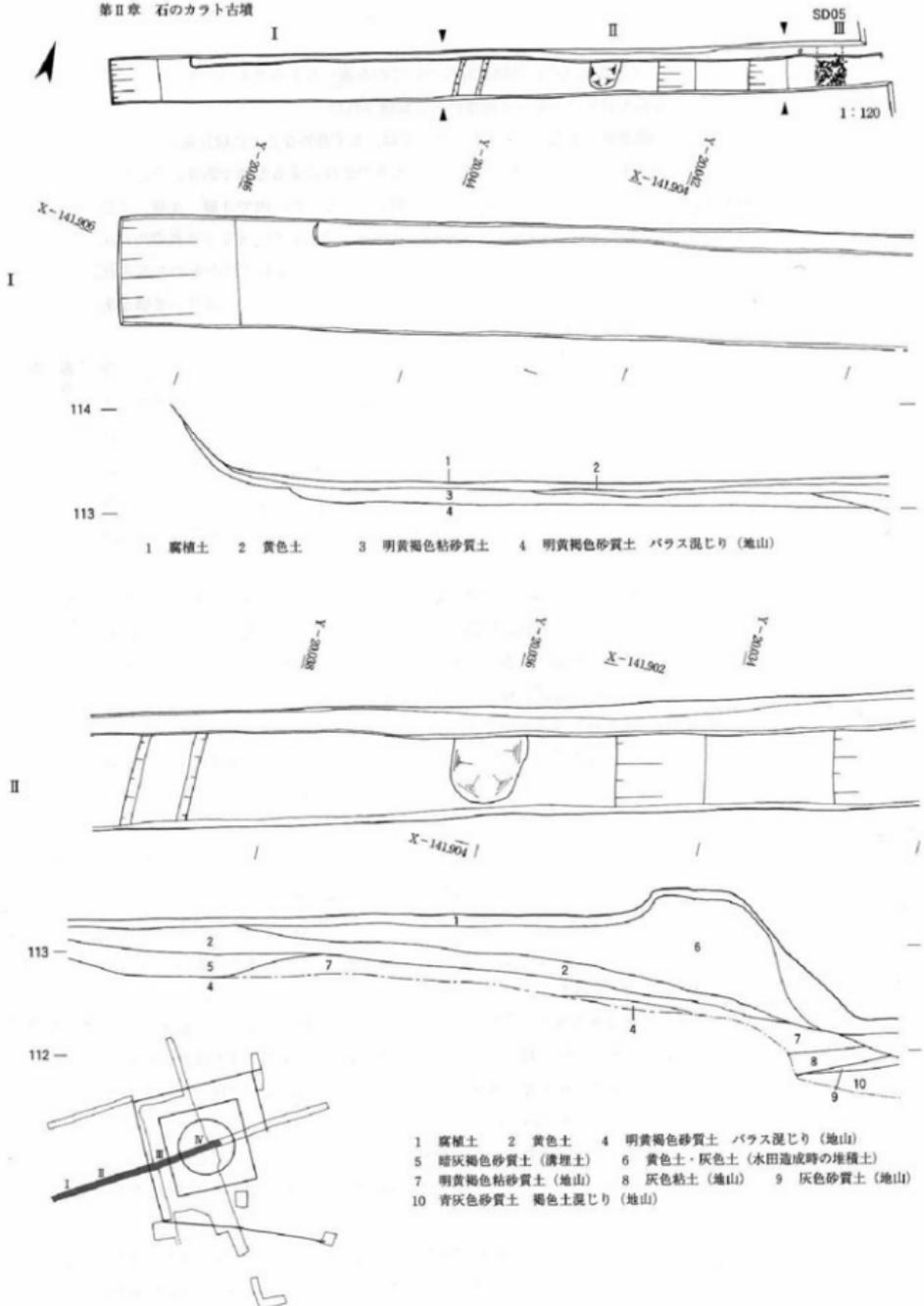
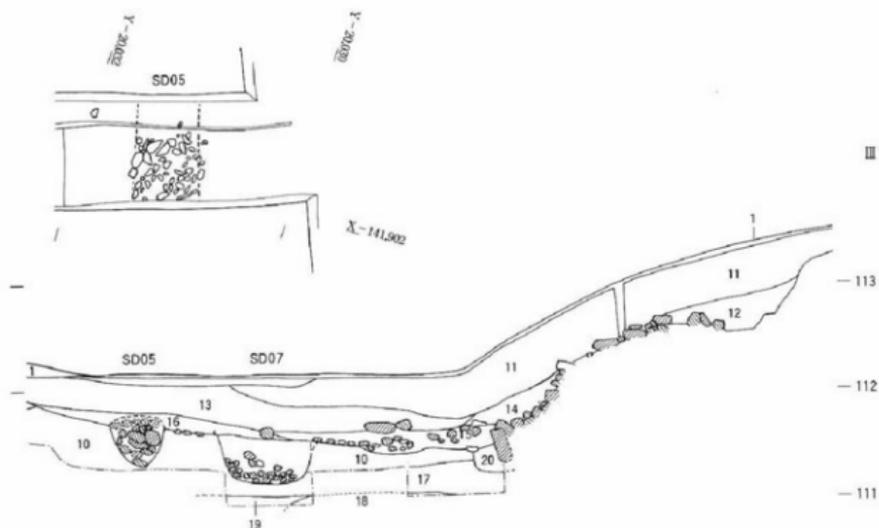
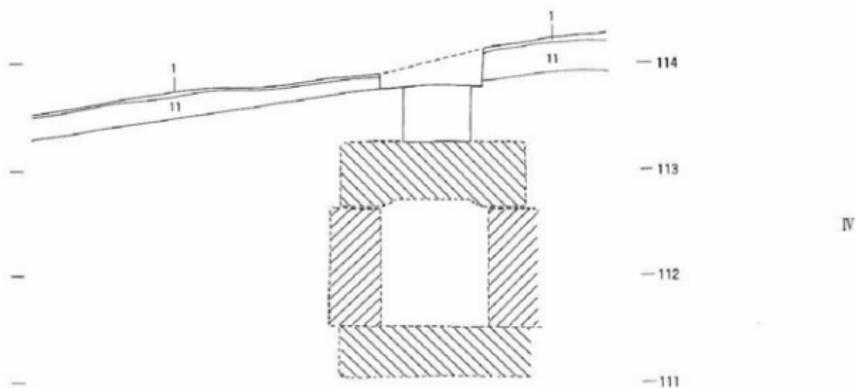


Fig. 10 石のカラト古墳 第3トレンチ平面・断面図 1:50



- 1 腐植土 10 青灰色砂質土 褐色土混じり(地山)
 11 黄褐色土 版築土の崩れた橙色砂質土を含む 12 暗黄褐色土 13 灰黄褐色粘質土
 14 暗黄灰色土 15 灰色砂質土 黒色粒子混じる 16 灰色粘土 17 褐色・青灰色土(地山)
 18 青灰色粘土 黄褐色混じり(地山) 19 青色粘土(地山) 20 灰褐色砂質土(基底石堀形埋土)



- 1 腐植土 11 黄褐色土 版築土の崩れた橙色砂質土を含む

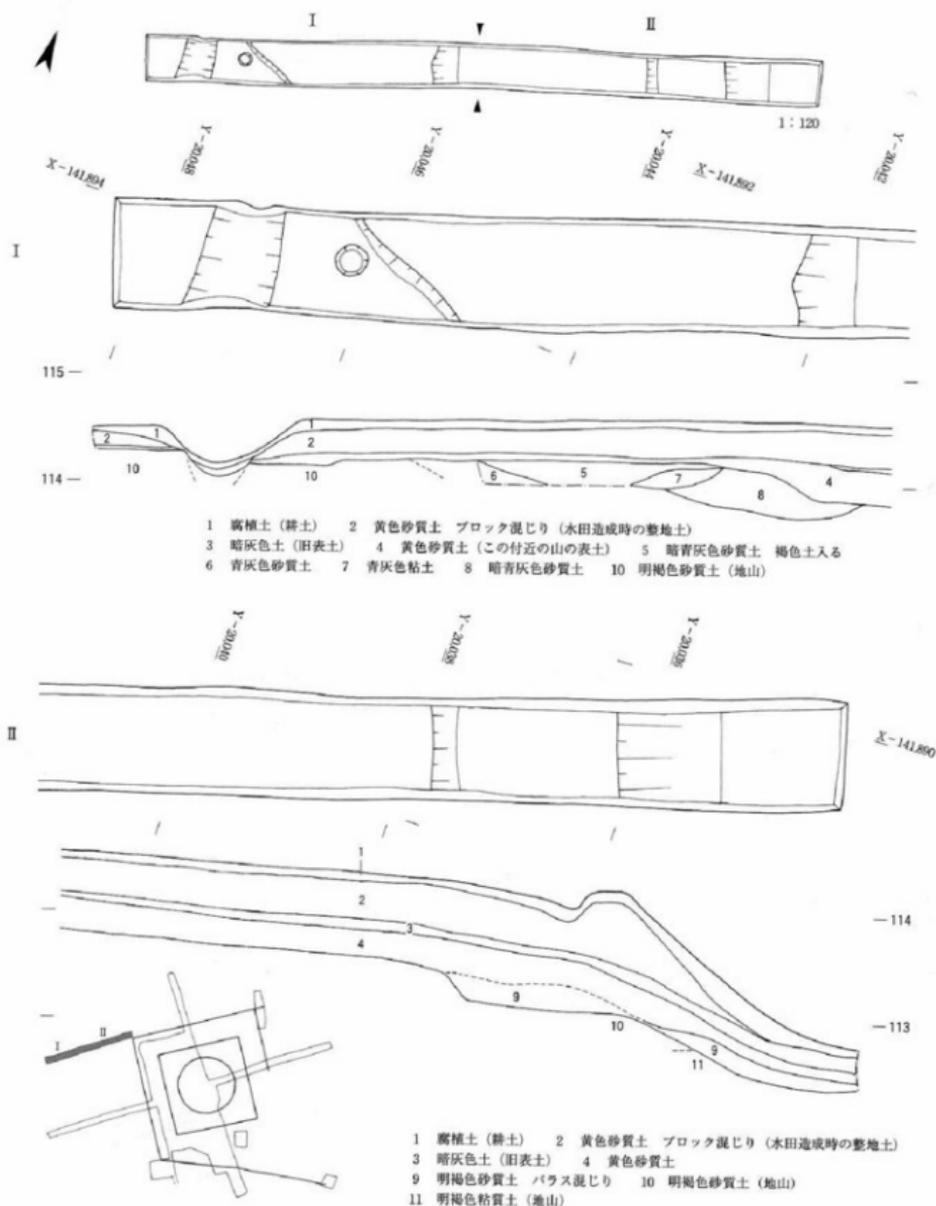


Fig. 11 石のカラト古墳 第5トレンチ平面・断面図 1:50

水溝であったことが窺われる。

外周平坦面の敷石は墳丘葺石に比べ小さく径10cmくらいの比較的平たいものを用いているが、場所によっては先にバラスを敷いてその上に、玉石をかぶせているように観察されるところがある。

外周平坦面
敷石

④墳丘北側 (Fig. 12・13, PL. 7-4・8-1)

第4トレンチ

第4トレンチは、主軸に沿って北へ一度設定したトレンチをさらに延長し、墳丘中心より19mの地点まで設定したことになった。ここでは、内部にぎっしり礫の詰まったSD06と平面では敷石面と重なってとらえにくいSD08を検出した。

断面図によると地形は地表面からの溝状のくぼみが入るあたりから西へはゆるやかに地山があがっていくことが確認でき、そこには手は加わっていないとみられる。ここでも外周平坦面を覆う8層が途切れる地点から地形の改変が地山になされ、13層が露出するまで下げられてから少し内側にSD06が設けられていることがわかる。しかし、SD08は13層の上面からではなく、1層上の11層上面から切り込まれているのである。この11層は地山の12層とは異なることから整地層とみられる。11層はSD06のところで途切れている。

北側の
カット

2条の排水溝のうち、北側のSD06はまたも敷石面より浮き上がって検出された。したがって、これは北側から墳丘側に向かって流れ込む雨水や湧き水を排水するものであったろう。SD05と同じく墳丘裾から約3mのところを平行に走っていることからすると、外周平坦面の北西隅でSD05とSD06はつながっていたと想像できる。

SD06

SD08はSD07同様、調査区の北壁際での検出となった。敷石の残りがよい外周平坦面での検出となった。6.6mほど検出した範囲でみると、やはり墳丘裾とは平行でなくややぶれながら東西に設定されていることがわかる。SD07同様、内部をすべて礫で充填するのではなく、底のみ礫が認められるのは、開渠だった可能性も含め、二次的な溝であったことを示していよう。外周平坦面の敷石は西へいくほどしっかりと残っており、反対に墳丘中軸に近いところではまばらであった。

SD08

外周平坦面
に敷石

北面の2条の排水溝の延長を検出するために東に離れて南北方向に設けたのが第8トレンチである (Fig. 13)。トレンチ中央、現地表下約30cmで排水溝に詰められた石が検出された。位置的にSD06の延長部分とみられる。これは本来さらに東へと続いていたことは確実であるが、出土状況からすれば遺構としてこれ以上東にははっきりと捉えるのが難しくそうであった。なお、SD06の南にある斜行する溝は古墳と関係ない。

第8トレンチ

以上の調査所見を総合すると、墳丘周囲については次のような知見をまとめることができる。

まず、東南に向かって緩やかに傾斜する地形にあって、平坦地ができるだけ広く確保できる場所を選ぶ。そして、とくに西側の尾根に沿いながら、西側と北側を鈎形に削り出し、続いて、東側や南側に整地を施し、敷石を載せる面を作っている。敷石が本来、北と西にだけあったのか四周同じようであったかはわからなかったが、景観や実習された儀礼などを考えると四周にあった可能性が高いだろう。

墳丘周囲
のまとめ

墳丘構築、埋葬行為などとの関係は後述するが、敷石をする前にもっとも外側の排水溝を南を除いて墳丘裾より一定幅あけて平坦面の周囲にコの字形にめぐらし、南のSD04のみ等高線に直交するように南東へ長く延ばす。これらは主として西や北から流入ないし、浸み出して

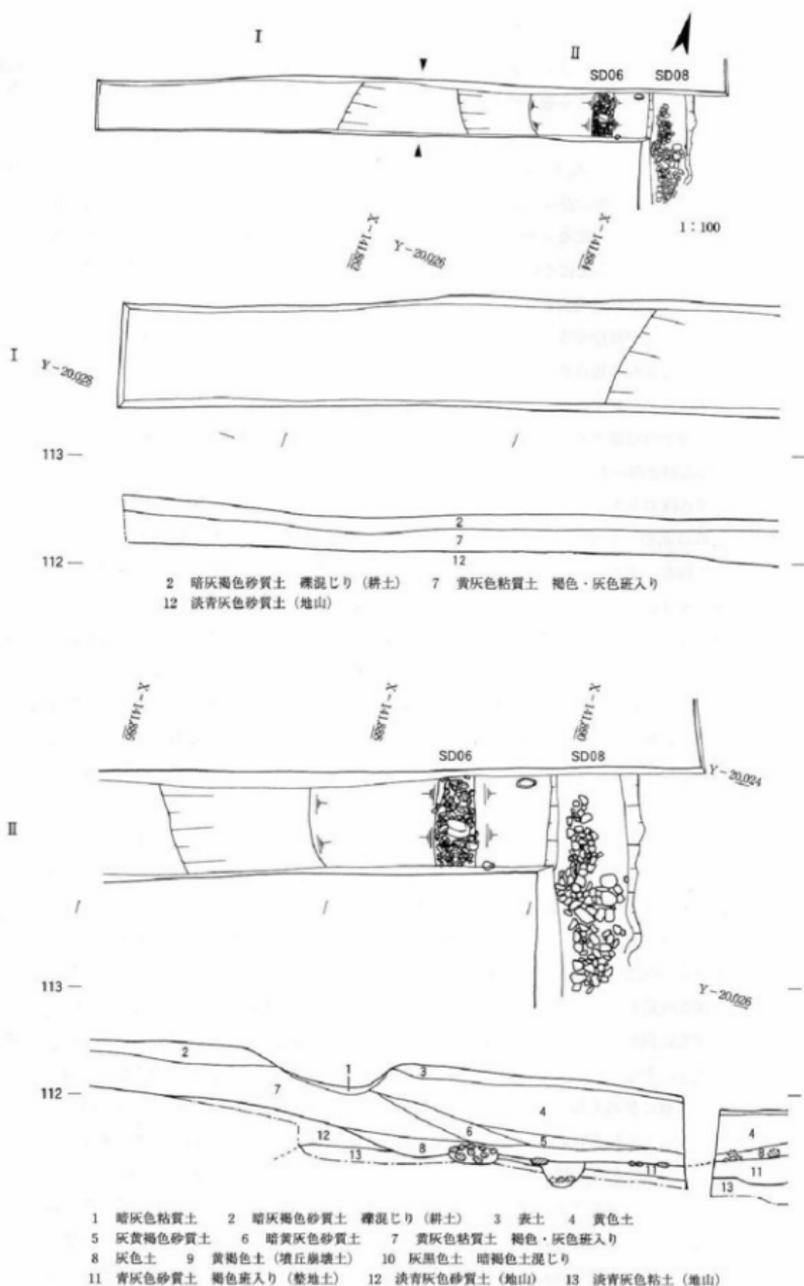
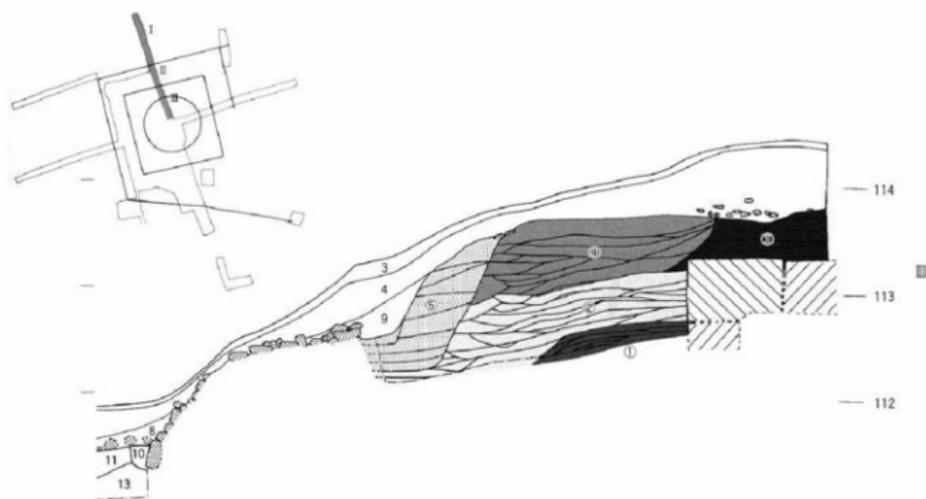


Fig. 12 石のカラト古墳 第4トレンチ平面・断面図 1:50



- | | |
|---------------------------|-----------------------|
| 3 腐植土 | ① 墳丘版築盛土 (褐色・灰色粘土) |
| 4 黄色土 | ② 墳丘版築盛土 (黄褐色・灰褐色砂質土) |
| 8 灰色土 | ③ 墳丘版築盛土 (黄褐色砂質土) |
| 9 黄褐色土 (墳丘崩壊土) | ④ 墳丘版築盛土 (黄褐色砂質土) |
| 10 灰黒色土 暗褐色土混じり (基底石棚形埋土) | ⑤ 墳丘盛土 (灰褐色砂質土) |
| 11 青灰色砂質土 褐色斑入り (整地土) | |
| 13 淡青灰色粘土 (地山) | |

くる水を受けるために設けられたメインの排水溝であろう。

いっぽう、これらの内側に設けられたSD 0 7とSD 0 8の2本の排水溝は、二次的ないし補助的なものであった。北側と西側とともに外側の排水溝と比べて底面のレベルは明らかに低く、かつ礫詰の状態も異なる。開渠であった可能性も考えられるのである。その方向も、規格的でないことから、必要に応じて応急的に掘り足されたものかもしれない。それぞれはコーナーで連結するようなものではなく、末端は外側の溝に斜めにつながったり、消失したりするようなものではなかっただろう。

なお、墳丘下部から延びる排水溝が設けられていることも明らかになった。これらは、いずれも墳丘造営に先立って設置されたものであり、3本の溝は墳丘を縦に4分割する南北方向のラインに沿っている。それぞれの排水は、内角で105度の方向へ東に折れたSD 0 2に合流するしくみになっていた。後にも述べるが、中央のSD 0 1は墓道部分のコロレール抜き取り跡の下で確認したところ、石部の南端より1mのところから始まるものであることが確かめられた。石部の底板を設置したあと、幅0.6m、深さ0.2mの溝を掘り込み、礫を詰め込んで造られている。その礫には大小のものを混ぜるが、南端でSD 0 2と連結する部分のみ小さな礫を多く用いている。ここではSD 0 2の方が低く掘り込まれていた。SD 0 1の総延長は7.4mである。

⑤第9トレンチ (Fig. 14, PL. 8-4)

第9トレンチ

墳丘から南へ30mほど離れたところにある逆L字形の小さな土塁状の高まりに対して、正L字形の調査区を設定して調べた。地山の上に2層の黄色砂質土が堆積していることがわかるが、

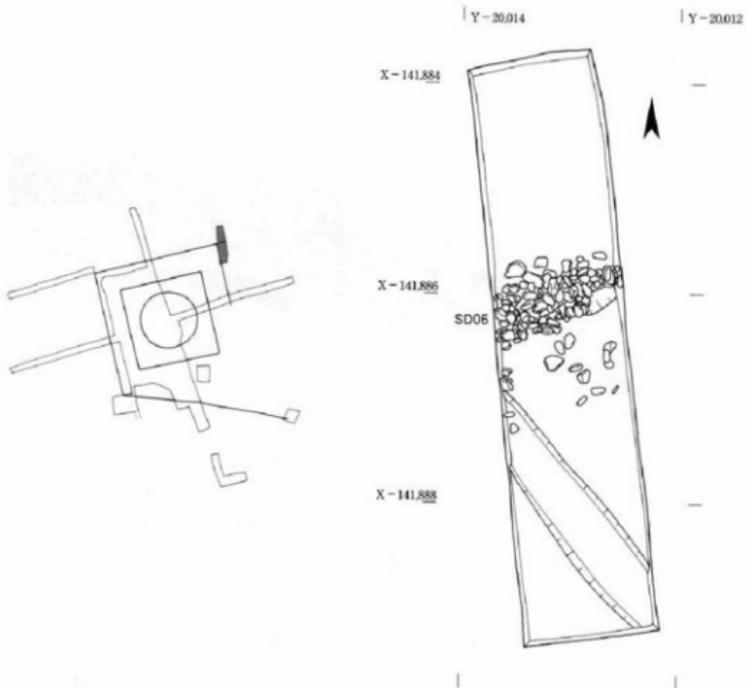


Fig. 13 石のカラト古墳 第8トレンチ平面図 1:50

時期や性格はまったくわからなかった。古墳とは直接関係のないものと判断され、その付近にまで整地が及んでいる形跡は確かめられなかった。

(2) 墳丘の調査 (Fig. 3・6・7・10・12・15, PL. 6)

すでに記したように墳丘部分については、西半分を広く発掘したほか、第1～4トレンチでは墳丘部分に限って、部分的に断ち割り調査を実施し、その構造を把握しようとした。

① 外表施設

石 上円部墳丘は墳頂に近いところで葺石に使用された可能性のある石がわずかに散乱していたが、絶対的に表面を削られて旧状を留めていないようであった。これに対して、下方部はその上面に敷かれた石から葺石の基底石に至るまで一部間に透いたところがあるがよく残っていて、古墳築造当時の姿をよく留めている。

なお、上円部に本当に葺石があったかどうかが問題である。検出した状態を見ると、北面で1ヶ所テラス面より低いところで上円部葺石の基底部分と思われる礫層を認めたが (Fig. 3)、そこ以外は上円部盛土残存部と下方部テラス敷石内縁との間が一様に1段くぼむように掘り上

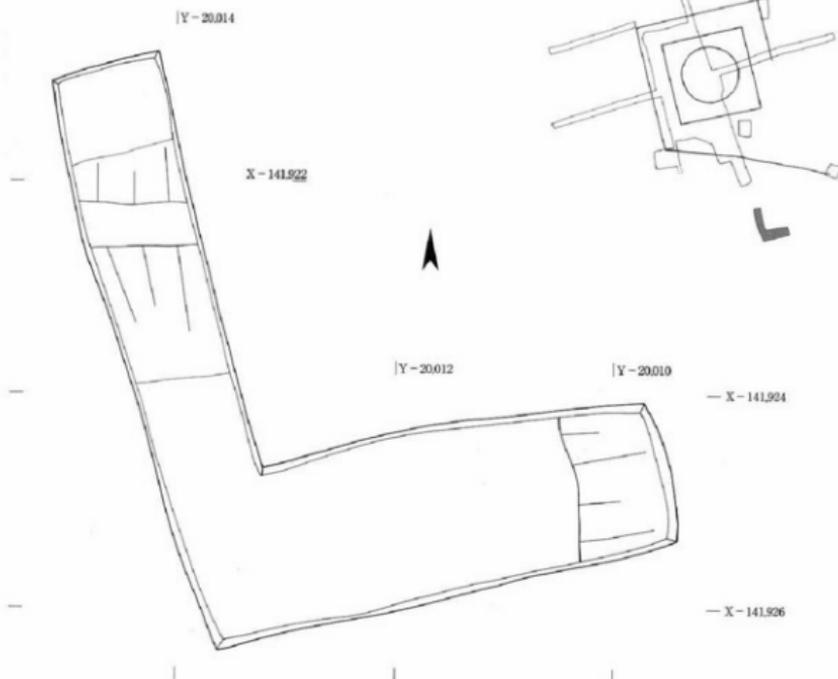


Fig. 14 石のカラト古墳 第9トレンチ平面図 1:50

がった。そこには墳丘の崩落土が詰まっているが (Fig. 12)、そこだけが決めるのは理解しがたい。また、後に述べるように、墳丘の築成過程を見ると、外側には何らかの土留めを施していくことが必要となる工法を採用していることから、本来上円部の外表にも裏込めをとまなう石があったものと判断される。これは葺石というより擁石と呼ぶものに該当しよう (高橋2002)。

上円部にも
葺石

そうすると、第1トレンチの墳頂付近にあった石や、石塚内部に投げ込まれた相当量の礫石がその名残であるかもしれない。したがって、現状はそれらが裏込めとともに抜け落ちた状態とみられ、上円部の裾の径は下方部上面の敷石が途切れるところでおさえられる。その場合、テラスの幅1.4m以上で上円部径は9.7mとなる。ちなみに、上円部残存径は9.1mである。

葺石は十字トレンチの各断ち割り断面によくその葺き方が現れている。まず、裾のラインから0.2~0.4mほど外側から掘り込んだ布掘り状据付掘形の中に縦長の基底石を縦使いにして並べることから始まる。基底石の大きさは長さ25cmほどである。ただし、隅角の基底石は直角に近い2面をもつ特別に大きい石を立てて使っている。その後、掘形を埋めると、本来縦長の基底石が普通の丸、ないし四角い石のように見えるようになる。その上に基底から数十cmの間は小口を外に向けた石を、全体で外面が平滑に見えるように積み上げていく。Fig. 12や Fig. 15からこれは裏込めの土を置きながら施工していることがわかるが、その前の作業として、

基底石

墳丘のコア部分の外側をいったん削り立てる所作をしていることが注意されよう。

また、墳丘裾から1m以上のところは確実に敷き並べており、敷石と呼ぶべき状態にあるが、小口積みからの移行部分はやや不鮮明である。外見上境目が目立たないように石の置き方を変えていったものと思われるが、その部分がちょうど抜け落ちた残存状況にある。斜面の葺石とテラスの敷石の石材を比べるとあまり大きな差はないが、葺石に対して敷石は石材の広い面を上に向けて並べられている。施工単位や区画の目地はともに確認しがたい。

四隅の溝

敷石についてもうひとつ注目されるのが、北西と南西隅テラスに石を2列に縦に並べて作った斜め45度の溝状部分である。本来、下方部四隅すべてにあったとみて間違いない。木材など腐朽しやすい部材を置いて、細長い石を横向きに沿わせてから周囲に石を敷いたのだろう。自ずと敷石の施工が分割されることはわかるが、その後どうして溝状に残したのかはわからない。水道として利用した可能性もあるが、斜面の葺石部分に垂れ流すことになり中途半端である。類例の増加を待ちたい。

②墳丘本体 (Fig. 7・12・15, PL. 9-4)

第2トレンチと第4トレンチ (Fig. 12) の断ち割り断面図から墳丘の構造と構築方法がほぼ明らかとなる。

墳丘構築

基本的に墓塚をもたず、墳丘の構築は石櫛の組み立てと連動して同時的に行進していったことがわかる。そして土の積み上げは茶褐色砂質土を詰めた土叢による土留めをしながらの版築によっている。

第2トレンチの左右の壁を図化したFig. 7やFig. 15によく表れているように、まず地山を削り出したあと、石櫛範囲に礫を敷いている。この段階で墳丘内の排水溝SD 01などがさらに地山を掘りくぼめて設けられたと考えられる。

そして石櫛の床石を礫の上に敷き並べたあとに、排水溝を埋めながら床石周囲全面をFig. 7の9~11層やFig. 15の1~3層の整地土を入れて床石の高さまで嵩上げしている。この段階での版築は比較的弱いけれども、確実に土叢で押えてある。この嵩上げの工程と外周平坦面の整地は一体で進められたものと思われる。

なお、底石上面に回りの面が連するまでに、コロレールが仕掛けられている。コロレールは心で0.7m、それぞれ上面幅0.3mで約3.0mの長さにわたって検出した。その抜き取り跡は墓道として石櫛前面が利用される前には完全に埋め戻されている。それまでに石櫛の石材が搬入されていたのであり、奥壁、側壁などの部材がこのコロレールを利用して外から送り込まれ、順次組み合わされていったと思われる。だが、ここでひとつ問題がある。

後述するように石櫛床石と天井石には側面に相欠きがあり、その向きからするとともに手前から奥へ石材を並べていったとしか考えにくい。したがって、南から以外の搬入もあったことも考えておかななくてはならない。

さらに、天井石をいつ架け渡したのかということも、その技術的方法とも関連して問題である。扉石を除く石櫛の構築がすべて終わってから、墳丘の本格的構築が始まったのか、天井石を載せる前に、側壁の高さほど墳丘を盛っておいて、その斜面を利用して天井石を引き上げたかのどちらかであろうが、Fig. 12の①の版築がちょうど奥壁上端に一致していることは後者の可能性を支持する。とはいえ、Fig. 15にはそれは読み取れない。

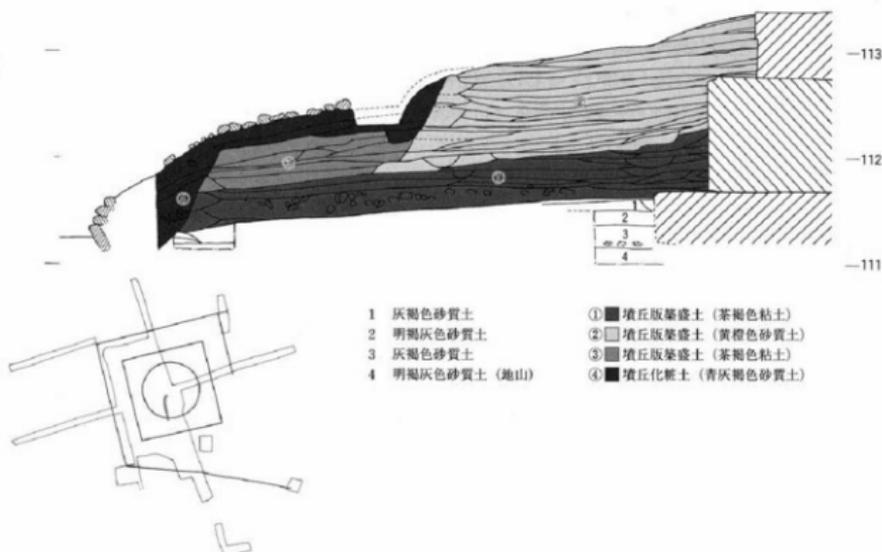


Fig. 15 石のカラト古墳 第2トレンチ断面図 1:50

墳丘の積土は、最初に小礫を入れた黄褐色青灰砂質土を厚く入れているほかは、1層あたり5cmほどの明褐色、灰色、灰褐色の粘土を丁寧に積み上げ、丁寧な版築状態を見せている。それにも大別何工程かが読み取れることを、Fig. 12を例に見ておきたい。先の①の版築のあと、石柵を固めるように、2段階成の完成後の姿を意識して②～④の版築によって盛土していることがわかる。ただし、この段階では仕上がりの外観より数十cmほど小ぶりに作られている。なお、③の石柵天井部はとくに黄褐色砂質土の非常に堅固な版築をおこなっている。②と④は確実に端を土嚢で抑えながら版築をおこなった形跡をみせるが、③にはそれがみられない。しかし、土層断面に見えるような水平な版築層を築くにはやはり端を固定する必要があると思われる、④を盛る時にその部分が大きく削り取られた結果、③については土嚢の単位が断面図には現れなかったと理解したい。ところで、この層が途切れる標高113.7m付近に礫が平面的に広がる部分がある。墳頂の敷石の残骸かもしれない。

このあと、土嚢積み部分を意識的に削り込み、墳丘をきれいに平滑にしてから、あらためて葺石、敷石を施しているのである。この外装を整える前に、埋葬をおこなっていることは外表施設に追加した痕跡がなく、まったく石の並びが乱れていないことから明らかである。

本古墳で用いられている土嚢は断面は端が鋭角にとがるように見えるものであり、外面を削り立てた角度は約65度に達する。

さて、調査時にはこの砂質の土塊が内側に対して鋸歯状に入る様子に対して、合理的な解釈ができたわけではないが、今日までに古墳時代後期以後の古墳にしばしば土嚢で端を抑えながら内部を盛っていくという例がいくつもみつかようになってきた(江浦編1998)。したがって、

墳丘削り
込み

今日的視点でいえば、やはり土葬状のもので端を抑えて版築をおこなったことは確実である。

2種の土葬 そこには最大で0.3m以上の長さを計る塊が見られ、おそらくその倍ほどの土葬が用いられていたと考えられる。しかし、2種の土葬を使用していた可能性もある。すなわち、一番外を抑えるのに0.5m以上の土葬をもちい、そのすぐ内側にあたかも詰め物のように0.4mほどの薄い土葬も使ったように観察できるところがある。

③墓道 (Fig.7・16, PL.5・9-1~3)

墓道は第2トレンチでその西半をほとんど掘り上げており、東の壁では墓道の埋土の断面を

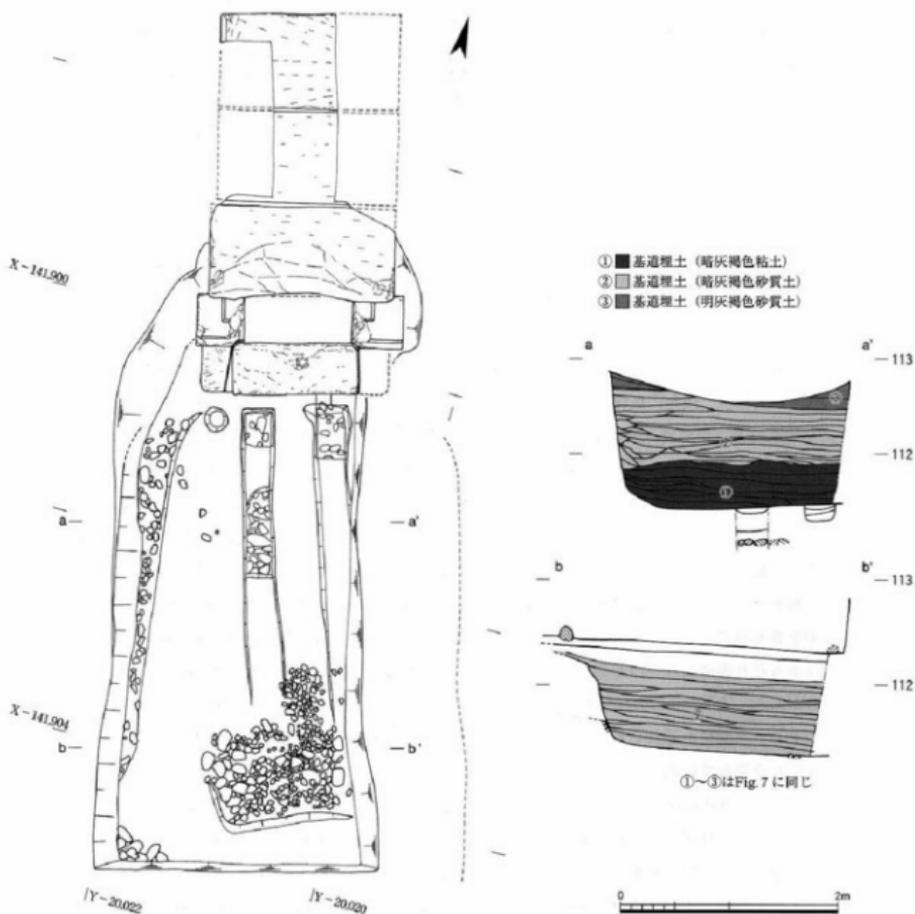


Fig. 16 石のカラト古墳 墓道および石椁 1:50

残しているが、西では墓道の西壁を直接検出している。検出範囲は長さ4.4mである。

墓道の形状は平行する東西の壁が石槨前面に急速にすぼまり、石槨両側壁前端に取りつくようになっている。中軸で折り返した場合、墓道が広がったところでの幅は上面で約3.1m、底面で約2.2m、それより南ではさらに緩やかに広がっていく。墓道の傾斜は南に10%と比較的緩いものである。

墓道の形状

この墓道面上の遺構としては、西側コロレールの抜き取り跡最北端のわきに上面径20cm、深さ同じく20cmほどの柱穴が1ヶ所だけみつかった。東側の対称位置にもその存在が予測され、墓前祭に関わる遺構とみられる。そして、石槨前面から2.5m南へ離れた墓道面に東西1.2m、南北1.5mの範囲にわたって小石を凸字形ないしL字形に1層敷き詰めた遺構が検出された。

柱 穴

凸字形になろうがL字形になろうが、古墳の中軸上にあたる部分が石槨の方へ0.5mほど突出している。

これも墓前祭に関する遺構とみて間違いないが、磔敷の周囲では何ら特別な遺物はみつかっていない。その位置は下方部テラスの下、墓道出口付近にあたる。西寄りには大きめの河原石が多量に用いられ、中寄りには小さめの石が使われている。コロレールの抜き取り跡は、この範囲では下へ続いている様子であったが、先に述べたように抜いたあとに埋め戻して墓道を整えているため、敷石検出面では明確にその抜き取り跡は見えない。

磔 敷

Fig. 7の墓道東壁のセクションから、墓道の埋め戻しは扉石閉塞後、大きく3段階の工程を経ておこなわれていることが窺われる。まず、細かい単位の版築層の①が墓道外側に向かってかなりの傾斜をもって積まれる。これは粘土質で端を土糞で抑えることはしていない。これに続いて、下方部墳丘コア部分の端とともに墓道壁際も土糞で抑えながら版築をおこなって石槨扉石と墓道内を②の版築ではほ埋める。最後に上円部に相当する開口部分を③で埋め戻し墳丘コアの成形を完全に終えるという工程がわかる。①と②は灰色、褐色の粘土各層の境に灰色砂が入り込む層の版築であるが、③は明灰褐色砂質土で、小バラス、粘土ブロックの混じる互層となっている。

墓 道
埋め戻し

なお、須恵器皿 (Fig. 21-1) がこの墓道の埋土①あるいは②から採集されている。

須 恵 器 皿

④石槨 (Fig. 17~19, PL. 10~12)

石槨は墳丘中央に位置し、主軸は北で西に約13度48分振れている。二上山で産出する凝灰岩製の切石による組み合わせ式石槨で、ここでは横口式石槨と称する。石槨の内法規模は東側壁で2.59m、西側壁で2.60m、幅は床面中央で1.03m、天井部で1.04m、高さは東側石、西側石それぞれ中央で1.065mである。天井部は屋根形に削り込まれていて、0.1mほど上げられている。床面は北側が高く、南に向かって緩やかに下降し、比高は2.3cmを計る。天井石外側の目地には灰白色粘土で目張りしている。

横口式石槨

石槨各部は計16石で構成されている。ただし、このうち盗掘によって最南端の天井石は失われている。床面を構成する石は4石からなる。後述する天井石同様、隣接する石と接する側面は相欠きとしているらしく、目地からそれぞれ0.23cmのところでのその跡が確認できる。それによると南側の床石から順次北側へ4枚敷き並べていったと考えられる。

計 16 石

床石の長辺は推定で1.7m、床石のうち短辺の長さがわかるのは、内側の2石で、南から2石目のものが0.89m、3石目のものが0.88mである。東側壁を構成する各石は南から下辺、上辺の

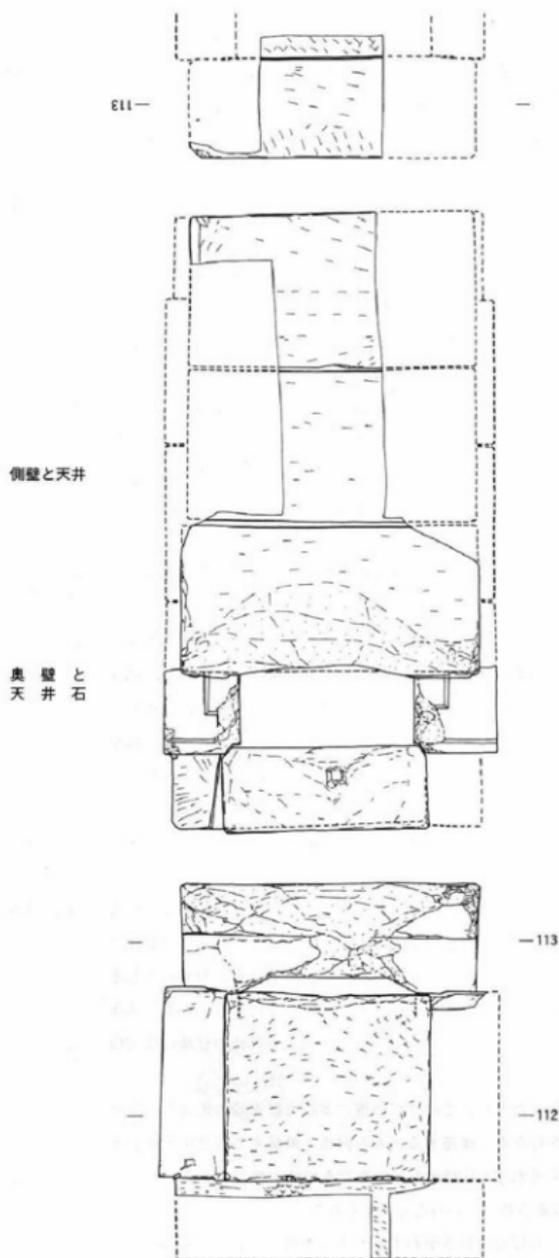


Fig. 17 石のカラト古墳 石櫛外面実測図 1:30

順に記すと、長さは1石目が0.82m、0.85m、2石目が0.88m、0.88m、3石目が0.89m、0.89m、西側壁は1石目が0.86m、0.87m、2石目が0.88m、0.88m、3石目が0.86m、0.86mであり、東側石南端のみやや小さいが、0.87m平均で作られている。

最南端の床石の厚みは、扉石をはめ込むために1段下げたところで0.45mを計る。側石はそれが載る床石のへりを1段削りこみ、対する側石下端もその段に応じるように内壁側角を落とし、側石内壁と床石上面とが隙間なく組み上がるよう工夫されている。側石に相欠きがあったかどうかは明らかでないが、おそらく奥壁を設置して順に前へそろえていったと考えられる。側壁と天井石とはいわゆる逆印籠蓋の方法によって固定されるようになっている。つまり、側石の上面を20cmほど、内側が1cm低くなるようにし、そこにはまるように天井部は側面から15cmのところ段を作り出している。また、側壁南端部分は8cmの幅で約1cm落としているが、これは失われてしまった南端の天井石がそこで安定するようにしたもので、そこより南にどの程度天井石が張り出していたかは定かでない。

石櫛前面では、扉石を載せやすいように床石上面を前方ほど広く1段落としている。これは側壁に対する削り込みよりもさらに深い。扉石は長辺1.3m、短辺1.06mで、底面と上面は平らであるが、両側

石に接する範囲のみ斜めに削り込んでいる。これに対応して、最南端の側壁石は内側を鉤の手に削ってあり、そこに扉石をはめ込むようになっている。なお、扉石と床石の間には小石をいくつかかませて安定を図っている。また、扉石上面に上場で10cm、下場で5cmほどの小さな方形の凹みがあるが用途は不明である。おそらく、盗掘後の際かその後に加えられた傷であろう。

天井石は南から2石目のもので長辺1.7m、短辺0.87m～0.92mを計る。天井石どうしは床石同様相欠きによって接合を強化しており、上面から0.28～0.30m付近で相欠きが確かめられる。相欠きの具合からやはり南から架けていったように見える。失われている南端の天井石が仮に一番北の天井石と同じ短辺長をもつならば、扉石をはめない状態ではほぼ南半分が側石の南端よりはみ出ることになる。そのためにも南から天井石をかけ始めて、2石目の相欠きによって転げないように抑えたと解釈できよう。天井石どうしの組合せは北の2石間の接合があまりきれいでない(PL 11-1)。

天井石の幅は下面で測ると奥から順に0.87m、0.87m、0.88mで、最南端も同様の幅の天井石であった場合、扉石がちょうど完全におさまることになる。先に述べたように天井石内面は側石の接するところから屋根形に削り込み、10cm高さを上げている。狭くなった天井内面の幅は0.66～0.68mである。

天井石の外側目地には灰白色粘土が詰めてある。また、奥から2番目の天井石の上に薄く広く粘土が覆っていることが観察されるように、本来、天井全体を薄く粘土が覆っていたと見てよい。

それぞれの石の表面には基本的に藍やチヨウナの痕跡が残っているが、荒削りのままのところと比較的丁寧に仕上げているところがある。たとえば北端の天井石の後方側面は上方約20cmが荒削り、下方35cmが丁寧に仕上げとなっている(PL 12-3)。石室内部は水磨きがなされ平滑な面を呈しているが、部分的に壁の上部と天井部は風化してはがれているところがある。外面に残る藍やチヨウナ痕からは工具の刃の幅が5cmのもの、6cmのものがあることが確認される。奥壁裏側、扉石南側も明瞭に工具痕跡が残る仕上げとなっていて、石椽内面についてのみ周到な配慮がなされていることがわかる。ただし、関連する終末期古墳にみられる漆喰の塗布は壁面で確認できないばかりか、目地にも詰まっていなかった。また、組み合わせる場所をあらかじめ示すような計画線をつけた痕跡もみつからなかった。

こうして組み上げられた石椽の形態は、石椽内面が天井を家形に仕上げていること、そして扉石で閉塞した場合、扉石左右側面が側石の前方でかなりむき出しになることなどが、大きな特徴で、いずれの特徴も法量は異なるがマルコ山古墳のそれと類似する。

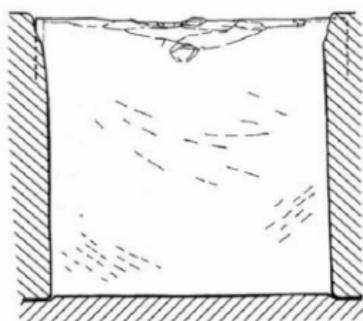
石椽内部には大量の土砂や礫が流入していた。開口部ほど厚く堆積していたのではなく、ほぼ水平、どちらかと言えば奥壁側が厚く堆積していた。埋土は上から礫を含む腐植土、下方ほど礫を多く含む明黄褐色土と続くが、このように礫が多いのは、開口部から石を投げ込むことが地元の人々の間でさかんにおこなわれたことを示しているのだろうか。その下に、北側に茶褐色土、南に黄褐色砂質土が端ほど高く堆積し、もっとも下層に黄褐色砂質土、灰褐色砂質土が薄く堆積していた。

奥壁寄りの茶褐色土からは、Fig. 21-4に掲げたような土師器皿が破片がかなりの数出土しており、それらは主に灯明皿として使われたと見られる。近世になって盗掘にあったか、あ

天井石

石材表面の加工

石椽内土



— 112

113

112

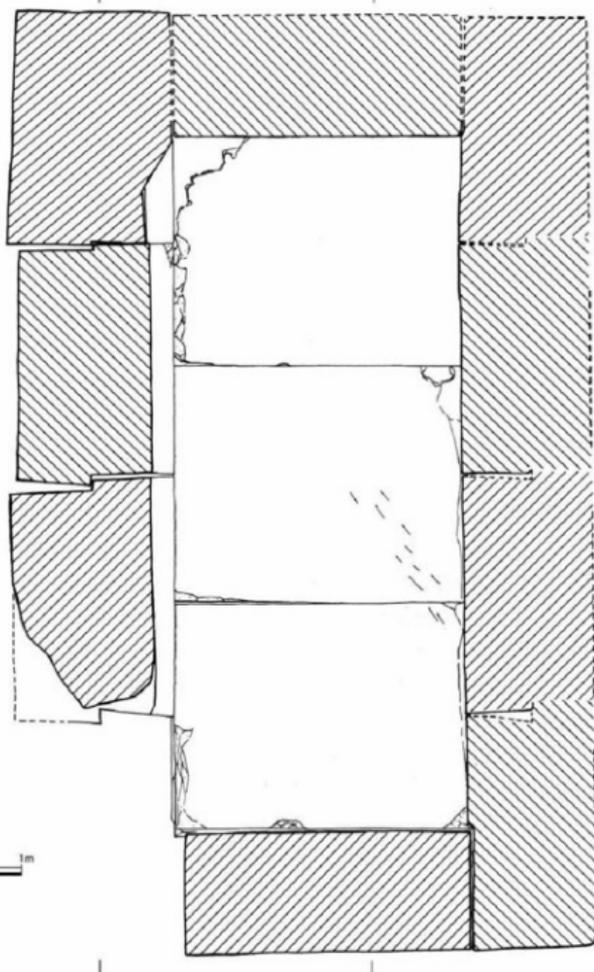
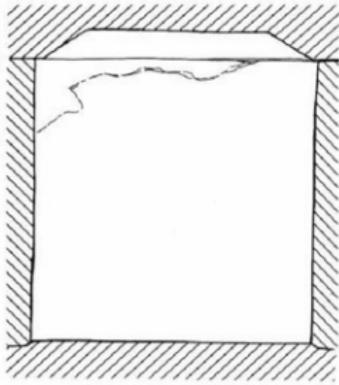


Fig. 18 石のカラト古墳 石室内部実測図 1:20

—113—

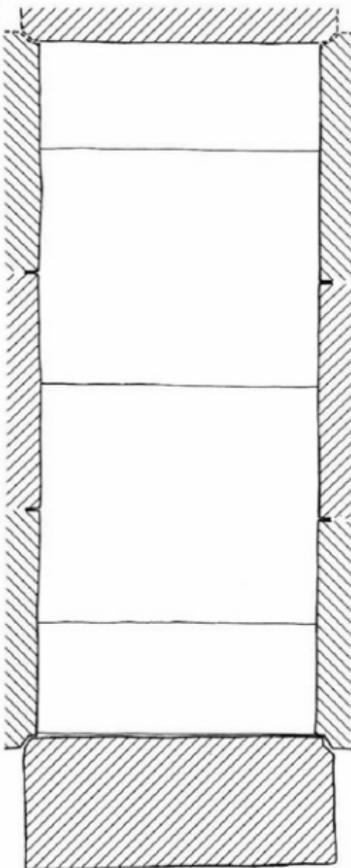


I

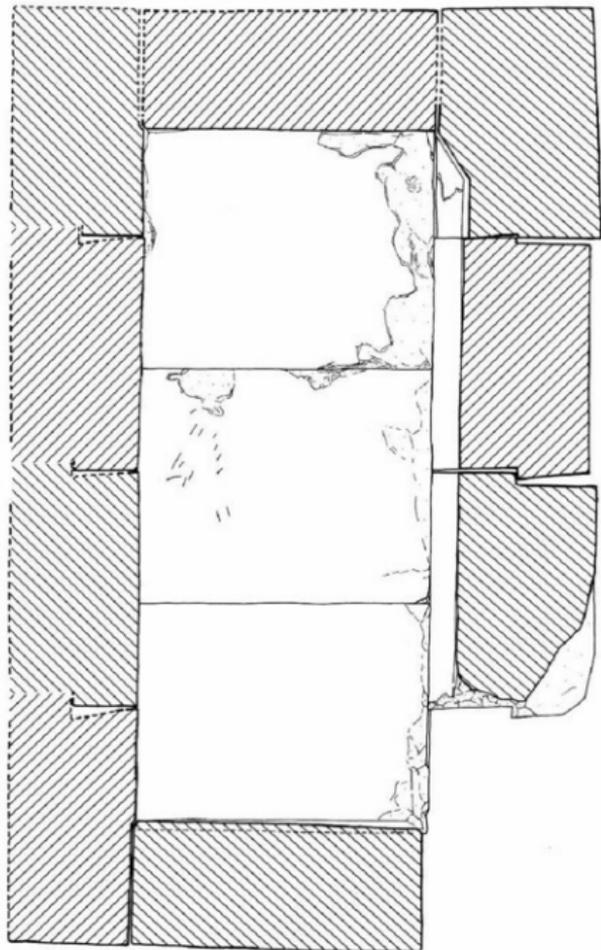
—112—

112—

113—



—



I

I

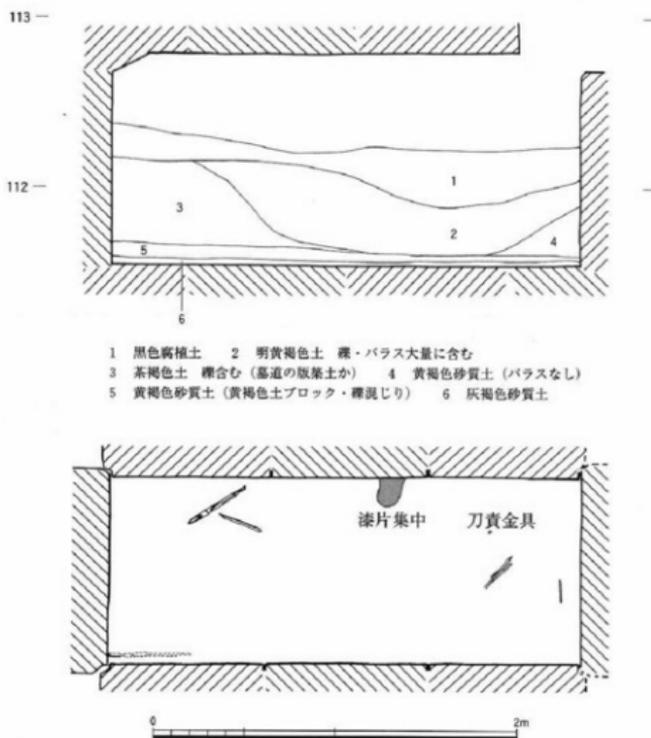


Fig. 19 石のカラト古墳 石室内堆積土断面図・平面図 1:30

るいはすでに盗掘されていたあと、近世にそこが何らかのかたちで利用されたのだろう。

床面で検出できた本来の副葬品としては、唯一扉石から0.5mほど北に行ったところで見つけた刀の貴金具があるだけで、これもその出土状況から本来置かれた位置を大きく動かされていると思われる。このほか床面近くの砂質土中から棺の一部とみられる漆塗製品の破片が東壁付近でやや集中して出土している。それ以外の遺物は、水洗選別によって流入土の中からみつけたものである。それらの中には金箔片も含まれていた。

なお、Fig. 19平面図に見る棒状のものは竹の根などの植物の痕跡である。

B 出土遺物 (Fig. 20・21、巻頭図版3、PL. 13)

出土品のうち、自然科学的分析は第V章で報告する。

大刀装具 (Fig. 20-1~3) 精尻金具と責金具、そして柄の部材が残っている。

銀装 大刀

2が精尻金具で銀製、おそらく鍍付け法を用いて薄い袋状に成形している。側面形は先端が丸みをもつ長方形で、端部は幅2mmの面をもち側面との間に明瞭な稜(筋)を作っている。現状では内部に鉄刀の切っ先が詰まっていたり、口には責金具が1個固着している。この責金具まで含めて長さ3.5cmあり、厚みは銀本体部分では最大1.0cmである。この責金具に接するか、わずかに隙間をあけて厚みのある革状の残存物が金具の側面に貼り付いていて、佩表や佩裏の広い側面では1.9cmの間隔をあけて直線的に途切れていることが観察される。この革状の残存物によって挟まれたところには何か別のものが貼り付けられていたと見られる。しかし、何ら接着剤などの痕跡は認められない。

むき出しになっている銀の表面は、側面では縦方向の刷痕が観察され、中央付近はやや金色を呈する。また、端部との稜付近はやすりによると見られる細かい刷痕が付いている。

責金具は2の精尻金具に付いているもの以外に1の単独のものがある。1は、石部床面で検出したものである。例卵形で、長径3.5cm、短径1.8cm、側面からみた幅0.35cmに作られている。表面は稜をもち、対して、内面は平らで、両者の間にわずかに1mmにみえない面があり、そこにやすりがけの痕跡が明瞭に残る。

もう1点の精尻の約金として2に見るものは長径2.9cm、短径1.1cm、幅0.3cmで、1に比べて稜がよりはっきりしている。

3は直線的な部材だが、責金具と同じ断面形で長さ4.0cm、幅2.8mm、厚さ1.4mmの細長いものである。一端は斜めに薄くつぶして端とし、反対の一端は別材に接続すべく相欠き状にしてある。当該期の大刀装具の中で、このような直線的な部材を探すと、正倉院宝物の中に黄金莊大刀第1号(中倉8)が鞘を白鮫皮で包んで佩裏中心線で金板金を施して扱を形成しているのが参考になる。本例も扱の部材として利用されたと考えられるであろう(正倉院1977)。全面に丁寧なやすり仕上げがなされる。

これらの装具はいずれも銀製で、同一の大刀の装具であったと見られよう。古墳時代の伝統的大刀とは異なるいわゆる唐様の大刀の装具に属する。中でも東大寺に伝わる銅漆作大刀第10号(中倉8)や黒作大刀第13号(同)の類に精尻金具の形制は似る。1の責金具は格段のデザインをもたないので精口か把の責金具(約金)かのどちらかであろう。

黒作大刀と比べて本個体は、完全銀装で作られていることから、装飾性が高いということができよう。出土している金箔がこれにともなうことはまず考えがたいが、精尻金具両面に貼り付けてあった別の装飾の存在を考えればやはりかなりの儀仗的性格をもっているものと言えよう。

金製玉 (Fig. 20-4) 直径8.8mm、重さ6.37g、黄味の強い金色を呈し、光沢は鈍い。表面はどこどころ黒く汚れ、細かい傷が無数に走る。完全な正球形に近いが、若干いびつで、1ヶ所に径約1mmほどの円形の窪みないし平坦面が観察される。これはおそらくその部位に別の工具が当たった跡とみられる。

玉

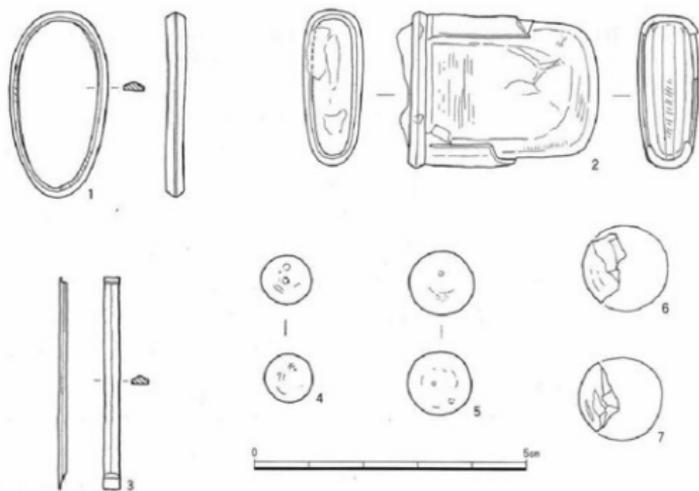


Fig. 20 石のカラト古墳 石塚内出土遺物 1:1

鍍銀玉 (Fig. 20-5) 直径11.8mm、重さ9.1g、表面は鍍のためか黒色化が進んでいるが、まだらに白銀色がきれいに見えるところもある。正球形ではないが、たたきながら球形に仕上げている感じがある。金製玉同様、数ヶ所に径1mmに満たない円形の窪みがある。これも工具の当たった痕跡と思われる。

琥珀玉 (Fig. 20-6・7) 円化できるものはこの2点である。赤みを帯びた茶褐色を呈し、5片の断片となっているが、同一個体になるかどうかはわからない。1片をのぞき4点ともすべて球面を残すものの、経孔の有無はわからない。直径1.9cmに復元できる。

金箔 (巻頭図版3-3) いずれもくしゃくしゃになったもので最大のものでも5×2mmである。石塚内堆積土を水洗して採取したものであり、石塚内での分布の粗密はわからない。他の材質のものに付いていた痕跡や、顔料などの付着は今では観察できない。

漆片 (PL. 13-3) いずれも細かな破片で最大のものでも1辺1cmに満たない。石塚内の東壁に比較的集中してみつかった。非常に薄い何かから剥がれたような状態で、内面に布目痕を残すものと木地のようなものを残すものがある。また、片面に水銀朱が付着する残片もわずかではあるが存在する。こうした状況から、厚く漆で布を重ね合わせた夾紵棺というよりも本体は木か何かで、その表面に布を張ってその上から漆を塗り重ねたような棺の存在が推定され、その表面の漆膜が残ったものと考えられる。朱のついた断片があることから、ことさら棺以外の製品にともなう可能性を追究する必要はないであろう。もちろん朱のついた面は棺内面ということになる。

須恵器 土器 (Fig. 21) 1が墓道埋土に入っていた須恵器皿Cである。口径10.5cm、高さ2.5cmを計る小型の皿である。口縁端部を外側に引き出す。底部外面はヘラ切り後ナデ調整で整える。

2と3が第2トレンチの墳丘南裾外側の堆積土から出土した。2が須恵器杯Bの蓋で復元口

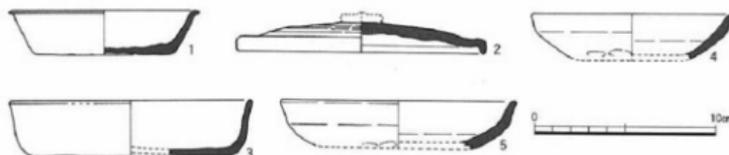


Fig. 21 石のカラト古墳 出土土器 1:3

径16.6cm、つまみは残っていない。3は須恵器杯Aで残りは悪い。復元口径13.5cm、高さ3.1cmである。底部外面はヘラ切り後ナデ調整を施す。

古墳に関係する可能性のあるものとしてはこれ以外に、土師器細片があるが形はわからない。

4が石塚内の茶褐色土から出土した土師器皿の中で、比較的形のわかるものである。復元口径10.8cm、胎土は白褐色で焼成は良好。近世前半、17世紀頃のもので、灯明皿として利用されたものであろう。比較的まとまって出土しているので、石塚の盗掘時ではなく何らかの目的ですでに開いていた空間を利用した時期を示すものであろう。

5が第2トレンチの暗茶褐色粘質土から出土した土師器皿で、復元口径13.0cmを計る。口縁部付近を幅広くヨコナデするもので、底部外面にはユビオサエの痕が残る。茶褐色で焼成は普通。11世紀頃のものと思われ、この時期に最初の盗掘がおこなわれた可能性を示唆する。

1は年代を限定することの難しい須恵器皿である。いっぽう2と3は奈良時代前半に下るものだが、墳丘外での出土であり古墳築造時期を示すものではない。

参考文献

- 飛鳥資料館1979『飛鳥時代の古墳』飛鳥資料館図録第6冊
 梅原末治1925『相楽村ノ方形墳』『京都府史蹟勝地調査会報告』6
 江浦洋編1998『歳塚古墳』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第24集
 大阪府立近つ飛鳥博物館2003『壁面古墳の流れ』大阪府立近つ飛鳥博物館図録31
 金子裕之2004『都城における山陵-藤原・平城京と喪葬制-』『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会50周年記念論文集
 上林史郎2003『後・終末期古墳における墳丘内暗室』『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念 考古学論叢』関西大学考古学研究室
 京都府教育委員会1979『奈良山-Ⅲ 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』
 正倉院事務所編1977『正倉院の大刀外装』
 高橋克壽2002『古墳の葦石』『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所創立50周年記念論文集
 塚原二郎2004『東京都武蔵府中熊野神社古墳の調査』『考古学研究』51-2
 坪井清足1948『生駒山脈に於ける古墳の地理的分布』『生駒山脈-その地理と歴史を語る-』積善館
 長江正一1920『京都府相楽郡相楽村の方形墳』考古学雑誌11-1
 沼津市教育委員会1990『清水柳北遺跡発掘調査報告書その2』
 石島和夫・土生田純之・曹永欽・吉井秀夫2003『古墳構築の復元的研究』雄山閣

第Ⅲ章 音乗谷古墳

1 古墳の立地 (Fig. 1・22、PL. 14-1)

丘陵先端に
立地

音乗谷古墳は微視的に見ると、北に谷を擁し、東北へ張り出す奈良山丘陵の支丘陵の先端部に位置していて、周辺ではかなり目立つ位置にある。眼下に皿池を臨み、丘陵裾からの比高はわずか5mほどである。

そのすぐ南の東向き斜面には音如ヶ谷瓦窯(第9号地点)があり、さらに南の歌姫西瓦窯(第12号地点)とともに、今日、一体で整備がなされている。それ以外に須恵器窯が第10号地点などで見つかっているが、古墳はこの一帯では確認されていない。ただし、音如ヶ谷瓦窯跡のSK17から出土した円筒埴輪(Fig. 80)は後述するように音乗谷古墳の埴輪とは型式学的特長を異にするものであるため、音乗谷古墳以外の古墳、あるいは埴輪窯跡が近くににあった可能性も捨てきれない。今のところ古墳が確認できるもっとも近いエリアは後述の第13号地点・第15号地点のある奈良山丘陵東部ということになる。距離にして1.2kmほど離れている。

2 発掘調査の経過

A 発掘区の設定と調査の経過 (Fig. 23)

1972年10月初めに音如ヶ谷瓦窯跡の南西に位置する奈良県御歌姫地区の第10号地点で、須恵器の窯跡を調査した後に、1972年10月12日から須恵器窯跡と同じ丘陵の北端に位置する本古墳を調査することになった。

墳丘は竹の土取りによって相当削り取られていたが、まず北東側の墳丘崖面を削って盛土の状態を確認するとともに、測量調査ならびにテストピットを墳丘の乗る尾根をまたぐ形であけることから開始した。その際に、南側裾から多数の埴輪が出土したため、範囲を広げて発掘した結果、掘削り状の遺構が掘り上がった。この時、その掘削り内の南西側に赤く焼けている部分があることが注意された。

地区割り

掘削り部分に続いて、古墳本体の調査を実施した。まず墳丘を南部、西部、北部、東部に4分割し、それぞれA区、B区、C区、D区と名前をつけた。それらの境界の中心をX30、Y30とし、XY座標によって地点を表現する方法とともに、2mずつ北東-南西方向のX軸にアルファベットを、北西-南東方向のY軸に数字をつけ、その併記によって地点を呼び分ける方法も用いた。

掘削りの
調査

まずA、C区の表土から剥いでいった。調査が進むにつれ、C地区の中で、墳頂と思われるところから円筒埴輪と形象埴輪が良好なかたちで出土した。いっぽう、A区では掘削り内に見つけた焼けあとのある土坑は、掘削りが埋まる中で掘り込まれたものであることが知られた。

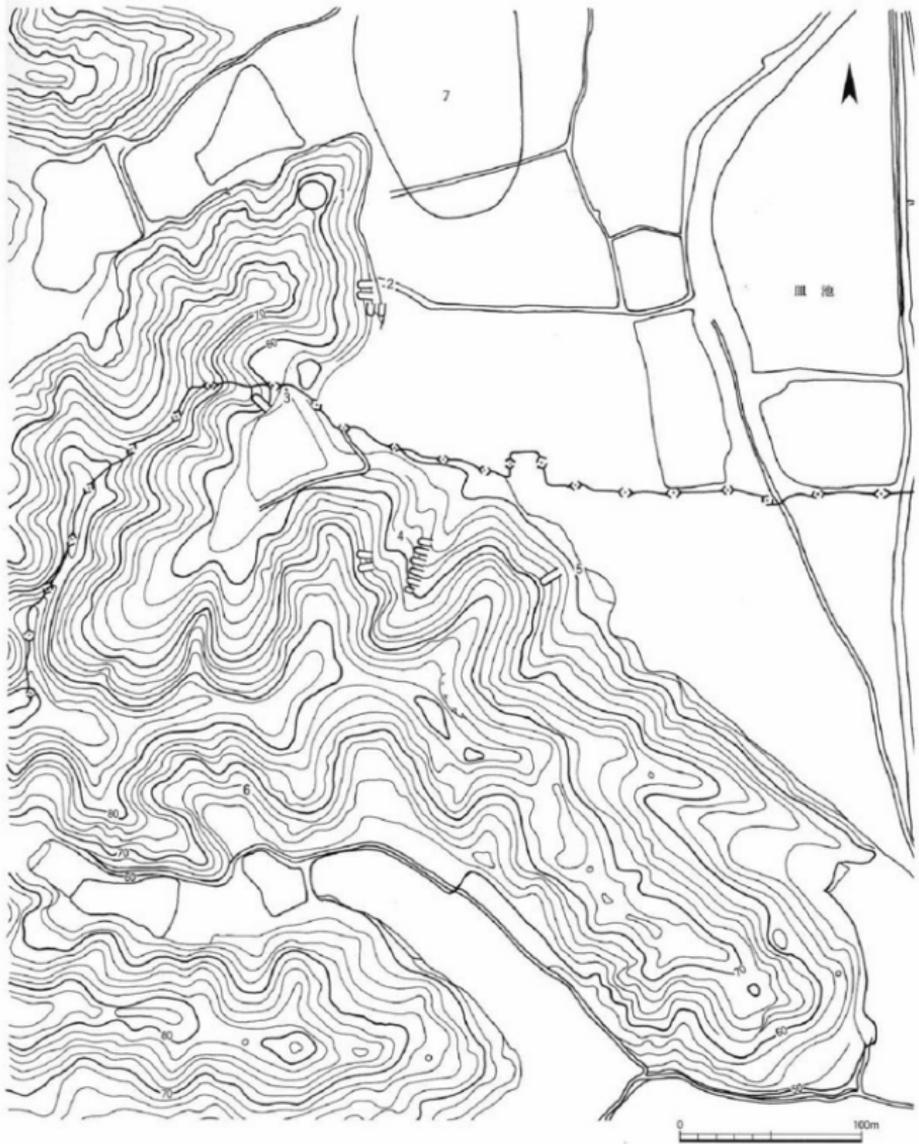


Fig. 22 音楽谷古墳 付近遺跡分布図 1:3000

1. 第20号地点 (音楽谷古墳)
2. 第9号地点 (音如ヶ谷瓦甍)
3. 第10号地点
4. 第12号地点 (歌姫西瓦甍)
5. 第11号地点
6. 第18号地点
7. 大品遺跡

この間、A区の掘削りから引き続き埴輪が多数出土した。円筒埴輪のほか人物、動物、玉杖、双脚輪状文形埴輪などの豊富な資料が得られ、それに続く南東斜面からは円筒埴輪のほかに蓋形埴輪や須恵器片も出土した。

埋葬施設の調査

続いて、D区の調査とともに埋葬施設の本格的調査が10月26日より開始された。D区でも埴輪の集中域を確認している。埋葬施設は徹底的な破壊にあったが、平面検出により、墓壇とともに石室の裏込めの粘土が残っていることがわかった。このことから、埋葬施設は横穴式石室だったとしても羨道から玄室にかけて段がつく特異なものであろうと考えられた。

埋葬施設内部を掘り下げるにあたって墓壇にあわせて畔を切り直し、四分法により進めたが、やがて盗掘で床面の大半まで攪乱されていることがわかった。床は本来バラス敷きで、それが残っているところでは鉄鍬など若干の遺物を検出した。

この段階で11月4日にいったん作業を止め、12月18日より再開した。そこでは、埋葬施設南側に排水溝を確認し、残存する部分を全て検出した。最後に排水溝と盛土、墳丘構築関係などを調べ、はじめてこの石室に石材が使用されていたことが判明した。調査面積は125m²。

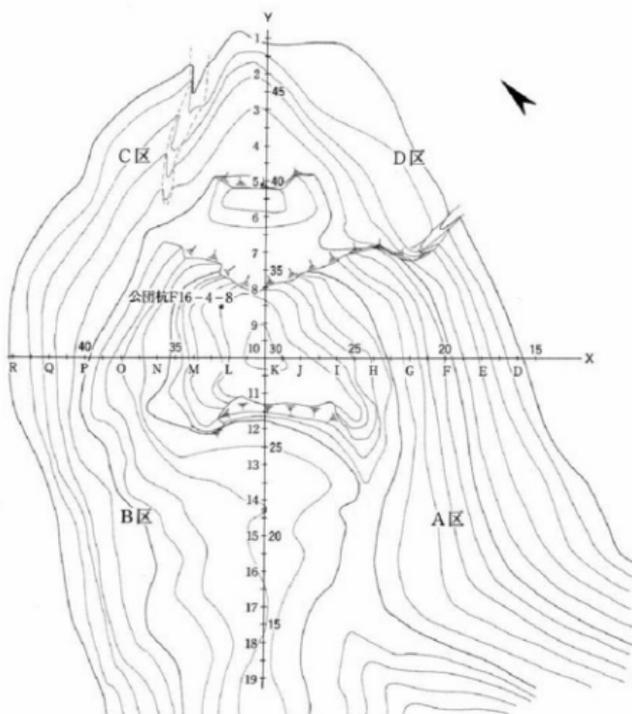


Fig. 23 音乗谷古墳 調査区地区割り図 1:300

B 調査日誌

1972年10月12日(木) 晴れ

丘陵先端部にある音乗谷古墳の調査にとりかか。作業は墳丘の除草集め、竹林によって削られている封土断面の清掃。断面の清掃作業中、封土から埴輪片を多数発見。

10月13日(金) 晴れ

壺掘り、古墳北東竹林側の断面を削る作業開始。墳丘裾と西南尾根上テストピットから多数の埴輪片が出土した。西南尾根上テストピットを拡大したところ堀と考えられる溝を検出し、人物・動物・双脚輪状文・玉杖を含む埴輪片が多数出土。掘削りの西南側が焼けていたが性格は不明。溝上面から須恵器高杯脚片出土。断面観察の結果、約3mの盛土をした古墳であることが判明した(後に訂正)。なお、テストピット中から甕腹片が出土したが性格は不明。

10月14日(土) 晴れ

音乗谷の調査対象地の地区割り。10月6日の発掘開始以来、「K」区としていた府県境から古墳までの間を「K」と「L」に分ける。

10月16日(月) 晴れ

壺掘りピットを開ける。4POJの測量を開始し、約半分を終了。

10月17日(火) 曇り

丘陵の陵部、伐採と壺掘り開始。本日で終了。測量済み部分から木の根抜き。

10月18日(水) 晴れ

測量完了。2班に分かれA・C地区の表土剥ぎ開始。C地区から円筒埴輪3・形象埴輪1が出土した。

10月19日(木) 雨

雨天のため作業中止。測量図のトレース。

10月20日(金) 曇り

4POJ・A区、封土を30cmほど掘り下げると、主体部と思われる部分の輪郭が現れた。外側に良質でない粘土、内側に封土表面を覆っている黄褐色が見られるのは、黄褐色が落ち込んでいるためと思われる。一時日はC区で主体部の一部が顔を出したが、そのときの判断よりも大きく広がることがわかった。またAII7を中心に、焼けた3cm程の壁をもつ遺構を検出。90×60cm四方程度の長方形プランをもつことが判明し、掘削りに沿って延びるのではないかという予想ははずれた。南西側の壁は焼けが顕著。この遺構は掘削り埋土(黄褐色)の上から切り込んでいる。C区において盛土と地山の境界を検出。60.00mコンターとほぼ一致する(後に訂正)。地山は小円礫混じりの砂質土(砂礫層)である。盛土の端、墳端とは速断できないが一応の目安はついた。

10月21日(土) 晴れ

本日はA地区の調査のみ。測量のため墳頂部に打った基準杭を主体部調査の必要上、東南(Kライン上)に移した。調査をAII7の掘削りに集中。焼け壁の検出された遺構を残し掘りあげた。AII7での深さは地山上面から1m程度であるが、AJ17では次第に浅くなっている。地形の関係からであろう。したがってこの掘削りは北西方面にはこれ以上遺構として残されておらず、南東方向にはまだ延長すると考える(いくつかのテストピットにその一部が確認できている)。遺物としてAI・AJ17の埋土中から発見された埴輪片がある。10月13日に同地点から出土した玉杖形埴輪と同様の破片も含まれる。本日の調査でA区の地山の地形が凹凸の著しいものであることが判明したが、人為のものであるかは不明。

10月23日(月)

A区墳丘裾から排土開始。

10月24日(火) 晴れ

A区墳丘斜面の排土。AF・AG14~15に落込み。

10月25日(水) 晴れ

A区墳丘東南斜面の排土。埴輪片採取。墳端はまだ未掘である。AII7の掘削りが南東方面へ続くことを確認するため、AE17・18埋土の排土をおこなう。約90%掘りあげる。AII7と同様AH17においても埴輪片が多く、溝底近くには不規則に落ち込んでいる。出土遺物はAH17ではトロ箱2杯分の埴輪が出土。円筒のほか、玉杖やAII7出土品と同一個体の動物を含む形象埴輪がある。また、瓦石と思われる石製品(後に否定される)も出土している。東南斜面は円筒や蓋形などトロ箱1/2杯分の埴輪と、甕か器台と見られる須恵器1片が出土。

10月26日(木) 晴れ

A区東南側墳端の検出をおこないつつあるが、まだ確実にはつかぬ。山土が堆積し、かなり深い。C・D区にかかる屋面のセクションで地山と盛土の境をつかむことが必要。A区の溝はAF17で曲がる。主体部輪郭を出すため40cm幅の碑を残し、プランの検出にかかると。粘土の内側から測って4.7mの墓壁である。DJ7で円筒埴輪を検出。

発掘の進行方法に変更あり。明日から主体部の発掘にかかり、11月4日までに完了。11月6日から阿弥陀浄土院と77次宮内の二手に分かれる。阿弥陀浄土院終了(12月5日)後、音乗谷古墳の墳形調査と須恵器窯の実測。宮内の調査はそのまま続行。以上のような段取りとなった。

10月27日(金) 雨のち晴れ

雨のため午前は作業中止。午後からDJ8にヤグラを組み、四分法による発掘の進行状況を撮影。

ヤリカタ測量の貫板の墨打ちと杭打ちをおこなう。

明日は①35mmモノクローム写真撮影。②ヤリカタの貫板打ち。③現在掘ったところで、封土のセクションとり。④主体部の畔をはずす。⑤主体部の四面をとる。そして主体部の発掘。

10月28日(土) 晴れ

ヤリカタの貫板打ち後、 $X=30,000$ 、 $Y=30,000$ のラインで主体部畔のセクションをとる。畔をはずした後、個氏による写真撮影。主体部中心と考える点を基準に十文字に水系を張り、四分法によって主体部の発掘を開始。粘土の内側から始める。主体部をⅠ～Ⅳに分け、その中から取り上げる遺物はx軸とy軸からの距離によって求めることとした。Ⅰ(+x、-y)、Ⅱ(-x、-y)、Ⅲ(-x、+y)、Ⅳ(+x、+y)。主体部のみに用いたこのx軸、y軸は、ヤリカタ測量に用いたX軸、Y軸とは逆となる。Ⅱ・Ⅳを数cm掘り下げたところ、落ち込んだと思われる埴輪片が出土。

10月29日(日) 晴れ

昨日のⅡ・Ⅳ区の掘り下げにより主体部内側に褐色土の部分が認められ、中央がさらに低くなっていることが予想された。同様の状況を確認するためⅠ・Ⅲ区を発掘したところ、褐色土の上に粘土があり、あと数cm掘り下げればこれがなくなると褐色土が現れると思われる。この粘土は棺の上の粘土が落ち込んでいるのであろうか。遺物は須恵器片・埴輪片が、粘土の内側傾斜面に貼り付いて出土した。この現象は花崗岩の礫についても同様(特にⅠ・Ⅱ区において)であるが、花崗岩の性格はまだ不明。

10月30日(月)

昨日の予想どおり、中央の粘土は暗黄褐色土上に数cmの厚さで乗っていた。この粘土を掘りあげ暗黄褐色土の掘り込みを調査。しかし遺物は須恵器や埴輪小片のみであった。よって、主体部の底まで掘りつくした可能性もあるが、それにしては性格のわかる遺物や遺構が出ないため様子がおかしいとも考える。調査員一同これで終わりかと落胆す。しかしこれ以下の土層にもさらに須恵器・埴輪片の混入が認められたため、主体部が盗掘にあっていることが判明。よってこのプランが盗掘で偶然に主体部の掘形のような形状をなしたものであることがわかった。須恵器片には杯・長脚二段透かしの高杯・器台があり、6世紀前半と見られる。盗掘時期を示す遺物は発見されず。

10月31日(火)

盗掘の程度を確認するためⅠ区を掘り下げる。ここでは主体部下の粘土にまで盗掘が及んでいた。Ⅲ・Ⅳ区において主体部の棺下に敷いたと考えられる小円礫(黒色の河原石)を検出。これも盗掘時の攪乱によりごく一部を残すのみ。出土遺物は鉄線約20本、須恵器片、鍍金を一部に残した辻金

具らしきものの破片4。

11月1日(水) 晴れ

昨日に続きⅡ区を掘り進める。畔をとり主体部底面および盗掘面全体を検出。昨日、礫床として検出したものが原位置かどうか疑わしいため、実測後さらに掘り下げて駄目押しすることに。

11月2日(木) 晴れ

主体部、C・D区埴輪、A区の溝、溝内の特殊ビッドの実測をおこなう。主体部はセクションとレベル取りの仕事を除いて終了。特殊ビッドの焼け壁については熱残留磁気の測定を依頼することになっている。

11月4日(土) 曇り

礫床の遺物を取り上げる途中、辻金具の中心部の丸い部分を発見。作業終了。シートをかぶせ、主体部と溝の部分を12月まで保護する。

12月18日(月) 晴れ

作業再開。墳丘断面削り開始。南に南北方向の排水施設。

12月22日(金)

玉石排水溝の構造と盛土と地山の境について検討。壙の東側で埴輪を検出したため、傾斜に沿って掘り進める。

排水溝は両側に長めの石を近接して並べその上に偏平な蓋石を乗せたもので、底に石はない。粘土層中に作られており、掘形は確認できず。この粘土層が盛土か地山か議論を呼んだ。盛土については、排水溝の設置された灰色粘土層までを盛土とする説と、その上の層より盛土とする説に分かれた。前者については排水溝が粘土層中にあり掘形がみつからないこと、花崗岩を含んでいることを理由とする。また後者は、掘形がみつからないことを同じ粘土で埋めたからと判断したため。議論の結果、灰色粘土層を地山とする。

12月23日(土) 雨

雨のため作業中止。全員77次へ。

12月26日(火) 晴れ

礫床下の排水溝石組みの構造を確認するため、石の一部を取りはずす。排水溝は北辺まで続き、花崗岩の礫の部分で止まっていた。このため花崗岩の広がりによって拡張した結果、コの字形のように取巻いていることを突き止め、この古墳が石室を持っていたことが判明した。青灰色粘土層中に花崗岩を含んでいることも解決した。石室が横穴式か竪穴式かは残存部からでは直ちに結論を出せない。また、石室が終わると考えられる部分から排水溝に蓋石がかぶせられている。

12月27日(水) 晴れ

埋め戻し完了。

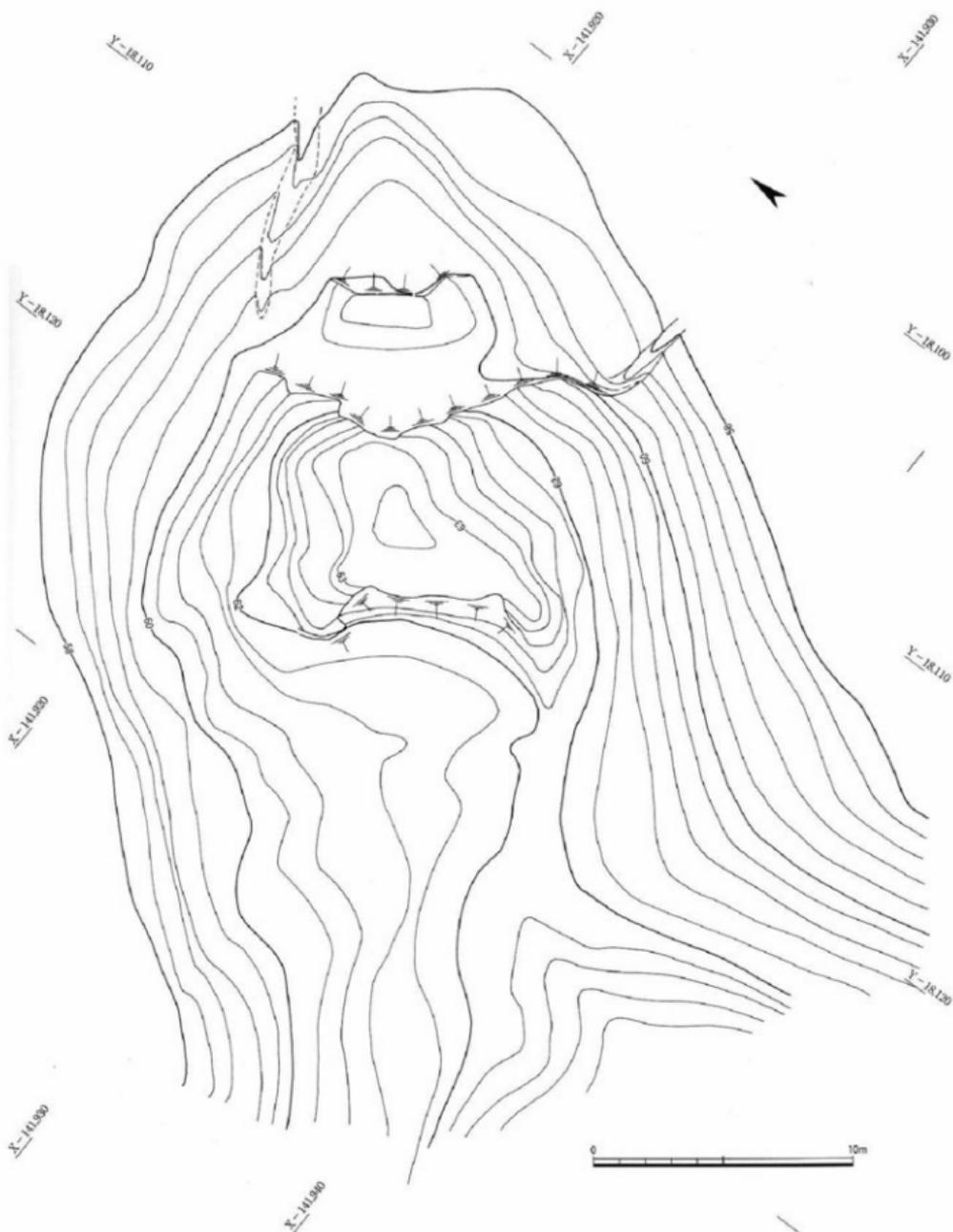


Fig. 24 音楽谷古墳 墳丘測量図 1:200

3 発掘調査の成果

A 音乗谷古墳の現況 (Fig. 24)

墳丘北半は
残存良好

音乗谷古墳は、昭和39年の分布調査の際には実は確認できなかったのだが、その後埴輪が発見され、古墳であることがはじめて明らかとなった。調査前は測量図に見るように、北半で東西にやや円形の等高線がきれいに回るように見える箇所以外は、原形を留めておらず、後世の改変が著しいことが知られ、中でも南西からの墳丘の削り取りが大々的におこなわれている。

調査前の墳頂最高所のレベルは63.382mで、北東側の大きく削られた場所の外側の高まりは60.970m、南西側の削られずに残ったところで62.140mをはかる。したがって、側面より見ると、墳頂部の高まりは尾根の付け根側にそれほど低くならず、相当削平された姿に見える。

もちろん、この部分、すなわち古墳から続く南西側背後の丘陵との間に、古墳造営にともなうカットがなされていることは容易に想像された。調査前にはその削り出しの状況はわかりにくく、どちらかといえば円墳を思わせるような状況であった。西側の等高線の回り込みは標高60mのラインまでは何とか認められるが、東側ではほとんどわからない。かりに62mの等高線がもっとも内側に入り込むところをとると、墳形は長楕円形になってしまうため、調査による解明が強く期待された。

B 遺構 (Fig. 25, PL. 14-2 ~ PL. 17)

発掘はすべて人力によった。検出された遺構はA区の掘削りと火を受けた土坑、墳丘と埋葬施設である。墳丘には埴輪を並べるが、葺石はない。以下、順に述べる。

(1) 掘削り (Fig. 26)

掘削り

はじめのテストピットの壺掘りによって埴輪が集中して出土したことから、それを順次広げていくと、古墳を背後の丘陵から切り離す掘削り状地形が明らかになった。この掘削りは上幅で約4m、下幅は長方形土坑のために掘りきれておらず正確にはわからないが、1m以上の比較的フラットな底をもっている。本古墳出土の埴輪の多くは下から2層目の暗黄褐色土層から出土した。

底は尾根線上が馬の背状にもっとも高く、X=30のY軸の通る位置では断面に掘削りは現れていない (Fig. 34)。そして、掘削りは円弧を描くのではなく、尾根筋に直交するように直線的に続いていることから、この掘削りが円墳を削り出したものではないことがわかる。

埴輪は特にA区H17やA区I17付近で掘削り内埋土の暗黄褐色土層からまともに出土しており、中でも馬形埴輪の残存率が良好であった。地形から見て、それらがもともとあった場所は狭い西側の尾根上というよりも古墳側と見た方が自然である。先にも述べたように古墳の南西側はひどく削り取られていて、本来の形はまったくわからない。しかし、掘削りから見つかった数多くの形象埴輪と掘削りの形状とを考えると、本墳には南西側に造り出し状の短い前方部があり、その上面に多数の形象埴輪が並べられていたと考えるのが妥当である。

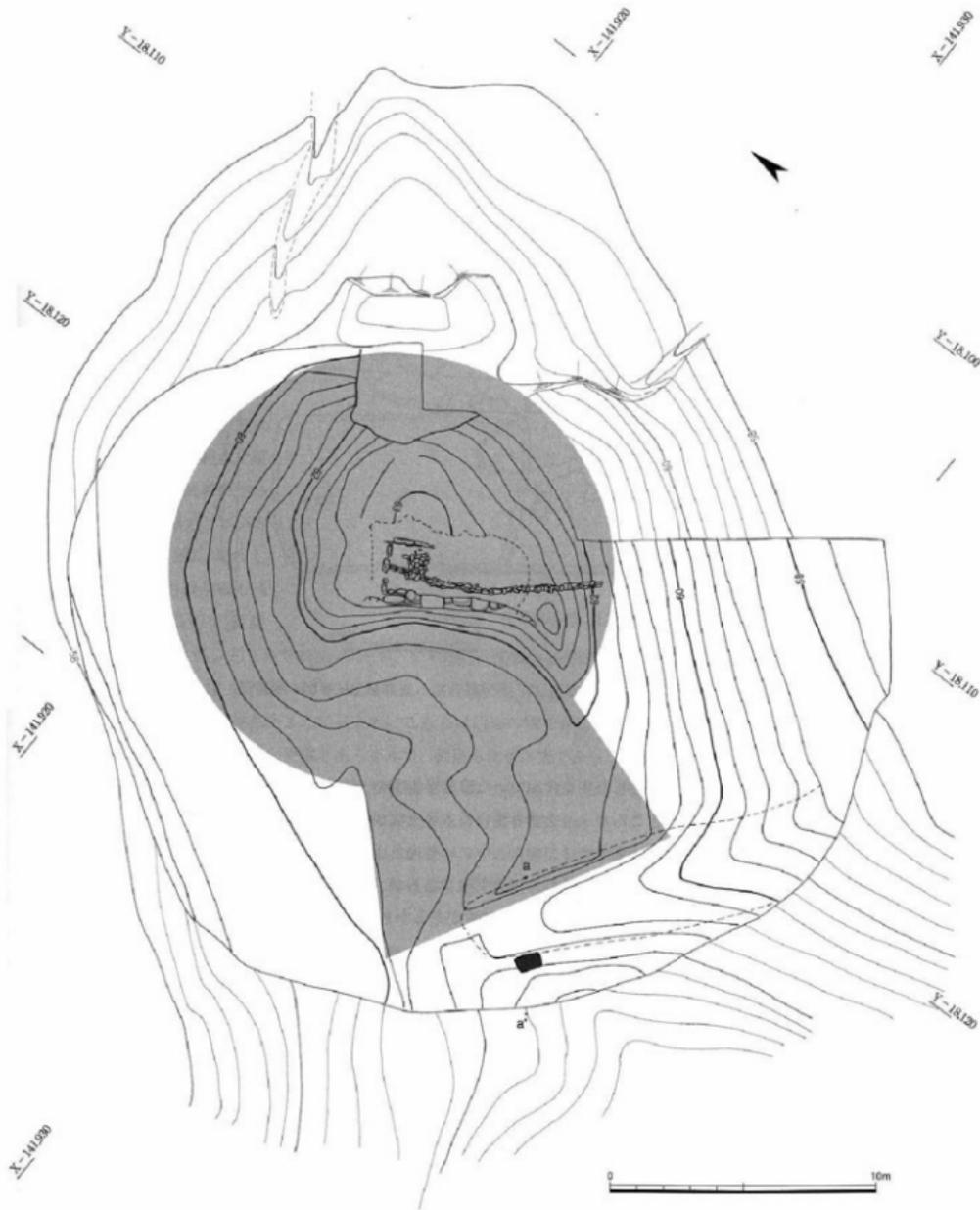


Fig. 25 音楽谷古墳 遺構配置図 1:200

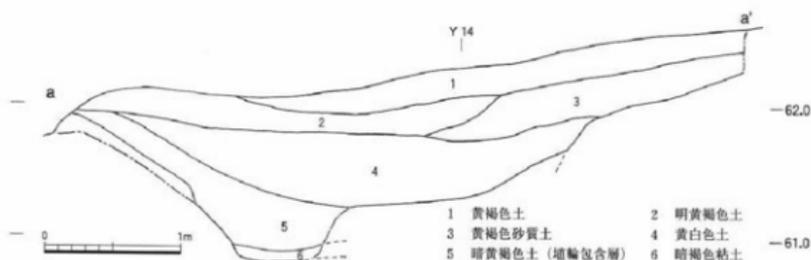


Fig. 26 音楽谷古墳 墳丘南側掘削り断面図 1:40

掘削りの底内側に前方部端を求め、北西の60mの等高線が後円部裾とほぼ重なると見て古墳を復元すると全長約22m、後円部径約17mの帆立貝形古墳あるいは造り出し付円墳と見ることができる (Fig. 25)。高さは残存部までで3.4mになる。

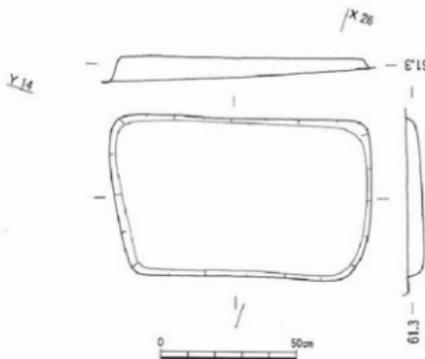


Fig. 27 音楽谷古墳 長方形土坑平面・断面図 1:20

(2) 長方形土坑 (Fig. 27, PL 15-2)

焼けた土坑 ところで、掘削り中に、埴輪を多く含んでいた暗黄褐色土を上面から切り込んで、長軸95cm、短軸60cm、もっとも深いところで9cmを測る浅い長方形土坑が検出されている。壁が焼けており、とくに南西辺が厚さ3cmまで焼けていた。中には黄褐色土が詰まっていたが、平らな底の方には木炭が入っていた。出土遺物はなく用途不明であるが、層位から明らかに古墳築造後のものであることが知られる。火葬遺構などの可能性があるかもしれない。

(3) 墳丘 (Fig. 28・29, PL 15-3~4)

短い前方部 崩落土を剥いだ結果、Fig. 25のように墳丘西側は比較的きれいに等高線が円形にめぐり、墳丘裾の削り出しの様子のがはっきり確認できた。それによると、標高60mの等高線付近が墳丘裾となることが明らかである。その外側には掘削りはない。

しかし、南の掘削りがかなり高い位置で止まっているため、実際の墳丘裾は南に向かって徐々にレベルを上げていったと見られる。標高60.2mの等高線がくびれ部状の形状を見せており、そこから南が前方部と考えることができよう。その場合、前方部の長さは約6.5m、幅は約12mとなる。

埴輪は掘削り部分に続く平野部側東南斜面でも比較的多く出土している。しかし、それらは

いずれも原位置にあるものでない。

ほぼ原位置で埴輪が検出できたのは、墳頂縁辺の2地点であった。そのうちもっとも良好なのは、C区のX33、Y33付近、公団枕F16-4-8のすぐ西で検出されたもので、円筒埴輪2本と玉杖形埴輪が踏んで墳丘上の黄褐色土中より出土している(Fig. 28)。検出した高さは埴輪の高いところで標高

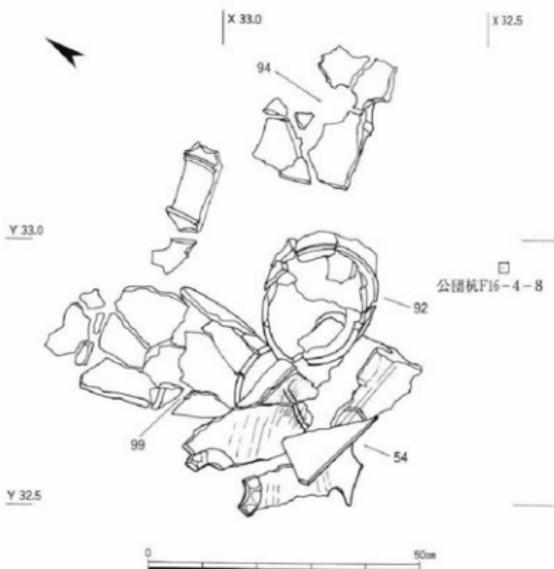


Fig. 28 音楽谷古墳 C区埴輪 1:10

62.8m、低いところで62.5mである。2本の円筒埴輪の基部が比較的良好に残っていて、そのうちの1本(Fig. 55-92, PL. 34-92)は立った状態で出土しており、もう1本(Fig. 55-99, PL. 35-99)が外側に倒れたように見える。これらは円形の墳頂縁辺を取り巻くように配列された円筒埴輪列を構成していた隣りあう2本で、間隔も比較的密であったことがわかる。

これに覆い被さるように玉杖形埴輪(Fig. 49-54, PL. 29-54)が出土したが、破片の中に基部をまったく交えていないことからもとの樹立位置を推定しがたい。しかし、玉杖形埴輪の倒れ方から判断すれば、円筒埴輪列中、あるいはその内側にかなり間隔をあけながら樹立されていたであろうと思われる。いずれにしても墳頂に玉杖形埴輪が樹立されていたことが確実に知られる稀有な検出例といえる。

また、C区集中域で出土した円筒埴輪は後に述べるが、ヘラ記号、調整、形態などの比較から同一工人が作ったと考えてほぼ間違いないものが多く含まれている。

C区ほど良好ではないが、D区においても比較的埴輪がまとまって出土したところがある(Fig. 29)。X28、Y35付近である。これは2本分の基部(Fig. 55-97・98, PL. 34-97)が埴輪列の関係を保ったまま墳丘裾側へ倒れた状態を見せているように観察され、それらのさらに外側に大きく動かされた埴輪が散らばって出土した(Fig. 55-93・95)。どの固体も残存率が高く、原位置をそれほど動いていないと見られるものの、基部の残る2個体も、本来これより少し南にずれたところにあったと思われる。検出した高さは62.1m~62.4mとC区に比べて若干低い。

ここで見つかった埴輪にもC区出土のものと同工のものがある。

これら墳頂の2地点がほぼ円筒埴輪列の位置をある程度留めているとすると、墳頂の平坦面

C区埴輪

玉杖形埴輪
墳頂出土

D区埴輪

墳頂の円筒
埴輪列

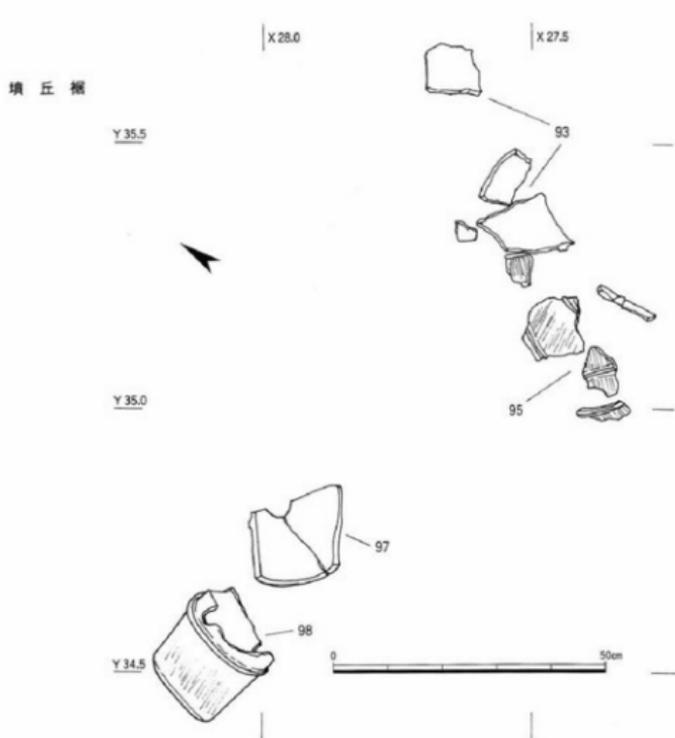


Fig. 29 音楽谷古墳 D区埴輪 1:10

の直径は約10mとなろう。

以上の墳丘頂部に比べて、墳丘裾についての情報はきわめて少ない。西側の等高線から見ると、くびれ部の形状がある程度残っているのに、埴輪の出土は少ない。状況的には、形象埴輪を多数樹立した前方部上面から続くテラスが後円丘周囲をめくり、そこにも埴輪が並んでいたとみなすには躊躇されよう。とはいえ段築テラスがない場合でも、墳丘裾に円筒埴輪を並べていた可能性は十分ある。

(4) 埋葬施設の調査

① 石室 (Fig. 30, PL. 16)

破壊された
石室

表土を剥いでいくと、長軸約3.0m、短軸約1.5mの範囲で粘土が不整形長方形に取り囲んでいる範囲が見つかった。これは石材の抜き取り後に残った表込め土が残存したものであるが、発掘初期の段階では個々の石材の痕跡はみつけられていない。その内部には褐色土、そして粘土の順で摺鉢状の堆積が見られ、褐色土の中から花崗岩の礫多数が須恵器や埴輪の破片とともに出土した。このような所見より、早いうちから石室であったことが予測された。

これらの攪乱土や花崗岩を取り除いたところ、3cm大の礫を敷き詰めた床面が北西側で1mほどの広がりをもって現れた。これが本来の埋葬施設の残存部分であり、それ以外の部分は礫敷面より下にまで攪乱が及んでいた。

この礫敷面のあいまいに拳大の平たい石がいくつか見えるが、調査を進める中で小円礫を取り除いたところ、その下にも平たい石が広がっていることがわかった。おそらく全面がこの2層

構造の床面であったと思われる。ただし、後述するように本古墳では追葬があった可能性もあるから、小円礫は追葬の段階で敷き直したものかもしれない。いくつかの遺物はこの礫敷の目地から出土している。

石室壁体については床面検出時の認識が甘く、石材の残存や抜き取り跡をみつけたのは排水溝の検出時であった。残っていた石材は奥壁寄りに長さ60cm～80cmのものが認められるほかは、ほとんどすべて抜かれていた。しかし、それらの抜き取り跡から見ると、いずれも長くても80cm、

幅が15cmないし20cmほどの厚みのない石材を多数用いて築造したものであったことがわかる。裏込めの控えも深くない。これは定型的な畿内の横穴式石室には見られない特質である。むしろ竪穴系の石室と見た方が妥当にも思えるが、追葬の状況を考えるとやはり横穴式石室に属するものであったとみなさざるをえない。

② 排水溝 (Fig 31・32, PL 16-3・4)

奥壁からくの字に緩やかに湾曲しながら南東方向へ排水溝が延びている。全長8mほど延び、排水溝その先は途切れているが、地形の状態からすると本来そのくらいで墳丘東南斜面に開口したであろうと考えられる。末端は墳丘想定範囲端にほぼ一致している (Fig 25)。

排水溝の構造は、掘形がみつげにくかったが、溝を灰色粘土の地山に掘って、その中に底石を置かず、薄くて細長い石を2列に立て並べ、そこを水が流れるようにしてある。注意される

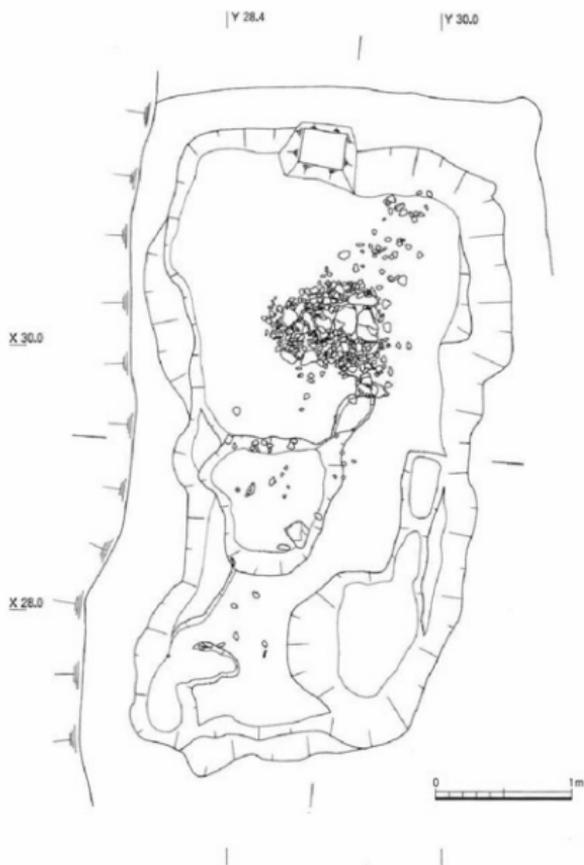


Fig. 30 音乗谷古墳 石室床面検出状況 1:40

小さい石材

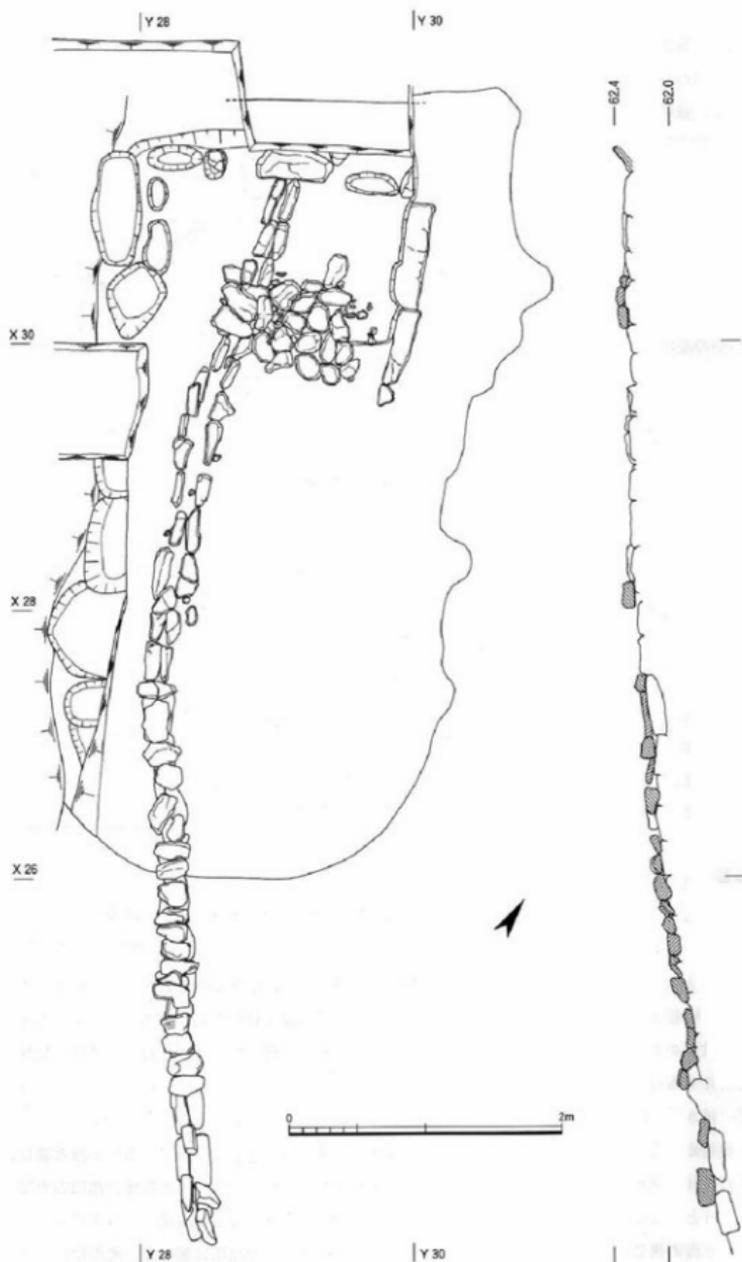


Fig. 31 音樂谷古墳 石室排水溝平面・断面図 1:40

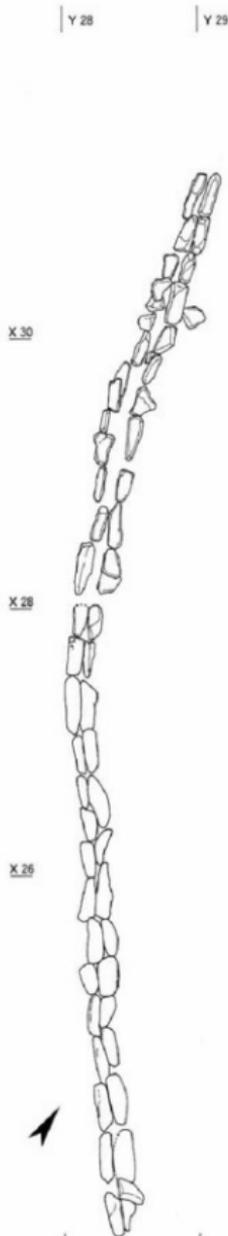


Fig. 32 音乗谷古墳 排水溝蓋石除去後 1:40

のが排水溝の蓋石の残り方である。奥壁から3.8mのところから南は平たい石で門構えのように覆うのだが、それより北西側はそれが見られない。先に述べたように、蓋石と一体化した石室底面の平たい石が小円礫とともに、盗掘の際に剥がされた結果とみられよう。排水溝の蓋石のない範囲が本来の石室内部と見られるのである。

よく見ると、蓋石の途切れるところで排水溝が屈折していることがわかり、石室の南壁はちょうどその位置にあたるかと推察できるのである。また、傾斜もほぼこの位置で石室内の緩やかな傾斜が角度をもって降下するものになる。これにより石室の長さは内法で3.7m、奥壁沿いでの幅は1.7mという数値が求められる。

③ 副葬品の出土状況 (Fig. 33)

主体部関係の遺物のほとんどが、盗掘坑の埋土の中から出土している。図にはレベルは無視してそれらの平面的な分布状況を示した。

これらのうち、床面の礫面上で出土したものだけでもととの位置を保っている可能性があるが、それらにしても追葬や盗掘などによって動かされている可能性を否定できない。なお、須恵器片については遺憾ながら出土後、整理途中の混乱により厳密な位置の特定ができなかった。

礫残存部で目立つのが辻金具の各部破片と鉄鏃である。このうち、辻金具に組み合う馬具関係遺物が南にそれほど離れず出土しているので、東側側壁付近に馬具を置いていた可能性がある。また、管玉の出土しているのが、奥壁に接する東側側壁際であることは、被葬者が奥壁に頭を向けた姿勢で埋葬されていたか、奥壁に沿って東側に頭を置いて埋葬されていたかのいずれかであることを推測させる。そして先に復元した石室幅が1.7mであることからすると、遺体は奥壁に頭を向けて埋葬されたと考えた方がよいであろう。

なお、副葬遺物には棺釘や鏝はまったく認められないので、それらを使わない棺が用いられたと思われる。また、刀剣類、工具類も、鉄鏃と同様に各所から出土していてもととの位置を知りえない。

石室南壁

底面上遺物

被葬者頭位

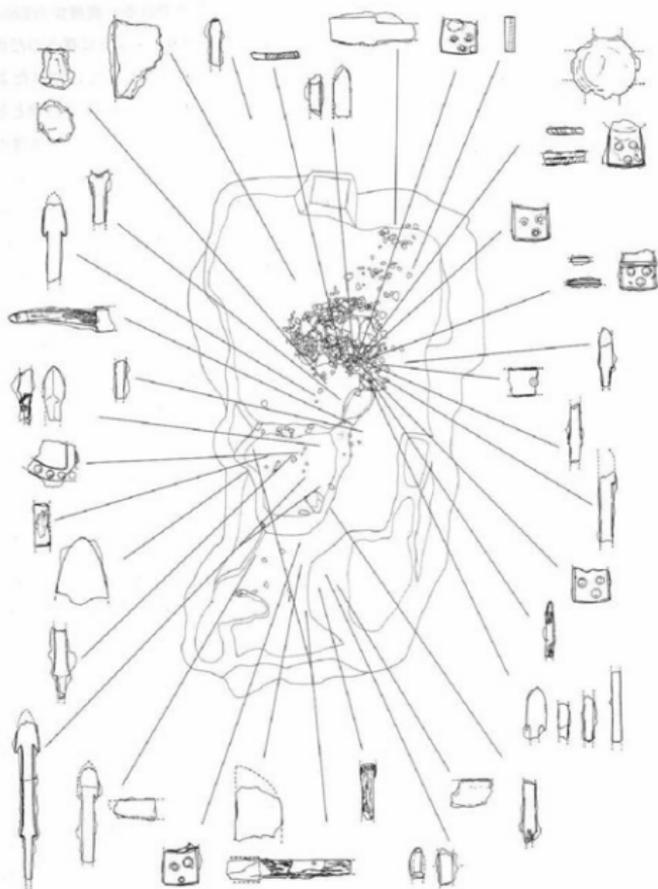


Fig. 33 音楽谷古墳 石室内副葬品出土位置図（遺構1：50 遺物1：3）

④埋葬施設の推定 (Fig. 34)

墳頂壇輪列
の低さ

先に述べた墳頂の円筒壇輪列の検出高は62.5m前後であった。すると、石室床面のレベルが62.3~62.4mくらいであることはどのように考えられるだろうか。

もし、前者が古墳築造時の墳頂壇輪列の姿をよく留めているとすると、このレベルの近さは、そこに十分な高さをもった横穴式石室が存在していたことを想定できる余地を失わせる。その意味で、かろうじて残っている石室石材はいずれも小ぶりのものを横長に使ったものであり、いわゆる通常の横穴式石室に見られる構造と異なることと相通じる。そして、すでに述べた墓壇が排水溝方向においても閉じていることなどを考え合わせると、縦穴式ないし縦穴系の埋葬

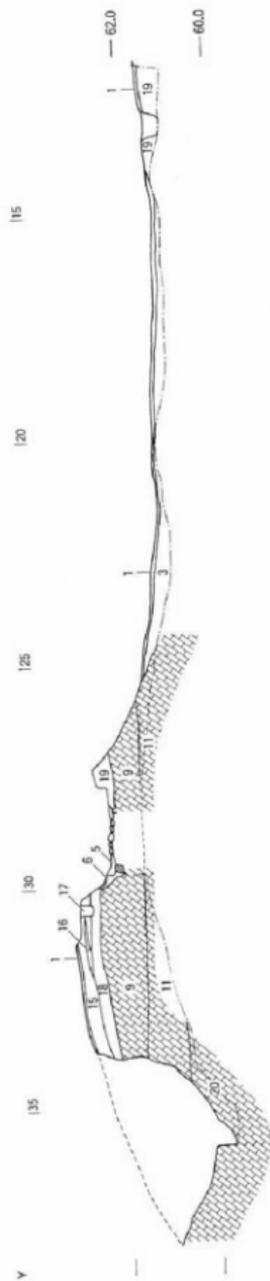
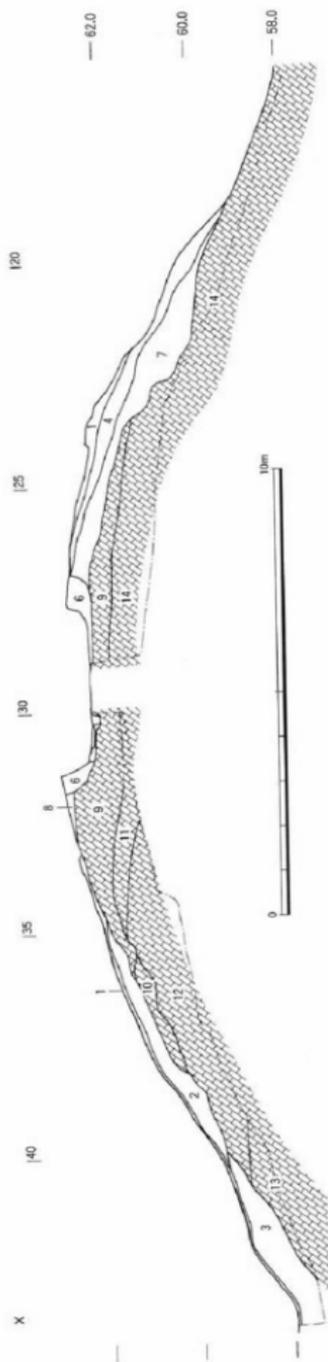


Fig. 34 音楽谷古墳 墳丘断面図 1 : 120

- 1 (表土) 2 暗黄褐色土 3 黄褐色砂質土 4 淡褐色土(表土) 5 (空掘り層土) 6 青色粘土(墓室覆土)
 7 黄褐色土層と砂層の互層(盛土) 8 黄褐色砂質土 砂子の粗い砂含む(盛土) 9 灰色粘土(地山) 10 黄褐色砂質土(地山)
 11 灰色粘質土 鉄分を含む層と粘土の互層(地山) 12 黄色砂質土 白灰色砂質土と黄色土の互層(地山)
 13 黄褐色砂質土 砂と礫の互層(地山) 14 灰色粘土と酸化鉄の互層(地山) 15 褐色砂質土 16 暗褐色土 焼土・灰化物・灰含む
 17 黄褐色土 砂子の粗い砂含む 18 灰黄色粘質土 遺物包含(盛土) 19 黄褐色土 パラス混じり 20 黄褐色砂層(地山)

施設を強く推定させる。

厳密に調査した範囲内で墓塚がどのレベルから切り込まれたかについては確定できないが、墳丘断面図にあるように盛土をある程度盛った段階に墓塚が掘削されていることがわかる。なお、断面図に見るように基底石を据えるところはさらに1段深く掘り下げている（6層）。

しかし、このように理解したとしても、削平されている石室高を数十cm、さらにそれを覆う盛土をさらに数十cmとすると、やはり本来の墳頂は埴輪検出面より1m前後は高くなくてはならない。直径10m前後の墳頂で石室上方と埴輪列の間にこの比高を解消することは特異な埴輪構造を想定しない限りまず不可能であろう。

いっぽう、埴輪列は中間段に並べられたものだったとすることも、全体の墳丘形態から見て不可能である。

しかし、後述の須恵器に新田の2時期に大別されるものがあることは確実である。新しい須恵器の混在は、横穴式石室への追葬を想定させ、底面の二重の礎数があったことが思い起こされる。上の考察から、堅固で高さのある石室が存在したとは考えられないが、丈が低いとはいえ横から出入りすることの可能な石室が築かれていたと想定しておきたい。

排水溝が整っていることからしても、横穴式石室の1種であったと思われる、羨道ないし墓道は南東に段をもって上がっていくようなものであったと考えたい。

総じて音楽谷古墳は小丘陵の自然地形を利用して、少ない切土と盛土によって墳丘を完成させた古墳であったと評価できる。南掘削りを掘削した際の土は主として前方部の成形に用いられたのであろう。

C 出土遺物 (Fig. 35~60, PL. 18~38)

出土した遺物には、埴輪と副葬品として納められた須恵器や金属器、玉類がある。

(1) 埴輪

① 形象埴輪

馬形埴輪 1 (Fig. 35~37, PL. 18~20) 1は本古墳でもっとも注目される馬形埴輪である。完形に復元でき、全長97.5cm、全高59.1cmを計る。全体的には通有の飾り馬に見えるが、鍔の表現がなく、そのかわり右体側に限って板状の足掛け装置が表現されているのが大きな特徴である。

横 坐 り 馬

音乗谷古墳から出土した形象埴輪のうちもっとも残りのよいもので、A区の掘割りの中から出土した。復元にあたっては、できるだけ接合関係を確認しながら位置を決めていったが、左後脚を除く脚3本と尻尾、それに顔については厳密には胴本体にはつながっていない。また、脚の長さも推定である。首の立ち上がり角度が緩く、かつ顔の側面が大きいため、側面観は猪にも似た印象を与えている。いっぽう、胴部はかなり長く造形の巧みさを感じさせる。

馬装は、面繫と尻繫からなり、胸繫はない。面繫は先端にf字形鏡板を付けるものである。低い幅の広い帯を鼻の上と目の後ろに回して、それを耳の後ろから延びる帯に伏鉢形辻金具を使って固定している。このうち、目の側の辻金具は黄金具まで表現してある。また、f字形鏡板は頭部左側に付けられるものの一部分が残っていたただけだが、頭部右側にも剥離した痕跡が残っている。鏡板の残存部から、それが周縁を1段厚くしてそこに密に粘土粒を貼り付けて鍔を表現した写実的なものであったことが知られる。

馬 装 表 現

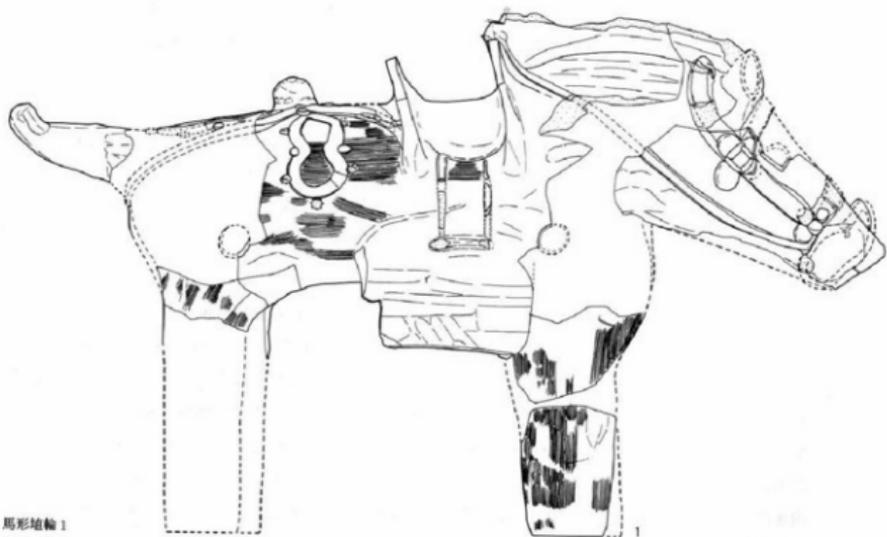
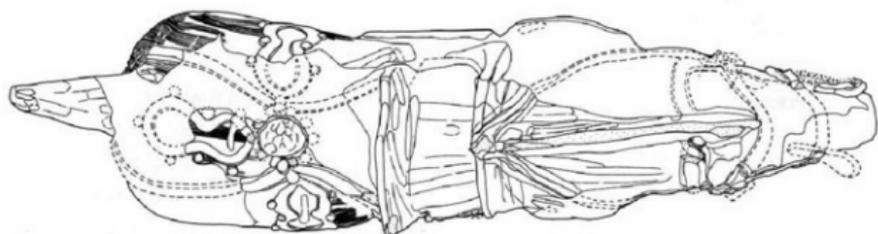
このf字形鏡板に取り付く手綱はほとんどたわむことなくタテガミと鞍の前輪が接するところまで延びている。その断面形は三繫の帯とは区別され、細くて高さがある。タテガミは前輪上端に弧を描いて収束してくることがかろうじてわかるが、前方の形状はわからない。また、前輪上端から再び跳ね上がるように見えるのは、手綱の延長表現があったことを示すのだろう。

鞍の前輪、後輪は相似形で、後輪の方がやや大きく作られている。側面が垂直に立ち、弧状の上縁との境が角をもつ。その表裏には鞍金具その他の装飾を何ら付けない。

騎乗する部分は粘土を厚く貼り足して鞍褥を表しているが、下縁は前輪、後輪の下端とはほぼ同じ位置までしか及ばない。この右側の鞍褥の下から2本の吊紐が垂れ、それに下げられる形で足掛け板が表現されている (PL. 20-左下)。本個体はその板の表現は突帯状に退化しており、本来の形状からかなりデフォルメされていると判断できる。なお、本例は左体側を大きく失っているが、鞍褥の剥離部分から下に続く部分と同種の足掛け装置がないことは明らかである。この足掛け装置が載っているのが障泥であり、馬の体側のもっとも横に張り出たところから下向きに板状の粘土を貼り付けて表現している。前方は馬の前脚の後方に当って接着を強化しているのに対して、後方は隅を四角く欠いた形で後脚から離れて作られている。

足 掛 け 板

尻繫は背中中央に載せられた雲珠を中心に展開し、幅のある突帯で表現されている (PL. 20-上)。雲珠は12脚のようであるが、多くの脚が剥離しており、正確にはわからない。後輪の付け根から雲珠へと延びた2条の帯は、本来は別の帯であるはずの尻尾の下を回りこむ長い帯と一連で作られている。杏葉は雲珠の左右および後方に計3個吊り下げられている。



馬形埴輪 1



Fig. 35 音樂谷古墳 馬形埴輪 (1) 1:6

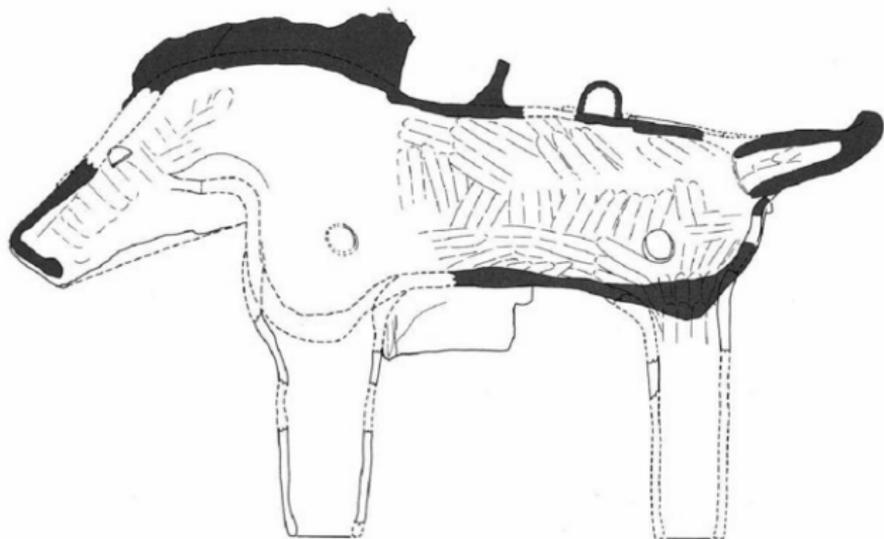
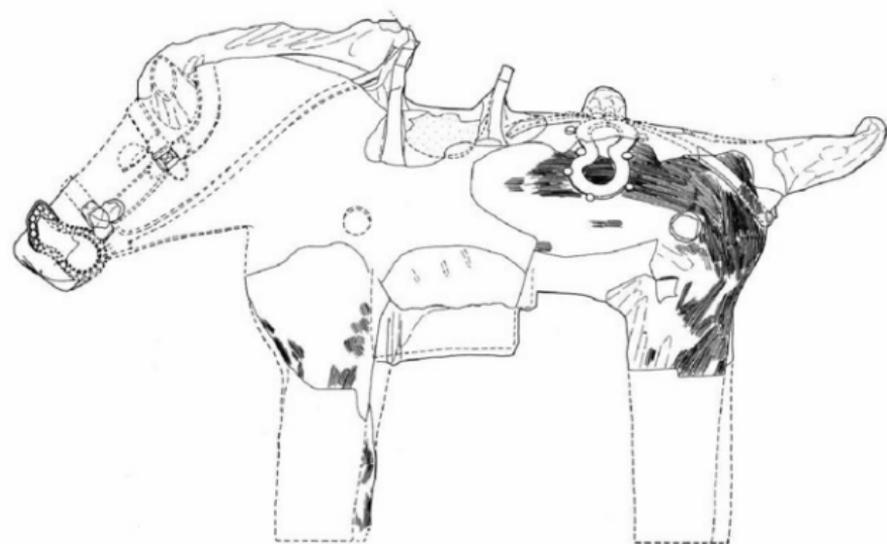


Fig. 36 音兼谷古墳 馬形埴輪 (2) 1:6



Fig. 37 音楽谷古墳 馬形埴輪 (3)
1:6

成形方法

雲珠は伏鉢を有する型式を中空の半球形粘土を貼り付けることで表現し、脚はボタン状の粘土を貼り付けるだけで表している。杏葉は瓢箪形の輪郭を粘土紐で表し、周囲に計7個のボタン状粘土を配したものである。ボタン状粘土が紐の上部でなく輪郭に接して貼り付けられていることから、これは鈴を表現したものであり、瓢箪形も本来剣菱形杏葉の表現であったと思われる。埴輪の表現だけからすると、垂下のための革帯はなく、雲珠脚に直接取り付けられているように見える。

尻尾は先端を小さく上に折り返す表現となっているだけである。中空に作り、基部を柄状に尻に差し込むように固定している。

脚は粘土紐の積み上げで成形したもので、後ろ左脚付け根に見る擬口縁状の部分(PL. 20-右下)から見ると、まず脚を4本作っておいてから胴部をその間に渡すように作っていったことが知られる。胴部を渡す前に前後2本ずつ股間で固定する作業がおこなわれたことが窺える。胴部は内面に何ら成形の痕跡が残らないほど、丁寧にナデを施して

あり、成形の具体的な手順についてはわからない。ただし、下部は縦方向のナデが顕著なので、両足付け根から徐々に中央に向かって腹部を伸ばしていったことが想像でき、それより上位はナデが垂直に近くなるので今度は横方向に積み上げていって、その後ナデの方向から判断して背は尻側から閉じていったものと思われる。

その過程で尻尾が取り付けられる最後部分は円形に開放された状態にしておき、背部完成後、尻尾付け根を差し込むようにして塞いだのであろう。

首側背部と同時に胸を上へ延ばしていき、下から40cmほどのところで、前方へ折り曲げて15cmほど水平に延ばし、その両側面を頭部の接合に使用している。

頭部の固定

頭部は内面に鼻筋方向に直交するナデが明瞭に残っていることから、粘土紐を重ねて板状にしたものをU字形に折り曲げて顔の大枠を作りそれを首と胸延長部に固定するように作っているものと思われる。鼻先の部分は粘土板で塞ぐようにして作られている。このような成形のために、頭部の下面は開放されたままになっている。

こうして全体を成形した後、馬装やタテガミ、あるいは耳や目の表現を加えたと見られる。目は削り抜きによる表現で、右目の下半分のみ残る。鼻の穴と口はヘラで線を刻むだけである。なお、脚上部の胴部側面に開けられた4個の円形透かしや尻尾の下の小さい透かしはいつ開けられて、何に用いられたかはわからない。

最終的な調整は、脚部や胴部にはよくハケメが残っているが、主として鞍の部分や障泥、あるいは背や頭部はナデが丁寧に施されている。焼成は堅緻なところと甘いところとにもあり、色調はややピンクがかったベージュ色である。赤色顔料は塗布されていないと判断する。

馬形埴輪 2 (Fig. 38・39, PL. 21-上) 鞍の表現をもちながら、三繋構造を備えておらず、手綱のみ表現した馬である。脚部は固定できるものがなく、頭部もほとんど残っていないかったが、胴部が比較的残っていたために復元した。全長95.7cm、全高69.5cmである。

胴部は馬形埴輪 1 や馬形埴輪 3 とは異なり腹側が四角く張る特徴がある。その分、胴部の断面はつぶれた感じになる。胴部の外表は側面に目の粗い横方向のハケメが残るが、腹部と背面は丁寧に横方向のナデが施されている。その上に鞍の前輪と後輪が直接取り付けられている。ともに側面が垂直で、上方の輪郭との間に角をもつ。胴部体側には馬形埴輪 1 同様、円孔が左右2個ずつ開けられていることがかろうじてわかる。タテガミは半月形の形状で、後方の先端は鞍には届かず首に取束する。タテガミ前端的の形状についてはまったくわからない。

頭部の成形は、馬形埴輪 1 同様、胸の上部を延長した部分を頸の内側に当てるようにして固定している (PL. 23-右下)。その状態を見やすいように頭部の半分は復元していない。顎は表側に段をつけて強調してある。頭部及びタテガミはユビナデによる丁寧な仕上げとなっている。

この頭部に見られる馬装は、鞍を除くと手綱が1条残るだけである。手綱の断面形は台形で

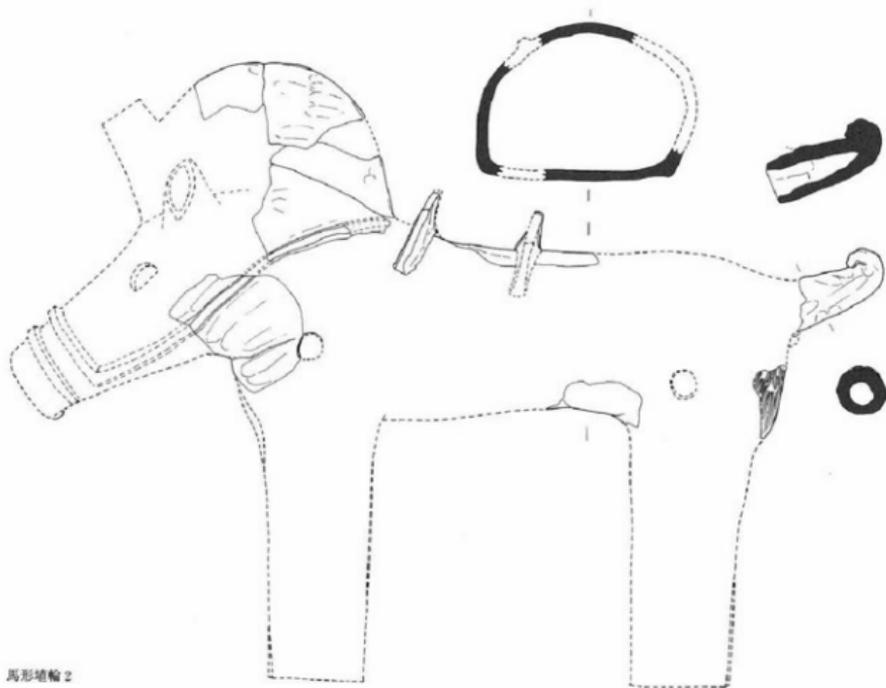


Fig. 38 音楽谷古墳 馬形埴輪 (4) 1:6

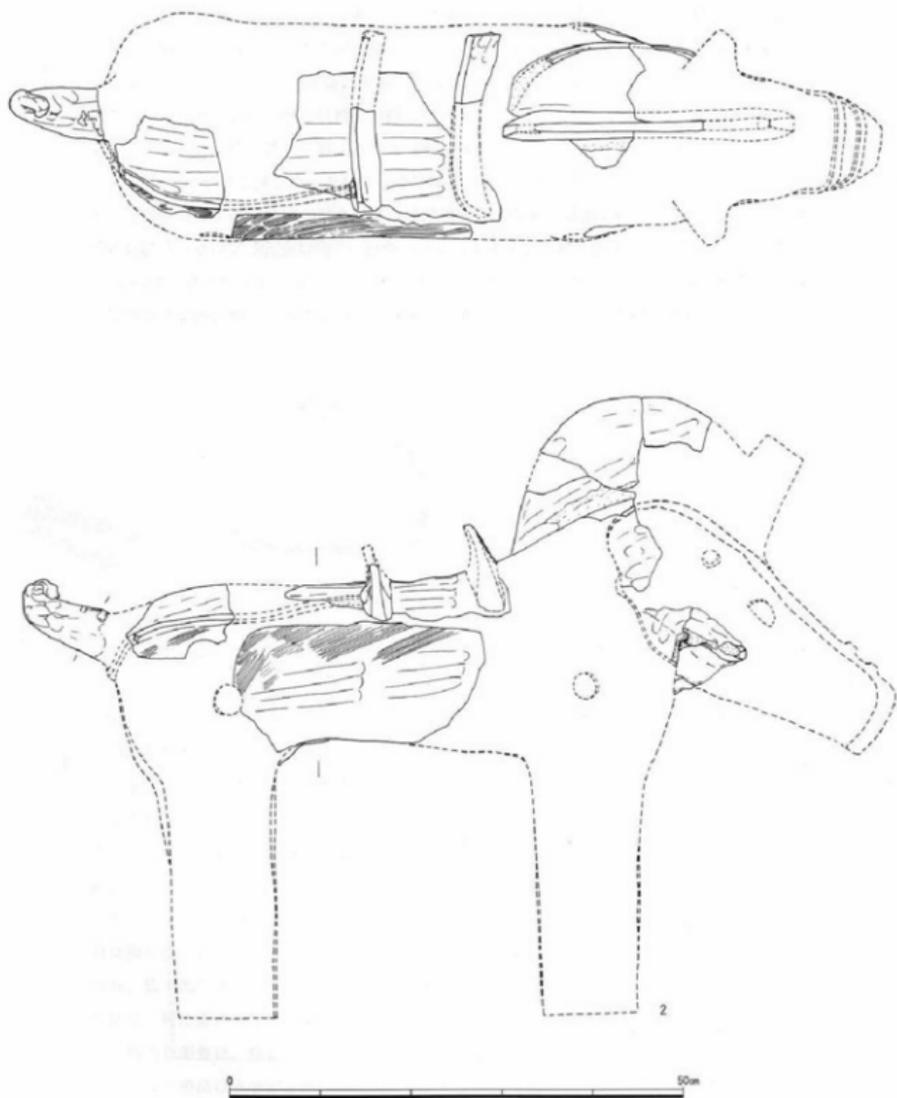


Fig. 39 音樂谷古墳 馬形埴輪 (5) 1:6

比較的細く作られている。口元の構造は馬形埴輪3をもとに復元したが、手綱はそこから左側面を前輪中央に向かって延び、さらにその延長が鞍を越えたところから再び始まり、胴部右側上面を通過して尻尾の下へと回りこんで止まるかたちで復元できる。鞍の前輪と後輪の間には何も表現されていない。

尻尾は、馬形埴輪1同様、先端のみ折り返した中空の作りで、やはり柄状にした基部を差し込んで胴部に固定している。

色調は白っぽいベージュ色で、焼成はやや甘い。

馬形埴輪3 (Fig. 40・41, PL. 21-下) 鞍の表現はないが、馬形埴輪2と同様に左口元から後方手綱の馬に向かって手綱が1本延びている馬である。やはり脚部の遺存度は悪く、すべて復元である。これに対して、胴部上半の残りは比較的よい。ただし、タテガミは残っていない。復元した部分をすべて含め全長は97.0cm、全高は67.7cmを計る。

頭部は左側面がほぼ残っており、手綱とそれを止めるための2条の帯が表現されている。手綱と口元の帯とは直接つながったように表現され、鏡板や轡に似た特別な構造を要さなかったことが知られる。結びつける程度だった構造を反映しているのだろうか。

この頭部はほかの馬形埴輪と比べてやや細長く作られているが、これも下面が開放されるように背と胸の延長に固定し、鼻先だけ塞ぐというものになっている。目は輪郭が少し盛り上がるように削り抜いたあとで整えられているが、鼻の穴と口はヘラで刻むだけの表現である。口の切り込みはしっかり側面にまで及んでいる。また、顎の部分が立体的に表現されており、以上の特色から馬形埴輪3の顔のつくりは総じて写実的であると言える。

手綱は頭部左側面から背中を斜めに横切り尻の右側へ及ぶもので、断面は方形に近い。鞍がない分、背を通して手綱が右後方まで途切れずに表現されている。

胴部は残存部から考えると、かなり長くなると思われる。全体に表面の肌荒れが目立つが、頭部は丁寧なナデによって仕上げられているのに対して、胴部は尻にかけて横方向のハケメが顕著に残っていることが指摘できる。体側の円孔は残っていない。

色調は黄味を帯びたベージュ色で、焼成は甘い。

馬形埴輪4 (Fig. 42・43-14・15, PL. 22) 馬形埴輪1と並ぶ飾り馬である。A区の掘割りから各部の破片が比較的まとまって出土したが、完形に復元するには躊躇された。最も豪華な馬

頭部付近の破片を図上で合成し、頭部右側面を作ったものがFig. 42-4である。タテガミは断面がT字形になるように端部の両側に粘土を貼り足して作られ、両側面には線刻を密に施してある。そして、先端には大きく棒状に束ねた表現が付くことが知られる。

4以外に頭部を残す破片を2点図示した。これらはいずれも左側面の破片と思われる。5は手綱と面繫の表現であり、すぐ左側に鏡板が接続するものと思われる。6は左側面の目元付近の面繫と見られる。それには直交する頭絡が辻金具で留められている様子が写されているが、辻金具の伏鉢部と脚部の間に貫金具を表す細い粘土紐を付けてあることがわかる。轡や鏡板の特徴はよくわからないが、1に劣らず写実的な表現が採られていることが知られよう。ただし、面繫の帯は手綱とあまり差がないように見える。

この馬にともなう鞍は、断片が残るだけで全形は推測しにくい。鞍橋の7は前輪か後輪かわからないが1.2cmの厚みを持ち、弧状の上縁が比較的スムーズに側縁へと移ることがわかる。い

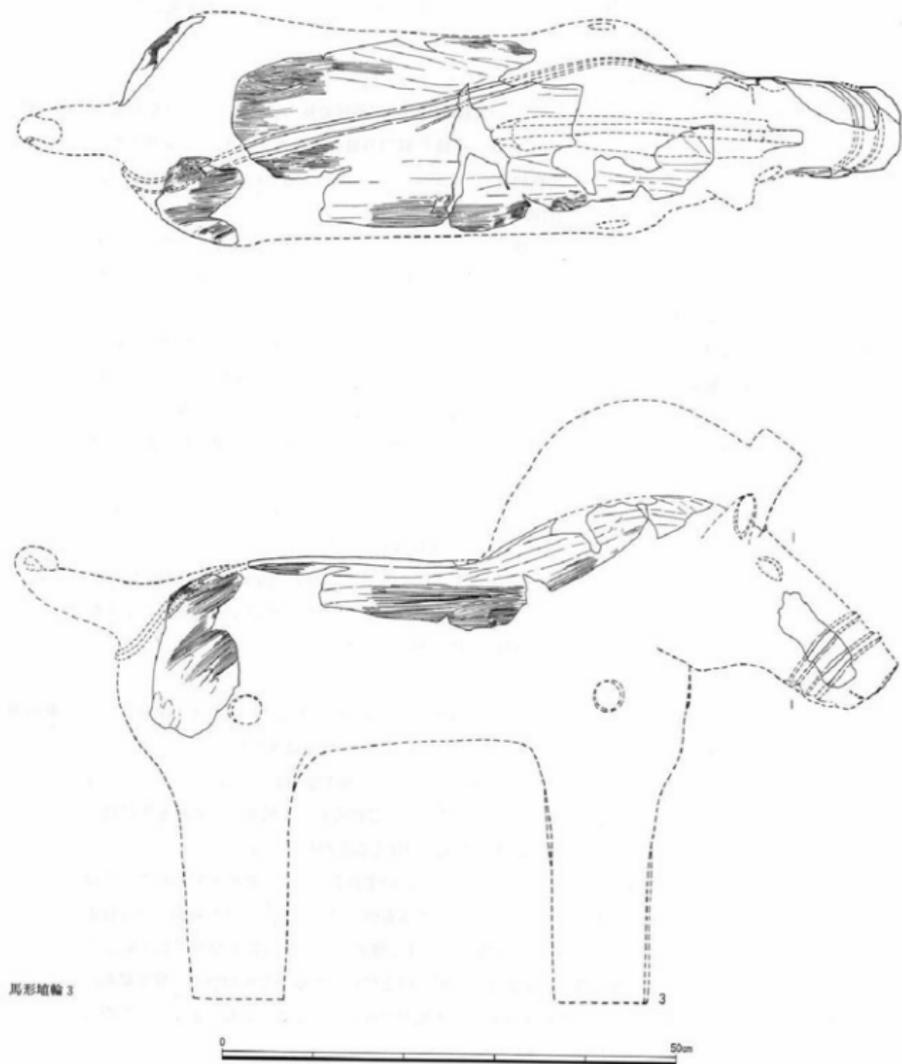


Fig. 40 音樂谷古墳 馬形埴輪 (6) 1:6

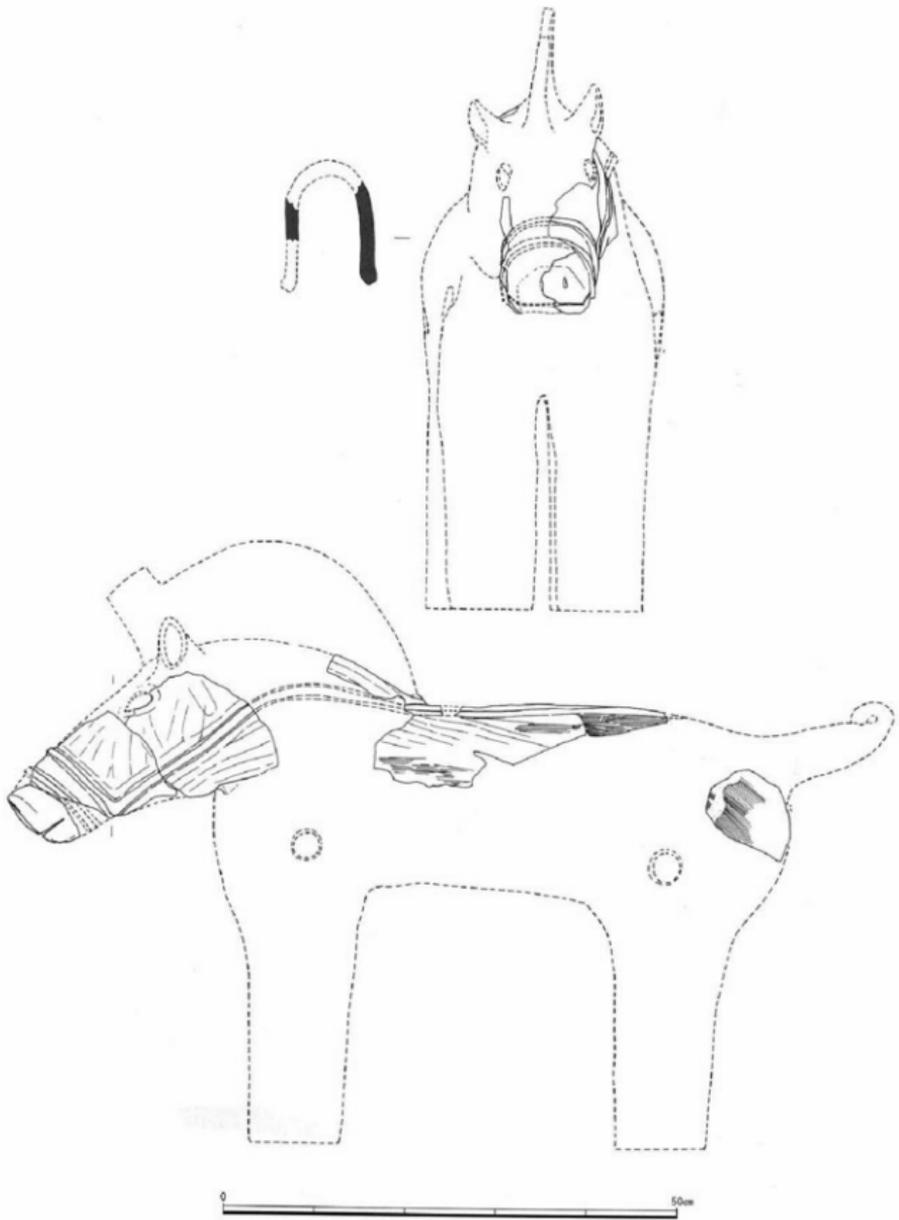
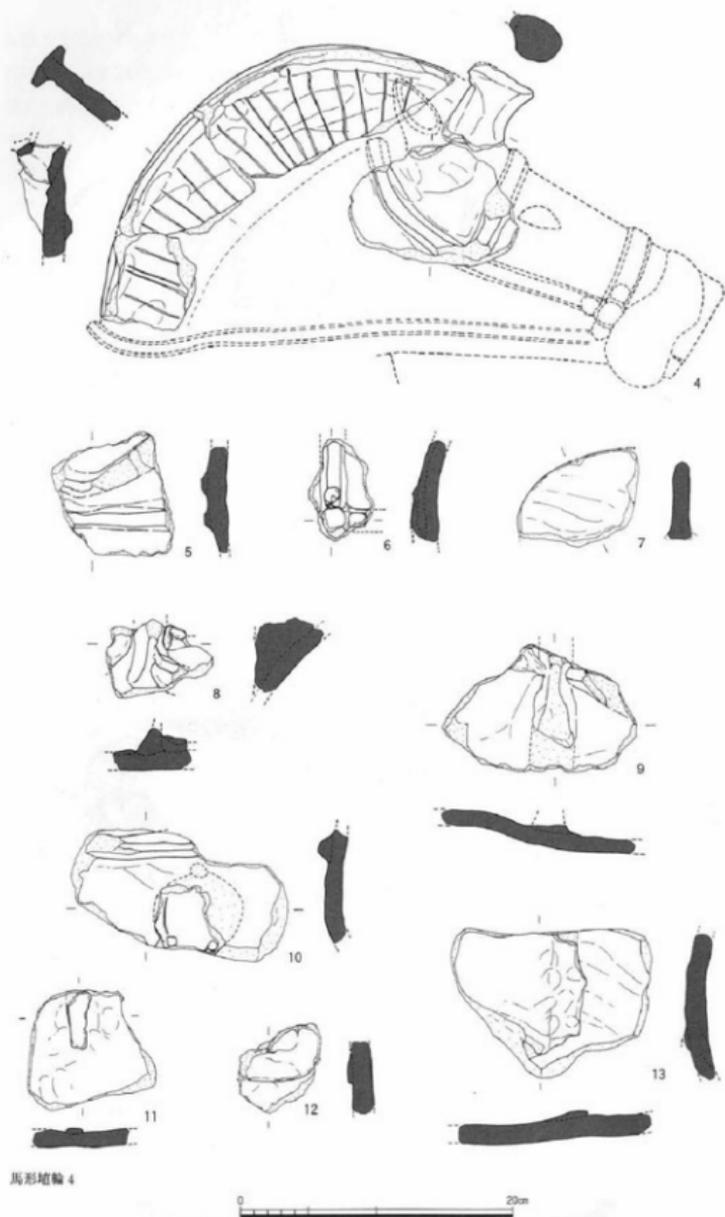


Fig. 41 音楽谷古墳 馬形埴輪 (7) 1:6



馬形埴輪 4

Fig. 42 音樂谷古墳 馬形埴輪 (8) 1:4

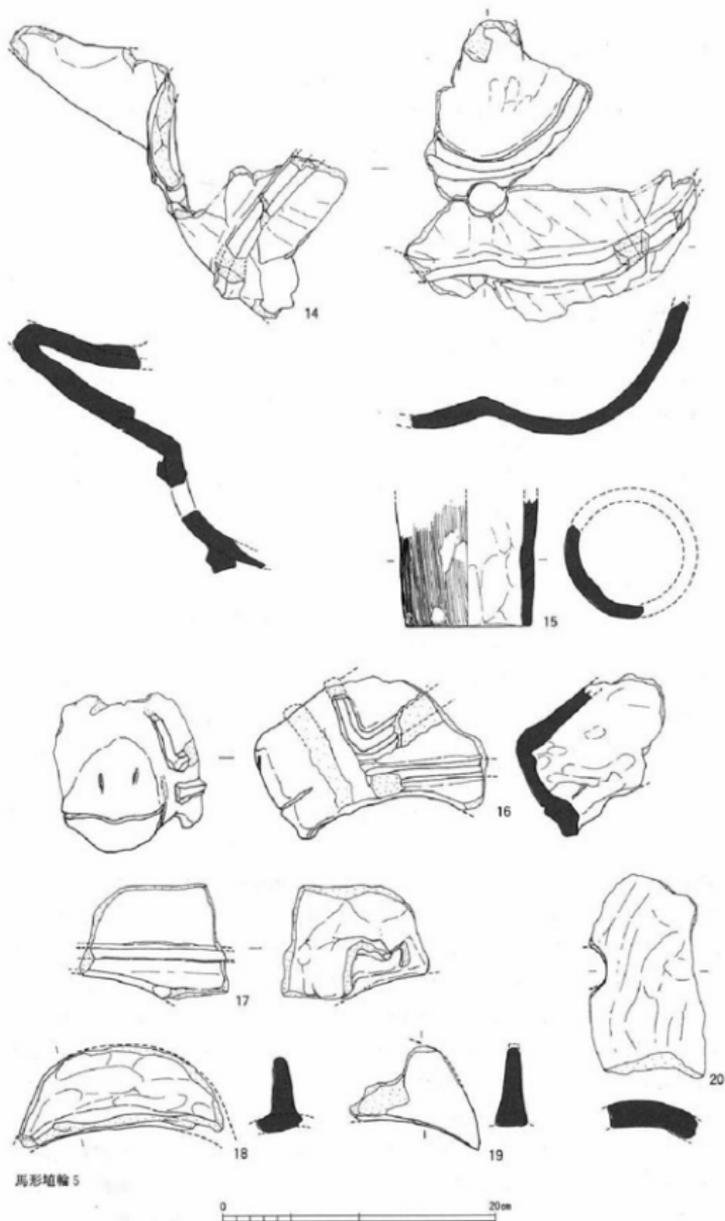


Fig. 43 音楽谷古墳 馬形埴輪 (9) 1:4

っぽう、8と9はともに後輪の根元部分で、8が左側、9が右側のほぼ対称箇所の破片と見られる。8は前方には鞍褥が粘土を厚く貼り足すことによって表現しており、後方へは、尻繫の2条の帯が延びている。両帯は延びる方向が異なり、上側の帯の延長には馬の背中央の雲珠が想定される。なお、その付け根には脚と黄金具状の造形が加えられている。いっぽう、下方の帯は尻の下を巻くものになると思われる。これに対して、9は後方の雲珠へ延びる尻繫の1本が残存しているだけで、後輪も剥落している。いっぽう、尻繫の馬装と見られるのが10である。尻繫の帯の下に円板を貼り付け、その上面に粘土粒を貼り付け、周囲に沈線をめぐらしている。これは鈴付きであることを示すのではなく、鋳と縁金具を表したものであると思われるが、鋳頭の粘土粒は剥がれたままである。下半がまったくわからないが、剣菱形杏葉の上半部と解される。

11は障泥の左上端付近の破片である。障泥を吊り下げる紐が4cmほど残っているが、その先の状態については摩擦のためはっきりしない。残っている長さ以上に紐は延びなかったようにも見える。障泥自身は胴体に板状の粘土を貼り付けて垂下されたものであることを表現していたと思われるが、その周縁は粘土をさらに貼り足して、1段厚くしている。13は端が脚部に接続しているから、右体側の障泥上端の破片と見られる。12は鞍褥の端部の表現と見られる。鞍褥全体を厚く貼り足すのではなく、障泥の端部の表現同様、周縁にだけ断面三角形の粘土を貼り付け、形態を模写している。

二重の尻繫

14の特徴から尻繫は馬形埴輪1と異なり、尻尾の下にあけられている円孔の下側にもう1条の尻繫が回るより豪華な馬装であることが知られる。先の8とよく対応する。ここでも帯の断面形は台形で、全体を平滑にナデで仕上げている。

尻尾はその他すべての馬形埴輪同様、差込式になっているが、先端を失い本来の全体像はわからない。胴部からある程度延ばしてきたところで差し込みをおこなっている。

15は馬4の脚とほぼ認定できるものである。底面径10cmで寸胴な形状を呈する。外面にクテハケメが顕著に残る。内面にはナデが施されている。

馬形埴輪4は色調がピンクがかった橙褐色であることから、同一個体を識別しやすい。焼成はやや甘い。赤色顔料が塗布されている可能性がある。

手綱と鞍のある馬

馬形埴輪5 (Fig. 43-16~20, PL. 23) 頭部は左側面が比較的残りがよく、16と17の2片からおおよそ復元可能である。16に見るように鼻先は他の個体と比べて短い。面髯は剥離等のためわかりにくくなっているが、馬形埴輪3同様、口元に2条の突帯を回すだけで、鏡板や辻金具などの馬具表現はもっていない。その2条の帯のうち後方の帯から体側にかけて帯が2条延びている。そのうち上側の突帯は、おそらく斜めに上がっていき耳の後方で巻いてタテガミの下で収束する頭絡であろう。これに対して、下側の突帯は下顎のラインとほぼ平行に後方へと続く手綱を表現したものと見られる。17がその一部となるのであろう。またその表側を見ればその他の馬形埴輪同様、胸前面の延長部分が前へ折れ、下が開放となった頭部であることがわかる。

馬5には小さく表現された18・19の鞍が載ると見られる。これまでのその他の鞍では側面がほぼ垂直になるようなしっかりとした形のものであったのに比べて、著しく簡素な半月状のものとなっている。騎乗用ではない鞍を模しているせいかもしれない。鞍の存在と頭絡の存在が関係するならば、馬形埴輪2にも頭絡があった可能性があろう。

20は右前足の付け根から胴部にかけての破片と見られる。側面の円孔が一部残っている。21

(PL. 23) は前脚、後脚どちらかわからないが、脚上端をつなぐに際し、厚い粘土塊を用いて丁寧に固定していることがわかる。焼成はやや甘く、黄褐色でナデ調整の顕著な個体として比較的容易に識別できる。

小型動物 (Fig. 44~46, PL. 24・25) 22は左後方部の破片が比較的多く残っていたため、ほぼ同一個体と認定できる破片を用いて全形を復元した小型動物である。南掘削りからまとまって出土した。後脚の股間は接合しておらず、前脚の胴体との接合角度は胸側からのラインを重視して決めた。耳ヤツノの復元はすべて24の個体から推測した。

復元された全長56.8cm、高さ39cm。前脚は股間までの長さ17cmを計る。成形は粘土紐を積み上げて作った上開き気味の四脚を腹でつなぎ、そこから粘土板を順に積み上げて尻の方から胴体を作っていったと思われる。そして、最後に頭部の成形にかかり、口のところで閉じて全体の成形を終えているようである。耳ヤツノの付加はその後であろう。

胴体は馬形埴輪よりも厚く、脚の付け根は内面に縦方向の強いナデを加えている。胴部側面の4個の円形透かしは、胴部中位にまで上がっている。尻尾はここでも杓を用いた接合をおこなっているが、後ろから見て左に寄っている。また、尻の穿孔は尻尾の接合をおこなったあとに実施されていることがわかる。尻尾自身は欠損している。

前脚から胸へと進んだ前方の成形はそのまま下顎へと進むが、本例は胸と顎の間に断面が三角形になる粘土塊を貼り付けて、首の皮のたるみを表現しているところに特徴がある。頭部は円形に削り抜かれた目から先の部分しか残っていない。鼻先は著しくすぼまるが、摩擦のため鼻の穴の表現の有無は不明で、前面にヘラで刻まれた口の表現を残すだけである。

外面全体に丁寧なナデを施しており、ハケメの残る箇所はない。色調は白っぽいベージュ色で、赤色顔料の付着と見られる部位もある。焼成も堅緻だが全体に作りは厚い。

23は頭部から胸にかけて残る小型動物埴輪片である。鼻先にかけて著しくすぼまる形状で、目を大きく円形に削り抜いている。鼻先には刺突による鼻の穴1対に加え、やや開いた形の口の造形が見られる。断面を見ると、頭部が非常に厚くなっているのは、全体の成形の最後に開口部を塞ぐように頭部を作るためであろう。

ここでも、顎から胸にかけての部分に断面三角形の大きな粘土の貼り付けがあり、首のたるみを表現している。外面全体をナデで仕上げている。

24が22の復元のもとになった小型動物の頭部上半の破片である。これも南掘削り出土。右目が円形にあげられ、さらに耳を取り付けた孔がある上に、小さな突起が耳の付け根の上に貼り付いている。断言はしづらいが、この突起は鹿の角のように長いものが欠けたのではなく、現状でほとんど残っている状態と見ることが妥当である。目の部分は輪郭に多少膨らみを持たせてある。

このツノの特徴と、先の22と23に見られた首の造形から、いずれも鹿の埴輪と見るよりも、牛と見る方が正しいように思われる。

これらとは異なる種類であるが同じく小型動物に属する破片がある。25と26がそれである。26は左端に目を表す円孔の一部が残り、その後ろに耳の付け根が残っている。耳はあらかじめ開けておいた孔に杓状部分を差し込み固定している点では、本古墳出土のその他多くの動物埴輪と同じであるが、その杓状部分と外に突出した耳が板状を呈することが大きく異なる。また、

首の皮
のたるみ

牛

犬

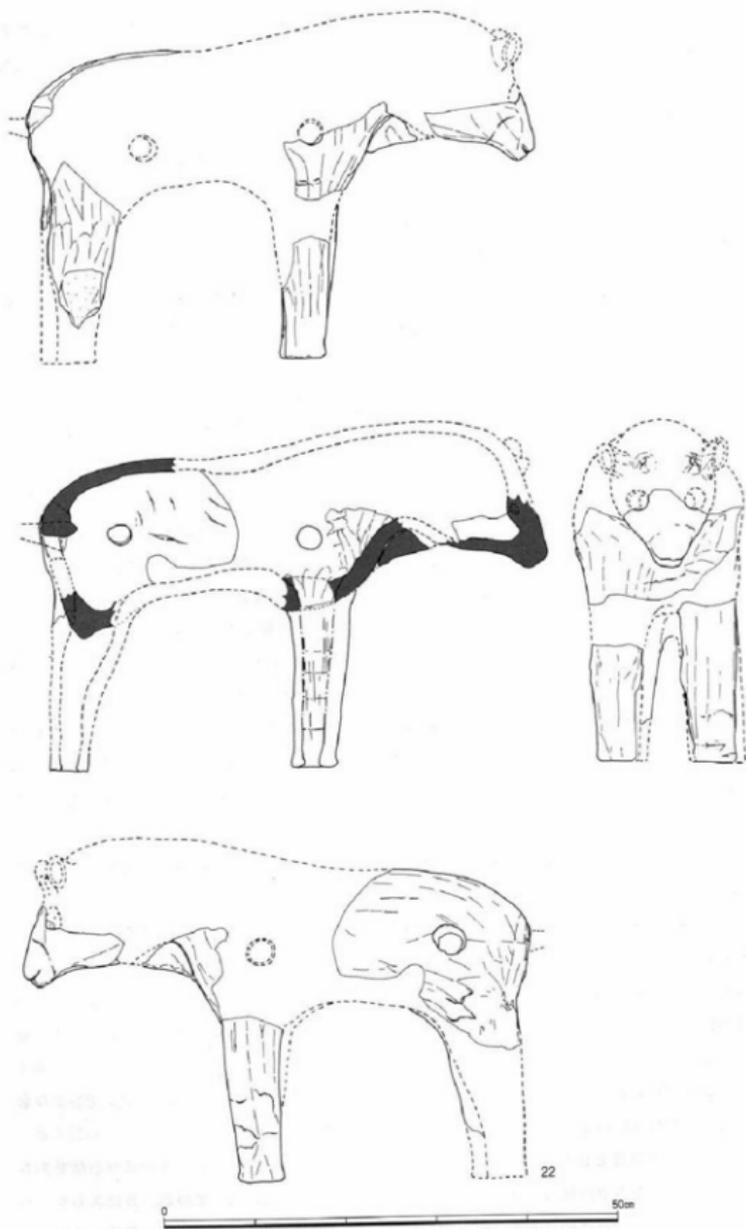


Fig. 44 音樂谷古墳 動物埴輪 (1) 1:6

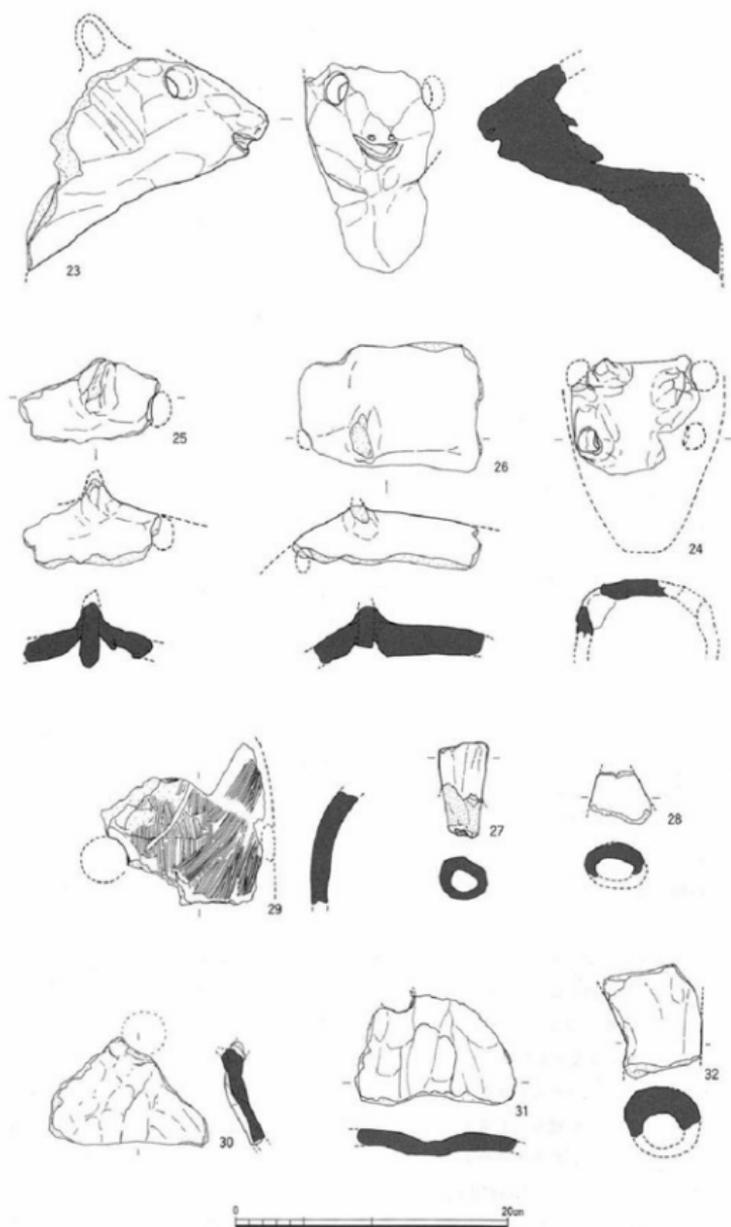


Fig. 45 音楽谷古墳 動物植輪 (2) 1:4

ツノの表現もないことから、犬形埴輪であろうと思われる。25も同様に平たい柄状部分を差し込んであり、図右側には目の円孔が一部残る。本破片はかなり深くまで納状部分が入っている。

耳 27以後は種別の同定の難しい各破片である。27は一端が頭部に挿入されていたことのもので、反対の一端は斜めに切られたように端面をなし、外面は丁寧なナデで仕上げられている。挿入部を含め全長7.2cmと短いことからすると、馬以外の埴輪の耳と考えざるをえないし、犬でもない。

28は先端が尖る動物埴輪の耳であるが、馬か小型動物も含めて同定不能である。類似の破片は少なくない。

29は動物の尻で右側の破片である。尻尾が破片左上に付くこと、そしてすぐ下に円孔があくことがわかる。表面にハケメが密に施されており、焼成は堅緻である。尻髯が残っていないが、馬形埴輪1に同定できる可能性も捨てきれない。

30、31も尻から股間にかけての破片である。これらは基本的にナデ仕上げとなっている。

脚 32は大きさからみて小型動物の脚と見て間違いない。これもナデ調整で仕上げている。

33は馬の脚だが同定できない。底径7cmで上方に向かってやや広がる。内外面ナデ調整である。これに対して、34は外面にハケメが残るが同じく馬形埴輪の脚部破片であろう。

これら筒状の脚に対して、逆漏斗状の破片で同じく動物の脚になりそうな破片がいくつかある。このうち2点のみ図化した。35は接地する面を意識した端部の処理をおこなっているのに対して、36は端部が四角く単純に終わる。ともに外面にハケメが残る。おそらく図の天地と逆方向に粘土紐を積み上げて作ったものであろう。脚とは関係なく、特殊な器財あるいは高杯や器台などの土器を形象化した埴輪片かもしれない。

鳥 鳥形埴輪 (Fig. 46, PL. 25-右) 37は鳥形埴輪と見られる。中空で首が長く内面にナデの痕跡が縦につくことから輪積み成形と考えられる。首の成形を終えてから、円錐形の嘴をつけている。摩滅が著しく嘴に線刻が認められる以外は何ら具体的な造形は残っていない。

鶏冠や肉垂がついていたかはわからないが、首の長さや頭の小ささからすると鶏を表現したものでなくて水鳥を表現したものと考えられる。

南掘割りから出土している。

人 人物埴輪 (Fig. 46, PL. 26) 数ある動物と比べると、人物埴輪と見られる破片はきわめて限られる。

38は復元するとやや上すばまりの円筒状になる破片で、先端が斜めに切られたように仕上げられている。粘土紐の輪積みで成形されており、外面には一部縦に剥離痕が残り、その位置の頂部がもっとも高くなる。それ以外の外面には縦方向のハケメがよく残っている。これらの特徴から、後頭部の垂髪が剥離した男子人物頭部と推測する。南掘割りから出土。

39は鼓形の残存部分から人物埴輪の肩から首の部分の破片と考えられる。輪積みによって肩をすばめてそのまま輪積みで上開きの頭部の成形に移っていったことが観察できる。内面には粘土紐の縦目とその際のナデやオサエの痕跡がよく残る。残存部位には顔面や衣装、装身具の痕跡は残っておらず、どちらが正面であるかも不明である。南掘割りから出土している。

40は、先端が詰まった中空棒状の破片で、やや反り返った表現となっている。反対側は柄状に差し込むようにして何かに取り付けられていたことがわかり、矮小気味の人物の腕の表現で

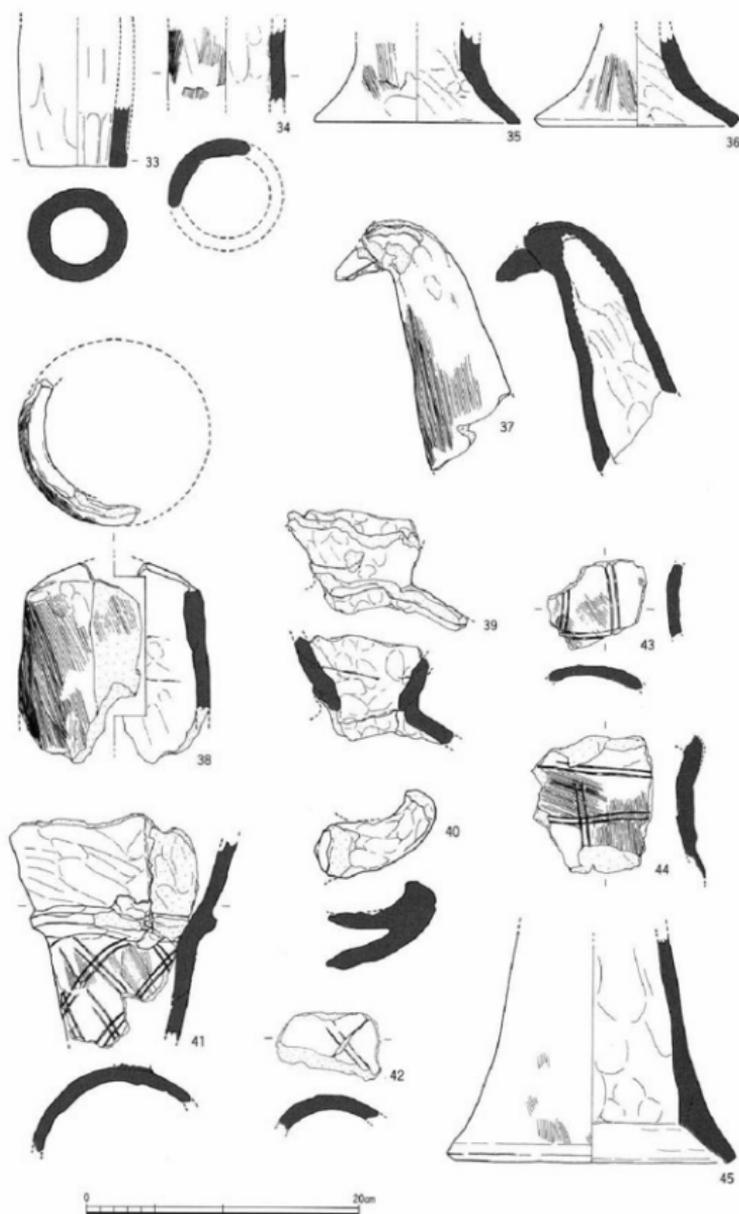


Fig. 46 音楽谷古墳 動物・人物埴輪 1:4

馬 子 あろうと思われる。衣装や指の表現はない。これも南掘削りから出土しており、どの馬形埴輪にともなうかはわからないが馬子の片腕と考えることができよう。

45は、裾開きの形状をした破片で、裾の径は21.2cmを計る。近くにの内面にははっきりとした稜がつく。外面は摩滅が著しいがハケメ仕上げと見られる。欠損している上部で何か別の部品と接合していたとすると、人物埴輪の上衣の裾かとも思われるが、あるいは裳かもしれない。そのどちらにしても、内側に円筒形台部があったとするならば、造形上これほど長い裾は不自然である。茨城県周辺に見られる上下分離式の人物埴輪にでもなりそうな破片である。しかし、出土位置は南掘削りではなく墳丘北西斜面であることから、人物埴輪と見ること自体できないかもしれない。

41から44は2本一組の沈線で文様を刻んだ破片である。41は人物埴輪の足の部分と思われる。中ほどに断面台形の突帯がめぐり、それより上では何かが割られた跡が縦方向に観察される。突帯より下では2本一組の沈線で斜格子文が充填されている。突帯は足結とも見られ、突帯より下はゲートル状のはきものの表現かもしれない。しかし、上方の剥離部分に付いていたものは想像できない。なお、赤色顔料の塗布を考慮すると、天地を逆に考え、大刀形埴輪の柄と鞘の連接部分の造形とも受け止められなくもない。墳丘東南斜面黄褐色土からの出土であり、掘削り出土の一群からそれほど離れていない。

42は横方向にのみ緩やかな湾曲をもっているが沈線の施し方から41と同一個体の破片になる可能性が高く、出土位置も同じである。

武 人 43と44は2本一組の沈線が格子状に施されている破片である。何を模しているのか判断がつかないが、43は上下左右に湾曲をした薄い破片で、内面は下半のみヨコハケメが強くかけられているのに対して、上にすはまるせいで内面上半にはハケメがなく、ユビナデ調整となっている。この様子から、冑のような頭部表現と思われる。これも墳丘東南斜面からの出土。

これに対して44は図の上端に円形の首様のものが続くことがわかるもので、人物の肩や胸の一部分と思われる。沈線の形態は挂甲や肩甲の表現であろうか。表面にはタテハケメが比較的残るのに対して、内面はナデやユビオサエの痕が顕著である。43と同一個体かもしれないが、盗掘坑内から出土している。

円形輪郭の
双脚輪状文

双脚輪状文形埴輪 (Fig. 47, PL. 27) Fig. 47には双脚輪状文形埴輪を載せている。縮尺は46のみ6分の1、他は4分の1である。46はもっとも残りがよく形象部分を完形に復元できた。南掘削りから出土したものである。左右の長さは約37.8cm、盤状部の上下の径は約27.5cmである。向かって左側に上下対称形の巖手状部分をつけた円盤状の造形で、中心に径9.6cmの円形の孔をあけ、前面にのみ線刻文様を施す。形象部分は板状の形象部をほぼ作り終えてから、円筒部に接合したのではなく、円筒部から連続的にかたち作っていったように観察される。そのため、形象部分は下半が断面円形の本体に鱗状の張り出しを付け加えた形となるのに対して、上半は背面から盤状形象部を支える形となっている。なお円筒部はまったく残っていない。

表面の模様は、円孔と円形の外側輪郭に沿って平行する2本線の間を短い刻線で埋めた梯子状文様を施し、その間を三角文様で満たすものとなっている。そして円盤部分のみ内向きの三角文様の内部を頂点に集まる縦線で充填する。そのうち、隣り合う三角文が接して有軸の綾杉状表現に見えるところもある。

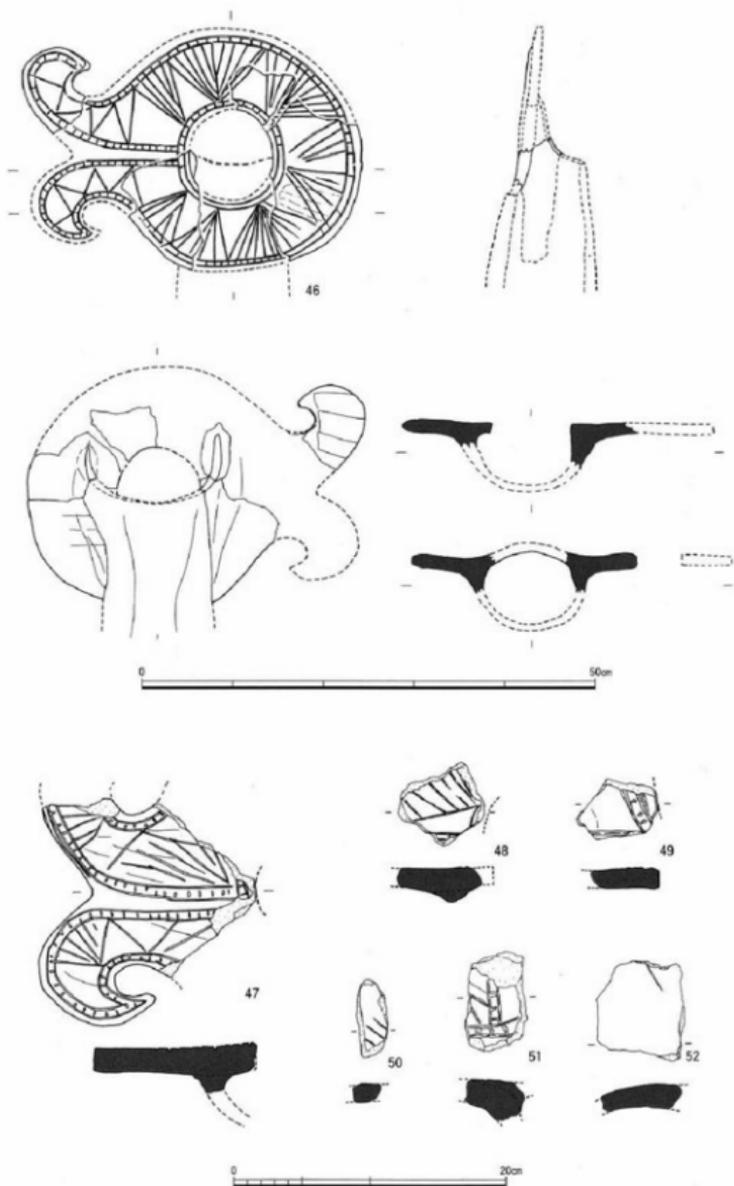


Fig. 47 音乗谷古墳 双脚輪状文形植輪 (46. 1:6 47~52. 1:4)

双脚輪状文 の配置

47は46とは別個体の双脚輪状文形埴輪である。右端にかろうじて円孔の一部分が残る。輪郭は46同様、梯子状文様で縁取るが、短い刻みは刺突状になっている。梯子状文様で挟まれた内部は連続三角文様で満たしていることは変わらないが、盤状部と双脚部での鋸歯表現の違いは46ほど明瞭でなく、内部を充填する三角文様は双脚部にも及んでいる。石室盗掘坑の中から出土した。

48は双脚部と盤状部との接点付近の破片で、円孔の縁取りの一部と、双脚部付け根の縁取り、そしてそれらに接する平行線を充填した三角文様が残る。これらの特徴により、上述2者とは異なる個体であることが判明する。南掘削りから出土している。47とよく似ている。49もほぼ同様の破片であり、右端に円孔の一部が残る。図の下端に残る沈線は三角文様の一辺と見られる。これも南掘削りからの出土である。50は部位を特定できないが、51は背面の円筒部の接続状況から盤状部右下部分の破片と見られる。表面には梯子状文様が直交している表現が残り、左には内部を充填した三角文様の一部が見られる。墳丘北西斜面から出土している。

以上の破片のうち、47と49は同一個体である可能性もあるので、音楽谷古墳出土の双脚輪状文形埴輪は46に類するものが最低3個体、それらと異なる梯子状文様の直交する51を加えて4個体は存在したと考えられる。いずれも、橙褐色の胎土で他の形象埴輪とは区別される。

52は橙褐色の胎土から46や47と同一個体になる可能性がある円筒部破片である。表面にハケメが残っていない。上端に斜めの線刻が1本あるが、文様の一部かどうかはわからない。墳丘北西斜面からの出土である。

玉杖形埴輪 (Fig. 48~50, PL. 28~30) 従来、石見型盾形埴輪、あるいは、石見型埴輪と呼ばれてきたものを本書では玉杖形埴輪として扱う。その意味では円筒部もいくらかは棒状の杖部分を象っていると考えられるが、便宜上、左右に板状に広がった上半部に対して形象部と呼称する。音楽谷古墳からは大型品と小型品の大別2種類の玉杖形埴輪が出土している。このうち前者は1点、後者は2点形象部を復元しえた。

大型品 53が大型品で円筒部もある程度復元できた個体である。復元された全高は99.8cmを計る。

形象部は小型品と比べると相対的に幅広く、下縁背面に補強のための突帯がつく。形象部の長さ71.5~72.0cm、上辺幅46.5cmを計る。両側縁の半円形削り込みを挟み小さく鱗状の突出をもつ中間の帯状部分は、2本一組の沈線により上下と分けられ、全体で3段構成となっている。ただし、鱗状突出部分はほとんど残存していない。頂辺中央はツノ状の突起をもち、その間をU字形に挟む。また、輪郭を縁取る2本一組の沈線は中間の段にはない。

円筒部は形象部との境に突帯をもち、そのさらに約12cm下にも1条突帯を回すが、それより下の部分にはこれと同じ間隔では突帯が回らないことがわかる。円筒部のハケメが向かって左上から右下に斜めに走ることからすると、本製品が円筒部を先に作ったのち、天地をさかさまにして形象部の成形に及ぶ倒立技法を用いていることは明らかである。

形象部表面は円筒状の中央部を除いてほぼ全面にナデが丁寧に施されていて、板状の部分にはハケメはほとんど見えない。これに対して、円筒部のハケメは消そうとした痕跡がない。

この種の製品によく見られる小孔は、両側縁に沿って4個ずつ、そして中央にそれらと位置をずらして3個上下に配されていると復元できる。中には貫通していないものもあるが、断面形は方形で、斜め下向きにあげられている。

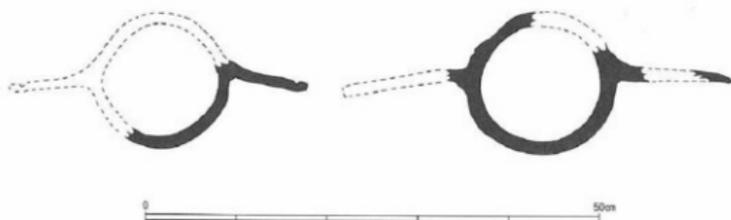
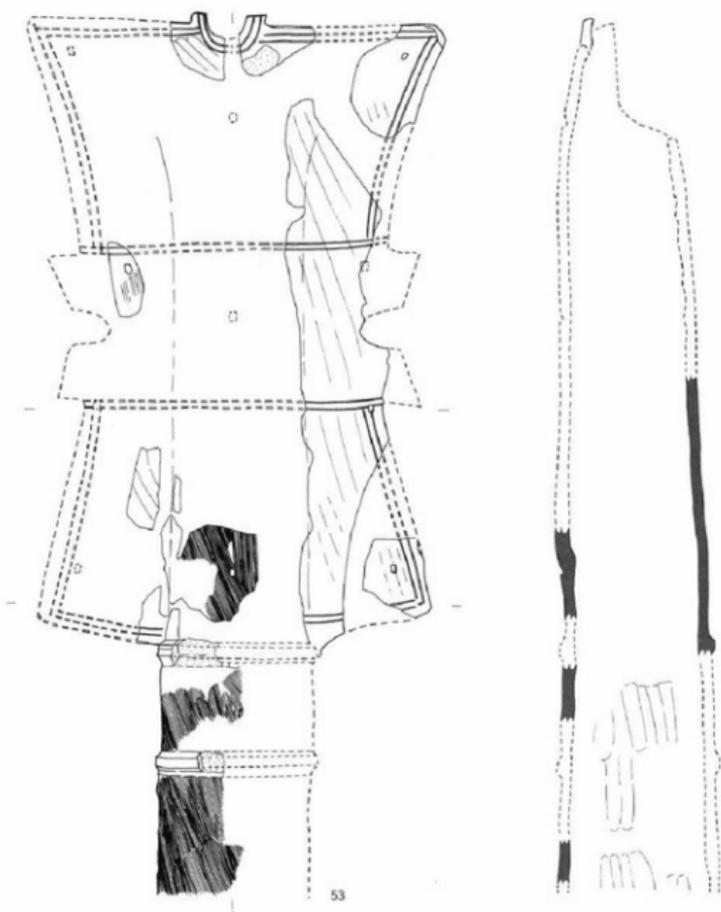


Fig. 48 音楽谷古墳 玉杖形埴輪 (1) 1:6

色調は全体にやや黄味がかったベージュ色で表面に赤色顔料が残存している。焼成はやや甘い。南掘りからの出土である。

小 型 品

54は小型品である。C区の墳頂で円筒埴輪とともに出土した個体である。大型品に比べると形象部中段の緒状突出部分が相対的に大きく表現されている。暗赤褐色の色調と硬質の焼成が特徴で、盾面上半の残りは比較的良好なもの、下半は両翼部が残存しているにすぎない。そのうち左側の下端隅角は斜めに切り落とされている。断面形によく現れているように、形象部は円筒の両側に水平に粘土板を貼り付け、それと円筒部の前面で形成されている。頂辺のツノ状突起部分にはU字形の粘土帯を貼り付け、指で押圧して表面に変化をもたせている。このほか、盾面中央のU字形削り込みを挟むように上下2段の沈線の帯が水平に刻まれている。粘土帯と沈線以外には盾面の装飾はなく、斜め方向のナデが全面に施されている。ただし、円筒部はハケメが比較的良好に残っており、ナデはあまり丁寧におこなわれていない。内面は上半では縦方向のナデが顕著。背面の円筒部上端はU字形となっている。

小孔は両側縁に沿った位置では中段で確認できるが、下半の板状部には明らかに認められない。ただし、残存はしていないが、おそらく上半の左右板状部にはあったと考えられる。一方、中軸沿いではまず上段に1個確認できるが、中段以下は残存していないので不明である。あっても、あとひとつくらいであろう。小孔の形は方形である。

円筒部はまったく不明である。法量は形象部の長さ56.0cm、上辺幅39.0cmを計る。

55も54同様の小型品である。形象部周囲の残りは比較的良好だが、それ以外はほとんど残っていない。頂辺のツノ状突起部分にU字形に粘土帯を貼り付け、指で凹凸を付けていることが唯一の装飾と言えるもので、翼状部下端の隅角は左側を見るとやはり小さく切り落としてある。形象部は全面ナデで仕上げている。小孔は両側に3個ずつあけられていることがわかるが、中央にどれだけの小孔があったかはまったく不明である。この小孔も断面は方形である。形象部の長さ57.5～59.5cm、上辺幅38.9cmを計る。

出土地点は南掘りである。表面に赤色顔料が残存している。

Fig. 50には復元しえなかった玉杖形埴輪の各部破片を掲載した。67を除きいずれも小型品に属する。形象部の破片はどれも表面にナデの痕跡がよく残っており、裏面もナデによって仕上げられている。

56と57はともに頂辺の残る破片である。56はツノ状突起に粘土帯を重ね指で押圧しており、54・55の2点と共通する表現であるが、その左右の頂辺に沿って2本一組の沈線を刻んでいる点が異なる。この沈線は側縁には続かない。これも長方形の小孔が残る。左右対称として復元すれば、形象部上辺の幅は40cmとなる。B区からの出土で、表面に赤色顔料を塗布する。

57はツノ状突起上端が斜めに切られていて、半円形の削り込みに沿うU字形の粘土帯の貼り付けはない。かわって、頂辺に沿って梯子状文様を刻んでいる。削り込みは8cmにも及ぶ深いものとなっている。ナメナデが丁寧な表面に長方形の小孔が1個認められる。焼成は比較的良好で、橙褐色を呈する。復元すれば形象部上辺の幅は32.8cmくらいになるだろう。石室盗掘坑から出土している。

58も頂辺の残る板状部の破片と見られる。57同様梯子状文様を水平に刻むが、短い刻線は57と反対に右に傾く。なお、残存部位には小孔は残っていない。南掘りから出土している。

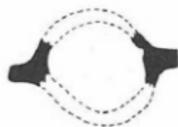
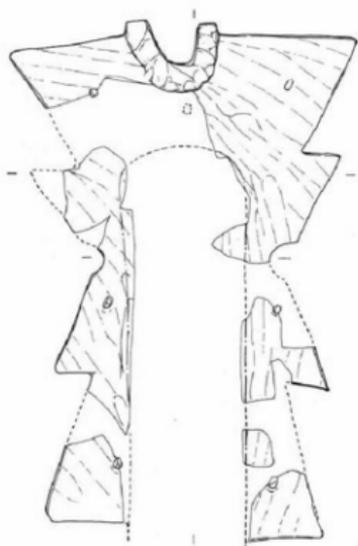


Fig. 49 音楽谷古墳 玉杖形埴輪 (2) 1:6

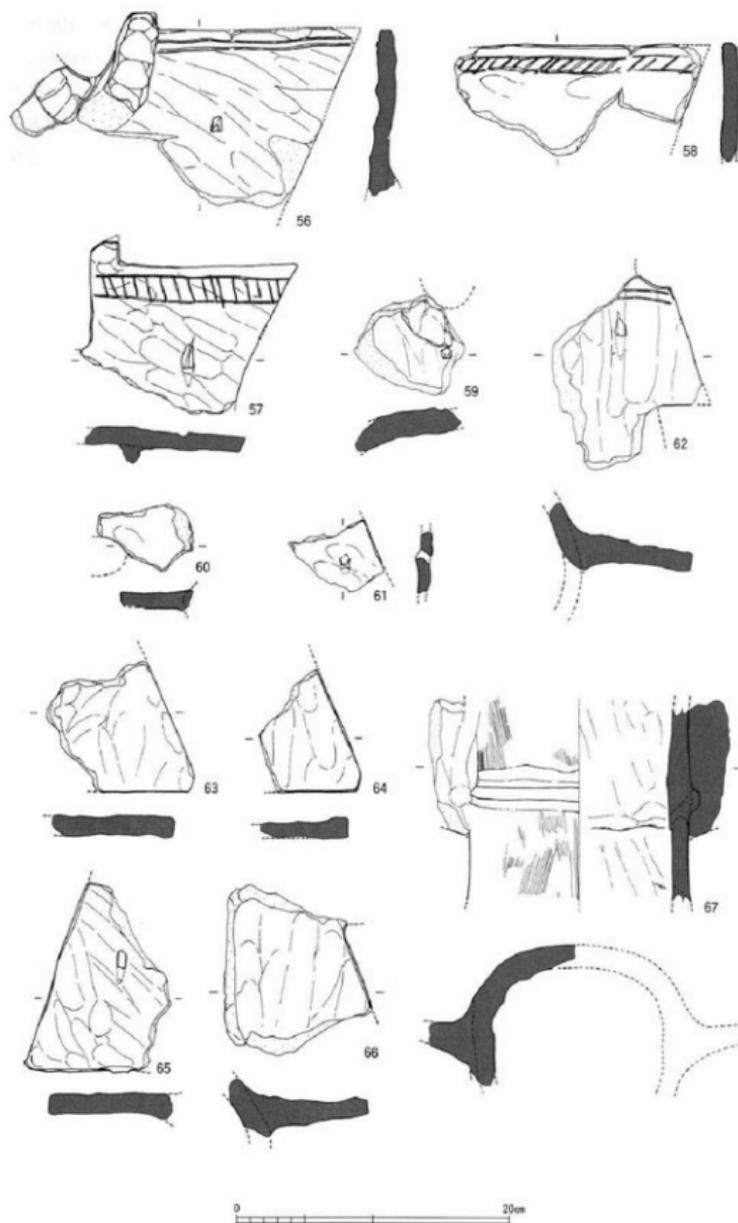


Fig. 50 音乘谷古墳 玉杖形埴輪 (3) 1 : 4

59は56と同一個体ではないがほぼ同工のU字形削り込みが部分的に残る破片である。粘土帯の貼り付けがもっとも下がった部分の直下に方形の小孔が認められる。

60と61は小片だが形象部中央付近の破片と思われる。ただし、天地は不明。60には左端に削り込みが一部残る。また、61は小孔が残るもので、右側側縁との距離が短いことから中段の破片と判断しうる。

62は中段右側縁の削り込みの一部とそれから続く鱗状突起を残す破片である。表面に2本一組の沈線を刻むことは54や56と同じである。この沈線のすぐ下に小孔が残る。B区から出土している。表面に赤色顔料が残っている。

63～66は形象部下端の翼状部片である。63と65も赤色顔料を塗布しており、65が長方形の穿孔を1個残すのに対して、63はこの部分に穿孔がないことが明らかである。前者が55に対応し、後者は54に対応することがわかる。いずれも表面には丁寧なナデの痕跡が観察され、65の隅角はわずかではあるが小さく切り落としていると見られる。63と64はともに翼状部分右側下端の破片であり、これらも、隅角を小さく切り落としている。

67は形象部から円筒部にかけての破片である。大きさと器壁の厚さから大型品の基部と思われる。残存状況が悪く、背面から見た実測図を復元的に載せた。円筒部上端の復元径は16cmである。

円筒に取り付けた形象部の残りはわずかである。円筒部断面及び内面の観察から突帯の直下あたりにももとの基底部があり、基部完成後天地を逆にして、その上に上半の粘土を積んでいたことが知られる。突帯はその際の強化の役割も担っていることがわかる。外面にはハケメがよく残り、焼成は甘く、淡褐色を呈する。南掘割りから出土している。赤色顔料残存。

以上の各破片のうち、60・61・64・66は砂粒を多く含み、サーモンピンクの色調を帯びていることが共通し、いずれもB区より出土していて同一個体の可能性がある。

これに対し67は南掘割りからの出土で、53とともに、大型品は人物、動物埴輪群とともに使用された特別なものであったことが推測される。これに対して小型品は墳頂各所に樹立されたのであろう。

蓋形埴輪 (Fig. 51・52, PL. 31・32-上) 蓋形埴輪には大別2者があり、68だけが大きく異なる。

68は破片から復元的に図化したものである。いずれも同一個体の各部である保証はない。立ち飾りは文様にあわせて長方形の透かしを1枚につき2個ずつあけたもので、周囲につく鱗状飾りは線刻をもたない。4枚の羽根は受け部からの剥離面を下面にもっており、そこには接着を強化するためのヘラによる刻みが確認できる。傘部に差し込む心棒やその先端に付く受け皿部はまったく残っておらず、傘部の破片も見当たらない。台部は円孔の一部が残りに、内外面ともにナメナデにより仕上げられている。各破片とも、表面に赤色顔料が残存している。

これは立ち飾りの特徴や全体的な形状から見て、5世紀前半の蓋形埴輪と見られる。遺物への細かな注記がなく、保管中に混入した可能性が高いと見られるが、古い時期の埴輪が新しい古墳へ持ち込まれる例もないわけではないので、掲載しておく。

69～73が宮原谷古墳から出土したことが確かな蓋形埴輪の各部破片である。69～72がすべて立ち飾りの破片である。68に比べかなり立ち飾りの形状がくずれたもので、立ち飾り本体と外側上部の鱗状飾りが一体化して大きく変わったものに内側の鱗状飾りが小さく表現される形であ

玉杖の配置

5世紀の蓋

6世紀の蓋

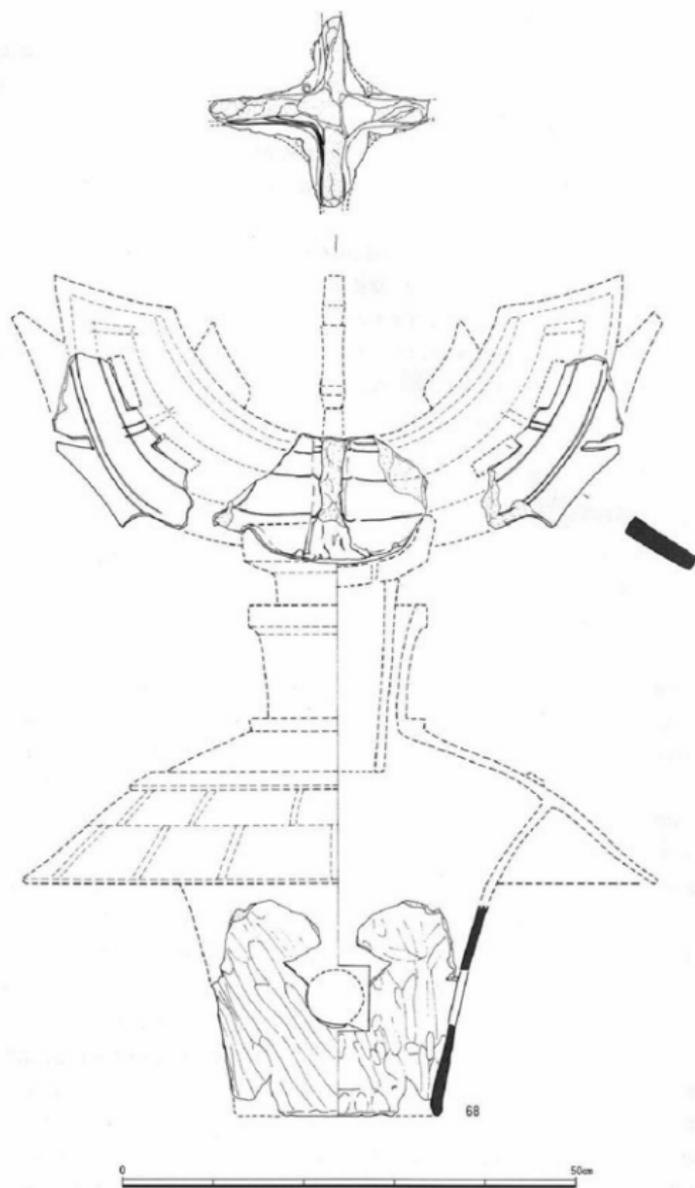


Fig. 51 音樂谷古墳 蓋形埴輪 (1) 1:6

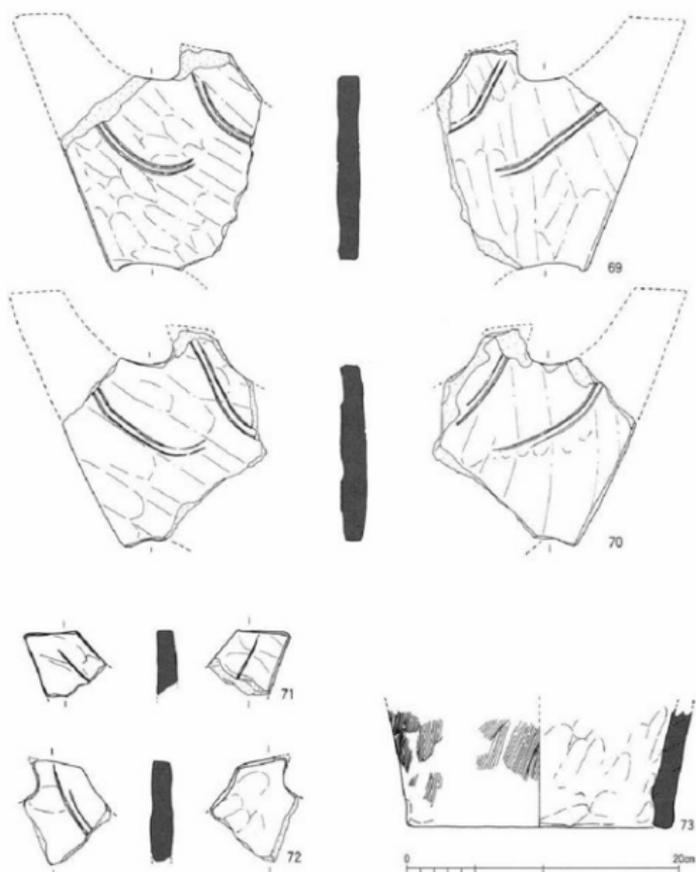


Fig. 52 音乗谷古墳 蓋形埴輪 (2) 1:4

る。線刻も2本一組の弧線が2組ずつ付けられているだけで、71ではそれが1本線に、そして72では片側だけに残っている。それでもそれぞれ表面は丁寧なナデ調整が施されている。色調は灰橙褐色である。

この種の立ち飾りにともなうと考えられる台部が73である。表面に不定方向のハケメが残り、内面にはナデやユビオサエの跡が顕著に残る。これ以外の傘部や受け部の破片はまったく採取されていない。

これらはB区からも出土しており、小型の玉杖形埴輪同様、各所に置かれたものと推測できる。その場合、円筒埴輪に載せてあったことも十分考えられる。

家形埴輪 (Fig. 53, PL. 32-下) 74~78が家形埴輪の破片と認められるものである。74を除くいずれも同一個体である可能性が高い。

蓋の配置

74は垂直の壁面状のものに斜めに貼り付けていた部位がはずれた形をしており、あえて言うなら家形埴輪の軒の部分と考えられる。しかし、沈線の施し方はあまり例を見ないものである。少なくとも、以下の75~78とは胎土、焼成においても明確に異なるものであり、注記もなく混入の可能性も捨てきれない。

75~78が隅丸方形の平面形の家形埴輪軸部の破片である。暗灰褐色を呈し焼成は良好である。どれも、底面より3cmほど上がったところに断面低台形の突帯を外側にめぐらす。75には沈線で縁取られた長方形透かしが突帯のすぐ上にわずかに認められ、入口部分の表現と見られる。77は隅部分の破片であろう。いずれも斜めなない縦方向の不規則なハケメが外面によく残っている。また、内面の基底付近は指による押圧が顕著におこなわれている。78も図左端がコーナーに近いことが観察される。いずれもB区からの出土であり、A区南掘削りから出土した大量の形象埴輪とは異なる地点、墳頂での使用がまっさきに考えられるものである。

家の配置

鞆形埴輪 (Fig. 53, PL. 33-上) 79~81が鞆形埴輪の破片である。古墳時代後期に通有の奴風形の鞆の埴輪である。79と80は矢印状に表現された矢が板状破片に刻まれたもので、79は鎌が計5本描かれている。長頭鎌を模していることはほぼ確かであろう。表面にはハケメがよく残る。これに対して、80は表面の摩滅が著しく鎌の線刻も消えかけている。

81がこれらの板状の鎌表現部分を扶む翼状部分の破片のうち、左側の破片と思われる。斜めの刻みを入れた覆輪状の表現で縁取り、その中を上向きの弧線で充填している。この翼状部分と鎌表現部分とがどのように接続するのか不明であるが、鎌表現部分は残存する範囲ではきわめて平坦なことから、矢筒本体を構成する円筒の前面が上端でそのまま翼状部分へとつながっていくのに対して、板状の鎌表現部分は円筒部をまたぐように左右の翼状部分の間に固定するしくみであったと思われる。79と81がB区からの出土であり、やはり墳頂にあったものと見られる。これらはともに焼成が良好で、色調もよく似ている。

5世紀の盾

盾形埴輪 (Fig. 53, PL. 27-右下) 82は灰褐色でその他の埴輪と比べるとひと目で胎土が異なっていることわかる破片で、蓋形埴輪68同様、長い間の保管期間に混入してしまった可能性が高いものである。盾形埴輪盾面の一部で、裏に一部円筒部が残る。盾面の輪郭と相似形の無文の内区を2本線で囲み同じく2本線からなる外側の区画との間に鋸歯文を充填した盾形埴輪である。鋸歯文は有軸の綾杉文を充填するものである。鋸歯文の向きが反対であるが、宮崎県西都原171号墳出土の盾形埴輪と共通する特徴が多いことから、68同様、5世紀前半の製品と見た方がよい(高橋1993)。乳白褐色で焼成はやや軟質である。

器種不明埴輪

これに対して、83はA区から出土したことが確かで、胎土も文様もともに双脚輪状文形埴輪と類似している。ただし、直線的な一辺が残り、直交する梯子状文様も双脚輪状文形埴輪には比定しにくい特徴と言え、ここでは盾形埴輪の隅の破片として報告する。内側には内部を線で充填した鋸歯文が刻まれている。もちろん、盾形埴輪に比定できる以上、盾持人の一部である可能性もあることになる。南掘削りからの出土である。

84以後の破片は器種の同定ができない器財埴輪の破片である。84は2本の並行する沈線が残るも、残存する端部の形状からは何の埴輪かわからない。85は無文で鏝状の外形をもつが、天地を含めかたちを復元できない。

86はナデで調整したやや湾曲のある破片に粘土を帯状に貼り足し、その上を指で連続的に押

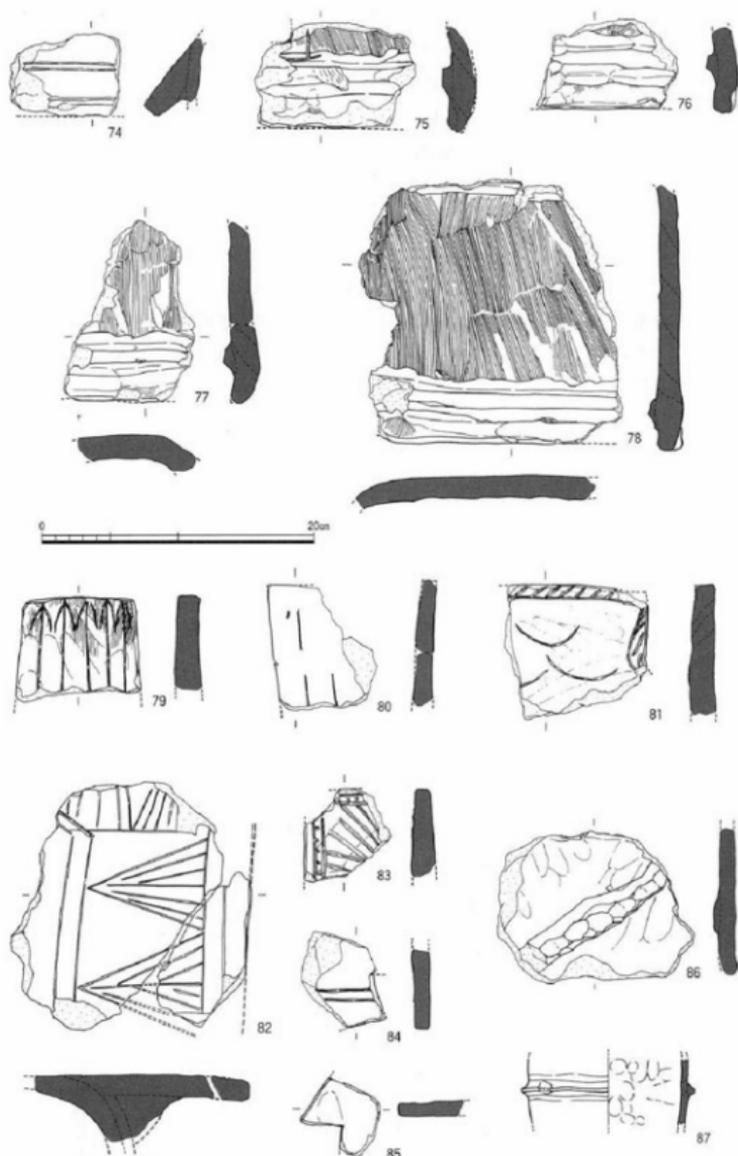


Fig. 53 音楽谷古墳 その他の形象埴輪 1:4

さえたものである。13の馬形埴輪の障泥に用いられた貼り足し方に似るが、ユビオサエの有無が大きく異なり、器種を同定できない。出土地点も不明である。87は円筒埴輪に似るが、器壁が薄く、径も11.8cmと著しく小さく、外面にはハケメが残らない。丁寧なナデが施されていることから形象埴輪の一部と理解した。B区からの出土で、墳頂での使用が想定される。

倒立技法

円筒部 (Fig. 54, PL. 33-下) Fig. 54には形象埴輪の円筒部を集めた。どれも倒立技法によって作られており、いずれかの器財埴輪になると思われる。88は突帯を2条残すもっとも残りが良いもので、両突帯間は心線で23cmと長く、下側の突帯に近い位置に径の小さい円孔をあける。おそらく上部の突帯のところが形象部との境で、もっとも狭くなった円筒部の径は12.8cm。小型の玉杖形埴輪の基部であろう。黄白褐色で焼成は甘い、表面に赤色顔料が残る。B区出土。

89~91は基部の破片である。89と90は88と同じく小型で、89が径19.0cm、90が径18.4cmに復元できる。ともに基部が外側に広がっている。89は幅の広い粘土帯上の押圧はあまり顕著でない。橙褐色で双脚輪状文形埴輪の基部の可能性もある。盗掘坑内から出土している。これに対して、90は粘土帯が狭く、押圧は比較的はつきり凹凸を見せている。また、内面に横方向のハケメを施している。ベージュ色を呈し、小型の玉杖形埴輪の基部にあたと見てよい。D区からの出土で焼成は堅緻。これらに対して91は径が22cmと大きく、また裾が広がらず、別種類の埴輪の基部と見られる。ただし、これも端部には薄く粘土帯を貼り付け、一押しずつ押圧をおこなっている。焼成はやや甘く、ベージュ色を呈す。B区出土であることを評価するなら、大型玉杖形埴輪が人物、動物埴輪樹立区に限定される可能性から、それとは別種の埴輪と見る方がよい

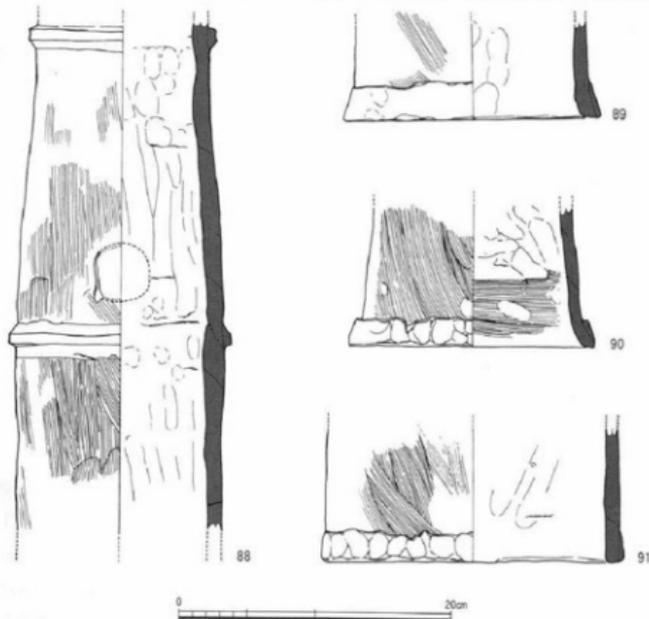


Fig. 54 音乗谷古墳 形象埴輪円筒部 1:4

かもしれない。

②円筒埴輪 (Fig. 55・56, PL. 34~36)

音乗谷古墳から出土した円筒埴輪はすべて普通円筒に属するもので、朝顔形埴輪は1点も存在しないことが注目すべき特質となっている。固化したものは21点であるが、C区の埴輪集中域にあった92を除き、原位置に立っていたものはない。

朝顔不在

はじめに全体的な特徴を説明し、その後で、目立つ一群の抽出を試みたい。

形態 すべて4条突帯5段構成に作られていると復元できる。底部からほぼ一様な傾きで上に向かって開いていく。全長がわかるものは92・94・99・106の4点であるが、ばらつきも大きく平均で54.6cm。口縁部径は平均23.9cm、底部径16.5cmとなる。

透かしは第2、3、4段に2孔ずつ上下で直交する向きに穿つのを典型とするが、106のように第3段には省略しているものもある。透かしの径は比較的大きい。

突帯は台形断面で大ぶりなものが目立ち、とくに上側の稜が突出する。ただし、貼り付けにあたって何ら貼り付け位置の目印を付けていないせいか、大きくうねるようにナデ付けられているものも少なくなく、ナデ付けのひとなでひとなでが良く見えるものもある。

円筒埴輪
の 特徴

割付をおこなっていないため、突帯の間隔も個体内でさえまちまちであり、100に見るように口縁部のラインの水平が重視されていることがわかる。

口縁は基本的に断面コ字形の単純な仕上げとなっている。端面を整える最終のヨコナデではあまり強い力を入れておらず、端部際までハケメが明瞭に残る個体が多い。

外面調整 外面調整は粘土組の積み上げ後、直接縦位のハケメを下から上にかけて、下部から徐々に仕上げていき、口縁部のハケメを最終的にかけて終わっている。そして、突帯の貼り付けは口縁まで作ってからおこなわれていると考えられる。音乗谷古墳出土の円筒埴輪の外面調整には以下のようにいくつか注意される点がある。

まず、最初に施されるタテハケメが、基部の端からきっちり施されている個体があるいっぽう、112のようにハケメのかかっていない外面が広く残るものも見られる。一方、ハケメ自身は開始点をらせん状にずらしながら効率よく下から上に順に進んでいるように見えるものもあるが、多くは92や93のように開始点が不規則に並んでいることが観察されるものである。

また、この中にハケメの傾きが上に向かって右に傾いているものが少数ある。これは左手で下から掻き上げる所作によるもので、比率から見ても左利きの工人の手になるものであることは明白である。

内面調整 内面調整は相対的に丁寧で、粘土組の痕跡はナデやユビオサエで消されほとんど残っていない。口縁部付近にのみいずれも横方向にハケメを施しているが、それ以外のところへのハケメの施し方にはばらつきがある。

底部調整 底部に特別な調整を施した個体はわずかしかない。しかし、107と108は痕跡としては微かであるが、板状のもので抑えたために、ハケメが消え、断面もやや薄くなっている。これらを除くと、底部は外面に一次タテハケメ調整を施すだけである。

群別 それでは、音乗谷古墳の円筒埴輪の中で特徴的な群についていくつか説明を加えることにしよう。

Fig. 55の92~98が上に掲げた各項目においてもよくまとまりを見せる一群である。これらを

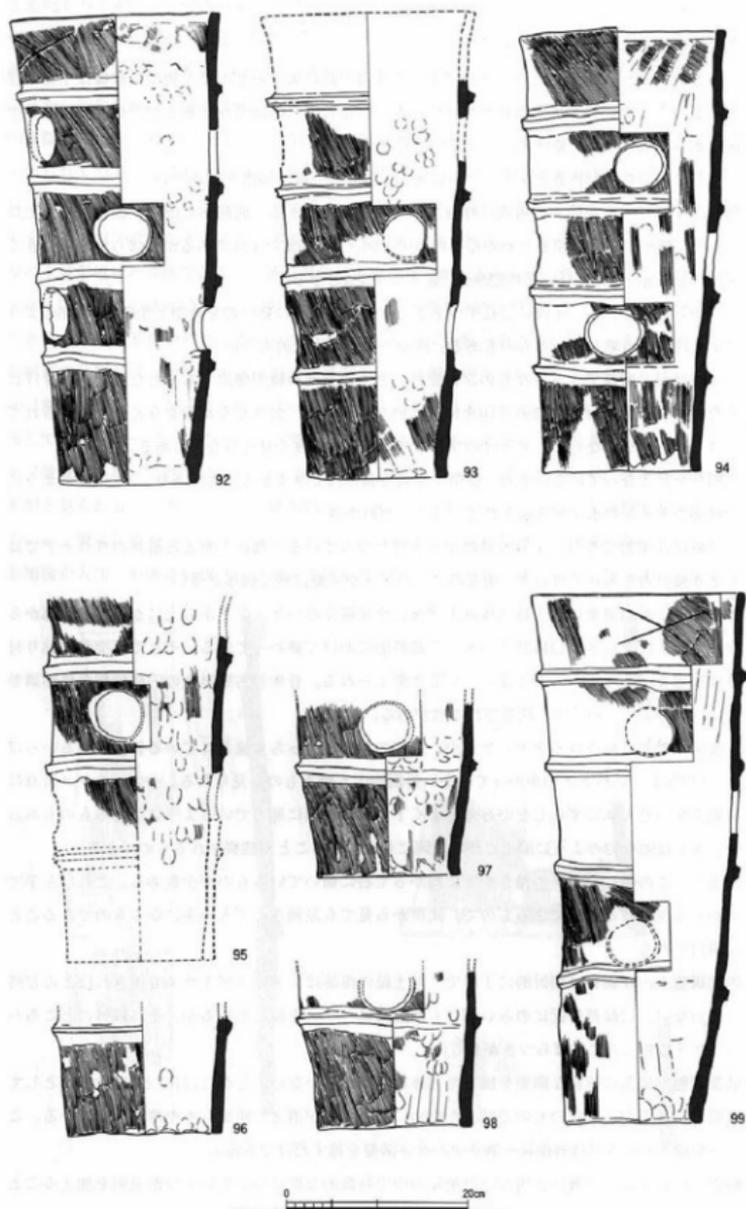


Fig. 55 音樂谷古墳 円筒埴輪 (1) 1:6

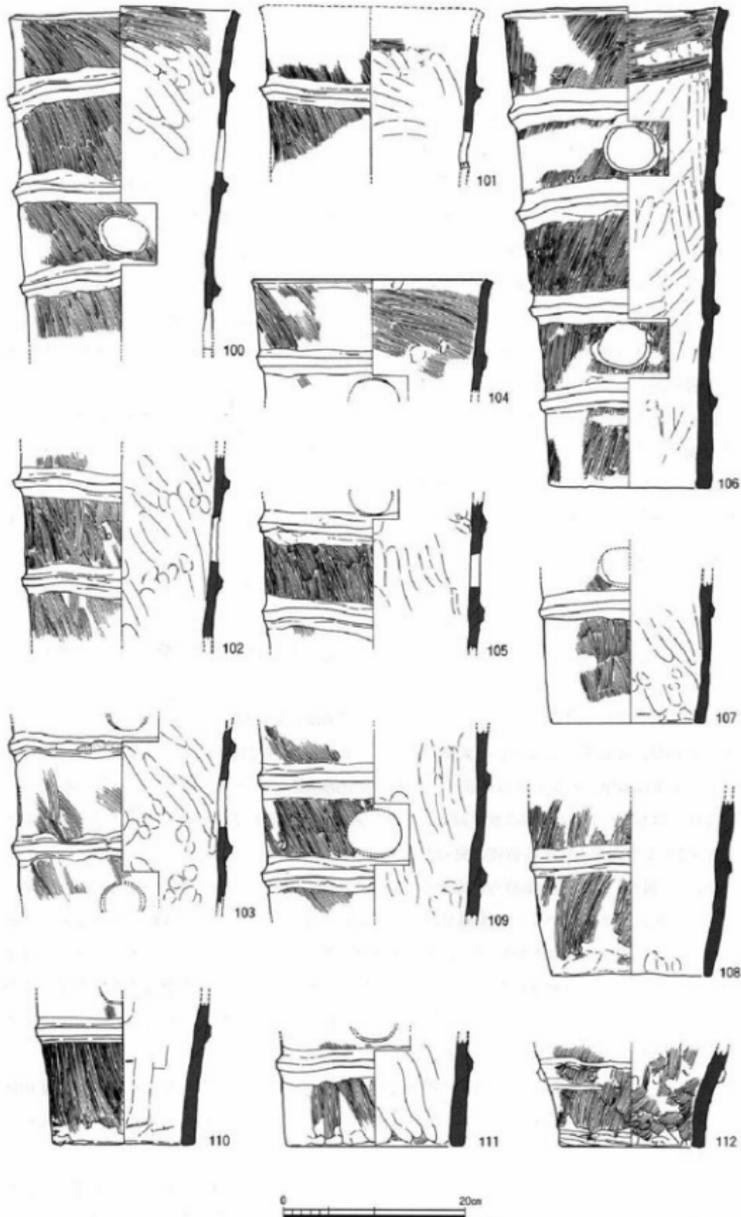


Fig. 56 音楽谷古墳 円筒埴輪 (2) 1:6

円筒埴輪群
1

1群と称する。それは、以下の特徴を共有し、洗練された感がある。目の細かいハケメ (PL. 36-左下) を外面に丁寧に何度も施し、さらに内面にも縦方向のハケメを施す。内面のハケメは縦方向に適宜施されているが、その後のユビによる調整でほとんどが消されている。色調は淡褐色でややピンクないし紫がかかるものもあるが、焼成が堅緻な仕上がりを見せる。胎土に角閃石と見られる黒色粒子が目立って含まれる。突帯は突出の大きなシャープなもので、あまりぶれのない端正な貼り付けがなされている。なお、92に見える×印のヘラ記号は図示したその他の個体には見られないが、同じ群に属すると思われる別の破片にも同様に施されている。大きさは底径15.5cm-17.6cm、口縁径は92と94ともに22.8cm、高さは92が52.8cm、94が50.6cmを計る。

ヘラ記号を重視すると、99は形態が若干異なるが、同じ群に含めることも可能かもしれない。しかし、焼成は甘く、胎土中の黒色粒子が少ない。また、内面には口縁部以外縦方向のハケメがなく、大きさも第1段がかなり高く、全高も60.4cmと高い。突帯の突出度がやや弱いことから別の群としておく。底径は14.9cm、口縁径は23.7cmを計る。

2 群

Fig. 56の100-103が1群について個体数の多いもので、紫褐色-橙褐色を呈し、焼成は良好で堅緻な仕上がりとなっている。これらを2群としよう。突帯も大ぶりて突出度の高いものであるが、突帯の貼り付けはかなりいびつでうねっている。透かしは小ぶりて、ハケメは目の粗いものを使用し、外面タテハケメはかなり斜行し (PL. 36-右下)、内面は口縁部付近のみほぼ水平に近く斜めに施している。100の口径は約26cmを計る。

3 群

104・105は突帯が低くて平らなことが大きな特徴で、明橙褐色の軟質に焼きあがっている。3群とする。104の口縁径は約31.0cmを計り、大きい。

以上の3群以外は1個体あたりの情報が少ないか、あるいは同じ群に属する個体が少ないのでこれ以上の群別呼称は控えたい。

106・108・112が左利き工人の手になる製品で、106は完形に復元した。106は最上段外面に赤色顔料が付着している橙褐色の個体である。下から3段目に透かしをもたないという特徴がある。突帯は重厚。ハケメは目が粗く、比較的規則的に施している。器壁は1.1cm平均で厚い。

これに対して、108は底部に板で抑えたような調整が認められる上、ハケメもあまり規則的でなく、106とは別工人による個体と見られる。

112は上掲のいずれにも認められなかった第1段内面のナメハケメがもっとも大きな特徴である。外面のハケメもかなり不規則で、かつ底面近くまで施そうとする意識が希薄である。そのため、底面から2cmほどの外面には粘土継を作る際に押し当てられた台の木目が付いたままとなっている。下から8cmほどのところに貼り付けられていた外面の突帯は本古墳出土品の中では珍しくはずれている。16.2cmの底径で上開きの器形や調整の特徴はそれが円筒埴輪の中では異質な部類に属し、形象埴輪の一部である可能性も残っている。

107は108と同様、外面ハケメ調整が基底部付近で消されているところからも、底部調整が施されたことが確認できる個体である。突帯は小ぶりて、高さ13cmと高い位置に貼り付けられている。

109-111にも類型化しにくい比較的残りのよいものを掲げた。109は基部、口縁部ともになく、暗褐色で焼成は良好。突帯はやや低い。110は器壁が厚く白褐色のもの。突帯は低い。底径15.4cmを計る。111は第1段部分での器壁が1.5cmを計るもっとも厚手の円筒埴輪で、外面のハケ

メと内面のナデの及ばない調整前の粘土肌が露出しているところが目立つ。突帯は低い。淡褐色で焼成は良好。底径は19.7cmに復元でき、径ももっとも大きい部類に属する。

樹立位置との関係 以上に紹介した円筒埴輪の群別と出土位置とはいかなる関係にあるのだろうか。墳頂出土品を除くと、樹立位置が限定できるものはないのであるが、掘割りや斜面から出土しているものも本来の樹立位置をある程度保っていると考えて、やや詳しく検討したい。

Fig. 28と29に円筒埴輪の番号を付記したように、本古墳からもっとも多く出土している1群の埴輪は、C区とD区の埴輪集中地点で出土した円筒埴輪の大半を占めている。また、C区とD区の埴輪同士が接合した93のような存在がある。99が1群と近いものであると述べたが、それを加えてもよければ、少なくとも墳頂の北側半分の円筒埴輪はすべて一つの工人集団ないし一人の工人によってまかなわれていた可能性が指摘しうる。製作の段階であらかじめ、配置する地点まで決められていたのであろう。

それ以外の類型は、ほとんどが掘割りを中心にA区からの出土であり、A区出土品には墳頂と比べると多様さが目立つ。これは、墳頂に並べる埴輪は裾に並べるもの比べて重要視されていたことを示すのかもしれない。1群に見られる洗練された特徴がその想定を支持する。

これに対して、群別できなかった多くの円筒埴輪が形象埴輪の一群とともに南掘りから出土した。裾にめぐらしたであろう円筒埴輪はあまり重視されていなかったのか、配列の仕方があまり厳格なものでなかったことを示しているのだろうか。

それでも、2群や3群のように比較的量のまとまるものがあり、これらが形象埴輪集中樹立区に付随するものであったかもしれない。それ以外があちこちからの流れ込みであったとすれば音乗谷古墳の円筒埴輪は基本的に群別と樹立位置に相関があったと見られよう。

(2) 須恵器 (Fig. 57~58, PL. 37)

須恵器はその多くが本来石室内に納められたものと考えられるが、それ以外にも墳頂その他、墳丘での祭祀に用いられたものもあったと思われる。そこで、盗掘坑内から出土したものと墳丘から出土したものに分けて図示する。

盗掘坑内出土須恵器 (Fig. 57) 1が有蓋高杯の蓋である。環状に近いつまみがつき、肩には弱く稜がつき口縁端部に面をもつ。内面天井部に同心円状の当て具痕跡がある。口径15.7cm、高さ5.5cmを計る。2もおそらく1と同様有蓋高杯の蓋と見られるが、つまみの有無は不明。外面の稜の下にはっきりと凹縁がめぐり、1よりも箱形の形状であることが知られる。復元口径は14.2cm。3は無蓋高杯の身の部分。外面に2条の突帯がめぐり、その間に櫛状工具による斜め刺突が密に施されている。復元口径は11.2cm。

4~8はすべて杯の身部であるが、4、5以外はいずれも有蓋高杯の身と考えられる。4の蓋杯は口縁部径12.9cm、高さ3.5cm。体部外面は全体の3分の2を削っている。受け部の長さや口縁部の長さ、杯部の浅さなどから他より型式的に新しいことは明らかである。5も細片であるが、4とほぼ同様のものであろう。6~8は基本的に同型式に属する有蓋高杯と見られる。6は残存部端にかろうじて脚部の割がれた跡が残っているが、長脚ではない可能性もある。

外面の削りの範囲は3分の2、立ち上がりは外反気味で、端面を丸く取る。形態的には陶器のTK10型式期の特徴を有するが、6の口径は10cmに満たず、7は口径9.2cm、8は8.6cmとい

1群は
墳頂用

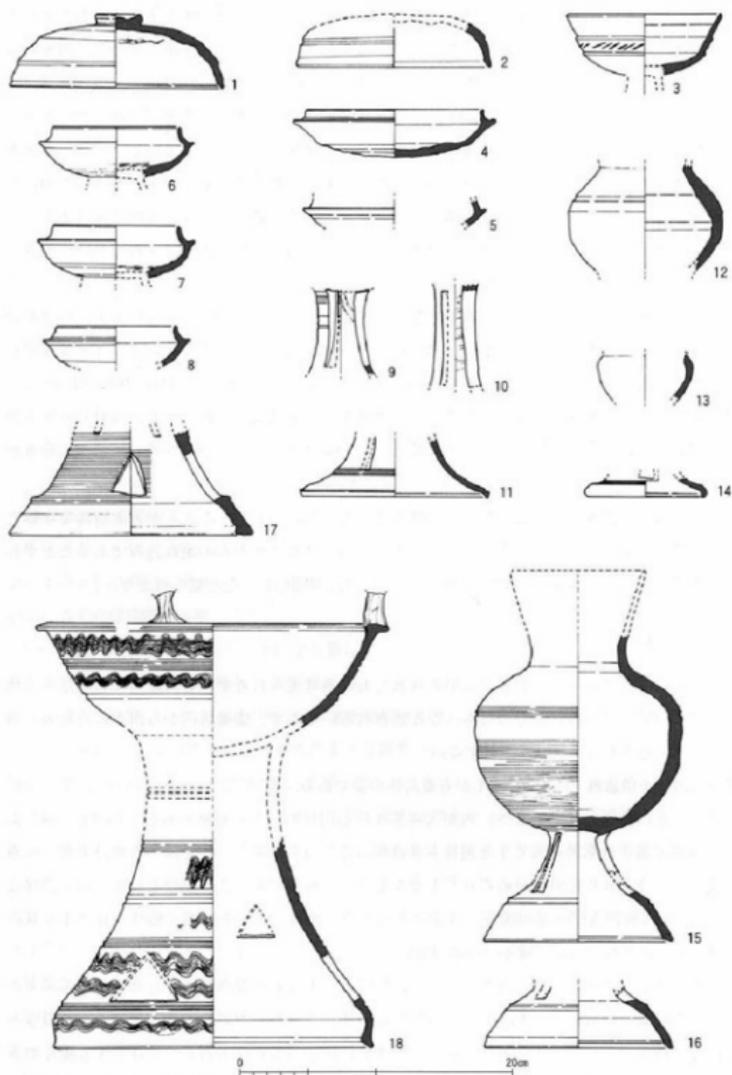


Fig. 57 音樂谷古墳 須惠器 (1) 1:4

ずれも小さい。6、7の杯部内面には当て具痕が見られる。

9～11が高杯胴部である。9、10はともに2段3方向透かしの脚部の上部であるが、明らかに型式学的に先後関係にあるものである。9には残存する範囲で2条一組の沈線が2段にめぐり、10にはそれがない。10の内面には紋目目が顕著に認められる。以上の特徴から9がTK10、10がTK43型式と見られる。おそらく9に対応する11は器壁が薄く、下段の透かしが残るもので、透かしの下縁に接して2条の沈線がめぐっている。脚端部は外側に面をもって、接地部分が下方に引き出されている。

12は球形の胴部をもつ壺の破片であるが、全形は窺い知れない。胴部上半の器壁がとくに厚く、肩部に沈線が1条めぐり、胴部最大径は11.4cmである。

13は胴部最大径7.0cmの小型で薄手の壺形態の破片であるが、これも全形はわからない。また、14も器種不明で長方形ないし三角形の透かしが入る小型の脚部の破片である。端部は丸く折り曲げ、脚部外面にはカキメが見られる。底径9.0cm。

15は台付壺。台部は胴部との接合部分が細くぐびれ、そこから大きく広がりながら踏ん張る。上半に3方向の長方形透かしがあげられ、透かしの下で屈曲するところに沈線が1条めぐり、胴部はやや張る肩部に沈線が2条めぐり、下半はカキメがよく残る。口頸部はほとんど残っておらず、有蓋か無蓋かは不明。脚部の高さ8.3cm、復元全高28cm、胴部最大径15.2cmである。16は15とほぼ同形の破片である。上端に長方形透かしが一部残る。底径14.0cmを計る。

17は上端にわずかに長方形透かしの下辺が残っており、2段透かしの台部であることが知られる。器壁は10.9cmと厚く、脚端部は面をもって広がっている。下段の透かしは三角形で、上段ともに4方向で、それらを千鳥に配置している。三角形透かしの下で脚部は一度屈曲するが、その直下に沈線が1条めぐり、この屈曲部より上には外面にカキメをよく残している。底径18.0cmである。

18は同一個体に属するいくつかの破片から復元的に図化した装飾付器台である。いわゆる高杯形の器台で、身部と脚部からなる。鉢形の身部の口縁端部を水平に拡張し、そこに偶像を基部を介して貼り付けるようにしてある。ひとつの基部しか残っておらず、偶像本体の形は知りえない。表面は指で整えている。

装飾付器台

身部は外面に上から2条、1条の沈線を施し、その間に波状文をめぐらせる。上段の波状文はかなり重複するように2重にめぐらせたものであるのに対して、下段は1重で済ませている。脚部はかなりのびて長くなった段階のものであり、端部近くにいたってほぼ直立するように踏ん張っている。脚端部は面をもつが、歪んだのか水平な接地面を形成していない。残存破片から推定して、おそらく図のように沈線によって6段に分割される形態であったと思われる。分割の沈線はいちばん下のものを除き、基本的に2条1組となっている。各区分には波状文を1ないし2周回し、その後三角形の3方向透かしを千鳥に配している。底径23.7cm、口縁径26.1cm、復元全高26.5cmである。

増丘出土須恵器 (Fig. 58) 19は蓋杯の蓋の破片。天井部は丸みもち、稜をもたず、口縁端部も丸く収めるだけである。先の4、5に対応する型式とみなせる。復元径14.8cm。20は蓋杯か高杯の身部の破片。立ち上がりは低く、復元される径も10.4cmとかなり小さい。21はナデで仕上げられた細頸の壺である。全体を押し測ることができないが、特異な器形のものと思われる。

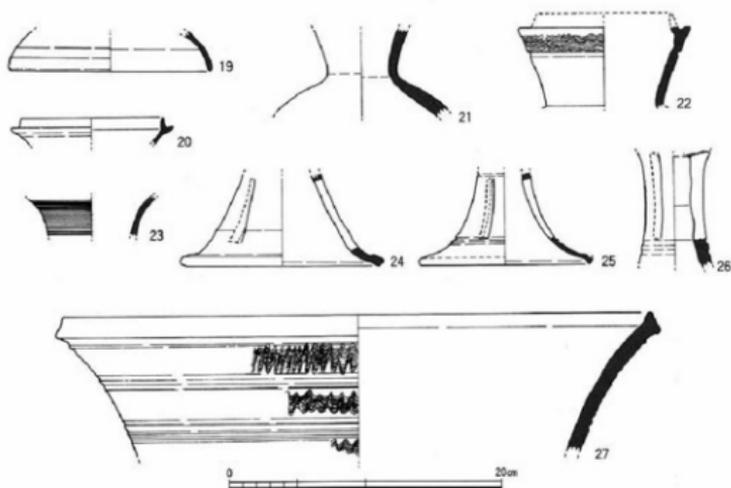


Fig. 58 音楽谷古墳 須恵器 (2) 1:4

22は有蓋台付壺の口頸部の破片である。下端は壺胴部との接点にあたる。口縁端部は欠損しているが、蓋受け部から立ち上がりがわずかに分岐していることがわかる。外面は上方に沈線を1条めぐらし、それより上に振幅の少ない波状文を1周めぐらしている。蓋受け部での径12.8cmを計る。

23は甕の頸部の破片と見られ、外面にカキメが残る黒褐色の硬質の破片である。TK10型式と見られる。24~26は高杯の脚である。24は器壁が厚く、裾広がりの脚部外面は下端から2.8cmのところで一度屈曲している。透かしは2段3方向の長方形透かしと思われるが、下段しか残っていない。復元底径14.2cm。25はFig. 57-11とほとんど同形に復元されるもので、3方向2段透かしのうち、下段の透かしが残っている。透かしの上下に沈線による区画がめぐる。復元径12.5cm。26は上段の透かし部分が残っている破片で下段透かしとの間に2条の沈線がめぐる。24がTK10、25・26がTK43型式とみなせる。27は甕の口縁である。外面を1条ないし2条の沈線で区画した中に、波状文を細かく施している。復元口径43.2cmである。

以上の須恵器はその多くが本来石室内に副葬されていたものと考えよう。ただし、27の大甕をはじめ、いくつかは墳丘頂部や裾部などに置かれていたものも含まれていると考えられ、とくに埋葬施設盗掘坑内から出土しているものの中には、もともと墳頂で用いられていたものが、盗掘によって落ち込んだものもあった可能性がある。また、TK10とTK43の新旧型式の共存も注意が必要である。

(3) 金属製品・管玉 (Fig. 59・60, PL. 38)

副葬品のうち金属製品としては、鉄製武器と鉄製工具、そして金銅装馬具がある。Fig. 59には鉄製武器と工具を、そしてFig. 60には金銅装馬具とその関係の遺物を載せてある。

鉄鏃は大半が断片化しており、さらに錆化により原形がわかりにくくなってしたが、接合とX線撮影などにより概報作成時に比べいくらかは形状が知られるようになった。鏃身部の残っ

新旧型式の
共存

鉄 鏃

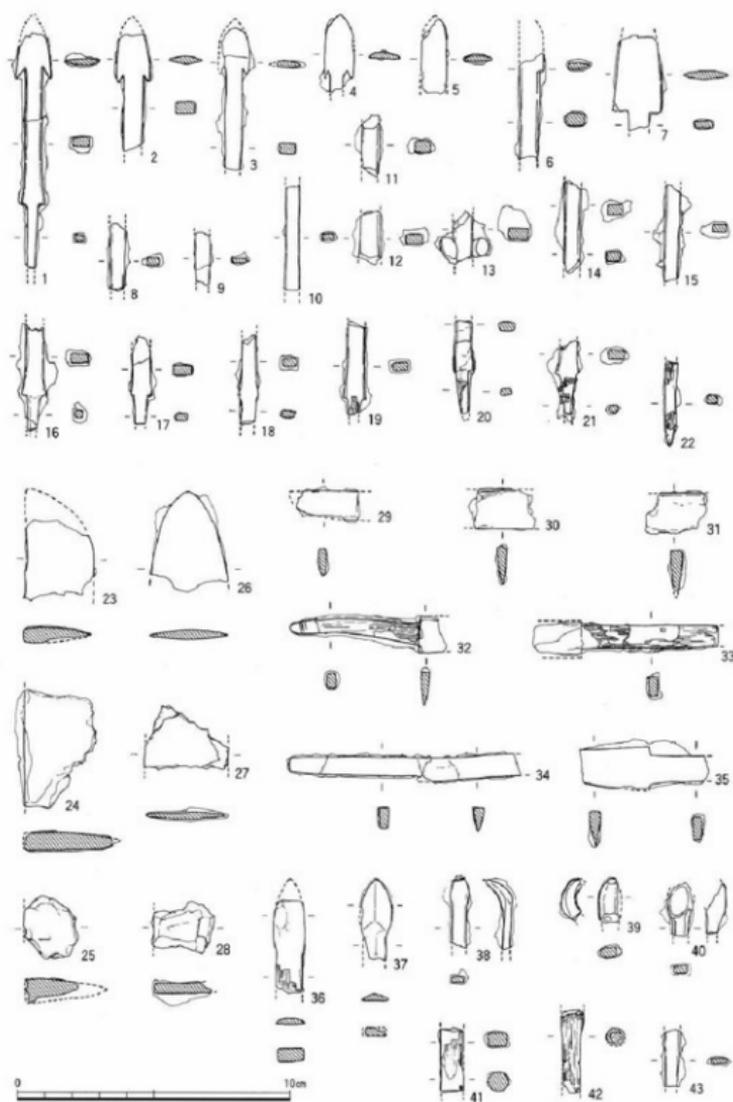


Fig. 59 音乗谷古墳 鉄製品 1 : 2

ているものを見ると、7の1点を除いて細根式の長頸鎌であることがわかる。その中でも左右両側に逆刺のつく柳葉形の長頸鎌がもっとも多く、1点のみ刀子形の鎌身をもつものがある。柳葉形のうち、1が唯一頭部の長さが知られるもので、5.4cmを計る。また、鎌身部の長さは先端から逆刺の先までで2.4cm程度を計る。5については1～4と形状が異なることは知られるが、逆刺も含め全体を予測できない。これらの頭部の断面は長方形である。それらに比べると平根式の7は頭部の断面がより平たく作られていることがわかる。7は鎌身部下端がまっすぐで逆刺はつかない。それでも、頭部は長頸鎌と同様な形態に作られていたであろうと思われる。

8～15は頭部の中間部分の破片と思われるが、中には工具の柄の破片が含まれているかもしれない。9・10は薄い作りであるが、4の鎌身とともに出土しており、これらは本来同一個体だったかもしれない。

16～22の7本が頭部から基部にかけての破片である。いずれも関はやや外に張り出し、直角の段がつくものである。基部の断面は隅丸方形であるが、末端に近づくにつれて円形になる。19～22には矢柄の木質が一部基部の上に残っており、21はその上を巻いていたであろう樹皮もわずかに残っている。

22は16～21のいずれとも接合せず、1をあわせて基部から鉄鎌は最低8本あったことになる。

23～28が大型の刀剣類の断片である。そのうち23～25は明らかに大刀の身の破片と認定できる。これに対して、26と27は剣の破片と思われ、大刀に比べて刃先が薄いことが知られる。28は角張った一端が残る厚みのある破片で、大刀や剣の柄の部分ではなかろうか。

29～35が小刀、ないし刀子の各部の破片である。29～31は刃の部分で、29のような小型のものそうでないものとに分かれる。32～35の中で34がその小型の刃をもつもので、脊側には関がつかない。柄部分の長さは5.0cm、幅0.7cm、刃の幅は0.8cmである。これ以外は33が多少不鮮明であるが、いずれも脊側に段のつく型式と見られる。32は柄の形が現状では湾曲しているが、

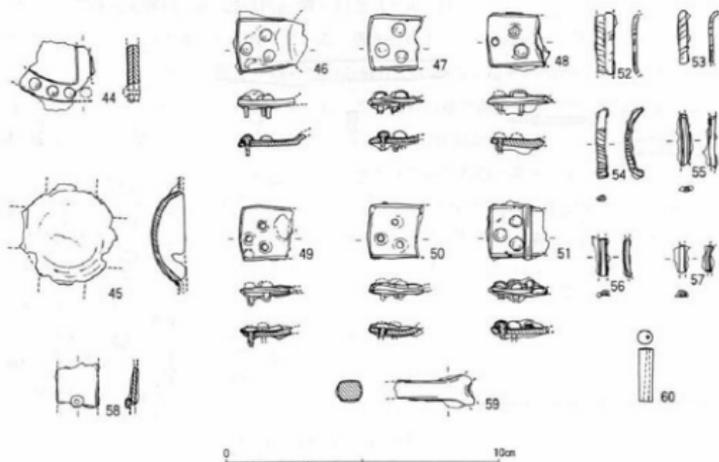


Fig. 60 音楽谷古墳 馬具・管玉 1:2

その上に残る柄の木目がそれにかかりなく平行に走っているので、本来の形状を留めていると考えてよい。なお、柄尻に近い部分に有機質のものを巻いたような痕跡を残している。柄の幅は先細りで刃先の幅は1.4cmである。33も同様に柄の木質が付着しているもので、柄部分の長さは5.0cm以上、柄の幅は0.8cmを計る。

36～43が鉈を主とする工具類である。36と37が大型、そして38～40が小型の鉈と見られるが、認定に誤りがある可能性が残る。36は刃の近くまで木質が残っている。37は他のものに比べて刃の形状がある程度明瞭に読み取れる。小型の3点はいずれも刃部が鉤状にめくれるもののようにである。

41～43は鉄製工具の柄と思われる。41は上側が断面長方形、下側ほど円形になっていて、周囲に木質が付着している。42も同様に木質が付着しているが、断面は細い。43は平たい断面形で整であろうか。

44は鉄地金鋼張の十字文楕円形鏡板の破片と見られる。下側の縁と十字文の連接する部分で、鉄製の縁金具と十字文を楕円形の鉄の地板に重ねた上から1枚の金鋼板で覆う型式である。縁金具の上には現状で3個の鉋が密に打っており、鉋の頭には銀を被せてあるように観察される。これ以外の鏡板の破片やセットになる杏葉の破片はまったく採集されていない。

45が床面礫床上でいくつかの脚の破片とともに出土した辻金具の中心部分の破片である。半球形の伏鉢形を呈し、鉄地金鋼張で作られている。四方に脚がつくものであるが、いずれもはずれている。伏鉢の高さ1.2cm、直径3.5cmである。46～51が2のような辻金具につく脚の破片である。いずれも3本ずつ鉋を打っており、それとその内側の資金具で三繋を留める仕組みになっている。脚の形状は46や51のように外側に広がるものと47や50のようにほぼ矩形のものがあるが、その差は明らかでない。鉋はそれぞれ3本ずつあり、よく見ると、どれも同じようにいびつな配置であけられている。同工であることが示されている。鉋頭の取れたものも多いが、残っているものには銀被せの状態がわかるものがある。また、51は唯一資金具が1本だけ錆着している。残存具合からすると最低2個体は辻金具があったと見られよう。

52～57にその資金具を図示したが、そのうち52～54のみ銀が被せられたまま残っていた。銀の表面には縄目状の凹凸が付けられていて、52からそれが被杉状に見えるように2本一組で使用されていたことがわかる。55～57がその銀被せがはずれた鉄の芯部分の破片で、51に遺存しているものと共通である。

58は幅1.5cmの細長い鉄板に鉋が打ってある破片。馬具かどうかかわからないが、吊金具の一種と見られる。金鋼装、銀張は確認できない。59は断面円形に近い鉄棒のいっぽうの端が環状に二股になっているもの。轡か引手の一部と見られる。

60は碧玉製の管玉である。濃緑色で、表面は平滑である。長さ2cm、径0.5cmを計る。穿孔は片面からおこなっており、裏側での孔の位置はかなり端に寄っている。

参考文献

- 高橋克壽1983「西都原171号墳の埴輪」『宮崎県史研究』第7号
 田辺昭三1966『陶邑古窯址群1』研究論集第10号 平安学園考古学クラブ
 奈良県教育委員会1973『奈良山 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』

工 具

馬 具

管 玉

第IV章 第13・15号地点

1 調査の経過

A 調査の概要 (Fig.1・61)

丘陵東側 上人ヶ平遺跡や市坂瓦窯跡などのある京都府木津町側の丘陵と鹿川を挟んで西側に対峙する奈良山丘陵東端に第13・15号地点は位置する。そのうち、第13号地点と第15号地点に古墳の残存が確認された。それぞれ奈良山第13号地点古墳、奈良山第15号地点古墳と呼ぶこととする。ただし、第13号地点古墳については後述するように墳丘は残っておらず、埴輪列からの推定であるため、古墳ではなく特殊な遺構である可能性も残っている。

両遺跡とも水田の広がる面から1段上がったところにあり、海拔もほぼ同様である。1段上がると地形はしばらく緩やかな傾斜が続くが、標高53m付近から背後の丘陵が急に上がって80m以上にまで向かう。なお、両地点のほぼ中間の標高68m付近の傾斜地にも古墳状地形が読み取れるが、調査はされていない。立地から見ておそらく7世紀に下る古墳であろう。

両地点のうち、第15号地点は昭和39年度の土取りの際に、Fig. 64-1～4の須恵器が出土しており、古墳の存在が前もって知られていた地点である。1972年度にはこれら両地点の調査は平行して進められたが、第13号地点については1978年度に再度追加調査をおこなった。

第15号地点 1972年度は、まず、第15号地点から調査に着手し、はじめに墳丘の南半について調査をおこない、主体部の残存の有無を確かめた。その後、周溝確認のために幅1.5mの長いトレンチを西と南へ設定した。さらに、墳丘の築成方法を知るために、墳丘の北半にも幅1mのトレンチを設定し、地山と盛土を層位的に調べた。調査面積は60㎡である。

第13号地点 第13号地点は、古墳時代の遺物よりむしろ中世以後の各時代の土器が表土から多く出土したことから調査をおこなうことになった。はじめに南北トレンチを長く設定し、それに直交する短いトレンチを3本設けた。南北トレンチを第1トレンチ、東西のトレンチを南から第2、第3、第4トレンチと呼ぶこととする。遺物は表土の下からはほとんど出土しなくなり、下層では古代の小穴や土坑が見つかったにすぎないが、その後、第1トレンチを北に拡張したところ、円筒埴輪列が2列みつかった。そこで、その延長部分を確かめるべく、東西にトレンチを拡張したが(第5トレンチ)、最初に検出した以上には遺構をほとんど確認できなかった。

1978年度には第1トレンチの3m東に平行して幅4m、長さ36mの第6トレンチをあけた。これは既にもつけていた埴輪列の北側にある落ちが周溝にあたり、墳丘本体は埴輪列の南にあることを予測したからである。それ以外に、第6トレンチの東に幅3m、長さ9mと10mのトレンチを2本設けて埴輪列と古墳の遺構の確認を試みた。しかし、埴輪列の遺存状態も悪く、古墳の痕跡も確認できなかった。調査面積は1972年度が125㎡、1978年度が200㎡である。

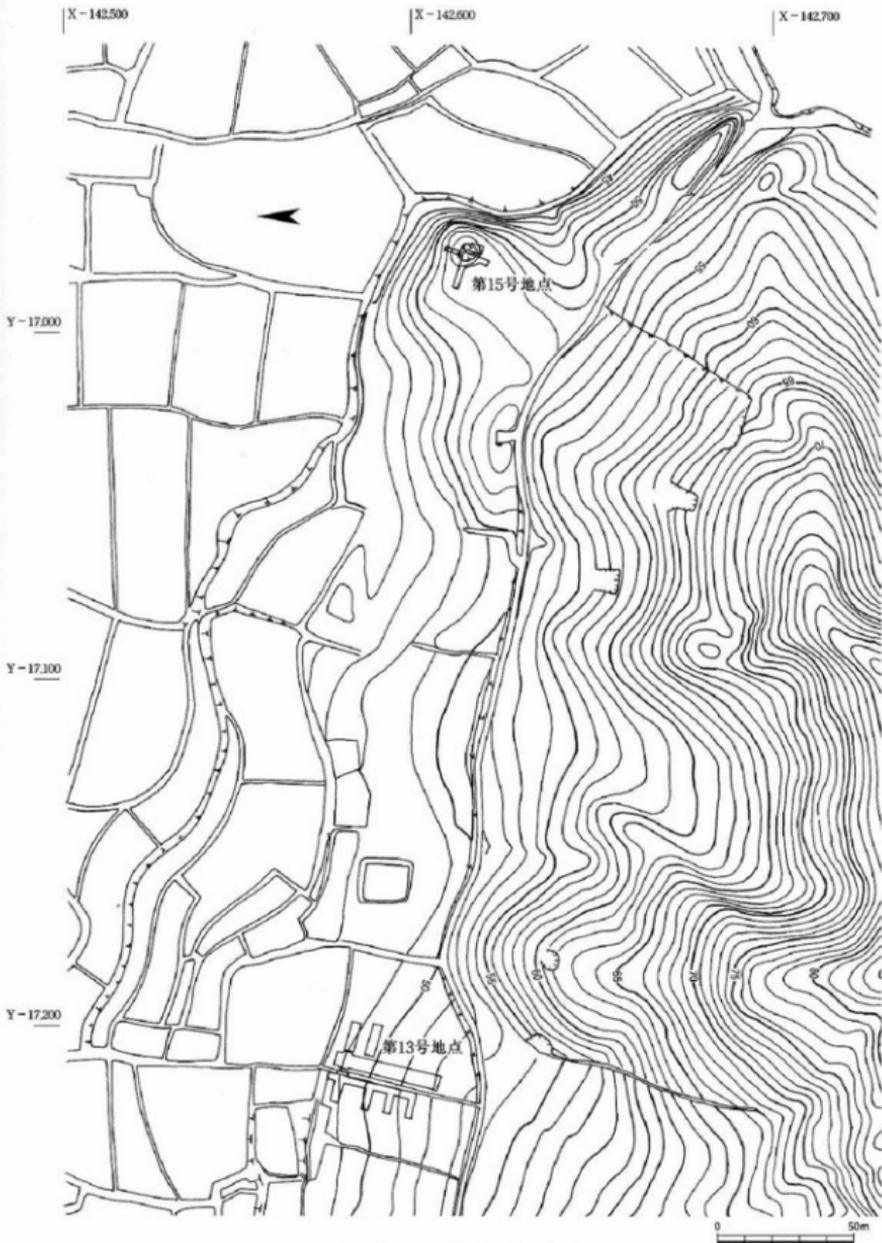


Fig. 61 第13・15号地点付近地形図 1:2000

B 調査日誌

1972年9月25日(月)

バイパス西の古墳、調査開始(第15号地点)。墳丘の九割は土取りのため削平されており、かろうじて北側墳裾部が60cm程度残る。南半について調査をおこなう。まず甕1点がほぼ完形で出土。また、墳丘西側の周溝付近では表土中より鉄斧1点が出土した。その他、埴輪片10数点、土師器高杯の脚部片2点などがある。

9月26日(火)

昨日の調査で主体部が残存しないことが判明した。周溝検出のためトレンチを南と西に拡張。深さ約20cm、幅約1mの周溝とみるべき遺構を検出できた。鉄釘1点が出土。明日の写真撮影の準備をし、午前中で作業を終了した。

午後からは、さらに西にある遺物散布地の調査にかかる(第13号地点)。はじめに芋畑の表土に散布する遺物を採集。南北トレンチ(第1トレンチ)を設定し、さらに東西方向のトレンチを3本設定。南から北にトレンチ番号をふる。

表土下では遺物はほとんど出土しなくなる。

9月27日(水)

午前中は第15号地点の写真撮影を、午後は13号地点の調査をおこなう。表土下に、遺物を含まない黄色砂質土の層が現われ、その下に黒っぽい暗黄色土層がある。表土からは、銅鏝・摺鉢・灯明風風の小形皿など出土。

9月28日(木)

第2トレンチで浅い土坑状遺構を検出。遺物は須恵器蓋(平安初め頃か?)が出土したのみ。第3トレンチでは穴を1基検出、遺物なし。第1トレンチは、黄色砂質土、暗黄色砂質土の下でガラスの層が出る。部長より、トレンチを北の端まで延ばす提案があり、交渉することとなった。

9月29日(金)

トレンチを北に拡張する。拡張した部分の北端から3m程の位置に、東西に並ぶ円筒埴輪を検出。埴輪は2列に並んでおり、北側3本、南側5本が残存していた。さらにトレンチを西側にも延ばす。

1979年1月13日～1月26日

第13号地点200㎡追加調査

2 第15号地点の調査

A 古墳の立地 (Fig. 61)

奈良山丘陵の東端は、鹿川による開析によってL字形に削り残された形で平野部に張り出している。そのもっとも東寄りのところから約100m西に丘陵がわずかに北東へ張り出したところがある。古墳はまさにその上の突端に位置し、北と東の2面に加えて西側も丘陵が内側へ入り込んでいることによって、周囲から際立って見える格好になっている。

このように自然地形を大きく利用して造られた古墳であることがわかるが、背面側の地形の改変については、標高52mの等高線によって囲われた平坦面がしばらく続くように、調査前の測量ではまったくわからなくなっていた。古墳の載る丘陵は北側の水田面から比高数mある。

調査前にすでに墳丘の大半が土取りにより失われており、北西端にわずかにもとの墳丘を残す箇所を確認できそうなどころがあったにすぎない。その範囲では等高線は円形を描いており、径10m前後の円墳と推定された。

なお、昭和39年度に土取りをした際、当地点からFig. 64の1～4の須恵器が出土したとされるが、正確な位置はわからない。

自然地形を
利用

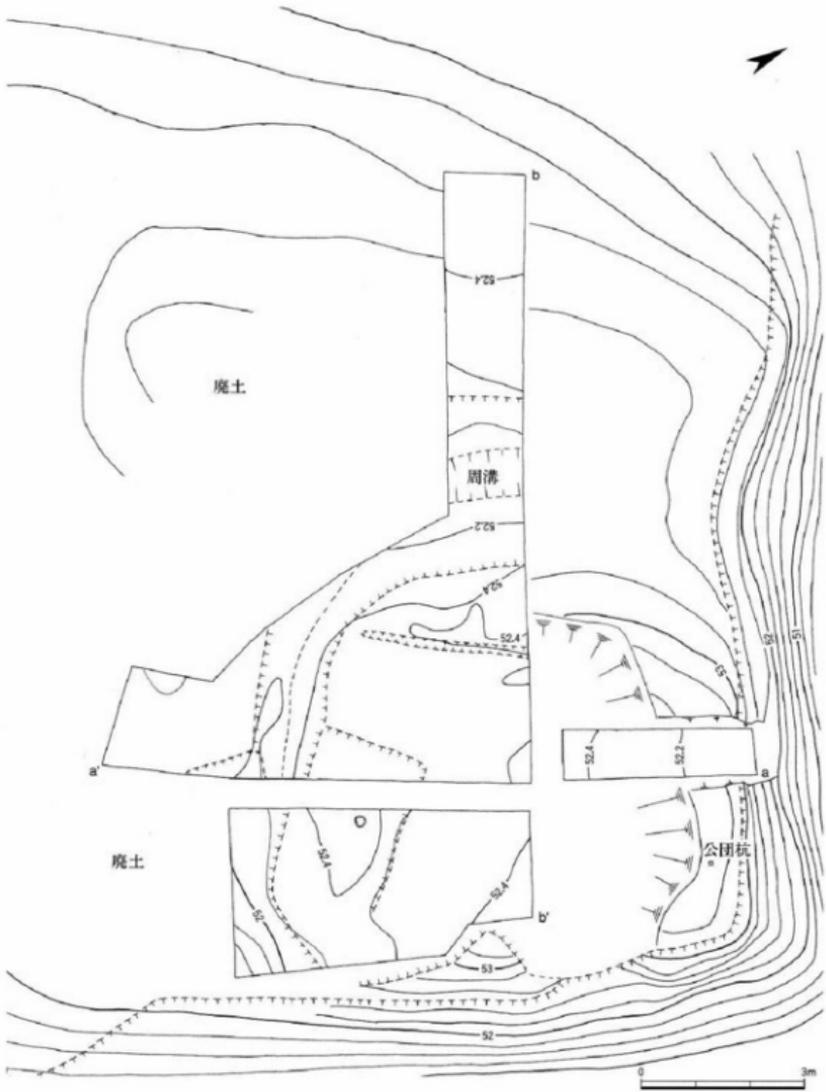


Fig. 62 第15号地点古墳 検出遺構 1:100

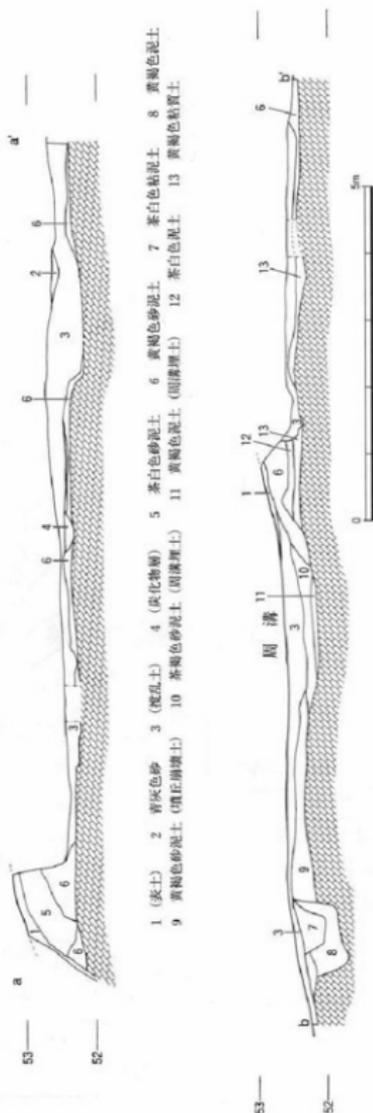


Fig. 63 第15号地点古墳 墳丘断面図 1:80

B 遺構 (Fig. 62・63, PL. 39)

調査の結果、古墳に関係する顕著な遺構は周溝だけであった。西側の細長いトレンチでは幅約3mで深さ約0.2mの周溝埋土がかろうじて確認された。この周溝は南側ではさらに痕跡的になり、周溝埋土は残っていない。それでも攪乱が深く入り込んだ部分がもとの周溝であったところと思われる。なお、西に長く延ばしたトレンチの西端で墳丘崩壊土を切る新しい時期の遺構を見つけている。

墳丘は旧地表を削平して、13層の黄褐色粘質土や12層の茶白色粘土を積んでいる。盛土がもっとも残っているところは墳丘の北東部で、高さにして1mほどであった。盛土でもっとも厚く残っているのが6層の黄褐色砂泥土で、周溝の外側にも一定の厚さで同じ土質の土が堆積しているのは大きく動かされたことを示す。北東部にあるのが墳丘残存部であろう。

残存墳丘から推定される主体部の位置には大きな攪乱が入っており、明確な遺構は何一つ残ってなかった。ただし、想定墳丘の中心付近で表土中から甕 (Fig. 64-5) を1点検出した。

墳丘の表土から円筒埴輪が十数片、土師器の高杯の破片が出土しており、西側周溝に近い表土から鉄斧1点を採取した。また、鉄釘もこの周溝部分で出土した。どれも原位置にない。

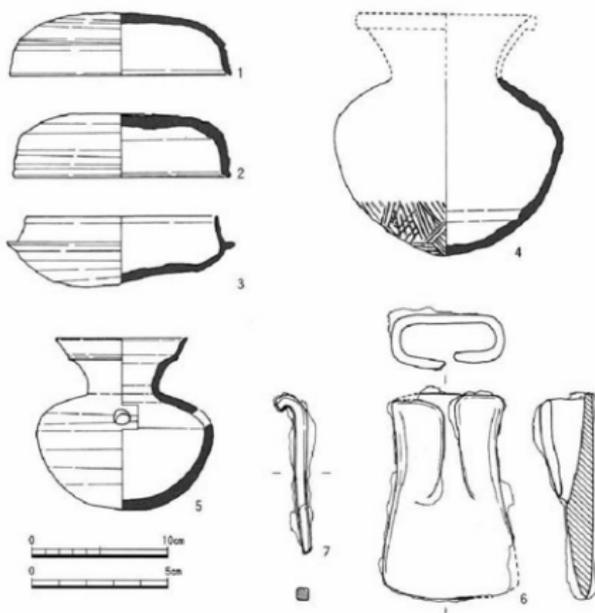


Fig. 64 第15号地点 出土遺物 (須恵器 1:4 鉄製品 1:2)

C 出土遺物 (Fig. 64, PL. 42-5・6)

1～4に昭和39年度の土取りで出土したとされる須恵器を再掲載した。

採集品

1と2が口径の大きな杯蓋で、ともに径16.2cmを計る。天井部はやや扁平で、天井部と口縁部とを分ける稜線は失われ、凹線でその境を表現する。端面は内側に傾斜し、浅くくぼむ。

3が対応する蓋杯、口径14.0cmを計る。口縁端部は丸く収め、杯部底面はやや尖った感がある。4が壺で、口縁部は欠損している。胴部最大径をやや上に寄った位置にもち、16.8cmを計る。丸底で底部外面にタタキを明瞭に留める。

5が胴部が大きく張った甗で、本調査で出土したものである。口径9.8cm、胴部最大径13.1cm、高さ12.9cmを計る。胴部に比べて小さな二重口縁を有する。二重口縁屈曲部外面には1条の沈線をめぐらし、口縁端部はやや平らな面をもつ。口縁部および胴部ともに外面に波状文等の文様やカキメをもたない。胴部外面は丁寧なナデで整えられていて、胴部肩寄りに孔をあける。古墳時代の甗には大型と小型の2種があり、前者は5世紀代に限られる形式である。本例は形態やその大きさから大型に属するものと考えられる。

出土品

6は鉄斧である。鍛造品で、上半部両側を折り返して袋穂部を形成している。長さ7.7cm、袋穂部幅4.2cmである。

7が鉄釘で上端を丸く折り返しただけで、錆化による変形が著しい。全長は6.0cm。断面は方形である。古墳にともなうものかどうか判断しかねる。

D 古墳の復元と年代

西側周溝の内側裾を墳端とし、丘陵の北と東の残存部いっばいを墳丘範囲に含めた場合、径10mほどの円墳となる。墳丘南側の攪乱がひどいけれども、その攪乱が周溝の位置を踏襲したであろうとする見解が正しければ、この古墳に造り出しや前方部のような張り出し施設が付く余地はない。いっぽう、丘陵外側に面した斜面側は円墳というより方墳を思わせるほど、明らかに古墳築造後のカットが進行していることがわかる。したがって、本来、丘陵がどこまで延びていたかはもはや明らかにできないが、周溝がそこにもめぐるほどの余地は当初からなかったものと思われる。斜面側は削り出す程度の成形であったのだろう。なお、この程度の規模なら段築をもたない円墳と考えて誤りない。葺石も本来なかったものと言える。

径 10 m の
円 墳

埋葬施設に関しては痕跡すら残っていなかったが、竪穴系の簡単な構造のものであったと思われる。木棺直葬などの石材を使用しない埋葬施設であったのだろう。鉄斧はその副葬品と見られるが、出土した鉄釘が棺に用いられていたかどうかは怪しい。製品としては古墳時代のものであっても良さそうだが、出土状況はむしろ混入の可能性を考えさせる。

ところで、今回出土した甕についても厳密にいうと埋葬施設内に副葬されたものとは限らない。須恵器が埋葬施設内に一般的に副葬されるようになるのは、特別な場合を除くと、5世紀後半でも末に近くなってからである。その場合でも竪穴系の埋葬施設の場合、棺内の空間に入れることはなく、棺の近くに置いて埋め戻す形をとることが多く、その場合、通常蓋杯や高杯が選ばれる。こうした一般的傾向を考えると、甕は埋葬施設内での使用に限られず、墳頂などの墳丘上面や裾など外表部分での使用も考えたほうがよいであろう。

この甕の型式は陶邑のTK208～TK23型式に比定できると思われるが、昭和39年に採集された1～4の須恵器はMT15型式の特徴をそろって見せている。つまり、甕とは年代差があると見られる。

第15号地点古墳は先に述べたように竪穴系の簡単な構造の埋葬施設を有していたと考えられるので、追葬による新旧型式の混在は想定しがたい。したがって、複数の埋葬施設があったか、あるいは時を隔ててから再び祭祀が執りおこなわれたことを考えざるをえないであろう。

5世紀後葉
の 築 造

後に述べる第13号地点古墳の時期も5世紀代で収まることからしても、この第15号地点古墳も採集された蓋杯よりも甕の型式を重視して5世紀後葉に築造されたものと見たほうがよい。

3 第13号地点の調査

A 発掘調査の成果 (Fig. 65・66, PL. 40・41)

第15号地点の西250mほどのところに位置する。南から東北に延びる丘陵の末端に位置し、地形は北に向かって緩やかに下降する比較的平坦な地形であったが、北側はすぐに比高約1.5m下の水田耕作面に達する。発掘調査前には耕土中から大量の土器が採取されたため、中世末の遺構が存在することが予期されていた。

包含層遺物

はじめに設定した範囲では第2トレンチの土坑状のくぼみで平安時代初期の須恵器の蓋を検出した程度で、ほかに遺物をともなわない数個の小穴、ないし土坑を地山面でみつけたが、しつかりした顕著な遺構はなかった。

表土ならびに包含層から出土した遺物には、土師器小皿や焙烙の類が多く認められ、とくに南北方向の第1トレンチの北半に多かった。

そこで北に11m拡張してはじめて円筒埴輪列2列を確認したのである。埴輪は地山と見られるバラス混じり暗褐色土上で検出されており、埴輪や須恵器片を含む暗灰褐色土ないし黄褐色砂質土が覆っている。2列の埴輪列の間隔は約1mで、その延長を確かめるために東に拡張し(第5トレンチ)、さらに、畦を残して東に約5mトレンチを拡張した。1972年度では埴輪の遺存度がこれら拡張部では悪かったので、1978年度にはそれらに重複してより東へ長く延びる第8トレンチを設けた。しかし、その範囲では埴輪の破片の集中状態からそこに埴輪が樹立されていたことをかろうじて推察できる程度で、計8本分のみ見つかっただけだった。

円筒埴輪列

この1978年度の埴輪列確認のためのトレンチのさらに南にも平行して長さ10mほどの第7トレンチを設定したが、そこでは何ら遺構は確認できず、硬くしまった地山上面から埴輪片、須恵器片が他よりも多く出土しただけであった。

1978年度の南北トレンチ(第6トレンチ)では、埴輪列の南側2mの地点に1段落ちをみつけただけで、それより南には地形が現地表と平行するように緩やかに上っていくことが確認され、古墳に関連する遺構は何もみつけれなかった。いっぽう、トレンチ北端では1972年度に周溝と考えていた落ち込みが、表土下の砂層から切り込まれていることが判明し、周溝の認識が誤りであったことがわかった。

以上の結果、2列の埴輪列が古墳のどの場所にあたるのかまったく明らかにすることができなかった。ただし、埴輪列は1972年度の検出分を評価すると、どちらかといえば埴輪列の北側に中心をもつ円墳の裾をめぐる埴輪列と見ることが可能である。そうすると、現状の水田面から考えて、古墳は完全に削平されていることが知られた。

墳丘は不明

また、円筒埴輪が2列近接して並ぶこと自体珍しいといわざるをえない。背後に山が迫ってくるような急な斜面地に築かれるような場合、違う段のテラスに並ぶ円筒埴輪列が、背面側ではほとんど同じ高さに接近してくるということもありえるが、本遺跡の場合はそういう状況は復元しがたい。

そこで考えられるのが、2列の間を通路として使うような場合である。しかし、1972年度検

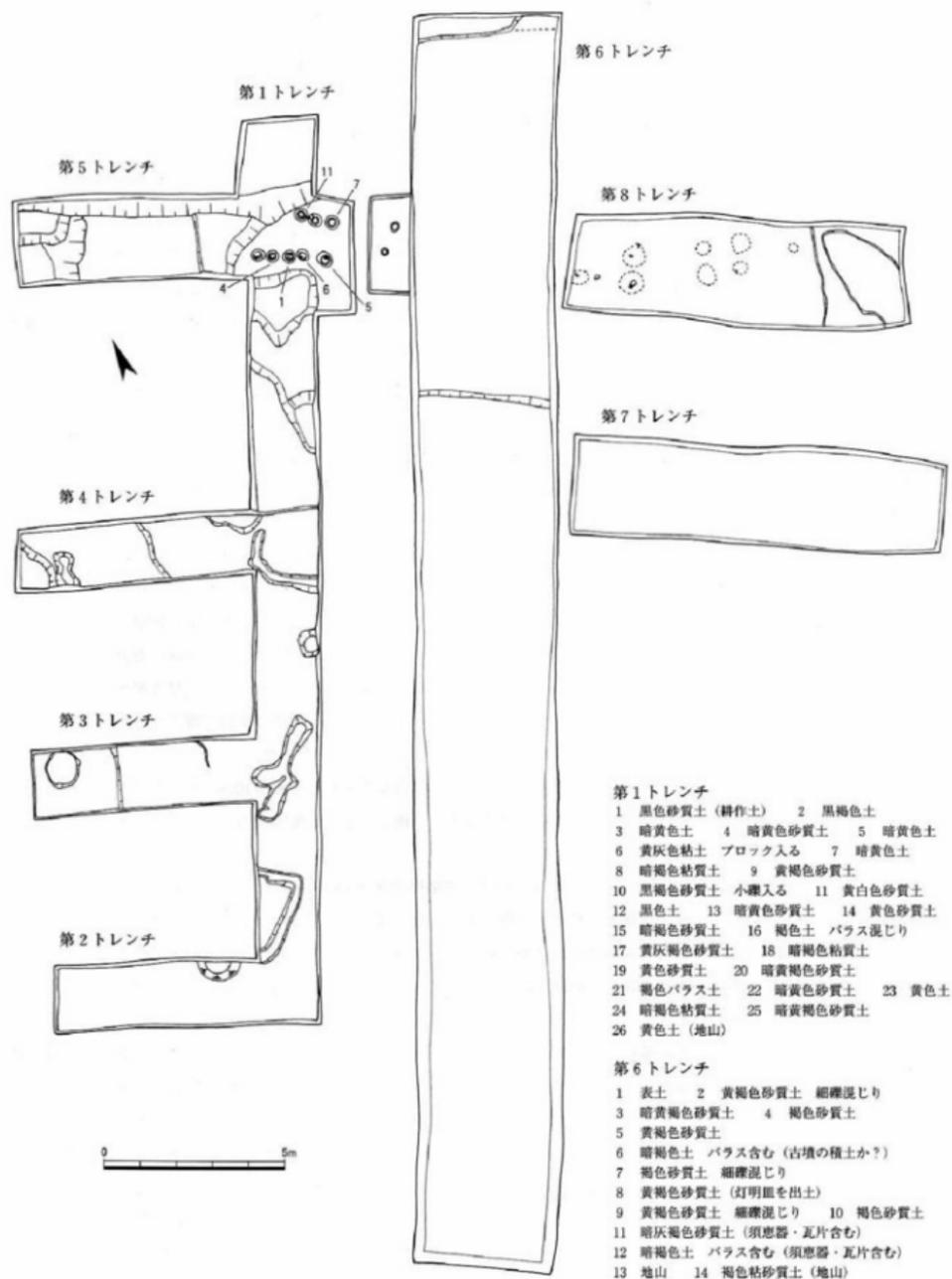
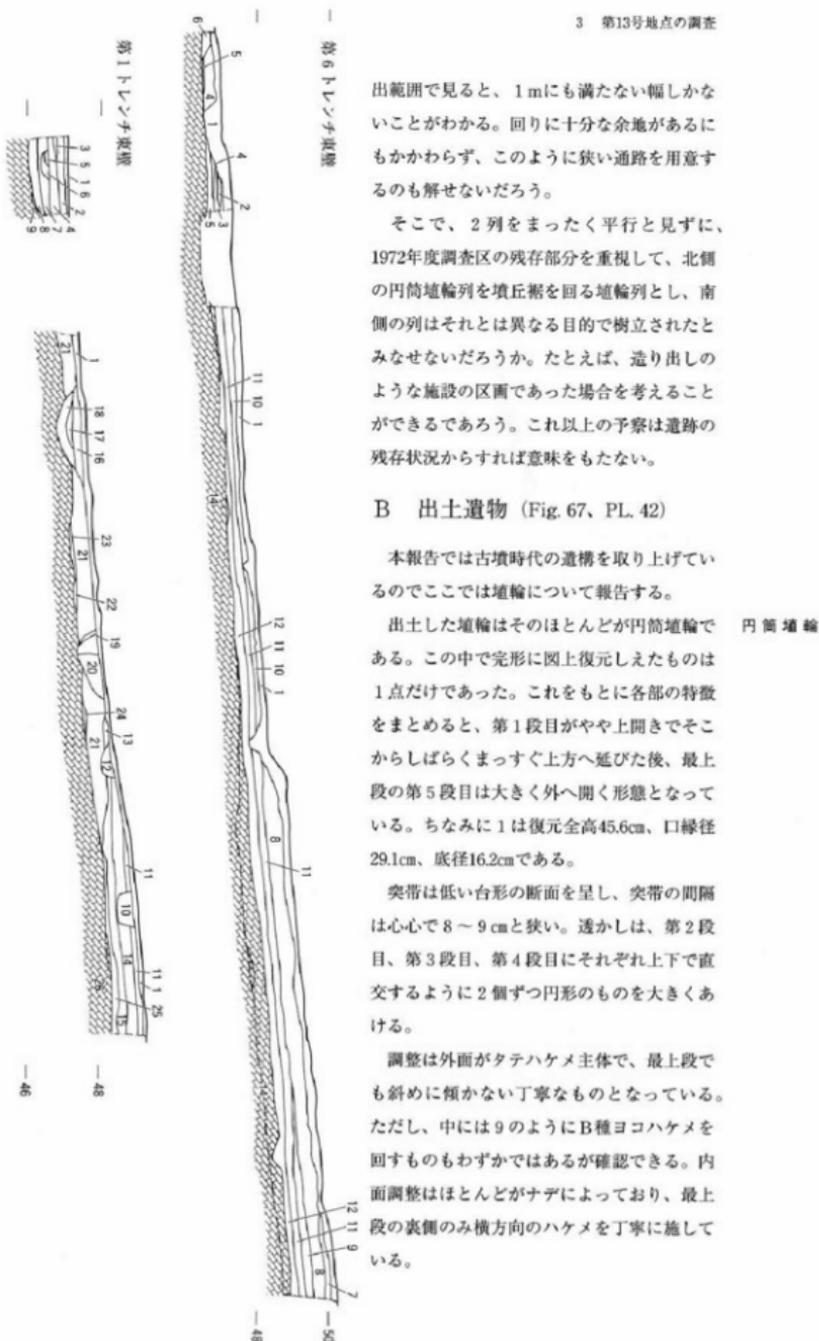


Fig. 65 第13号地点 遺構平面図 1:150



出範囲で見ると、1mにも満たない幅しかないことがわかる。回りに十分な余地があるにもかかわらず、このように狭い通路を用意するのも解せないだろう。

そこで、2列をまったく平行と見ずに、1972年度調査区の残存部分を重視して、北側の円筒埴輪列を埴丘裾を回る埴輪列とし、南側の列はそれとは異なる目的で樹立されたとみなせないだろうか。たとえば、造り出しのような施設の区画であった場合を考えることができるであろう。これ以上の予察は遺跡の残存状況からすれば意味をもたない。

B 出土遺物 (Fig. 67, PL. 42)

本報告では古墳時代の遺構を取り上げているのでここでは埴輪について報告する。

出土した埴輪はそのほとんどが円筒埴輪である。この中で完形に図上復元しえたものは1点だけであった。これをもとに各部の特徴をまとめると、第1段目がやや上開きでそこからしばらくまっすぐ上方へ延びた後、最上段の第5段目は大きく外へ開く形態となっている。ちなみに1は復元全高45.6cm、口縁径29.1cm、底径16.2cmである。

突帯は低い台形の断面を呈し、突帯の間隔は心で8~9cmと狭い。透かしは、第2段目、第3段目、第4段目にそれぞれ上下で直交するように2個ずつ円形のを大きくあける。

調整は外面がタテハケメ主体で、最上段でも斜めに傾かない丁寧なものとなっている。ただし、中には9のようにB種ヨコハケメを回すものもわずかではあるが確認できる。内面調整はほとんどがナデによっており、最上段の裏側のみ横方向のハケメを丁寧に施している。

Fig. 66 第13号地点 南北トレンチ断面図 1:150

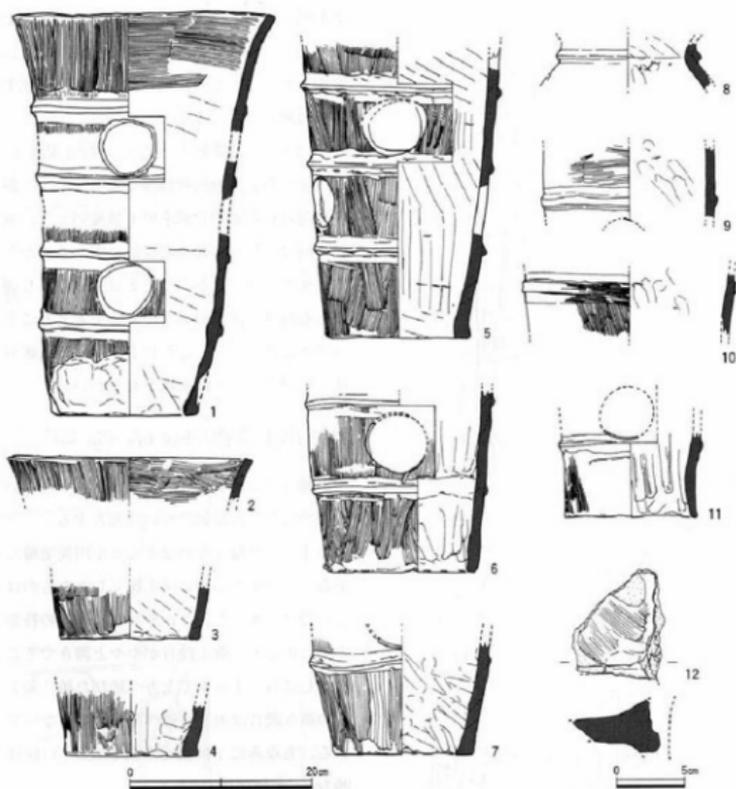


Fig. 67 第13号地点 出土埴輪 (円筒1:6 形象1:4)

確認できる基底部に縦方向のハケメが施されたままになっているものが大半であるが、11に示したもののように第1段を板状の工具を外面に当てて整えている個体がわずかに存在している。11は径が他に比べて小さく、14.7cmである。ハケメの特徴は5世紀末の年代を示す。

形象埴輪

8が朝顔形埴輪の肩部から頸部にかけての破片で、断面が三角形に近い突帯を回している。また、12は形象埴輪の一部である。円筒部から垂直に張り出す板状の破片であるが、表裏にはナメハケメが施されているだけで、文様は認められない。板状部最下端が残っているが、そこがちょうど円筒部に回されていた突帯の位置にあたることから剥離の状態からわかる。形状から盾形埴輪ないし盾持ち人物の一部と考えられよう。

以上の各種埴輪は全体的に赤黒い橙褐色を呈していて、焼成は比較的良好である。黒斑をもつものはない。1の第1段目はおそらく窯結めの際に火がよく回らずに剥落したのではなく、むしろ強い火力ではじけたような感じである。剥落後残った面までよく焼けている。また、1点だけではあるが、灰色で須恵質に焼け上がっている円筒埴輪の破片も存在する。

第V章 考 察

1 石のカラト古墳の築造過程の復元 (Fig. 68)

第II章で報告した発掘調査所見に基づいて、石のカラト古墳の墳丘築造過程について考察してみたい。

まず、墳丘を造る場所を選定し、造成をおこなう。選地は西と北に丘陵を背負い、平坦な面が大きく確保できる場所を探して決定したものと思われる。それでも地形が東と南に緩やかに傾いているため、切土と盛土を同時におこなって場を整える必要があった。

大規模造成

最初の大規模な造成は旧地表が全体になくなるほど広い範囲でなされたことがわかる。墳丘関係のトレンチで旧地表面を残す地点はどこにも確認できなかった。そして、とくに西と北の高い側では大きく地山を削り込んだものと思われ、外周平坦面の範囲はほぼこれで確保された。おそらく、この段階で最外郭のSD05とSD06などは斜面を流れ落ちる雨水をよけるために掘り込まれたのであろう。SD09も同様である。SD04は周辺の水というよりは、SD05の排水をより速くへ逃がすためのものである。

こうして広く墳丘を築く土地を確保した上で、石櫛を構築する部分の整備にとりかかる。石櫛自身を水平に保つため、さらなる掘り込みが墳丘の中心位置で地山面に対しておこなわれたとみられるが、その位置はすでに最外郭の排水溝を回す段階には決められていた。すなわち、墳丘周囲の整備と石櫛の構築が一体のものであった。このことは石のカラト古墳の各施設の位置がきわめて規格的に決められていることから判断されるのだが、それについては後に詳述する。

これに前後して、まず床石南端から約1m南のところから長さ7m前後の暗渠SD01を設ける。そして北にどれほど延びるかわからないが、SD02、SD03も相前後して設けられたと考えられる。

暗渠設置

そして石櫛床石を設置する位置に礎を敷き、礎敷範囲に床石を並べるが相欠きの仕方からは南から置いていったようである。ただし、それでも床石の中心が古墳の中心に合うように計算されていた。この順に床石が並べられたことはコロレールの設置以前の所作であるからさして問題ではない。

続いて、墳丘を載せる面をつくるための整地が広くなされる。これは墳丘裾を越えて最外郭の排水溝内側にまで及び、西側を除く3方でその存在が確認できる。なお、Fig. 68には表せなかったが、墳丘南側ではSD04を越えてさらに南へ整地が及んでおり、正面である南側を広く確保・整備する必要があったことがわかる。墳丘構築面のレベルは、墳丘南で111.2m、西で111.5m、北で111.5m、東で111.05mであり、排水のための勾配を考慮した跡が窺える。

続いて石櫛の構築がおこなわれる。その前に、墓道部分に石材運搬のためのコロレール（コロを並べるための材）を2本しかけるが、これについては先の整地の途中で据えた可能性がある。

石櫛構築

S

112

E

112

- 修土層
- 墳丘盛土 (礎石を抑え、山状)
- 墳丘盛土 (天井石設置後)
- 墳丘盛土 (石敷上)
- 墳丘盛土 (土間部上層)
- 築造明土
- 墳丘北側・扉石蓋込

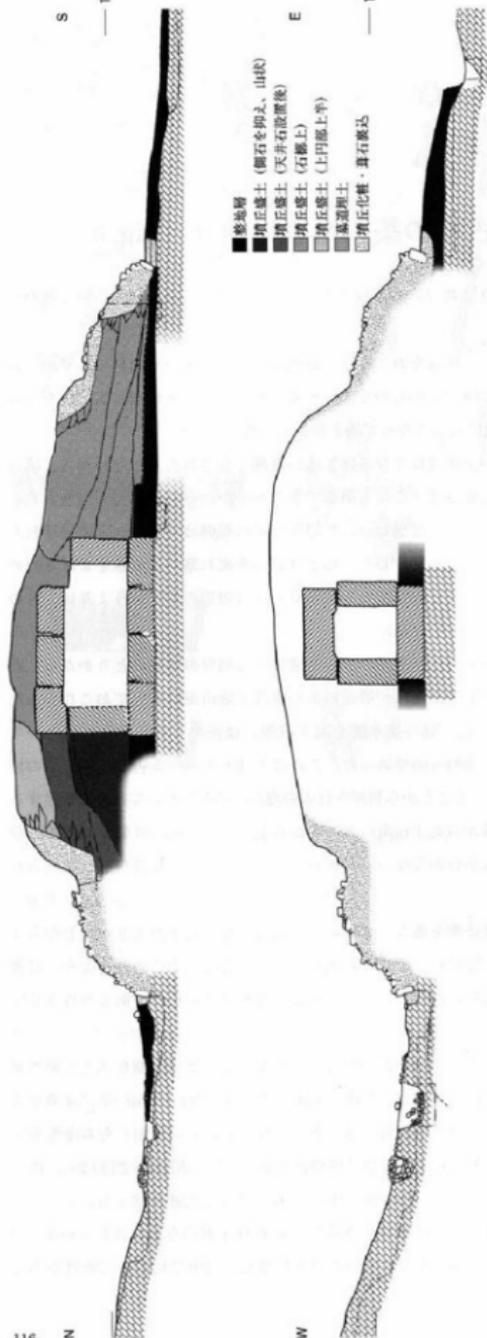


Fig. 68 石のカラト古墳 墳丘築造過程 1:100

掘形はなく、抜き取り跡しか見つけられないからである。床面と整地面が整った段階で、再びコロ(転)を使って石材が搬入され、側壁と奥壁が並べられていく。これが手前からか、奥壁から南へ向かって並べられたかについては定かでない。また、天井石についてはそのまま引き続きかけられたか、ある程度、墳丘を盛った段階でかけられたかは二つの可能性が残されている。

どちらにしても、扉石を除く石柵の構築と平行ないしその直後に墳丘が盛られていったのであるが、それにはFig. 68に見るようにいくつかの工程を踏んだことが復元できる。まず、礎石を抑えるようにして版築面が山状に斜めになるように褐色や灰色の粘土による版築をおこなう。なお、場合によっては、天井石はこの盛土の後で引き上げた可能性もある。なぜなら、その山状のスロープが天井石を引き上げるのに都合がいいからである。

続いて、上円下方墳を意識した盛土を黄褐色や灰褐色の砂質土を主体とし、粘土ブロックやバラ

スを含む層をまじえた版築で墳丘コアを造る。この際、外側を茶褐色砂質土を入れた土囊で抑えながら内部を充填していくという版築方法を採用。

この段階もさらに3段階ほどに分けられる。まず、石柵の上に盛土をする前のおおまかな築成がなされ、上円下方墳の基礎ができる。そのあと石柵上の墳丘中心部を黄褐色砂質土の版築でとくに硬く盛る。そして上円部コアを黄褐色砂質土の版築で完成させるのである。こうして墓道部分を残して墳丘の大枠ができあがったとみられる。

墳丘コア

なお、この時点で墓道部分が周りと同じように版築土で完全に塞がれていたと考えるのは掘削の手間を考えれば不自然であろう。ただし、検出した墓道西壁面に、版築層の端を押さえる土囊の単位がまったく残っておらず、どうやってその部分を空けたまま、そこ以外の墳丘を盛っていったのかは実はよくわからない。壁面に土囊の単位が見えないのは、墓道を切り立てるときに大きく削り取ったせいと考えれば問題はないだろう。

いったん埋め戻した後の墓道開削の労苦を考えても、やはり石柵の幅に近い形で空間が確保されていたと思われる。

そうしていよいよ埋葬がおこなわれるのだが、まず墓道用に空けておいた空間の両壁は墳丘を削り込むかたちで切り立たせられる。こうして墓道の幅は石柵より広げられ、棺を両側から支える人の場が確保される。そして墓道を通して棺が運び込まれ、副葬品その他とともに石柵内に納められ、扉石の閉塞がおこなわれるのだが、閉塞後に墓前祭祀のために祭壇あるいは礼拝施設として標を敷いたり柱を立てたりしたのか、閉塞前にそれらをおこなったのかは不明である。閉塞後であれば、扉石を閉めてから、コロレールをはずす行程をほさみ、墓前祭祀をあらためておこなったとも考えられる。いっぽう、閉塞前にコロレールがはずされており、棺の納入から扉石の閉塞までをコロを使用せずおこなったのであれば、棺の納入後、扉石の閉塞前でも後でもただちに墓前祭祀をおこなえ、より自然な感じがするが、証拠はない。

埋 葬

墓前祭祀終了後、墳丘構築過程に近い手順で墳丘が仕上げられていく。まず、扉石を堅固に抑えるように石柵側に山形になる版築が土囊を使用せず、暗灰色粘土と砂やバラスをまじえた土でおこなわれる。ついで、土囊で押さえながら灰褐色砂質土の版築によって墳丘コアの形状に合わせるのである。

墓 道 の
埋 戻 し

こうして表面に土囊積みが剥き出しになった粗方の墳丘が完成した後に、はじめて表面の整形、化粧がなされていく。そこでは表面を整形する前に、土囊積み表面を大きくカットする行為がなされていることが注意される。埋葬儀礼をおこなう間に汚れたのを忌み嫌ったのか、あるいは水気の失われた墳丘コアの外表を削り、湿り気のある表面を出して新たに施す裏込めの接着を強化しようとしたのかは定かでない。

こうしてフレッシュな面を出してから、葦石を築くのであるが、最初に墳丘プランに沿った位置に基底石が並ぶように整地面に堀形を設け、基底石を縦に埋める。そしてこれを足がかりに葦石を積み上げていくが、実際は裏込め以上の土量を使って背後のカット面との間を埋めていて、しかも、墓道西側の上円部断面に見るようにその積み方も水平のところがあることから、実際は葦石というより石と同時に土を積み上げる擁石と呼ぶ方法によっている。

葦石・敷石

外表は下方部の基底からテラス、そして上円部へとほぼ連続的に仕上げていったものと思われ、その間、下方部テラスの隅には対角線状の溝を設けている。これについてはその目的は今

のところ不明である。水道とは考えにくい。

外周平坦面 の 敷 石

これら墳丘の構築のどの段階で外周平坦面に敷石がなされ、さらに排水溝としてSD07・SD08が設けられたのかもはっきりとはわからない。ただ、墳丘外表が整うのは埋葬後になってようやくのことであり、敷石はそれに接するように敷かれているので、同時か、葺石完成後と見たほうがよいであろう。外周平坦面が整えられた段階にはすでに埋葬の諸儀礼は終わっているということになる。

追善供養

しかし、敷石が中に落ち込んだように観察されたSD07・08の両排水溝はさらに遅れて設置された可能性がある。次節で説明する規格を無視した排水溝の敷設は、より時期が下った追善供養の祭祀などのときかもしれない。墳丘南裾から出土した須恵器はその時期のものと考えることができるのである。

以上に見たように、石のカラト古墳は、選地、地割に始まり墳丘の構築と埋葬から周囲の整備に至るまで、一連の流れとして統一的におこなわれているのである。そこには埋葬行為やそれに付随する供献儀礼などを盛大に執りおこなうような余地はあまりなく、古墳時代の葬制との隔たりを感じさせる。2005年春に調査された大阪府ツカマリ古墳の墳丘外側に設けられた東西15.0m、南北13.2mの裸敷施設が、簡略化され墓道内に用意されたものが石のカラト古墳の敷石遺構なのかもしれない（大阪府2005）。

副葬品もこれに応じて、身に付けるもの以外持ち込まず、土器の副葬もおこなわない。終末期古墳の特徴がよく現われている。

しかし、墳丘の外表に葺石を施したり盛土に土嚢を用いた版築を採用したりしていることなどは、古墳時代の様相を垣間見せるものである。高松塚古墳やキトラ古墳では水平な版築のみによって墳丘を整えるのに板をあてがう本格的な版築を採用していることと大きく対比されよう。後二者のもっとも外側の積土がどのようになされたのかは十分に明らかにされたとは言い難いが、どうやら版築の仕方と葺石を施すことは密接に関連しているように思われる。

ただし、葺石があることは时期的に古いことを意味するものではない。石のカラト古墳が葺石にこだわったのは、あるいは上円下方墳という墳形と関係があるのかもしれない。なぜなら、上円下方墳の形態を採用したことが調査で明らかになった府中熊野神社古墳と柳北1号墳の2古墳はいずれも葺石を備えているからである。そして、そのうち後者は火葬骨を埋葬し確実に8世紀前半に下る古墳である。葺石の採用は上円下方墳にとって不可欠と認識されていたのだろう。

2 石のカラト古墳の規格

A 墳丘規格 (Fig. 69)

これまでの各調査区で得られた所見を総合的に考察して、石のカラト古墳の築造にあたって考慮された規格を復元することとする。その根幹をなす平面規格については、墳丘本体については西半分のすべてと東側に延ばした第1トレンチによる幅1mのトレンチ内での確認にとどまる。同様に外周平坦面については一部未発掘部分が残るもやはり墳丘西半分はほぼめぐっているが、東半については第1トレンチと第10トレンチでわずかに関連遺構を確認しただけである。それらにくらべ、最外郭の溝については第1トレンチだけでなく、その他のトレンチでもその幅の中での検出であり、大差ない。このほか、墳丘下の排水溝を3条確認している。さらに、外周平坦面にあまり規格的でない排水溝SD07・SD08の2条を調査区壁際で確認した。

概報では検出遺構上で任意に計測した数値をいくつか掲げた。しかし、全体の復元図を念頭においての数値の提示はできておらず、図上での復元も本来の主軸が決まらないままでは正しく各部の寸法は計れない。そこで、ここでは上述の成果を総合し、復元的に規格を検討することにした (Fig. 69)。

見たとおり、この墳丘は幾何学的な形態であり、何らかの設計図があって作られていることが当然予測される。そこで、試みに正方形にちかく見える下方部一辺の4分の1の3.45mを単位とする方眼を一带にかけて規格を検討すると、以下のような点が指摘できるのである。なお、この場合、座標の南北軸は北で西に約12度44分ずれている。下方部はこの単位のマスをもとに $4 \times 4 = 16$ 集めた面積をもち、下方部一辺は葺石の外周で13.8mを計る。そして上方部の裾は、方眼の交点上にあることに気づく。つまり、上方部の半径は1単位の1辺 $\times \sqrt{2} = 4.85\text{m}$ となっている。ただし、この場合、下方部テラスのもっとも内側の石が並ぶラインである。先に本来その位置まで下方部同様外表の化粧があったと予測したことと関係する。

一辺3.45m
の方眼

そして墳丘周囲の平坦部について見てみると、調査区壁際で検出したSD07やSD08でなくて、トレンチの幅内でのみ検出したSD05やSD06がまさにその外側の上場を方眼にあてるように造られていることが知られるのである。その目で墳丘の東側を見るとSD09もやはり外側の上場を方眼に合わせていることがわかる。つまり、SD05とSD09の外側の上場どうしの距離は20.7mであり6単位分に相当するのであろう。外周平坦面の東西長は墳丘の一辺の長さの1.5倍になっているのである。

さらに、SD05とSD04の接続部分を第6トレンチで見えてみると、調査区の北壁と接して分かりにくかったが、SD04の礎の途切れる範囲が方眼のコーナーにあたり、ここではふたつの溝が接続していることが確信されるのである。そして、SD04の南側上場は墳丘中軸上でも方眼の交点を通っているのである。

排水溝の規格

この方眼にかなう遺構はそれだけではない。墳丘下から延びる3条の平行する南北方向排水溝SD01、SD02、SD03もこの方眼に基づいて決められている。すなわち、SD01は墳丘中軸、そしてSD03とSD02はそれぞれ中軸から東西に1単位ずつずれたところを

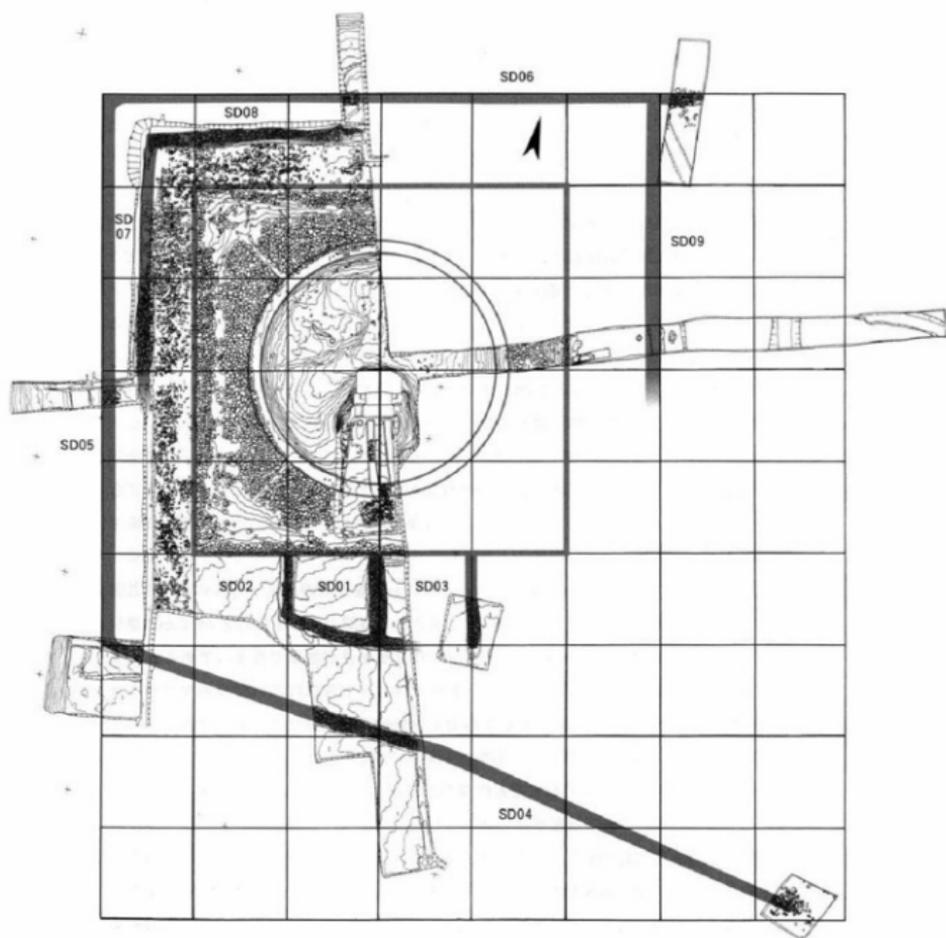


Fig. 69 石のカラト古墳 墳丘規格 1:200

平行に南下しているのであり、SD02は不自然に屈曲するもSD01との交点はやはり南側上場で中軸上で中心から3単位分南下へ下がったところにあたるのである。もしかするとそこより東はそのまま斜めに延びるのではなく、方眼にそって東向きを修正するのかもしれない。なぜなら、SD03の礫はちょうどその方眼交点で止まっているからである。

以上から、南北軸から東西に向けてはまず、1単位目で東西の墳丘下排水溝SD02、SD03、次に下方部裾、そして外周平坦面最外郭の排水溝SD05、SD09外側ラインという順に等間隔に並んでいたことがわかる。これは南北に見ても同様である。墳丘南側は、中心か

ら2単位目で下方部裾、3単位目でSD02とSD01の交点、4単位目でSD04の外側上端という並びになっている。

このように見てくると、石のカラト古墳の設計にはこの1単位が実に重要な長さとなっていることが了解されよう。そして、石櫛との位置関係を見ると、墳丘の中心は天井石中軸上で北から2石目と3石目のちょうど境、つまり、石櫛自身の中心と重なることが知られるのである。先に石櫛と墳丘ならびに周囲の計画が一体で決められていたと述べた理由がここにある。

この単位こそ、約34.5cmの10倍であり、1尺=34.5cmの尺が使用されたことが証されているのである。以下、ここではこの尺を大尺と呼ぶこととする。

それにより、外周平坦面の一辺は60尺、下方部40尺、上部部20尺 $\times\sqrt{2}$ の古墳が造られたとみなせる。それぞれメートルに換算すると20.7m、13.8m、9.7mとなる。その間、墳丘下の暗渠が10尺間隔で設置されたのである。

以上の方眼に合わないのが、墳丘周囲平坦面に不定方向に延びる2条の溝SD07及びSD08であり、墳丘造営と一連の工事で作られたものでなく、何か応急的に掘られたものであったことが示されている。本古墳については3重の排水溝をもつかのようと言われることがあったが、もともと墳丘下の3条の排水施設と平坦面四周の排水溝の2種をそなえた古墳で、それにSD07・SD08が後から付加されたと見られよう。

さて、ここで墳丘の高さについて見てみよう。墳丘基底部同様、下方部テラスの高さも地盤の高低差を反映して多少の違いがある。南側で112.4m、西側で112.65m、北側で112.6m、東側で112.35mとなっている。それぞれ1.2mほどの比高をもたせてあるようだ。墳丘残存部の最高所は114.2mであり、下方部上面からの比高は平均1.7m、全体の高さも2.9mに若干の削平分を見越したものであったと考えられる。これは高松塚古墳やマルコ山古墳と比べて著しく低平な姿と言えよう。外装の違いにも増してその差は大きい。

B 石櫛の規格

前節で分かったように、墳丘の築成とまったく同じ中心点を使用して構築された石櫛にも同様にこの大尺の適用が可能だろうか。まず、石櫛内法については長さが東側壁で2.59m、西側壁で2.60m、幅は中央部床面で1.03m、天井部で1.04mである。高さは東側壁、西側壁中央でともに1.065m、天井までの高さは1.165mである。石櫛全体の長さは3.52mである。これを尺度に直すと、石櫛の全長は先の方眼1単位に相当する10尺にほぼ等しく、石櫛内法は長さが7.42尺と半端だが、高さも幅、特に後者は正確に3尺に作られていることがわかる。

つまり、石櫛も要所の大きさが大尺の完数値で設計されていることが知られるのである。

しかし、石櫛の部材にはすでに記したように、0.89m前後の採寸による材が多用されている。周知のとおり、これは唐の小尺(=29.7cm)の3尺に相当し、それを4枚組み合わせると外法全長の近似値=大尺の10尺の値を得ている。以外の数値については小尺できれいに換算できるものはない。本設計にあたって、この小尺も使用された可能性があるが、全体の主要な寸法は先の墳丘全体の尺度からしても大尺で決定していたと考えて間違いないだろう。

墳丘同様、この時期の古墳の基準尺は唐の小尺を用いた研究がさかんであるが、再考を迫る結果といえよう。

墳丘と石櫛
中心は一致

内法は3尺

C 上円下方墳の規格論

石のカラト古墳は日本ではいまだ数の少ない上円下方墳の代表例である。今日までに確実な同形古墳としては東京都府中市熊野神社古墳と静岡県沼津市清水柳北1号墳が知られているだけである。このほか、埼玉県熊谷市宮塚古墳と同県川越市山王塚古墳が候補にあがっている。調査がなされた先の2古墳について、石のカラト古墳と同様な設計がなされているか検討してみたい。

熊野神社
古 墳

府中熊野神社古墳は1段目が約32m、高さ0.3m、2段目が一辺約23m、高さ2.5m、3段目が直径16m、高さ約2.2mである。下2段が方形で上1段が円形の墳丘であるが(塚原2004)、1段目が周囲からわずかにしか盛り上がりおらず、切石の縁石をめぐるすなど上2段と様相を異にすることは、1段目を石のカラト古墳の外周平坦面に対応する部分と理解することも許されるであろう。

そこで2段目の23mを石のカラト古墳でいう下方部に見立て、その四分の一の5.75mに $\sqrt{2}$ をかけた値を見ると8.1mでちょうど3段目の直径16mの半分に当たることから、ここでも、同じく方眼原理で下方部と上円部が割り付けられていたことが示されていると言えるであろう。

そして、基準となる方眼の長さ5.75mは、石のカラトの単位である3.45mとちょうど5:3の比率になっていることが注目される。

柳北1号墳

次に柳北1号墳であるが、上円下方墳の墳丘外側に比較的幅の広い周溝がめぐる形となっている。下方部の1辺は12.4m、上円部は直径9.0mを計る。報告では29.5cmを1尺とする唐小尺により、方眼原理ではなく、対角線の長さを重視した復元案が提示されている。それによると、上円部の半径がちょうど15尺になり、下方部の対角線も中心から四隅までが30尺となるという(沼津市教委1990)。しかし、下方部の一辺や段の幅などは中途半端な尺の値にしかならない。

したがって、先の2古墳と同じようにこれも方眼原理で考えられないか検討しよう。その場合、上円部の半径を $\sqrt{2}$ で割った値が重要な単位になっているはずだが、計算すると3.18mが1単位となる。その4倍の12.73mと比べると、先の方眼の計測長はやや短すぎて厳密に設計されていないか、異なる設計原理が考えられなくてはならない。しかし、外側の周溝までのテラスの幅が1.6mでちょうど0.5単位で作られていて、やはりここでも方眼原理で設計がなされたか復元することが可能である。その場合、石のカラト古墳と比べて1単位は10分の9となる。

なお、主体部の石櫃身部は長辺116cm、短辺106cm、中央に直径35cm、深さ35cmの丸い穴があげられていて、そこに蔵骨器が納められていたと推定できる。蓋部は長径122cm、短径105cmである。これを見ると、主体部には石のカラト古墳で使用された34.5cm前後の尺がそのまま用いられていた可能性も指摘できよう。

年代の絞り込みについては後でさらに考察するが、このように、7世紀後半から8世紀前半の中で特異な存在であった上円下方墳は、基本的に下方部の一辺の4分の1を単位とし、方眼原理の築造規格を共有するきわめて類似度の高い一群であったと言えるであろう。先にも触れたように三者がいずれも葺石を備えるという共通点をもっていることも符合するものである。

石のカラト古墳は石塚とは違う次元の墳形において、特定のグループを代表する古墳でもあったのである。

3 終末期横口式石槨墳の比較 (Fig. 69~72, Tab.1)

石のカラト古墳はこれまで主として特徴的な石槨の類似から、高松塚古墳、マルコ山古墳、キトラ古墳の3古墳との対比が試みられてきた。しかし、本報告で明らかになったより多くの観点から、これらの古墳を相互に比較することが可能となった。そこで以下の主要な項目について、これら類似古墳に対し比較検討を加えてみたい。

A 墳 丘

詳細の不明な高松塚古墳を除いても、他の3古墳はそれぞれ異なる墳形を有し、単純な比較が難しいように見える。しかし、先の規格という概念を使えばそれらの間に相互の関連が指摘できる可能性がある。

(1) 高松塚古墳

高松塚古墳は平成16年度によりやく墳丘の本格的調査が開始されたが、現段階では報道資料や現地説明会資料しか公表されていない。

それまでは昭和47年の発掘調査とそれに先立つ墳丘測量の成果しかなかった(榎考研1972)。この調査で墳丘残存部を発掘によって確かめたのは、石槨前方及び、東側墳丘裾についてだけであったため、石のカラト古墳のように全体の築造規格を割り出すことは容易でない。それでも石槨の位置と盛土の範囲から、報告では上段の径を約16m、下方の円形基盤を径約20mとする2段築成の円墳設計案が提示された。

ところが、平成16年度の調査で墳丘調査が本格的になされ、上段の径約18m、下段の径約23mという数値が出された(文化庁2005)。この数値に対して先の尺度がただちに有効かどうか検討することは、詳しい検討やデータの提示がなされていない現在、控えることとしたい。ただし、提示された数値を見る限り、共通の規格を採用していないように受けとれる。

(2) キトラ古墳 (Fig. 70)

キトラ古墳では石槨の身の丈に合うように墳丘背後を2段にカットした後に、石槨の構築をおこない、その段の位置をほぼ踏襲して墳丘背面の平坦面を作っていることや、盛土の際に幕板を用いた工法を採用しているなどの特色が指摘されている。

報告では、墳丘の北半で確認されている上段円丘の裾と、トレンチ東西で一部かかっている下段の裾からプランを復元し、ここでは上段9.4m、下段13.8mという数値を得ている。これを報告者が主張する1尺29.5cmの唐小尺を用いて計算すると上段31.8尺、下段46.8尺となり、完数値にならない。そこでこれを理解するのに幕板を規格計画線に合わせたことを想定し、墳丘の若干内側に入る幕板での直径が唐尺の30尺に近似する値になるとして、同じように下段も差を見越して45尺とする復元が試みられているのである(明日香村教委1999)。

しかし、下段が45尺と奇数となることが示すように、この場合、全体を割り付けるための設計の中軸や中心の存在が求めにくく、現地においてどのように割り付けたかわからない。また、

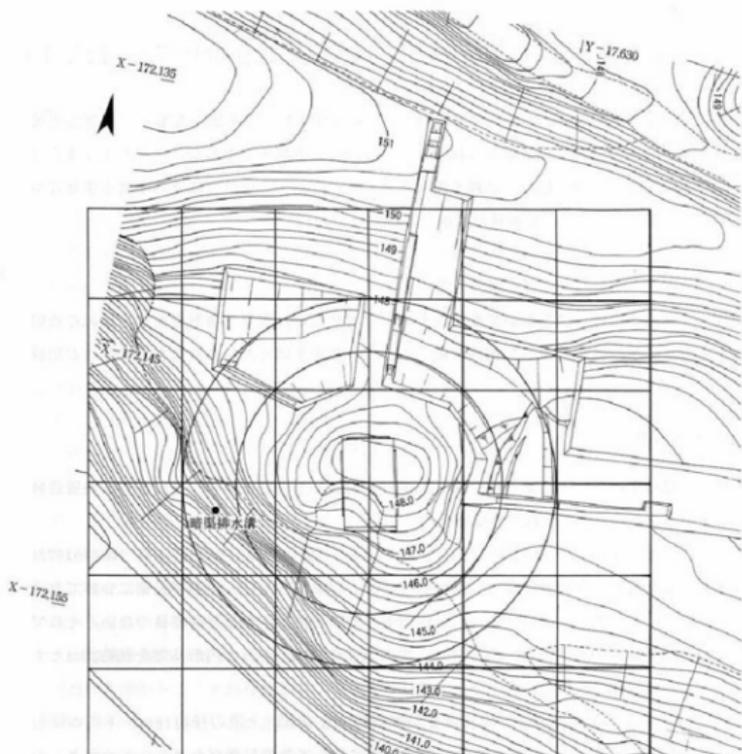


Fig. 70 キトラ古墳 墳丘規格 1:200
(明日香村1999より作図)

幕板を規格に合わせることの合理性もあまり説明できない。

そこで石のカラト古墳での復元案を手がかりにあらためて考察してみたい。まず、何よりもキトラ古墳の下段の直径13.8mが、石のカラト古墳の下方部一辺の長さに合致することから、同じ基準が採用されている可能性が期待されるのである。

同じ方眼
を使用

それゆえ試みにFig. 70のように、石のカラト古墳と同じ方眼を石塚の中心を通るようにかけてみることにした。すると、キトラ古墳の上円部も石のカラト古墳と同じ方法で、つまり、墳丘規定部径の四分の一を単位とし、方眼の交点を通るように決められたとみなせることがわかった。その場合、上円部は石のカラト古墳と同じく9.7mとなる。

なお、後にも述べるが石塚の幅が1.04mで石のカラト古墳とほとんど同じであることも、石のカラト古墳に採用された尺がここでも同じように使われていたことを証すものであろう。また、ここでは、奥行き2.4mもちょうど7尺となっていてさらにその可能性を支持する。

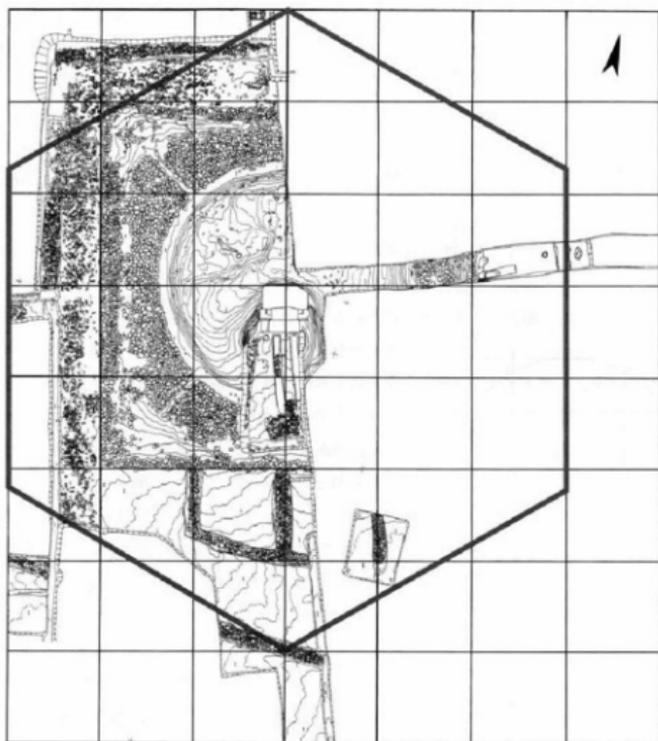


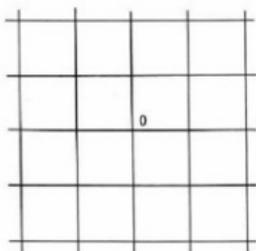
Fig. 71 マルコ山古墳 墳丘規格 1:200

(3) マルコ山古墳 (Fig. 71)

平成16年度に墳丘北西側について発掘調査がなされ、その詳細なデータの提供が待たれるが、ここではその概略を示した報告会のデータによって考察してみたい。マルコ山古墳も他の古墳同様、背後の丘陵を大きくカットしてから墳丘を構築しており、これまで直径約15m、外部施設を含めた径は約24m、見かけの高さ約5.3mの円墳と見られてきた。なお、周囲には礫を敷き、暗渠をそこに設けている点で、石のカラト古墳との類似も指摘されてきた(明日香村教委1978・1996)。

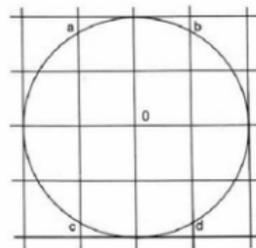
それが、平成16年度の調査により、墳丘形態の復元に大きな修正の必要が生じたのである。墳丘の西側を幅広く掘ったために、墳丘西裾が南北に直線的に延び、北側では斜めに屈曲し背面の丘陵カット面に平行するように北東方向に延びていることが確認されたのである(明日香村2004)。

これに基づいて、過去の調査成果を見直した結果、一辺12m、対角長約23.6mの六角形墳になることが判明した。礫敷の範囲については不明であるが、墳丘だけを見ても他の3古墳の中で



抜きん出て大規模な古墳ということが出来る。

ここでも試みに石のカラト古墳と共通する方眼に載せてみると、Fig. 71に見るような対応関係にあることがわかる。すなわち、ここでは古墳の主軸が南北の対角を結ぶ線とした場合、対辺の距離が6単位=20.7mとなり、南北長をのぞき、石のカラト古墳の外周平坦面の枠内にマルコ山古墳の墳丘がちょうど納まることが知られるのである。



以上が偶然ではないことを示す意味で、六角形が実際にどのように決められたものか、少しだけ考えておこう。そもそも六角形を描くとき、その方法は、任意の向き合う2辺を水平に置か、任意の向き合う対角を垂直に置くかで自然に分かれよう。仮に、前者を採用した場合、中心との距離は対辺からの最短距離となり、一辺の長さとその値との間に $0.5:\sqrt{3}$ という難しい比が出てしまい、この延長で設計したというのでは古代における計算上あまり信用性がなくなる。また、中心から各頂点までの距離で外接円を区切って各頂点を出すこともできるが設計上利用しにくい。

方眼を用いた六角形

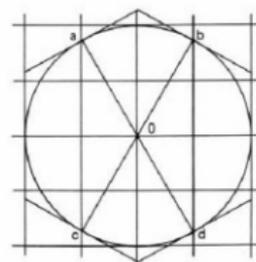


Fig. 72 正六角形作図手順

もあるかもしれないが、マスの大きさが長さにして2:3という整数比であることから、一連の単位と同じものを用いているといっていよう。以上のように、石のカラト古墳で用いられたのと同様の築造規格や単位を用いて、キトラ古墳とマルコ山古墳の双方が築造されていると推定できるのである。

B 墳丘構築方法・外表施設

墳丘の盛土は、この時代を反映していずれも版築に属する方法によっている。ところが、高松塚古墳とキトラ古墳では端を押さえるための板を据えた跡がみつかり、土嚢で抑える石のカラト古墳とは大きな相違を見せている。先に述べたように、土嚢積みを利用した盛土工

法は古墳時代後期にはかなり普遍的になっていたもので、塚板を用いる工法は基壇建物や土塀や城壁など、比較的新しく渡来した土木技術に由来するものである。ただし、この採用の違いはただちに古墳の新旧に関係するとは言えないだろう。

石のカラト古墳が上述の工法をとったのはやはり外表に石を葺くことと大いに関連しよう。版築の工法墳丘の外表施設は、石のカラト古墳をのぞくと、マルコ山古墳が外周平坦面及び墳丘第1段テラスに敷石を施しているだけである。実際の水の出方や、墳丘の強度や質感など多様な要素がその採択において考慮されたものと思われる。

いっぽう、排水のための処置については、今のところキトラ古墳では版築をする前に地山に掘られた礫を詰めた排水溝が1条みつかり、マルコ山古墳でも墓道下で1条みつかり、周到さにおいては石のカラト古墳に及ばない。なお、キトラ古墳の墳丘下暗渠が方眼に乗ってくるかこないかは詳らかでない。

墓道内の遺構としては石塚前面に柱などを据えたであろう穴が一对ありそうな点で、キトラ古墳と石のカラト古墳は共通性を強く見せる。

そして、石塚からある程度離れた位置に祭壇として利用しうる施設がみつかったのが、高松塚古墳と石のカラト古墳である。前者は厚みのある板石であり、後者は礫敷であった。遺構は異なるが、これらの古墳に見る共通性は、同様な祭祀が実施されたことを示すものであろう。

いっぽう、石塚を導き入れるためにコロを用いることは石のカラト古墳以外に、高松塚古墳、キトラ古墳、マルコ山古墳のいずれにおいても確認されている。ただし、他の3古墳ではそれが石塚の前面に4条用意されているのに対して、石のカラト古墳では2条であるなどの違いがある。

このように、墳丘構築方法や外表施設については、石のカラト古墳が葺石をはじめもともと古墳時代の特色を維持しているように見える。しかし、石塚を中心とする内部のしくみは他の終末期古墳と多くの共通性を見せており、とくに規格の共有は看過しえない。

C 石 塚

ここで対象としている4基の古墳はいずれも凝灰岩製の組み合せ式横口式石塚である。各特徴についてはTab.1に対比してあるが、内法全長を見ると、唐小尺=29.5cmを用いたとすると高松塚が9尺、そしてキトラ古墳が8尺に造られているといえることができる。しかし、4古墳間でのばらつきが大きく、その差は必ずしも29.5cmの倍数ではとらえられない。

石塚内法については、むしろ高松塚古墳、キトラ古墳、石のカラト古墳の石塚内法幅がいずれも大尺の3尺に合致していることを重視したい。もちろん、これを唐小尺の3.5倍と見ても可能である。これら3基に比べるとやはりマルコ山古墳の石塚が飛びぬけて大きいことが知られよう。

高さについてもマルコ山古墳が突出しているが、それを越えて天井の形態に大きく2大別がある。つまり高松塚古墳が箱形であるのに対して、他の3古墳はいずれも家形に仕上げられているのである。その家形の造形が、それ以前の古墳から系譜がたどれるとして、その退化方向で幅年を考える見解もある(相原1999・白石2000)。

石塚石材の敷にばらつきがあるように、鋪石が底石より外側へ張り出すのか、底石に完全に

載るのかといった違いや、扉石が天井石と底石の前端にすっぽり取まるのか、やや飛び出るのかなどの違いは認められるものの、4古墳の基本的な石槨構造が似ていることはあらためて言うまでもないであろう。

さて、石槨内部の様相については、よく知られるように高松塚古墳とキトラ古墳が漆喰を施した後に壁画を描いているのに対して、マルコ山古墳では石槨の塗布だけが確認されていて、石のカラト古墳では漆喰も壁画もともになかった。ただし、石のカラト古墳から出土している金箔については後に述べるように問題を孕んでいる。

D 棺と副葬品

漆塗木棺

棺は石のカラト古墳を除く3古墳が確実に漆塗木棺であるのに対して、石のカラト古墳ではこれまで積極的な根拠はなかった。その違いを反映してか、石のカラト古墳では他の古墳では普遍的に見つかっている棺の飾り金具類が1点も確認されていない。したがって、構造的な差異があったことが推し量られるが、どちらかというやや簡素なものだったと思われがちである。しかし漆の断片からすると石のカラト古墳でも木胎でその上に布を被せ漆を塗った類似の棺であった可能性が高い。それは内面に水銀朱を塗り、外面黒漆仕上げのもので、採取された金箔が高松塚古墳同様、外面に上重ねされていた可能性もある。

主な出土遺物も表に示した。盗掘によって本来の構成を正しく伝えるものは何ひとつないが、それでもいくつかの共通性を読み取れる。棺を装飾する金具類を除くと、まず、基本的に大刀を1振納めることが原則であったことが推察できる。石のカラト古墳の大刀は銀装で高松塚古墳やマルコ山古墳にみる山形金具などはともなわない。柩下であったことが示されているのであろうか。これに、琥珀玉をはじめとする玉類が加わることもよく共通性を見せている。

鏡については石のカラト古墳にあったのかどうかまったくわからない。仮にあったとしても、海獣葡萄鏡を代表とする唐式鏡であったに違いない。

金製玉の使用法

これらを除くと石のカラト古墳の金製玉と銀製玉、そして金箔片が異質な存在であることに気がつくだろう。これらについては少し検討が必要であろう。

石槨内から出土した金製玉、銀製玉各1については、古墳からの出土品としては類例がきわめて乏しいものであり、用途も含めて性格についてわかりにくい。

あえて探せば、奈良県飛鳥寺の塔心礎から舍利荘嚴具として納められたものの中に、金の小粒が1点みついている。径は約4.5mmである。これには金銀の延べ板がともなっていて、形状は矩形、正方形、不整形、扁平棒状のものなど各種がある。そのうちの小型の5枚は折りたたんでいたり、四隅を折り曲げられたりしている。銀の延べ板は扁平棒状のものだけである。

その他、興福寺金堂でも、金小玉5が出土しているが、このようにどちらかといえば寺院関連の遺構からは金製品として金粒や延べ板ないし金塊で出土することの方が多い。

これに関して、元興寺塔跡では、金延べ板3、金小塊1とともに金箔付着土塊が一括であがっていることも注意される。この例のように、石のカラト古墳に独特な遺物は、金箔を含め一見仏教関係の遺物のようでもある。古墳の祭式が仏教の影響を受けて変容したことを伝えているのだろうか。

しかし、関連性の強い他の3古墳から同種遺物がまったく出土していないこともあり、類似

する部分の多い古墳で、ひとつだけ仏教的葬送儀礼を執りおこなったとするには無理がある。もちろん、他の古墳でも本来そうした遺物を使った儀礼が同様におこなわれたが、それが偶然盗掘その他でまったく残らなかったという言い訳もできなくはないが、仏教的葬送儀礼は本来古墳の造営と矛盾する原理をもっていると考えられることもあり、別の可能性を探ってみた。

なお、伴出遺物から8世紀前半頃と思われる福岡県干海遺跡から出土した金製玉は、同じ金製であるが、紐通しの孔をあけた玉であることが重大な相違である(福岡県教委1980)。表面には細い針金状にした金の棒を使って玉の表面に細かな装飾を加えていることも大きな相違であり、性格がまったく異なることを教えている。

視点を変えて「衣限令」など奈良時代頃の規定を見ると、天皇をはじめ皇族や上級官人は金の玉などを儀式のときに身につけるという風習がすでにあったことが知られる。こうした儀式のいでたちをもったまま埋葬されたとすれば理解はたやすくなる。しかし、これも他の3古墳では一切出土しておらず、そもそも棺内にもちこまれる制度があった証拠がない。

つまり、舍利荘嚴具や鎮壇具のような使用でも携帯品でもないとすると、別の何かを飾る部品であった可能性が出てこよう。それに関連して、これらの玉が棺や棺を運ぶものに付属するものであった可能性が浮かび上がるのである。

実際の出土品から確かめることができないが、文献から金製玉の使用方法が推し量られる。元明の遺詔

十月一三日の条「丁亥。太上天皇、右大臣従二位長屋王、参議従三位藤原朝臣房前を召し入れて、詔して曰わく、「朕聞かく、「万物の生、死ぬること有らずということ難し」ときく。此れ天地の理にして、美ぞ哀び悲しむべし。葬を厚くし業を破り、服を重ねて生を傷ふこと、朕甚だ取らず。朕崩る後は、大和国添上郡藏宝山の雍良岑に壙を造りて火葬すべし。他しき処に改むること莫れ。諡号は、その国の郡の朝庭に取字しし天皇と称して後の世に流伝ふべし。また、皇帝、万機を摂り断ること一ら平日と同じくせよ。王侯・卿相と文武の百官と、輒く職掌を離れて、喪の車を追ひ従ふこと得ざれ。各、本司を守りて、事を視ること恒の如くせよ。その近く侍る官并せて五衛府は、務めて厳しき誓めを加へ、周衛伺候して不虞に備へよ」とのたまふ。」

十月一六日の条「庚寅、太上天皇、また詔して曰はく、「喪の事に須る所は、一事以上、前の勅に准え依れ。闕失を致すこと勿れ。その輿車・靈駕の具に、金玉を刻み鏤め、丹青を絵き飾ること得ざれ。素き薄を是れ用み、卑謙に是れ順へ。仍て丘の体鑿つこと無く、山に就きて壙を作り、練を交りて場を開き、即ち喪処とせよ。また、その地には皆、常葉の樹を植ふ、即ち剋字の碑を立てよ」とのたまふ。」

この元明太上天皇の二つの遺詔は上林史郎によってもとくに注意を喚起されている(上林 2004)、ここで重要なのは次の2点である。ひとつは自らの葬儀について徹底した薄葬を命じていること、そして、第二に棺を運ぶ車や輿に金製玉を埋め込んだり、丹青で絵を描いたりすることを禁じていることである。

つまり、薄葬の具体的方策のひとつとして、葬送用の車や輿の装飾に使用することを禁じた

金の玉の実例がこの石のカラト古墳から出土した金製玉であった可能性が浮かび上がるのではなかろうか。ほぼ同じ形態の銀製玉も同様の装飾に用いられていたと見たい。

出土した漆塗り棺自身に玉がついていたとはただちに考える手がかりはないが、棺を載せて運んできたものを含め、それらに2種の玉が飾られていた可能性が考えられるのである。

そのように考えると、その風習が禁じられた時よりも石のカラト古墳の築造はさかのぼると見てよいだろう。すなわち、西暦721年を下らないということになろう。

E 金 箔

石のカラト古墳の金箔も通常の古墳副葬品には見出しがたいものである。これも棺や輿に因するものとみなすことももちろん可能であり、現に高松塚古墳で、木棺の底に漆の上に金箔が施されていたことが発掘後にわかったのである。棺金具が出土しないことから棺の構造が違う可能性があるとはいえ、同じように金箔を施していたと考えることは可能である。

棺の装飾

盗掘されて攪乱された土からの出土ということがあり、出土した金箔が非常に細かく、いずれもくしゃくしゃになっていることから、もともと何に施されていたのかはきわめてわかりにくい。ただし、漆片に付着したものはひとつもなかったこともまた事実である。

副葬品

では棺表面の装飾に使っていたと見る以外にないものだろうか。金箔貼りの製品を代表する耳環はすでに副葬する風習もなくなっている。また、次節で述べられるが、6世紀以後の古墳で時折出土する金糸も薄さその他が異なる。

すると、類例のない金箔使用製品を想定せざるをえないことになる。しかし、どちらかといえば石のカラト古墳は、他の3古墳と比べ、副葬品において豪華さに欠け、盗掘の程度によるのかもしれないが、金箔使用製品の副葬を特別に想定するには躊躇される。

星宿の表現

ここで考えなくてはならないのが、金箔は高松塚古墳、キトラ古墳で壁画の星宿、天文の星表現に使用されていることである。これらの古墳は、漆喰を石槨全面に塗った上に華麗な壁画を描いている。その題材は大きく様相を異にするが、四神を四壁に描く点とともに、天井に星宿、天文を金箔と赤線で描くことは共通している。これに対して、マルコ山古墳は漆喰のみ施されていて、壁画はないことになっているが、漆喰の施されていない石のカラト古墳でも金箔によって星宿、天文の図像が天井に表現されていたことはありえないことではないだろう。漆喰の有無は壁画の表現にとってその見栄えに決定的な影響を及ぼすことは確かであるが、重要な方は図像そのものといえるからだ。

墳丘から石槨にいたる多くの類似は、出土した金箔の上述の使用も十分に想定せしめるものと言えるだろう。

仮にここでも金箔を利用した星宿や天文図が描かれていたとすると、汪勃の指摘はますます重要性を帯びることとなる(汪2002)。氏によるとそうした描き方は牟婁太子・房妃合葬墓(711年)と近接した時期によりやく始まるとされる。仮定に仮定を積み重ねるならば、石のカラト古墳の年代も平城京遷都以後であることを示すことになろう。

Tab.1 終末期古墳の比較

		高松塚古墳	マルコ山古墳	キトラ古墳	石のカラト古墳	
墳丘	規模	2段築成の円墳	2段築成の六角形墳	2段築成の円墳	上円下方墳	
		上段直径約18m、下段直径約23m、下からの見かけの高さ8.5m、北の周溝底面からの高さ3.6m。	一辺約12m、対角長約23.6m(上段約18m)。見かけの高さ約5.3m。	上段直径9.4m、下段直径13.8m、北側(上段)の高さ約2.4m、西側(上段+下段)の高さ約3.3m。	上円部の直径9.7m、高さ1.7m+a、下方部の一辺13.8m、高さ1.2m、全高2.9m+a、外周平坦面一辺20.7m。	
			墳丘周囲に石敷。石敷の下に幅22~34cm、深さ15cmの暗渠があり、礫を詰める。石室前面墓道下に礫を詰めた暗渠がある。	墳丘南西斜面下に礫を詰めた暗渠(幅40cm、深さ70cm)がある。	墳丘の下や周辺に礫を詰めた幅40cm、深さ20~30cmの暗渠を巡らす。墳丘周囲の外周平坦面にも石敷を施す。	
	盛土	版築 数cm単位で突き固める。幅5~6cmの溝状の空間があり、板状痕跡の可能性はある。	版築 数cm単位で突き固める。墳丘1段目テラスに礫を敷き詰める。	版築 数cm単位で突き固める。北・西側の墳丘裾で厚さ4~5cmの板状痕跡と、板を固定する直径約10cmの軌跡を検出。	版築 数cm単位で突き固める。土嚢採用。墳丘全面に川原石で葺石と敷石を施す。	
	コロレール	4条	4条	4条	2条	
石柩	石材	凝灰岩切石	凝灰岩切石	凝灰岩切石	凝灰岩切石	
	石材個数	床石3、扉石1 奥壁1、天井石4 側石各3(計15石)	床石4、扉石1 奥壁2、天井石4 側石各3(計17石)	床石4、扉石1 奥壁2、天井石4 側石(西3、東4) (計18石)	床石4、扉石1 奥壁1、天井石4 側石各3 (計16石)	
	石柩規模	長	265.5cm	271.9cm	240.0cm	260.0cm
		幅	103.5cm	128.5cm	104.0cm	103.0cm
		高：側壁 ：内法	113.4cm	135.7cm 143.3cm	114.0cm 124.0cm	106.5cm 116.5cm
備考	箱形	石柩内は家形家形の高さ8cm	石柩内は家形家形の高さ10cm	石柩内は家形家形の高さ10cm		
石柩内部	塗喰	石柩内全面に塗る(厚さ2~7mm)	石柩内全面に塗る(厚さ2~7mm)	石柩内全面に塗る	なし	
	壁画	奥壁 玄武	壁画なし (竹管状の痕跡あり)	奥壁 玄武 十二支像	壁画なし	
		西壁 白虎、月像男、女群像		西壁		
		東壁 青龍、日像男、女群像		東壁 青龍 十二支像		
		南壁		南壁 朱雀		
天井 星宿図		天井 天文図 日像(東斜面)				
主な出土遺物	漆塗木棺、棺飾金具、銅釘、金銅、銅製座金具、海獣葡萄鏡、銀装大刀金具、琥珀製丸玉、ガラス製丸玉、ガラス製葉玉。	漆塗木棺、棺飾金具、銅釘、金銅、銅製座金具、依鉞、山形金具、金鋼装大刀金具、尾鏡ほか。	漆塗木棺、銅製釘跡、金銅製頭座金具、琥珀玉、ガラス玉、金象嵌鉄製刀装具ほか。	金箔片、黒漆片、金製玉、銀製玉、琥珀玉、銀装大刀金具ほか。		

4 石のカラト古墳出土品の科学的分析

A 金・銀

はじめに

石のカラト古墳から、金、銀製の玉や銀製の刀装具、さらには金箔細片多数が出土している。これら金、銀製品の材質を調査したのでここに報告する。

材質の特徴を明らかにするために分析に供した資料を示す。

- ①金製の玉 1点
- ②銀製の玉 1点
- ③刀装具 2点
- ④金箔片 多数

分析方法は基本的に、非破壊的手法を用いた蛍光X線分析による半定量分析をおこなった。ただし、この手法は非破壊的な分析であるので、分析結果には表面の汚れやサビなど、遺物表面の状態が反映されるため、その取り扱いには十分な注意を要する。しかし、今回分析に供した資料は幸い遺存状態もよいため、得られた分析結果はオリジナルな遺物の組成に比較的近い値を示しているものと考えてよからう。

用いた装置は、株式会社ノス製蛍光X線分析装置TREX-640S。分析条件は、電圧45kV、電流0.3mA、X線照射コリメーター1mmφ、測定時間100~300秒。X線管球は、モリブデン (Mo) である。

結果及び考察

① 金製の玉は、重さ6.37gで、直径約8.8mmのほぼ球形に成形されている。蛍光X線分析の結果、材質は、金91.1%、銀8.6%、銅0.3%を示した。慣用的に、金100%を24Kで表すが、これに従えば21.4Kに相当する。ある程度の銀と微量の銅を含む材質は、これまでに分析してきた古代の金製品の特徴と良く合致する。

なお、この玉を直径8.8mmの球体と仮定すると、見かけの比重は17.87である。ここで、この金製の玉全体が、蛍光X線分析で得た組成でできた直径8.8mmの球体と仮定すると、その比重は17.94となり、見かけの比重とほぼ一致する。従って、この金製の玉は、中心部まで蛍光X線分析で得た組成でできていると言ってよい。非破壊分析的手法による蛍光X線分析は、得られた分析値の取り扱いに注意しなければならないが、このような金無垢の資料には有効な分析法であることがわかる。

② 銀製の玉は、金製の玉より少し大きめの直径約11.8mmである。これもほぼ球形で、重さ9.10gを計る。材質は、銀が98%近くを占め、0.4%程度の金、0.5%程度の銅を含む。

これを直径11.8mmの球体とすると見かけの比重は10.57である。ここで、この銀製の玉全体が、蛍光X線分析で得た組成でできた直径11.8mmの球体と仮定すると、その比重は10.53となり、見かけの比重とたいへんよい一致をみる。したがってこの銀製の玉も、中心部までは銀無垢の組成をとるものと考えてよい。

純度の高い銀に、微量の金と銅をともなう材質は、古代の銀の特徴と認められるが、この銀製の玉には、1%程度の水銀が検出されることが注目に値する。古代の銀製品に水銀がともなう要因としてまず挙げられるのは、銀・アマルガムの存在である。水銀は、金や銀と容易に合金を作り、これをアマルガムという。古代のアマルガムの用途で最も多いのは鍍金である。銅合金の表面だけを金や銀に仕上げる表面加飾法である。

しかし、石のカラト古墳出土の銀製の玉は、表面だけを銀色に仕上げたものではなく、中心まで無垢の銀である。鉱石から銀を抽出する方法として、鉛を使う灰吹法と水銀を使う混汞法（アマルガム法）が、地中海地域を中心に古代から知られていたといわれる。日本ではいずれも近世以降の技術とされてきたが、石のカラト古墳の銀製の玉から相応の水銀が検出された事実は、日本でも古代にこの混汞法の技術が使われていた可能性を示唆すると言えないだろうか。直径11.8mmは、銀の玉としてはかなり大きい部類に入る。従って、細かい銀を集めるのに水銀を用いたことも考えられる。同時期の飛鳥池工房遺跡では、金・銀の加工技術の痕跡が多数発見されている。これらの遺物の調査から、7世紀後半の飛鳥池遺跡と石のカラト古墳出土の銀製の玉に何らかの因果関係を見出すようなことになればたいへん興味深い。

石のカラト古墳から出土した大刀装具は、柄頭、黄金具それに冢の3点である。遺存状態は良好である。今回は製作技術などの詳細を調査するには至らなかったが、材質調査から、共に純度の高い銀製であることがわかった。いずれも銀は98%以上の純度を示し、他に銅、金などを微量に含む。

また、石のカラト古墳からは、金箔の細片が多数見ついている。これは、残土を篩ってみつけたものなので、実際にどのように使われていたのかその詳細はわからない。大きいもので2~3mm程度の大きさであり、顕微鏡による観察（巻頭図版3）から判断しても、これらの細片一つ一つが遺物として固有の意味をもつとは思えない。金箔の厚さを確認するまでには至っていないが、現代の金箔に見られる1 μ mに満たない薄さを誇るものではなく、おそらく5~10 μ m程度はあると見てよい。従って、金箔というより、金薄板と表現する方がより厳密な表現であろう。なお、古代の金糸は、15 μ m程度の金薄板のリボン糸を撚って作ったものであるが、この厚さよりは少し薄い印象をもつ。顕微鏡で観察すると、(a) 細かな皺がよったタイプと、(b) 比較的皺の少ないタイプの2通りがある。材質は、前者(a)が金約95%、銀約3%、すなわち22.8K、後者(b)は、金約87%、銀約12%、すなわち20.9Kであった。遺存状態や材質から見て、2種類の金箔が混在している可能性も否定できない。また、金箔の用途として考えられるのは、例えばキトラ古墳の天井に認められる星宿図のような壁面の装飾や、あるいは木棺の塗漆の装飾などが挙げられるが、いずれの資料も細片のため用途の確定は困難である。

ま と め

石のカラト古墳から出土した金、銀製品を中心に、材質調査をおこなう機会を得た。

飛鳥寺の塔心礎跡の舍利容器から金製、銀製の玉が出土した事例があるが、終末期の古墳からこのような金、銀製の玉が出土するのは珍しい。飛鳥寺から出土した金、銀は、素材そのものの雰囲気を持っていたが、石のカラト古墳出土の金・銀製の玉は、球体に加工した最終製品と位置づけてよからう。従って、玉そのもののもつ機能、あるいはそれに籠められたメッセージは自ずと異なると考えられる。その詳細の解明は今後の課題であろう。

(村上隆)

B 琥 珀

試料は少し直径（完全な球状部分がないので正確な直径は不明：約1cm位と推定）の大きい破片数個で、表面の色は茶褐色で内部はやや不透明であった。多数の粗くて深いひび割れが見られるが出土時から既に年月が経過しているため出土時に既にひび割れが存在したかどうかは不明である。

(1) 顕微赤外分析 (Fig. 73・74)

試料箱底部に約数ミリグラムの微小破片が脱着していたので、それを実体顕微鏡下で観察しながら赤外分析に適した一部分を選んだ。まず微小試料を金属台上に載せプレスして薄層試料とし、そのまま顕微赤外 (FT-IR) 分析計 (島津 (株) Prestige21, AIM8800積算回数: 100, 分解能: 4 または 8 cm^{-1}) の試料台に置いた。測定には上から垂直に光源赤外ビームを入れ、金属表面での反射により試料薄層を合計2回通過させた後、透過赤外光を検出し、反射配置での透過赤外スペクトルを測定した。

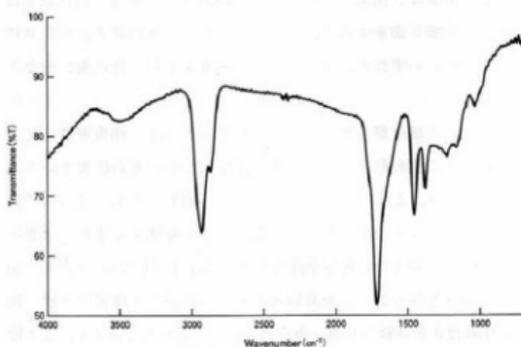


Fig. 73 試料（透明部分）の赤外スペクトル

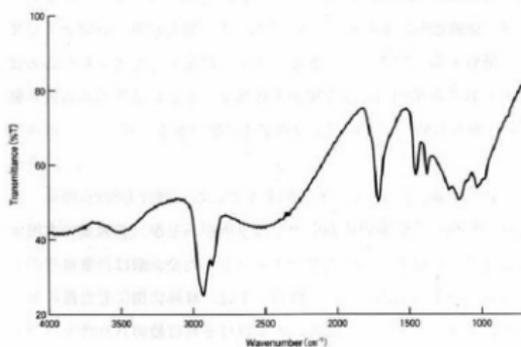


Fig. 74 試料（微粉末部分）の赤外スペクトル

Fig. 73に示すように、主要な赤外吸収は約 3000 cm^{-1} より少し低波数側の鋭い吸収ピーク、約 1700 cm^{-1} の幅広い吸収ピーク、約 $1500 - 1300\text{ cm}^{-1}$ の2本の強いピークが存在し、典型的な琥珀のスペクトルの特徴を備えている。奈良文化財研究所では既に奈良近傍のいくつかの遺跡から出土した琥珀について赤外スペクトルを測定しており (M. Sato, M. Mimura, K. Yamasaki, 2003)、今後、本試料とそれら試料のスペクトルの特徴を詳細に比較することによって産地推定などに有益な手がかりを得られるものと考えられる。

(2) 蛍光スペクトル (Fig. 75)

試料琥珀玉破片の中で、比較的大きい塊片の外側（球状表面）及び内側部分（破断面）について非破壊で蛍光スペクトルを測定した。光源の励起紫外光を試料表面に照射し、直角方向から試料の発光（蛍光）を観測し蛍光スペクトルを得た。測定には三次元スペクトルの測定が可能な日立蛍光分光光度計 F4500（励起光スリット幅：10 nm、発光（蛍光）スリット幅：5 nm）を用いた。

Fig. 75に一例として内側部分の蛍光スペクトルを示すが、約500nmの励起光により545nmに蛍光の発光強度極大が得られ、他の遺跡出土の琥珀とは類似した値を示した。

一般に蛍光スペクトルは主として分子内の共役二重結合に関する情報を与えるものと考えられるので、これらの点についても、今後各種試料と詳細な比較考察をする予定である (M. Sato, M. Mimura, K. Yamasaki, 2003)。

(佐藤昌憲、佐々木良子)

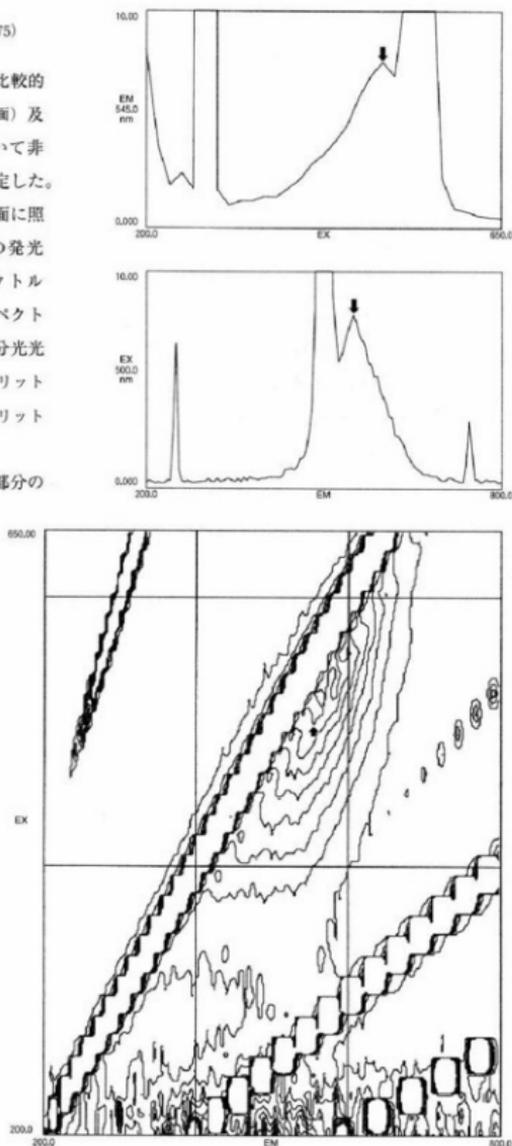


Fig. 75 試料（内側）の蛍光スペクトル

C 漆および繊維 (Fig. 76・77)

多数の微小な漆断片からなる一群の試料は発掘後に写真現像用バット(底面約30×40cm)内において硝酸塩溶液に浸されたまま30年近くを経過し現在に至っており、現状では溶液はすでに完全に蒸発し、乾燥した漆断片に多数の硝酸塩結晶が付着している状態である。今回、漆自体及び外観が織物状の付着物についての材質分析を依頼され、顕微赤外分析法による調査をおこなった。あらかじめ測定に適した外観の試料を幾つかビーカーに取り、蒸留水に浸して数日ごとに新しい蒸留水と交換して硝酸塩を除去し、最後に、漆片を濾紙上に置いてアシケーター内で完全に乾燥させてから赤外分析をおこなった。

測定にはまず光学顕微鏡下で試料片を観察し、漆片及び漆に付着した織物状物質をそれぞれ微量(通常約1mg以下)採取し、金属台上でプレスして薄層にした後、そのまま赤外分析計の測定部に移し、反射配置の透過法で赤外スペクトルを測定した。装置は顕微赤外(FT-IR)分析計(島津(株) Prestige21, ATM8800, 積算回数:100, 分解能:4または8 cm^{-1})を使用した。

得られた赤外スペクトルはFig. 76・77に示してあるが図の縦軸は透過率(%) (曲線が下に位置するほど赤外エネルギーの吸収が強い)、横軸は波数(電磁波の1cm当たり波の数(単位はカイザーと呼称する)、図の左方向ほどエネルギーが大きい)を表している。

試料は発掘後に硝酸塩に浸漬後、過度に乾燥したため漆層数層が互いに剥離しているものが多かったが、今回の測定ではそれぞれの層はほぼ標準的な漆の赤外スペクトルに対応する吸収帯を持っていることがわかった。

Fig. 76にその一例を示したが、主な吸収ピークは幅広い約3400 cm^{-1} の吸収、2900と2850 cm^{-1} 付近の鋭い2本の吸収、1600から1400 cm^{-1} 付近の幅広い2本の吸収、1400から1000 cm^{-1} にかけての幅広い吸収などである。

試料の中には顕微鏡観察で漆層の裏面に褐色の織物組織(平織り状)が付着していることが明瞭にわかるものがあったが、その繊維状部分を採取して赤外分析をおこなっても赤外スペクトルは漆に類似したものしか得られなかった。精細な確認には走査電子顕微鏡による繊維側面と断面の形状観察が必要であるが、おそらく元の繊維は完全に分解し、各繊維の外側部分に付着する漆層だけが残存して外観的には織物状を呈しているものと考えられる。

同じような織物状部分を持つ試料片を多数調査した結果、極めて少数例ではあるが繊維材質が残存している部分もあつたことが分かった。Fig. 77にそのような状態の赤外スペクトルを示してある。主な吸収としておおよそ3250 cm^{-1} 、2900 cm^{-1} 、1650 cm^{-1} 、1500-1250 cm^{-1} の広い吸収帯、1200-1000 cm^{-1} の広い吸収帯などは植物繊維に典型的な吸収パターンを示し、その詳細な吸収ピークの特徴から試料はおそらく苧麻であると推定される。しかし一層精細な確認を得るにはやはり走査電子顕微鏡による観察も今後必要である。

(佐藤昌志、佐々木良子)

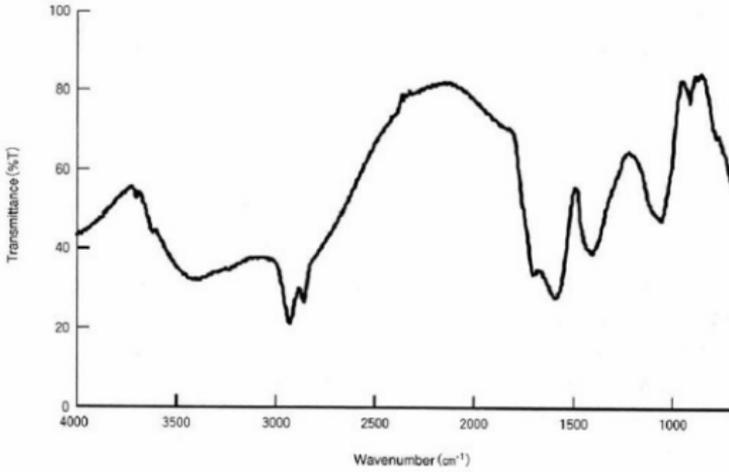


Fig. 76 漆の赤外スペクトル

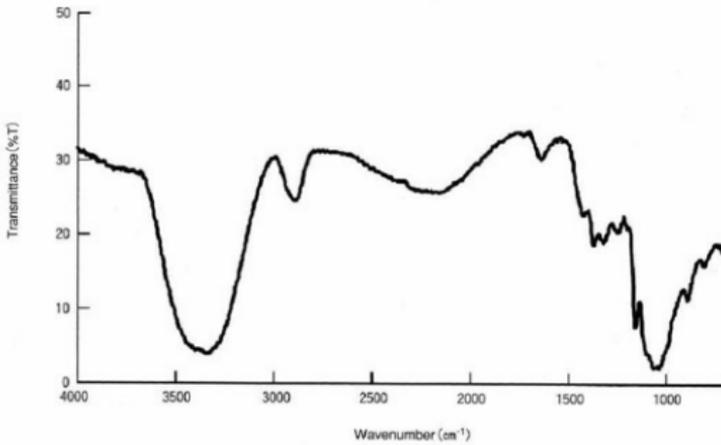


Fig. 77 繊維状物質の赤外スペクトル

5 音乗谷古墳出土埴輪の特質

音乗谷古墳ではこれまで畿内ではまれにしか確認できていなかった埴輪が数多く出土している。その要因としては古墳の特性ももちろん考えられるが、むしろ、6世紀代の畿内の古墳における埴輪について良好な資料に恵まれてこなかったこととともに、全体のわかる資料が少ないために破片から本来の構成を再現することが難しかったことがあるのではなかろうか。今後の資料の増加を期待しつつ、類例の少ない形象埴輪について若干の検討を加えておきたい。

A 馬形埴輪

横坐り馬については、杉山晋作・井上祐一らによる先行研究がある（杉山ほか1997）。それに導かれながら、集成すると以下の諸例があげられる。

- ・群馬県新田郡尾島町世良田諏訪下遺跡23号墳（杉山ほか1997）
- ・群馬県佐波郡東村雷電神社跡古墳（東村第7号墳）（松村1969・小山市博1983）
- ・群馬県佐波郡赤堀町田向井2号墳（井上2004）
- ・山内清男考古資料動物埴輪39（井上2004）
- ・埼玉県児玉郡美里町白石久保2号墳（長縄・中沢2003）
- ・埼玉県行田市酒巻6号墳（井上2004）
- ・千葉県山武郡横芝町塚塚古墳（杉山ほか1997）
- ・茨城県東茨城郡茨城町小幡北山遺跡2号窟（茨城町教委1989）
- ・三重県多気郡明和町神前山第1号墳（下村1973）
- ・奈良県天理市岩室池古墳（天理市教委1985）
- ・和歌山県和歌山市大日山35号墳（2004年度出土品の整理中に実見）
- ・京都府相楽郡木津町音乗谷古墳（本報告）

公表された例は以上の計12例である。全体的に見ると、畿内が2例、近畿地方に三重県を加えてもわずか4例にすぎないが、関東地方の馬形埴輪の多さから、西日本における横坐り馬の比率が少ないとは必ずしも言えないだろう。上掲した中では三重県神前山1号墳出土例がTK23型式の須恵器をともない、もっとも時期の遡る5世紀後半の資料といえる。これらの例からも東国の自由な裁量の産物というのではなく、畿内を中心とする西日本に横坐りの馬を加えた組成のモデルがあったと見るべきであろう。

山内資料のそれは、もっとも立体的な表現をもち、足を掛けるための水平な板状部分の突出も大きい。これに対し、神前山1号墳では幅のある突帯によって当該構造を表現するだけで、水平板の突出表現はなく、コの字を90度時計回りに回転させたかたちとなっている。ただし、その下に輪鏡の表現が見られること、水平方向の突帯の中央下部に別の表現が加えられており、その下の輪鏡と区別されていることなど、異なる写実性が認められる。水平板構造とは異なる足掛け装置であった可能性もある。

しかし、基本は短冊形水平板を下げるしくみであったといえる。音乗谷古墳のそれは、かな

り省略され、板というよりやはり突帯状になっているが、その表現は岩室池古墳のそれと近い。おそらく、製作された年代とともに生産組織が近似していたことを窺わせる。

ところで、音楽谷古墳では横坐り馬が1体であるのに対して、より豪華に飾った馬が1体、そして鞍をもつ駄馬が2体、鞍をも持たない駄馬が1体得られている。破片まで検討したが、まだこの他に別の馬があった可能性は低い。この5体が本来の構成を伝えていると見てよいだろう。全体の構成がわかる点で、重要な資料であると言える。横坐り馬は井上氏らにより女性の騎乗用と考える意見が今のところ妥当な見解として提示されているが、今後、単体どうしでの評価ではなく、こうした全体の組成を比べることによっても、横坐り馬の性格やそれをそなえる古墳の階層性などがはっきりするに違いない。

なお、音楽谷古墳から出土した馬形埴輪の頭部成形方法は、西日本でまったく知られていなかったものであり、逆U字形に曲げて作った頭部を胸の上に固定し、その鼻先のみ塞ぐという特殊な方法をどの個体も採用していることが注意される。類似の成形方法は、埼玉県行田市酒巻14号墳例（行田市1988）など関東地方で比較的多く認められるもので、関東独自と考えられてきた。筒状の頸の下をあとから挟む例は三重県石薬師63号墳例（三重県埋文2000）などでときどきみつかるとは、完全に開放のままの例はこれまで知られていなかった。

関東地方で見られるものは、6世紀でも後半に下るもので、しかも鼻面を塞がないままにしている点が異なり、集成に基づいて判断せねばならないが、関東地方で流行したこの頭部成形法も、音楽谷古墳の段階ですでに畿内で誕生し、それが伝授されて遠方で盛んになった可能性が浮上してきたと言える。

B 牛形埴輪 (Fig. 78)

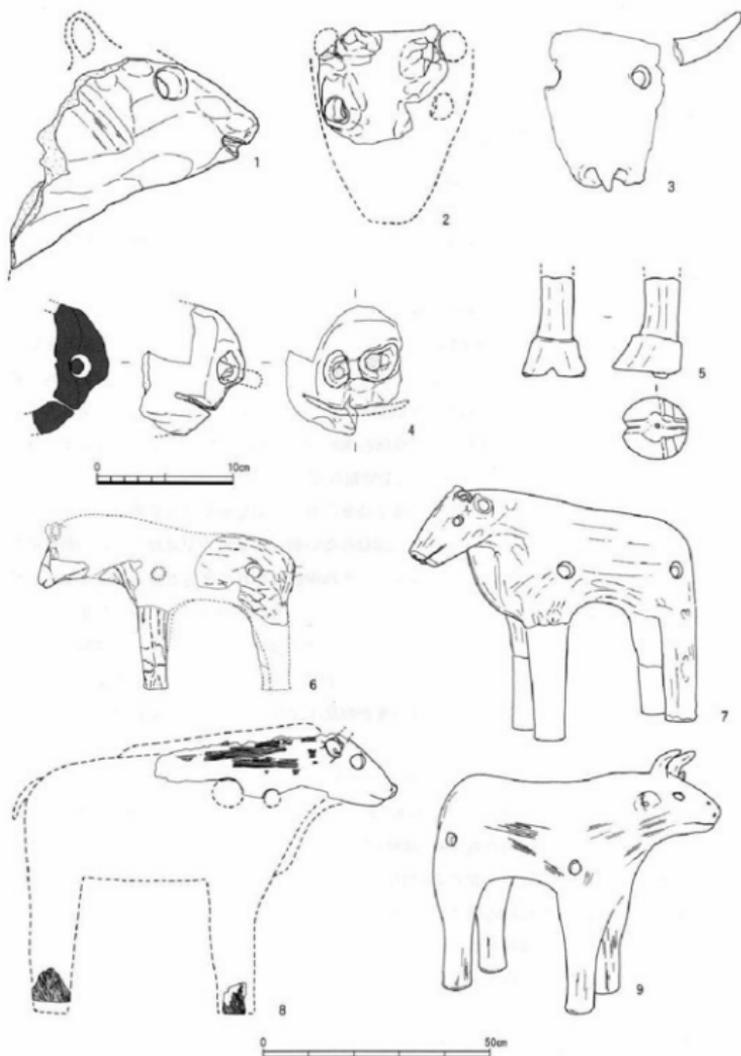
音楽谷古墳では牛と見られる小型の動物埴輪が複数出土している点でも珍しい。以下、牛形埴輪の出土例を掲げておく。

- ・大阪府守口市梶2号墳（守口市教委1991）
- ・大阪府高槻市今城塚古墳（高槻市しろあと歴史館2004）
- ・奈良県磯城郡田原本町羽子田遺跡（岡崎・中村1984）
- ・奈良県葛城市寺口忍海D-27号墳（吉村1988）
- ・兵庫県朝来郡朝来町船宮古墳（朝来町教委1990）
- ・千葉県山武郡横芝町殿塚古墳（歴史博2003）
- ・京都府木津町音楽谷古墳（本報告）

（以下は角の破片と見られるものが出土した古墳）

- ・京都府京都市穀塚古墳（京大文学部1968）
- ・大阪府南河内郡美原町黒姫山古墳（末永・森1953）
- ・千葉県市川市法皇塚古墳（市川考古博2002）

牛の埴輪は、本墳を除いて確実に見られるものには上記計6古墳出土例が知られている。それ以外に、角部分の破片と見られるものが出土した3例を加えると、本墳を含め10古墳からの出土が知られていることになる。



- 1・2・6 京都府音承谷古墳 3 千葉県殿塚古墳（歴史博2003を写真トレース）
 4 兵庫県船宮古墳（筆者実測） 5 奈良県寺口忍海D-27号墳（吉村1988）
 7 奈良県羽子田遺跡（岡崎・中村1984を写真トレース） 8 大阪府靴2号墳（守口市教委1991）
 9 大阪府今城塚古墳（高槻市しろあと歴史館2004を写真トレース）

Fig. 78 牛形埴輪（1～5 1:4、6～9 1:12、3 縮尺不同）

角を除く形態では、羽子田古墳例がもっともよく全体を伝えており、顎から胸の前にかけて皮のたるみが強調されているところが最大の特徴である。梶2号墳例は図面から窺うに顎の下にやはり皮のたるみが貼り付けによって表現されていたことがわかり、音楽谷古墳例を牛と推定した根拠の妥当性を保証するものとなっている。

しかし、問題は角の表現である。角だけが確認できる例を含め、牛形埴輪を同定するには先端が鋭い湾曲した角をもつことが要件になっているように見える。にもかかわらず、音楽谷古墳は明らかに短い突起状の角をもつだけで、その違いは小さくない。

しかし、船宮古墳例がこれまでのところ唯一鼻輪を写実的に表現していることを見ると、牛の埴輪を作るのにある程度自由な表現の選択がなされたことも理解されよう。黒姫山古墳では後円部墳頂から出土していることを考えると、牛の埴輪には本来、供献品としての意味があったことも想定する必要があるかもしれない。それならば、仔牛を表現することもあり得たであろう。音楽谷古墳の牛形埴輪は、馬形埴輪など葬儀に参列したものを象ったのではなく、儀礼の中で捧げられた牛の存在を表したもののなかもしれない。

しかしながら、黒姫山古墳の角が牛形埴輪の一部であると断定することが難しいならば、牛形埴輪も馬形埴輪などと同様に、身分の高い人に所有が限られていた当時における被葬者の権威を反映するものであったことは当然考えなければならない。

ところで、牛形埴輪は、先の横坐り馬に比べて、畿内からの出土が圧倒的に多い。関東地方をはじめとして遠隔地での少なさは、その所有が畿内先進地域に偏って認められていたことを示している。もっとも古い事例としては、畿内ではないが畿内からさほど離れていない船宮古墳が5世紀第3四半期頃と推定できる。これは角だけが出土した黒姫山古墳とほぼ同時期となる。それ以外は6世紀以後のものだと判断され、牛が馬に比べて遅れて普及したことを伝えていよう。

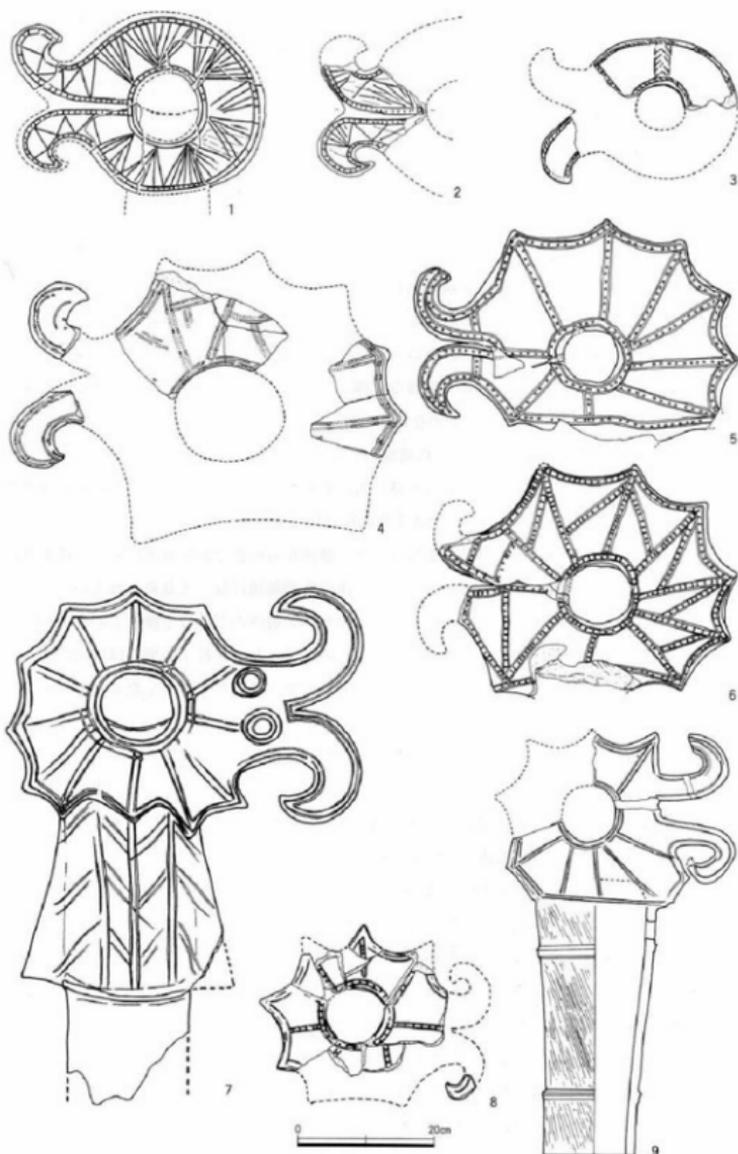
C 双脚輪状文形埴輪 (Fig. 79)

ここでは駢形埴輪全体を扱う議論はせず、名称通り双脚輪状文の形をした埴輪に限って扱う。管見に触れたものに以下の8遺跡出土例がある。

- ・奈良県天理市荒蒔古墳 (可見郷土館2002)
- ・和歌山県和歌山市大谷山22号墳 (末永ほか1967)
- ・和歌山県和歌山市井辺八幡山古墳 (森ほか1972)
- ・兵庫県神戸市新内古墳 (神戸市1989)
- ・香川県仲多度郡満濃町公文山古墳 (樋口1956)
- ・愛媛県北条市新成36号墳 (正岡2003)
- ・大分県東国東郡安岐町築山古墳 (宇佐風土記の丘1998)
- ・京都府相楽郡木津町音楽谷古墳 (本報告)

双脚輪状文形埴輪を出土した遺跡は上記8例にとどまる。ただし、築山古墳例は双脚部を確認できておらず、盤状部を充填している線刻も他とは異質で比定にやや疑問を残す。

周知のとおり、関東地方には蕨手状の双脚を横に張り出させないが、鋸歯状ないし星形の輪



- 1・2 京都府音楽谷古墳 3 愛媛県新城36号墳 (正岡2003を改変トレース)
 4 和歌山県井辺八幡山古墳 (森ほか1972) 5・6 和歌山県大谷山22号墳 (末永ほか1967)
 7 奈良県荒崎古墳 (可児市2002を写真トレース) 8 兵庫県新内古墳 (筆者実測)
 9 香川県公文山古墳 (樋口1956)

Fig. 79 双脚輪状文形埴輪 1:8

郭をもついわゆる鬚形埴輪が数多く認められる。中央にやはり円孔があり、長い円筒状の台部先端に表現することから、かねてよりそれらの関係は注意されてきた。これらは先端に肩状の表現をもつ別の鬚形埴輪と構造が大きく異なる。「鬚」としては本来肩状の後者の方がふさわしいだろう。そう考えると、前者はやはり双脚輪状文形埴輪の類例である可能性が高い。その分布域が重ならないこともそれを示唆する。ただし、群馬県碓氷郡音山古墳の胡座する人物埴輪がかぶっている甕の鬚が双脚をしっかりと表現した意匠になっていることから、双脚の有無がはっきりと認識されていたことは確実である。

さて、対象とする狭義の双脚輪状文形埴輪はきわめて数が少ないが、南海道に集中していることに気がつく。そしてさらに築山古墳のある西海道の豊後にまで及んでいるのであり、瀬戸内海南岸沿いのさかんな交流がそうした分布の偏りの原因になっていたであろうことは想像に難くない。唯一、瀬戸内海北岸の新内古墳例もこの内海交通の所産と見て誤りないだろう。

しかし、ここによりやく音楽谷古墳の例を加えることができ、南海道以外の地域にも存在、あるいは将来的に出土する可能性が強まった。

双脚輪状文形埴輪をさらに型式学的に分けるとすれば、まず、盤状部が円形のものと同輪郭が連弧状のものに分けられよう。前者をA類、後者をB類とすると、音楽谷古墳例はA類となり、新城36号墳だけが仲間となる。台部の装飾からも型式分類が可能なようだけれども、荒時古墳のように綾杉文を施した下部の形象部分を有するのか、公文山古墳例のようにそのまま円筒部に移行するのか現状でわかるものは少ない。音楽谷古墳例についてもわからない。

こうした形態上の特徴にとらわれず円筒部に盤状部を載せる造形上の特色から観察を加えてみよう。音楽谷古墳の場合、線刻のある前面を背後から円筒部の延長で支える構造になっている。表裏で大きな違いを見せるのに対して、同じB類の新城36号墳例は表裏の作り分けがはっきりしておらず、円筒部をつぶした上に表裏ほぼ対称形の形象部をこしらえていて、両面に線刻を施しているという大きな違いがあることに気づく。この構造においては、新城36号墳例は連弧状輪郭の公文山古墳例や新内古墳例と変わらず、表裏の線刻の有無は円筒部と盤状部の接合方法に関係があるらしいことが知られるのである。

しかしながら、造形的に新城36号墳とよく似た和歌山県の2遺跡出土例は、線刻は片面に限られ、畿内の他例との類似を見せておりそう簡単には割り切れない。

以上のように、個々にそれぞれ相関が認められるために、今のところA類、B類以上に型式学的特徴に由来する分類呼称をあえて用いないほうがよさそうである。むしろ、南海道にひろがっているといっても、個々の特徴がすでに強く現れていることを知っておく必要がある。

なお、この種の埴輪がきわめて限られることについては、当然、木製品による代用、あるいは木製品のほうが本質的な樹立であった可能性を考えておかなければならない。滋賀県守山市下長遺跡から出土している儀杖とされる木製品や奈良県橿原市四条古墳から出土している鬚形の木製品などとの補完関係があった可能性が高い（鈴木2000）。

しかし、これらの木製品はいずれも音楽谷古墳例のように盤状部の輪郭は円形で、中央にも円孔があくA類に相当する。その中には古墳時代前期に遡るものもあり、A類の意匠が伝統的なものであったことが知られる。これに対して、B類の意匠はもともと九州の装飾古墳壁画に多用されていることが広く知られているように、6世紀以後にしか見られず、材質を問わず新

しい意匠であると言うことができる。A類の伝統のあるところに大陸の蓮華文が加味されて誕生したものではなかろうか。

なお、音楽谷古墳では双脚輪状文形埴輪が墳丘各所に配されていたことが知られたこともその樹立方式を知る上で重要である。

D 玉杖形埴輪

玉杖形埴輪は、音楽谷古墳の形象埴輪の中でもっとも多く使用されている埴輪である。これは6世紀前半という時期を考えれば畿内では通有のことであるが、本古墳では、墳頂周囲においても確実にめぐらせていることを確認できたのは非常に稀有なことと言わねばならない。それとともに、大小の作り分けが存在し、小型品は上述のとおり墳丘各所に円筒埴輪列にまじえるか接するように点々と配置したと考えられるのに対して、大型のものはどうやら形象埴輪集中域にのみ使用されていた公算が高まった。

以前に当該埴輪を簡単に集成したとき、もともと1段厚く作られていた両脇の半円形削り込みをささむ中段をしっかりと上下と区分し、大きな形象部を有するなどの特徴のある一群と、中段の区画が忘れ去られ、頂部にツノ状突起を有するようになる別の一群とに大別できることを説いた。両者の差は円筒部と形象部の比率とも関わる。つまり、前者は形象部が大きいのに対して、後者は円筒基部の方が形象部より高いことすらあるのである（高橋1995）。

こうした2群に対して、前輪では若干の状況証拠より、前群から後群への相対的推移を想定したのである。

この大別に対して、音楽谷古墳の大小2つの玉杖形埴輪がどう対応するか調べてみると、まず、小型のものは法量的に滋賀県山津照神社古墳（高橋1995）や奈良県岩室池古墳（天理市教委1985）のそれにきわめてよく合致することがわかる。中段の分離もすでおこなっていない点も同じである。したがって、これらは後群に属し、その円筒部は形象部と同じくらい長いものであったと考えてよいだろう。

これに対して、音楽谷古墳の大型品は、大阪府軽里4号墳や奈良県石見遺跡の例ほど大きくはなく、大阪府川西4号墳例ほどの大きさであることが知られる。そして中間段を意識した沈線が、かろうじて上下で2本ずつ水平に引かれている。すなわち、音楽谷古墳では新旧の二群の共存が認められるのであり、大型品は意匠的には上述の先の一群に対応することがわかる。

全体として、大型のどっしりとした玉杖形埴輪から小型で丈の高い玉杖形埴輪へと生産の主体が移ることは大筋では動かないが、小型のものがいち早く墳丘の表飾として大量に作られるようになったのに対して、大型のものは重要な場面を荘厳するために残存し続けたことが初めて明らかになったのである。

E 音楽谷古墳出土埴輪の評価

以上の個別の検討を踏まえた上で本古墳の埴輪について総括しておこう。南掘削りを中心に出土した人物・動物の埴輪は、短い前方部の上に配置されていたものと考えられる。

まず、総計5個体と見られる馬形埴輪が存在したことがわかった。22m規模の中小規模古墳としては、数が多い方に属すると評価できる。しかし、本古墳の場合、飾り馬を多くそろえる

のではなく、それらに意図的に馬装の違いを明示し、見るものにそのことを伝えようとしていることが注目される。つまり、もっとも豪華に飾った騎乗用の馬として馬形埴輪4を、そしておそらく女性の騎乗用として馬形埴輪1を対で用意し、このほかに鞍のみを装着した馬形埴輪2と、馬形埴輪5を交通手段や運搬手段として、そしてさらに用途が限定できないが役馬としての鞍をつけない馬形埴輪3をそろえているのである。6世紀前半における馬の多様な利用形態を示すものであり、ほぼ100年前に朝鮮半島からもたらされた馬が生活のすみずみに浸透していることを教えてくれる。

いっぽう、犬や鳥、それに牛と思われる埴輪など豊富な種類の動物埴輪がそろって見つかった。それらに比べて人物埴輪は良好な遺存例にめぐまなかったが、おそらくわずかに位置をずらしてやはり前方部に集中的に配されていたものが、削平、ないし流出してしまっただけに違いない。

家に限っては、集中域とは離れ北側の斜面などから出土しているのは本来墳頂に置かれていたことを想像させる。また、双脚輪状文や玉杖の埴輪も蓋形埴輪同様、集中域以外でも樹立することがわかった。

円筒埴輪についてはいくつか群別が認められた。主流となる1群は墳頂に独占的に並べられていたようだが、必ずしもそうした群別と形象埴輪の組成との対応関係は取れていない。せいぜい、橙色の発色が特徴の双脚輪状文形埴輪に共通する胎土の円筒埴輪が3群として存在する程度であって、生産体制を復元するのは困難である。

また、朝顔形埴輪を1本ももたないという個性も認められた。

多彩内容をもつこれら総体は、大型前方後円墳を中心によりやく資料の揃いつつある畿内の6世紀の埴輪を代表するものと言えよう。しかし、とくに中小規模墳の対比資料にめぐまらない現在、性急に組成を論じることは控えなければならないだろう。

そこで、次に近隣の資料について円筒埴輪を中心に比べてみることにしたい。その際、何より、すぐ近くの第9号地点音如ヶ谷瓦窯のSK17から出土した2点の円筒埴輪 (Fig. 80) が問題となる。

ひとつは非常に重い須恵質の円筒埴輪で (Fig. 80-2)、青

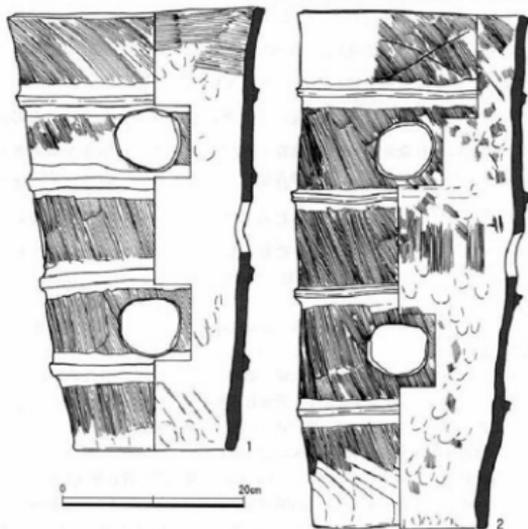


Fig. 80 第9号地点SK17出土埴輪 1:6

灰色。器壁も厚く、最上段外面に×印のヘラ記号がある点で、音楽谷古墳の円筒埴輪と共通性を見せるが、底部は倒立後タタキ締める底部調整をおこなっており、全体の特徴は音楽谷古墳の埴輪とは異なることがわかる。同じく、別の土師質の個体も (Fig. 80-1)、厚手で胎土を含め音楽谷古墳にはないものであることがわかる。しかし、製作年代は底部調整の見られることやどちらかといえば、形態的な崩れが少ないことから、6世紀前半頃と見られ、音楽谷古墳と大差ない時期に比定できる。

きわめて近い距離にありながら、これは別の古墳ないし遺跡にともなうものと判断せざるをえないことと、のちの土地利用を考えると、近くに古墳があった可能性に加え埴輪窯があった可能性も考えた方がよいかもしい。

いっぽう、第13号地点出土の埴輪はまた、両埴輪群とも異なる特徴をもっていた。橙色の胎土の発色と上に開く形態をもち、タテハケメを比較的丁寧に傾けず施す。そして、わずかにB種ヨコハケメをもつ個体があるが、中には底部調整をおこなう個体もある。透かし孔は大きく、朝顔形埴輪と盾と思われる形象埴輪もあるというものであった。

これは、音楽谷古墳やSK17出土品に比べると時期的に先行する特徴と見ることができ、鹿川対岸の上人ヶ平古墳群や低地部の弓田遺跡出土品との関連が問われよう。

弓田遺跡出土埴輪はちょうど第13号地点出土品の円筒埴輪の特性に近い。すなわち、B種ヨコハケメを施すものを一定量含みつつ、底部調整が施されるものが目立っている。ただし、完形に復元された個体は計4段構成のものが多く、違いもないわけではない。埴輪の窯跡や集積場としての性格が考えられている弓田遺跡との関係は重要で、第13号地点の特殊な埴輪配列の解釈にも与える影響があろう。今後、両地点の間の地点で調査が進むことが期待される。

対岸の上人ヶ平古墳群と埴輪窯では5世紀後半TK208型式期の5号墳を皮切りに窯の操業も始まるようで、第13号地点や弓田遺跡より早い。この上人ヶ平遺跡ならびに古墳群を受けるかたちで第13号地点やおそらく第15号地点の造営が始まったのだろう。残念ながら第15号地点の埴輪については本書で触れることができなかった。

これらに比べると、やはり音楽谷古墳の埴輪は系列を異にする可能性が高い。その後への継続性も認められないので、特殊な集団の関与を考えたほうがよいと思われる。それが、奈良山東部に所在する古墳に比べるとはるかに規模の大きい帆立貝形古墳を築きえた被葬者の力を反映したものであり、そこに見られる新たな埴輪の様式や製作技法は、以後の埴輪生産を大きくリードする立場を誇示するものであった。

参考文献

- 相原嘉之1999「キトラ古墳から高松塚古墳へ」『海が好きだ』藤代泰氏追悼文集刊行会
青木相夫ほか1990『続日本紀』2 岩波書店新日本古典文学大系
朝来町教育委員会1990『船宮古墳』朝来町文化財調査報告書第2集
明日香村教育委員会1978『真弓マルコ山古墳』
明日香村教育委員会1996『史跡マルコ山古墳環境整備報告書』明日香村文化財調査報告書第1集
明日香村教育委員会1999『キトラ古墳学術調査報告書』明日香村文化財調査報告書第3集
明日香村教育委員会2004『マルコ山古墳の調査』『明日香村発掘調査報告書2004』
網干善教1999『高松塚古墳の研究』同朋舎

- 網干善教2003『終末期古墳の研究』同朋舎
- 市川考古博物館2002『市川市出土の埴輪』市川市川考古博物館研究調査報告第8冊
- 井上祐一2004『第三章 動物埴輪資料』『山内清男考古資料14』奈良文化財研究所史料第66冊 奈良文化財研究所
- 猪熊兼壽1976「飛鳥時代墓室の系譜」『研究論集』奈良国立文化財研究所学報第28冊
- 茨城町教育委員会1989「小幡北山埴輪製作遺跡 第1次～第3次確認調査報告」
- 汪勃2002「高松塚古墳壁面天文図の年代」『関西大学博物館紀要』第8号
- 大阪府教育委員会2005「ツカマリ古墳発掘調査現地説明会資料」
- 岡崎晋明・中村潤子1984「大和の埴輪」奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 橿原考古学研究所1972『壁面古墳高松塚』奈良県教育委員会・明日香村
- 可見郷土歴史館2002『埴輪スペシャル』
- 金子裕之1984「平城京と葬地」『文化財学報』第三集 奈良大学
- 河上邦彦1985「凝灰岩使用の古墳」『末永雅雄先生米寿記念献呈論集』
- 河上邦彦1995『後・終末期古墳の研究』雄山閣出版
- 上林史郎2004「古墳の終焉と古代の木棺墓」『古墳から奈良時代墳墓へ』近つ飛鳥博物館
- 木内武男1961「舍利容器と埴輪」『世界考古学大系』4
- 行田市教育委員会1988『酒巻古墳群』昭和61年度～昭和62年度発掘調査報告書、行田市文化財調査報告書第20集
- 京都大学文学部1968『京都大学文学部博物館考古学資料目録』2
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター1991『上人ヶ平遺跡』京都府遺跡調査報告書第15冊
- 群馬県教育委員会1998『総貫観音山古墳Ⅰ』墳丘・埴輪編
- 神戸市教育委員会1989『昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報』
- 国立歴史民俗博物館2003『はにわ-形と心-』朝日新聞社
- 小山市立博物館1983『第4回企画展 古墳時代の乗馬』
- M. Sato, M. Mimura and K. Yamasaki, 2003 "Studies on Archaeological Ambers in Japan", *Proceeding of the First Forbes Symposium at the Freer Gallery of Art*, pp. 8-14, Edited by Paul Jett et al., Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution, Washington DC, USA.
- 下村登良男1973『三重県神前山第1号墳発掘調査報告書』明和町文化財調査報告2 明和町教育委員会
- 白石太一郎2000『古墳と古墳群の研究』塙書房
- 末永雅雄・森浩一1953『河内黒姫山古墳の研究』大阪府文化財調査報告書第1輯
- 末永雅雄ほか1967『岩橋千塚』関西大学文学部考古学研究紀要第2冊
- 杉山晋作・井上祐一・日高慎1997「古墳時代の横坐り乗馬」『古代』第103号 早稲田大学考古学会
- 鈴木裕明2000『「權威の象徴」-古墳時代の威儀具-』橿原考古学研究所附属博物館
- 高槻市しろあと歴史館2004『発掘された埴輪群と今城塚古墳』開館1周年記念特別展図録
- 高橋克壽1995「山津照神社古墳の埴輪と6世紀の畿内の埴輪」『琵琶湖周辺の6世紀を探る』京都大学文学部考古学研究室
- 田畑基2004『第二章 考古学から見た和田山』『和田山町史』上巻
- 塚原二郎2004『東京都武蔵府中熊野神社古墳の調査』『考古学研究』51-2
- 塚原二郎・板詰秀一・組野英二・青木敬2004「3. 府中市 武蔵府中熊野神社古墳の調査(2)」『東京都遺跡調査・研究発表会30 発表要旨』東京都教育委員会
- 天理市教育委員会1985『岩室池古墳 平等坊・岩室遺跡』天理市埋蔵文化財調査報告第2集
- 長滝歳康・中沢良一2003『白石古墳群Ⅱ-後海道地区・久保地区-』美里町遺跡発掘調査報告書第14集 美里町教育委員会
- 奈良文化財研究所1958「飛鳥寺発掘調査報告」奈良国立文化財研究所学報第5冊
- 奈良文化財研究所・文化庁2004『キトラ古墳の発掘調査』
- 沼津市教育委員会1990『清水柳北遺跡発掘調査報告書』その2、『沼津市文化財調査報告』第48集
- 橋本稔・辻本和美1997「弓田第2次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第74冊
- 花谷浩・村上隆2004「キトラ古墳の調査-飛鳥藤原第130次」『奈良文化財研究所紀要2004』
- 花谷浩2004「キトラ古墳の最近の調査について」『明日香風』第92号
- 花谷浩2005「キトラ古墳の発掘調査と壁画保存」『大阪府埋蔵文化財研究会(第50回)資料』

- 樋口隆康1956「双脚輪状文とさしは—新出異形埴輪の意味するもの」『古代学研究』13 古代学研究会
- 兵庫県教育委員会2002「シンポジウム古代但馬の王墓をめぐって」資料
- 福岡県教育委員会1980「干潟遺跡Ⅰ」福岡県文化財調査報告書第59集
- 藤田藏1971「舍利容器と鎮壇具」『新版考古学講座』
- 府中市教育委員会2004「速報 上円下方墳の発掘調査 府中熊野神社古墳」
- 文化庁2005「高松塚古墳の調査」(現地説明会資料)
- 松村一昭1969『鞍波郡東村の古墳(群馬県佐波郡東村々誌資料第11)』東村々誌編纂委員会
- 正岡隼夫2003「愛媛県出土の双脚輪状文埴輪の新資料」『古代学研究』160
- 三重県埋蔵文化財センター2000「石薬師東古墳群・石薬師東遺跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財調査報告200-2
- 水野正好ほか1994『「天鳥麩」総覧』新人物往來社
- 村上隆2000「飛鳥寺塔心礎から出土した金製品の材質に関する考察」『奈良国立文化財研究所年報2000-I』
- 村上隆2003『金工技術』日本の美術443 至文堂
- 森浩一ほか1972「井辺八幡山古墳」同志社大学文学部考古学調査報告第5冊 同志社大学考古学研究室
- 守口市教育委員会1991「梶遺跡 市営住宅梶第一団地建替に伴う埋蔵文化財発掘調査」守口市埋蔵文化財調査報告
- 吉村規温1988「6 D-27号墳」『寺口忍海古墳群』新庄町文化財調査報告第1冊 新庄町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所

第Ⅵ章 結 語

最後に石のカラト古墳および音楽谷古墳の築造年代を含め簡単にまとめておきたい。

石のカラト古墳の築造年代を考察するうえで、研究者によって何を重要視するかに大きな違いが認められる。たとえば、石櫛の断面形態を重視する立場をとるならば、その天井の高さの減少する順に並べることになる。そうすると、石のカラト古墳はキトラ古墳に併行して、それより遅れてマルコ山古墳、そして高松塚古墳が築かれたことになる。キトラ古墳と高松塚古墳のこの先後関係は、壁面の題材を重視して、キトラ古墳には見られなかった人物群像の加わる高松塚古墳をそれより新しくする意見と合致する。

いっぽう、出土土器を重視する立場では、石のカラト古墳から出土した須恵器を古墳築造時の使用品と判断し、奈良時代前半に下ると判断する。ただし、古墳完成後の外周平坦面での溝の増設が確認され、その判断材料の須恵器が心もとないことはすでに述べたとおりである。このほか、都城の葬地を考える視点で、平城宮の時期に当然下げて考えるべきだという立場もある。

こうしたさまざまな見解のある中で、本報告では、従来から言われてきているようにマルコ山古墳、キトラ古墳、高松塚古墳とそれぞれ類似点を多く所有していることを確認した。その中で、とくにキトラ古墳との関係が墳丘、石櫛双方において強いことがわかる。

いっぽう、墳丘構築法での土嚢積み等の工法は、葬石の採用、比較的緩い平坦地に築かれた選地の違いとも関連し、異なる造墓集団の存在を推定させる。その理由に上円下方墳という形態が大きく関わっていることが明らかになった。

そして金・銀製玉や金箔など注目すべき遺物の存在も石のカラト古墳の重要性を考えさせるものであった。それらを、積極的に評価すると、平城宮遷都前後の短い時間幅の中で石のカラト古墳が造られたことが考えられよう。それにともない他の3古墳のいずれかが奈良時代に下がる可能性もけっして否定できないだろう。これが元明太上天皇が終止符を打とうとした墓制であったに違いない。しかし、実際はその後も石材を使用するような埋葬施設を有した古墳が造られたことは、鎌倉時代の聖武天皇墓の盗掘記録から窺える。

対して、音楽谷古墳は全長約22mの帆立貝形前方後円墳であることがほぼ確定した。その多彩な形象埴輪の内容は、大阪府今城塚古墳や和歌山県大日山35号墳など近年明らかになりつつある6世紀の大型古墳の埴輪配列と対比できる中小古墳での樹立例として、今後の畿内の埴輪を考える上できわめて重要な基本資料といえる。円筒埴輪・玉杖形埴輪に見る特徴は明らかに6世紀前半に収まることを示しているが、採集された須恵器は、6世紀前半のものに6世紀後半のものが混ざっており、6世紀後半に追葬ないし追加の祭祀がおこなわれたと見られる。

墳丘の掘削りに面する前方部上に置かれた形象埴輪が、失われた人物埴輪各種を含め全体としてどのようなものであったのか大いに興味があるが、そこに樹立された埴輪については、奈良山丘陵の南で採葉を開始していた一大埴輪生産地である菅原埴輪窯跡群との関係を含めてさらなる検討を加えていく必要があるだろう。

RESEARCH REPORT

OF

NARA NATIONAL RESEARCH INSTITUTE FOR

CULTURAL PROPERTIES, NARA, VOL. 72

NARAYAMA EXCAVATION REPORT I

INVESTIGATIONS

OF

THE ISHINOKARATO TUMULUS AND THE ONJOGADANI TUMULUS

ENGLISH SUMMARY

INDEPENDENT ADMINISTRATIVE INSTITUTION

NATIONAL RESEARCH INSTITUTE

FOR

CULTURAL PROPERTIES, NARA

2005

Summary

This report is the archaeological report of the several tumuli in Narayama hills located in the north of the Nara city and the southern end of the Kyoto prefecture. Those excavations were done in 1972 to 1979 for the gigantic new town development project. Among them four tumuli were excavated, of which two are the most important. One is of the Ishinokarato tumulus that belongs to the final stage of Kofun period i.e. between the later 7th century and the beginning of the 8th century and the other is of the Onjogadani tumulus made in the first half of the 6th century.

It is well known that the Ishinokarato tumulus has many special features that can be compared to other similar tumuli of the final stage. Especially the Takamatsuzuka tumulus, the Kitora tumulus and the Maruko-yama tumulus are comparable in many structures as for planning, stone compartments and so on. The first two are very famous and focused today by having wall paintings in stone compartments. That kind of painting was newly introduced from the continent as a new mode and so restricted to have. So buried person in each tumulus is supposed to be such a noble person as to be recorded in the ancient historical documents like emperor's family.

The Ishinokarato tumulus was made on the border line between Nara prefecture and Kyoto prefecture. So it is also called Kazahahi tumulus by Kyoto side naming. It is located on the rather flat ground from where good eastern and southern views are available but northern and western views are limited. The shape of the mound are so called Joenkahofun in Japanese. It is a mounded tumulus having a dome-shaped knoll on a square base. This kind of tumulus sums up to only three in Japan. The mound is paved by stones and rectangle flat area surrounding the mound is also paved by stones only in western and northern sides.

Under the mound and on the fringe of the rectangle flat area were set several drainage ditches. They are filled with pebble stones. But supplemental ditches were set after the mound was completed. They are not filled with stones.

The mound was fundamentally made by the method called Banchiku which needs so many stages to lay the soil steadily. And it also used soil bags to fix the end of each soil layer.

There is a stone compartment to protect a coffin in the center of the mound. Of course the coffin has been disappeared already. The compartment style is called Yokoguchi type Sekkaku, and also called stone-coffin shaped chamber. The length is 315 centimeters. It doesn't have any stone corridor to enter nor annex room. So

the shape is like a box made by several flat stone plates, but the front plate of the chamber can be set after the corpse and burial goods are put into it.

The front space of the compartment was used for the aisle to carry the stone plates. It was also used as tomb passage. There we could find the mark of roller rails to carry the heavy materials. And also we could know that the burial rite had been done there by the existence of cobble stone paving and a posthole. After the burial rite soil was laid in front of the compartment by the same method as the mound building. After that whole surface of the mound and outer flat area were paved by stones.

Regret to say that stone compartment has already been intruded long before possibly in the medieval age and at that time front piece of the ceiling were removed. Intruders possibly stole the grave goods and consequently we could only find the remnants mainly from the filled soil. They are one gold ball, one silver ball, amber beads and silver ornaments of the decorated sword. In addition we could find the very small pieces of gold sheet and lacquer pieces. And one small dish of the earthen Sue ware was found in the fill of the tomb passage.

The chamber has some features. Firstly the ceiling is made roof-shaped. And the each ceiling plate was stiffly connected to each by rabbit joint. Floor plates are also supposed to be connected similarly as the ceiling. Inner surface has no paintings or mortar. The inner width of the chamber is 103 centimeters.

By analyzing the data of the excavation, we can propose some important issues.

It can be said that the scale that is 34.5 centimeters long was possibly used for the planning and measuring of the mound. Each size of the mound could be read in round numbers of this scale. Total length of the surrounding rectangle area is 600 times of the scale that amounts to 20.7 meters. The mound is 400 times of the scale that amounts to 13.8 meters and so on. In addition, the outer length of the stone compartment is ten times and the inner width is three times. And each drainage ditch runs along the mesh of ten times of the scale.

After examining other tumuli, it was revealed that the same scale was used for the Kitora tumulus and possibly for the Maruko-yama tumulus. So we can add a new analogy here between those of the final stage. If lacquer pieces are fragments of wooden coffin ornament, the Takamatu-zuka tumulus is also comparable to the Ishinokarato tumulus. As we forecast before they shared many features and must have been made almost homogeneously.

Further to say, if the gold ball found in the soil was the coffin or palanquin ornament that was prohibited to use in 721 A.D. by Genmei empress, we can estimate the latest dating of the Ishinokarato tumulus. On the contrary, according to the recent studies of their paintings, the date of those similar tumuli can not be

earlier up to the 7th century. So we could say that the Ishinokarato tumulus was made at about the beginning of the 8th century on the northern hinter land of the Heijō palace. We guess the person who was buried here may be the family member of the emperor or empress.

The Onjogadani tumulus is located on the top of the projected hill of Narayama. Current condition of the mound was generally damaged and the stone chamber was destroyed almost perfectly. So we could not know the original shape of the tumuli before excavation. But after the excavation we could find the linear cutting to separate the mound from the hill, the original shape of the mound was made clear to be keyhole-shaped. Keyhole-shaped mounds were made for ancient elites during the 3rd to the 6th centuries. The size of the mound is estimated 22 meters long.

Stones used for stone chamber were almost removed and grave goods were also stolen. We can hardly know about the original form of the chamber. But remained drainage on the floor of the chamber and the form inferred from the distribution of the removed stones tell us that it is immature corridor-style stone chamber having primitive passage to southern direction. Size of the chamber is about 3.7 meters long and 1.7 meters wide. Burials were done more than twice on the analysis of the Sue ware pottery between the former half of the 6th century and the latter half of the same century. Remnant grave goods are horse ornaments, iron arrows, iron tools, a jasper cylindrical bead and Sue wares.

Most impressive findings of the Onjogadani tumulus are haniwa figures of so much variation. Mass volume of them was excavated from the linear cutting between the hill and the mound. Horse shaped haniwa were especially the most outstanding among them. One of them has a special riding equipment. The equipment is hanged from the saddle on the right side of the horse to rest rider's feet. From very limited materials the equipment is thought to be used for female when riding. It can be said that it is the first example that can show us the whole image of that kind of horse. There are four other horses here and of which two could be regained their original forms. We know from their variation that horses were utilized in many ways in the 6th century. Perhaps the variety of the five horses is not outstanding but ordinary for the elites' tumuli in the 6th century.

Other than horses, many kinds of animal figures were found. For example, there are cattle which have not been reported more than six until now. And two dogs and one bird are also identified.

Human figures are not so many. But haniwa representing utensils are also many and including very rare ones. Among them Sōkyaku rinjōmon-shaped (i.e. wheel-shaped circle with two ribbon-like projections) haniwa are the most important. The shape can hardly be seen on the wall paintings of the 6th century stone chambers

in Kyūsyū district.

Ritual staff-shaped haniwa are of much volume and the size can be divided into two. Small ones were used on the top and edge of the mound. On the contrary, big ones might be used at such the special area where human and animal figures were gathered as the top of square part of the mound. This is the first example to show us their standing patterns.

This abundant image of minor classed tumuli's haniwa in Kinki district has not been supposed until today. But now we have to reexamine the similar findings excavated in old times. Today as for huge tumuli excavations are undergoing as such as the Imashiro-zuka tumulus in Osaka prefecture and more abundant haniwa figures are appearing. Until now Kinki district seems to have lost its hegemony in haniwa production in the 6th century, but consequently, we have come to say that Kinki district still had the same big power to the whole Japan in haniwa making as the former 4th and 5th centuries.

Other two tumuli are briefly mentioned in this report.

NARAYAMA EXCAVATION REPORT I

INVESTIGATIONS OF THE ISHINOKARATO TUMULUS AND THE ONJOGADANI TUMULUS

CONTENTS

Chapter I Introduction ..	
1 Circumstances and Outline of the General Research	1
2 Historical Environment	2
3 Organization of the Excavations	5
Chapter II Ishinokarato Tumulus	7
1 Previous Studies	7
2 Outline of the excavation	9
A Division into the Sectors of the Excavated Area	9
B Diary	11
3 Location of the Site	16
A Geographical Environment	16
B Current Condition	17
4 Research Data	19
A Features	19
B Findings	43
Chapter III Onjogadani Tumulus	46
1 Location of the Tumulus	46
2 Outline of the Excavation	46
A Division into the Sectors of the Excavated Area	46
B Diary	49
3 Research Data	52
A Current Condition	52
B Features	52
C Findings	63
Chapter IV Excavations at Points No. 13 and No. 15	104
1 Process of the Researches	104
A Outline of the Excavations	104
B Diary	106
2 Result of the Excavation at Point No. 15	106

A Location of the Tumulus	106
B Features	108
C Findings	109
D Reconstruction of the Mound and Dating	110
3 Result of the Excavation at Point No. 13.....	111
A Features	111
B Findings	113
Chapter V Studies and Analyses	115
1 Reconstructing of the Process of the Ishinokarato Tumulus	115
2 Study on the Planning of the Ishinokarato Tumulus	119
A Mound	119
B Compartment Protecting a Coffin	121
C Jōen- kahōfun Style Mounded Tumuli	122
3 Comparison of the Similar Tumuli in the Final Kofun Period	123
A Mound Planning.....	123
B How to Build the Mound	126
C Comparison of the Compartments Protecting the Coffin	127
D Coffins and Grave Goods	128
E Gold Sheet	130
4 Scientific Analyses of the Findings of the Ishinokarato Tumulus	132
A Gold and Silver	132
B Amber	134
C Lacquer Pieces	136
5 Studies of the Haniwa of the Onjogadani Tumulus	138
A Horse-Shaped Haniwa	138
B Cattle-Shaped Haniwa	139
C Sōkyaku Rinjōmon-Shaped Haniwa	141
D Ritual Staff-Shaped Haniwa.....	144
E Characters of the Haniwa of the Onjogadani Tumulus.....	145
Chapter VI Conclusion	148
English Summary	151

COLOR PLATES

- | | | |
|---|---|--|
| 1 | Far view of the Ishinokarato tumulus | of the Ishinokarato tumulus |
| 2 | 1. Mound and drainage ditches of the Ishinokarato tumulus | 2. Findings of the Ishinokarato tumulus |
| | 2. Tomb passage and its filled soil of the Ishinokarato tumulus | 3. Gold sheets found at the Ishinokarato tumulus |
| 3 | 1. Inner view of the stone compartment | 4 1. Haniwa assemblage of the Onjogadani tumulus |

PLATES

ISHINOKARATO TUMULUS

- | | | |
|---|--|--|
| 1 | 1. Panorama of the Narayama hills | 2. Stone paving under the mound |
| | 2. Reconstructed mound | 3. Cross-section of the fill of the tomb passage |
| 2 | 1. Far view from above | 4. Cross-section of the mound |
| | 2. Scene before excavation | |
| 3 | General Scene | 10 1. Door of the stone compartment |
| 4 | 1. Close view of the mound | 2. Back wall of the stone compartment |
| | 2. Close view of the mound | 11 1. Eastern side wall and ceiling of the stone compartment |
| 5 | 1. Close view after digging up the tomb passage | 2. Inner view of the ceiling of the stone compartment |
| | 2. Tomb passage | 3. Western side wall of the stone compartment |
| 6 | 1. Paving stones on the Square base | 4. South-western corner of the stone compartment |
| | 2. A corner of the Square base | |
| | 3. Paving stones on the slope of the Square base | 12 1. South half of the stone compartment |
| | 4. Terrace of the Square base | 2. Surface of the side wall of the stone compartment |
| 7 | 1. SD07 | 3. Outersurface of the stone compartment |
| | 2. SD03 | 4. Outer surface of the ceiling of the stone compartment |
| | 3. SD04 | |
| | 4. SD06 | |
| | 5. SD04 | |
| 8 | 1. Trench No. 4 | 13 1. Ornaments of the sward and bead |
| | 2. Trench No. 5 | 2. Amber beads |
| | 3. Trench No. 1 | 3. Lacquer pieces |
| | 4. Trench No. 9 | 4. Sue dish |
| 9 | 1. Mark of the removing roller rails | 5. Sue lid |

ONJOGADANI TUMULUS

- | | |
|---|--|
| <p>14 1. View from a far
2. Close view of the tomb</p> | <p>22 Horse-shaped haniwa (5)
23 Horse-shaped haniwa (6)</p> |
| <p>15 1. Close view of the tomb
2. Rectangle earthen pit
3. Haniwa <i>in situ</i> at the sector C
4. Haniwa <i>in situ</i> at the sector D</p> | <p>24 Animal-shaped haniwa (1)
25 Animal-shaped haniwa (2)
26 Human figurine haniwa
27 Wheel-shaped haniwa with two ribbon-like projections and shield shaped haniwa</p> |
| <p>16 1. Main burial facility of the tomb
2. Stone paving on the stone chamber floor
3. Drainage ditch under the stone chamber floor
4. Total scene of the drainage ditch</p> | <p>28 Ritual staff-shaped haniwa (1)
29 Ritual staff-shaped haniwa (2)
30 Ritual staff-shaped haniwa (3)
31 Sunshade-shaped haniwa</p> |
| <p>17 1. Y axis cross section of the mound
2. X axis cross section of the mound (center of the mound)
3. X axis cross section of the mound (foot of the mound)</p> | <p>32 Sunshade-shaped haniwa and house-shaped haniwa
33 Miscellaneous haniwa representing utensils
34 Cylindrical haniwa (1)</p> |
| <p>18 Horse-shaped haniwa (1)
19 Horse-shaped haniwa (2)
20 Horse-shaped haniwa (3)
21 Horse-shaped haniwa (4)</p> | <p>35 Cylindrical haniwa (2)
36 Cylindrical haniwa (3)
37 Sue ware
38 Metal objects and a bead</p> |

POINTS No. 13 AND No. 15

- | | |
|---|---|
| <p>39 1. General scene of the point No. 15
2. Moat of the tumulus of the point No. 15</p> | <p>4. Trench No. 1 of the point No. 13</p> |
| <p>40 1. Trench No. 5 of the point No. 13
2. Trench No. 4 of the point No. 13
3. Trench No. 3 of the point No. 13</p> | <p>41 1. Dual lines of haniwa of the point No. 13
2. Dual lines of haniwa of the point No. 13
42 Findings</p> |

PLAN

Plan of the Ishinokarato tumulus (1 : 80)

FIGURES

ISHINOKARATO TUMULUS

1	Distribution of archaeological sites around Narayama hills	3
2	Setting of trenches	10
3	Excavated features	15
4	Geographical map in the vicinity of the Ishinokarato tumulus	16
5	Current condition of the tumulus	18
6	Plane view and cross-section of trench No. 1	20 · 21
7	Cross-section of the fill of the tomb passage in trench No. 2	22
8	Cross-section of trench No. 6	24
9	Plane view of trench No. 7	24
10	Plane view and cross-section of trench No. 3	26 · 27
11	Plane view and cross-section of trench No. 5	28
12	Plane view and cross-section of trench No. 4	30
13	Plane view of trench No. 8	32
14	Plane view of trench No. 9	33
15	Cross-section of trench No. 2	35
16	Tomb passage and the stone compartment	36
17	Stone compartment	38
18	Inner surface of the stone compartment	40 · 41
19	Cross-section of the fill in the compartment and its floor	42
20	Findings	44
21	Pottery	45

ONJOGADANI TUMULUS

22	Distribution of archaeological sites near the Onjogadani tumulus	47
23	Sectors of the excavated area	48
24	Current condition of the tumulus	51
25	Distribution of the features	53
26	Cross-section of the ditch	54
27	Plane view and cross-section of the rectangle earthen pit	54
28	Haniwa <i>in situ</i> at the sector C	55
29	Haniwa <i>in situ</i> at the sector D	56
30	Floor of the stone chamber	57
31	Plane view and cross-section of the drainage ditch	58
32	Drainage ditch after removing the cover stones	59
33	Distribution of the grave goods in the stone chamber	60

34	Cross-sections of the mound	61
35	Horse-shaped haniwa (1)	64
36	Horse-shaped haniwa (2)	65
37	Horse-shaped haniwa (3)	66
38	Horse-shaped haniwa (4)	67
39	Horse-shaped haniwa (5)	68
40	Horse-shaped haniwa (6)	70
41	Horse-shaped haniwa (7)	71
42	Horse-shaped haniwa (8)	72
43	Horse-shaped haniwa (9)	73
44	Animal-shaped haniwa (1)	76
45	Animal-shaped haniwa (2)	77
46	Animal-shaped and human figurine haniwa	79
47	Wheel-shaped haniwa with two ribbon-like projections and others	81
48	Ritual staff-shaped haniwa (1)	83
49	Ritual staff-shaped haniwa (2)	85
50	Ritual staff-shaped haniwa (3)	86
51	Sunshade-shaped haniwa (1)	88
52	Sunshade-shaped haniwa (2)	89
53	Miscellaneous haniwa	91
54	Cylindrical butts of haniwa	92
55	Cylindrical haniwa (1)	94
56	Cylindrical haniwa (2)	95
57	Sue ware (1)	98
58	Sue ware (2)	100
59	Iron objects	101
60	Horse ornaments and a bead	102

POINTS No. 13 AND No. 15

61	Geographical map in the vicinity of the both point	105
62	Features of point No. 15	107
63	Cross-section of the No. 15 burial mound	108
64	Findings of point No. 15	109
65	Plane views of point No. 13	112
66	Cross-sections of point No. 13	113
67	Haniwa found at point No. 13	114

STUDIES AND ANALYSES

68	Reconstructing of the Ishinokarato tumulus	116
69	Planning of the Ishinokarato tumulus	120
70	Planning of the Kitora tumulus	124
71	Planning of the Maruko-yama tumulus	125
72	How to draw a hexagon	134
73	Infrared spectrum of the material (transparent part)	134
74	Infrared spectrum of the material (powder part)	134
75	X-ray fluorescence spectrum of the material (inner part)	135
76	Infrared spectrum of the lacquer fiber material	137
77	Infrared spectrum of the fibrous material	137
78	Cattle-shaped haniwa	140
79	Sōkyaku rinjōmon-shaped haniwa	142
80	Haniwa found in the pit No. 17 at the point No. 9	145

TABLE

1	Comparison of the four tumuli in the final stage of Kofun period	131
---	--	-----

図 版



1 奈良山丘陵全景 (平城宮上空から)



2 復元整備後 (南西から)



1 遠景 (南西上空から)



2 調査前 (南東から)



全 景 (真上から)



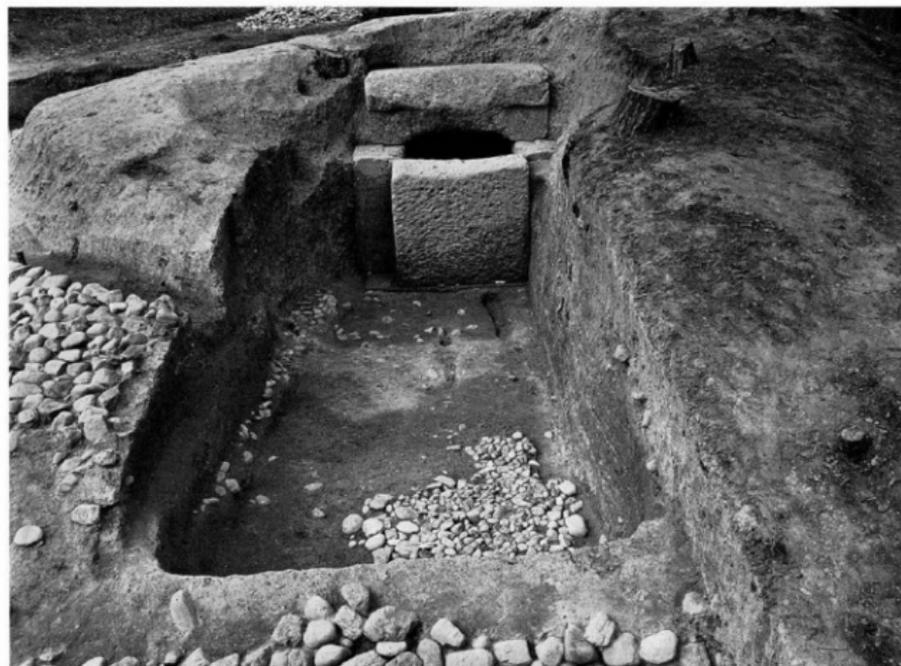
1 調査区近景（南から）



2 調査区近景（北西から）



1 調査区近景 墓道埋土除去後（南西から）



2 墓道（南から）



1 下部部葺石 (西辺 北西から)



2 下部部隅 (南西部 西から)



3 下部部斜面葺石 (西辺 西から)



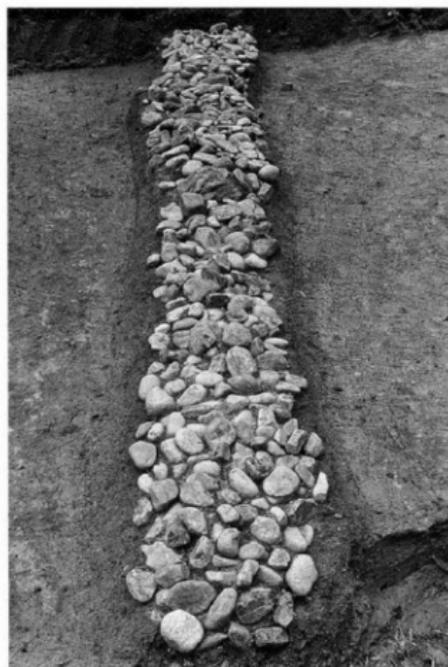
4 下部部テラス (南西部 北東から)



1 SD07 (北西証張区 南から)



2 SD03 (第10トレンチ 南から)



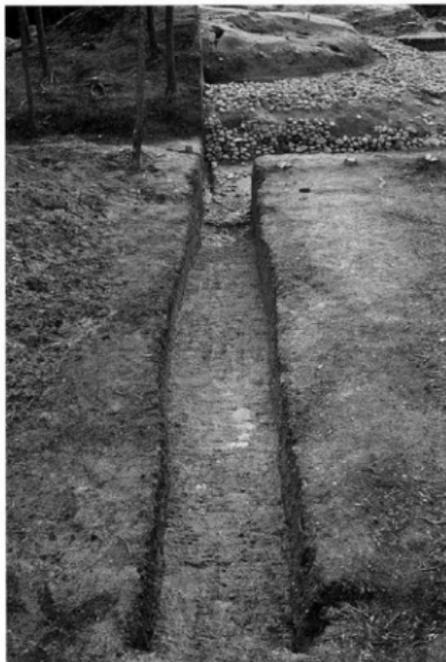
3 SD04 (第2トレンチ 東から)



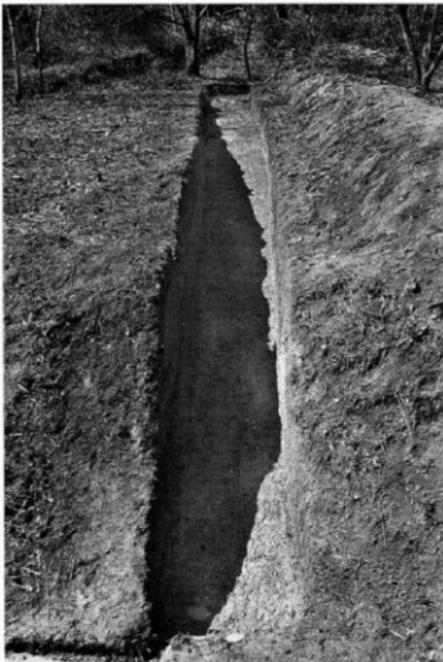
4 SD06 (第8トレンチ 北から)



5 SD04 (第7トレンチ 東から)



1 第4トレンチ (北から)



2 第5トレンチ (東から)



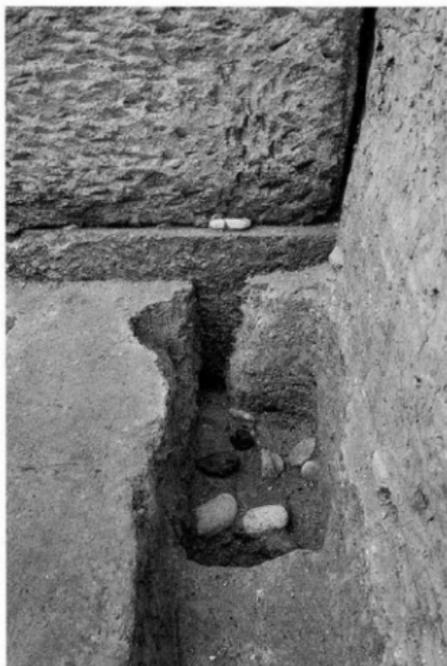
3 第1トレンチ (東から)



4 第9トレンチ (北西から)



1 コロレル抜き取り跡 (南から)



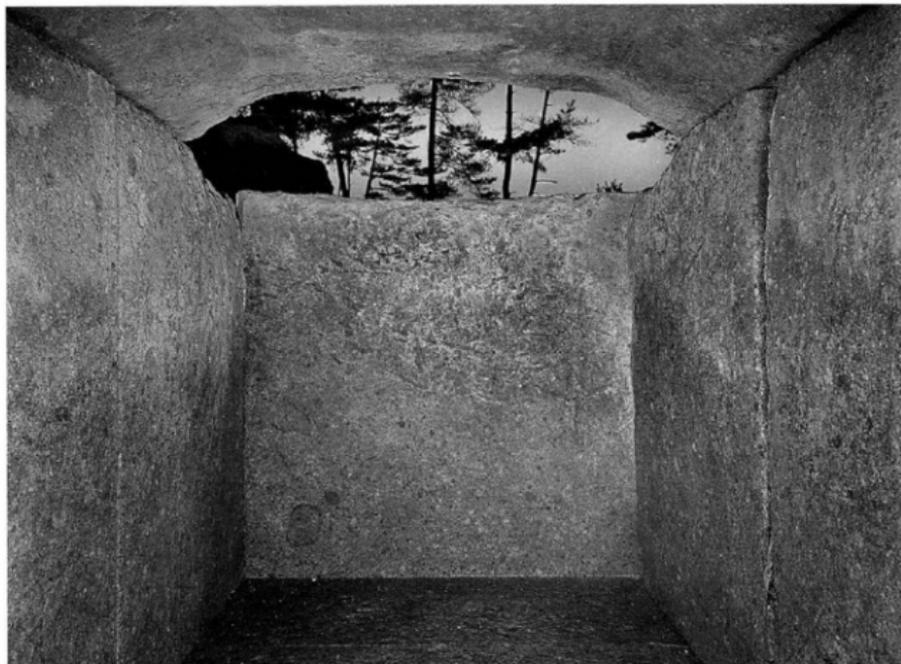
2 墳丘下磔敷 (南から)



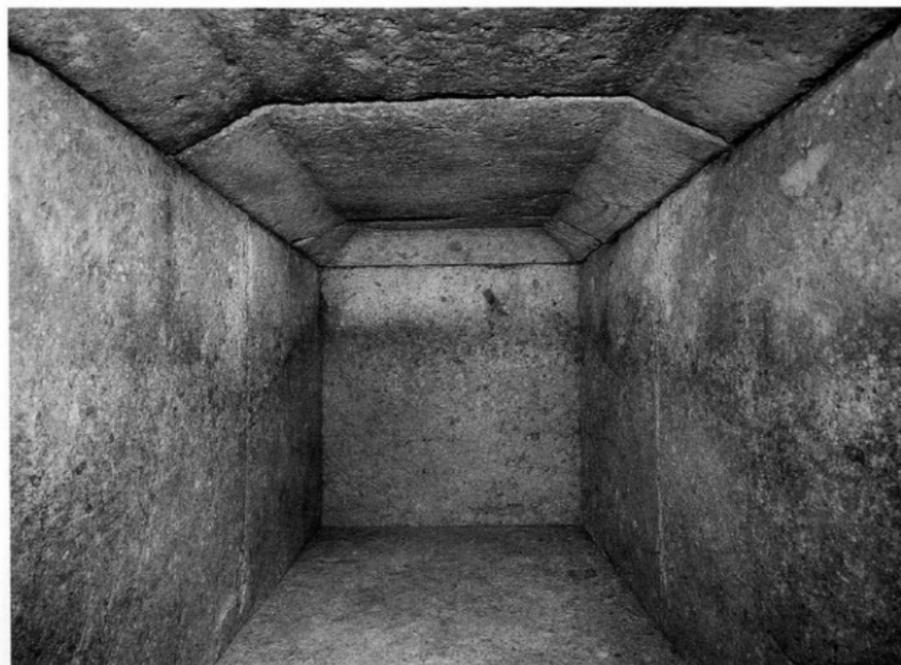
3 墓道埋土断面 第2トレンチ下方部 (東壁)



4 墳丘断面 第2トレンチ (西壁)



1 石塚原石（北から）



2 石塚原壁（南から）



1 石塚東側石と天井石



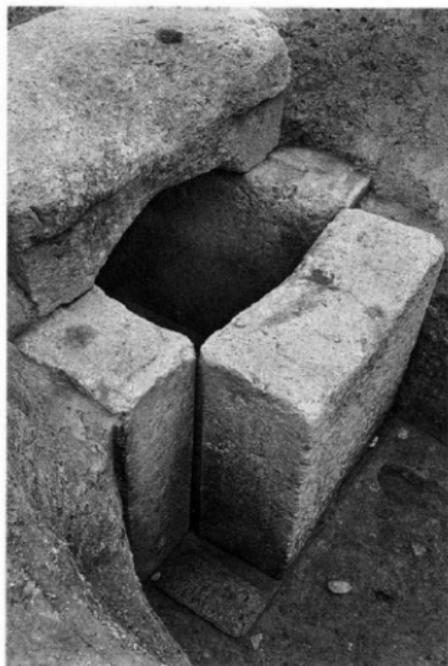
2 石塚天井石見上げ(北半)



3 石塚西側壁中央



4 石塚南西隅(左:扉石 右:西側石)



1 石塚南半 (南西から)



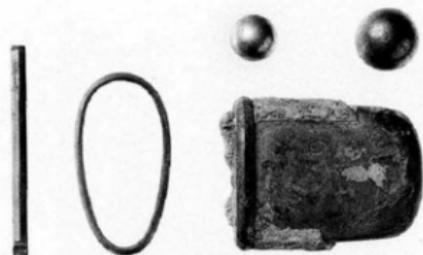
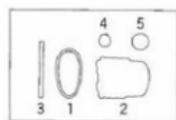
2 石塚側石上面の加工 (南から)



3 石塚北側外面 (北から)



4 石塚天井石上面 (北から)



1



2

3



1

4



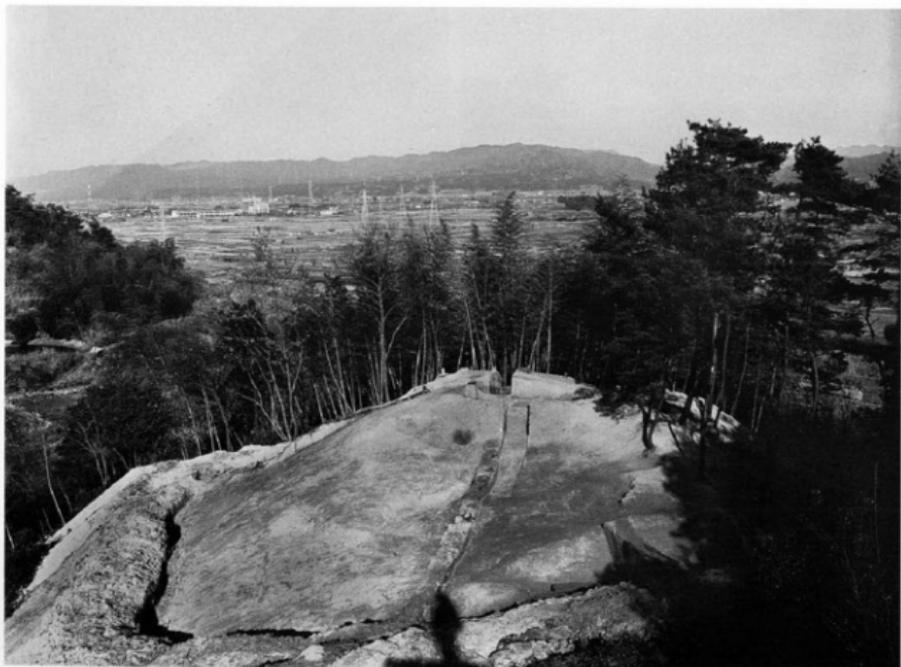
2

5

- 1. 大刀装具・玉類
- 2. 琥珀玉
- 3. 漆片
- 4. 須恵器皿
- 5. 須恵器蓋



1 遠景(東から)



2 調査区近景(南から)



1 調査区近景 (南から)



2 長方形土坑 (西から)



3 C区墳頂墳輪出土状況 (南から)



4 D区墳頂墳輪出土状況 (南から)



1 主体部 (真上から)



2 石室底面の礎敷 (南東から)



3 石室床下の排水溝 (南東から)



4 排水溝全景 (南東から)

1 Y軸墳丘断面
主体部東側



2 X軸墳丘断面
主体部北側



3 X軸墳丘断面
北側裾





馬形埴輪 (1)





馬形埴輪 (3)

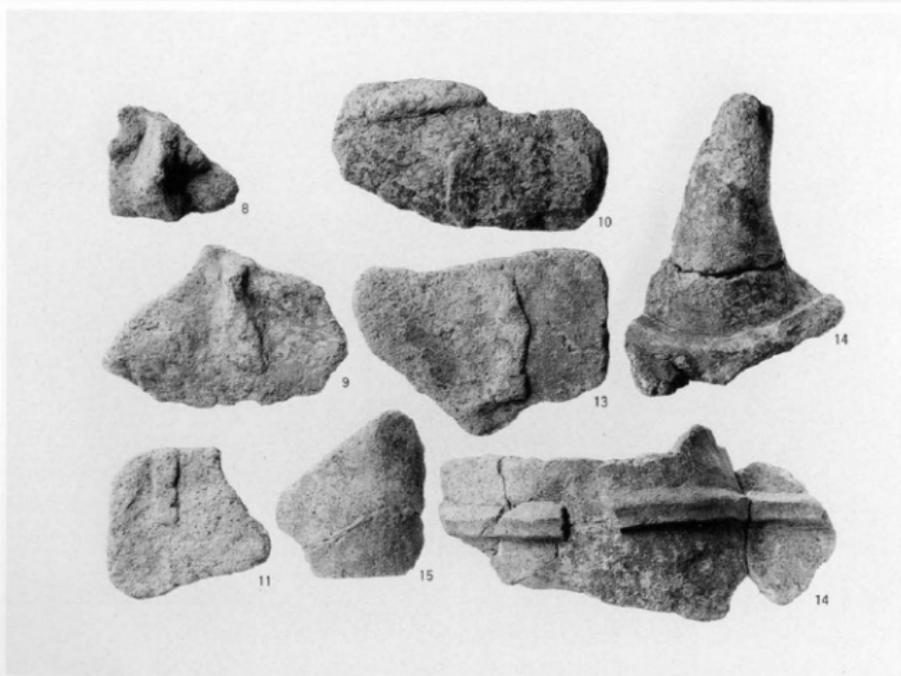
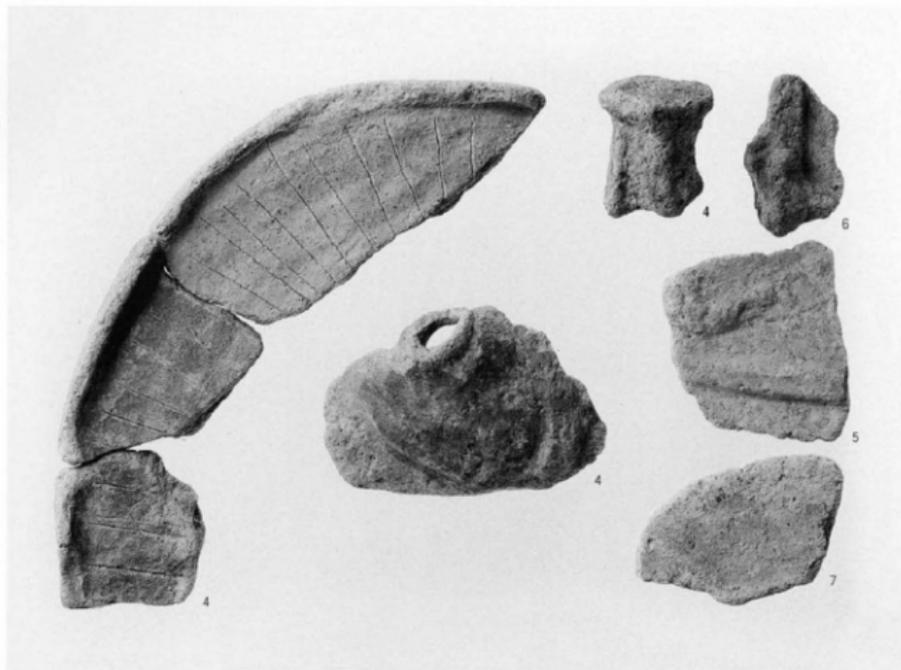


2



3

馬形埴輪 (4)



馬形埴輪 (5)



16



17



18



19



20



21



2

馬形埴輪 (6)



22

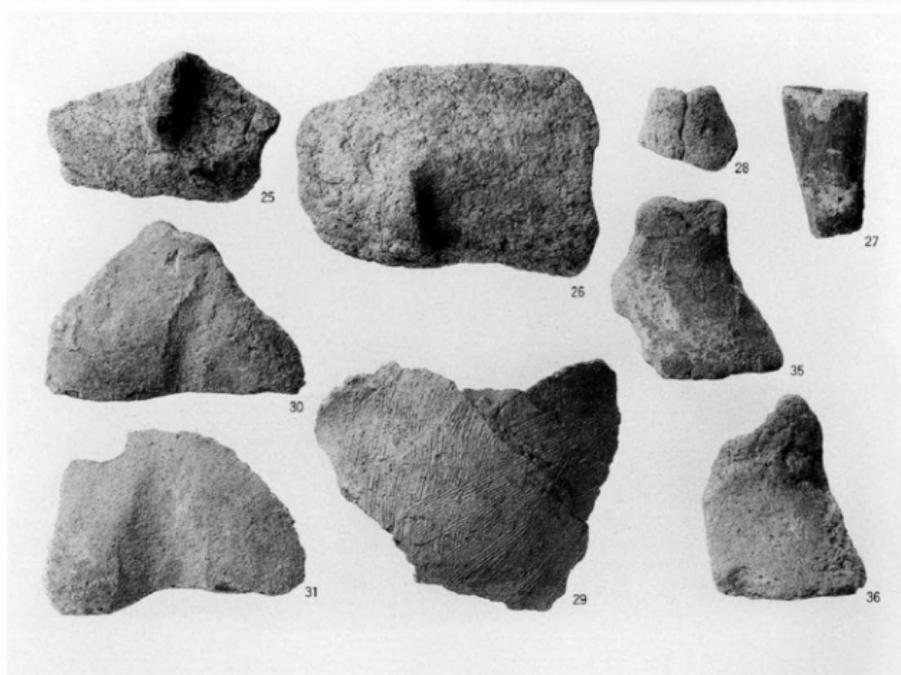


24

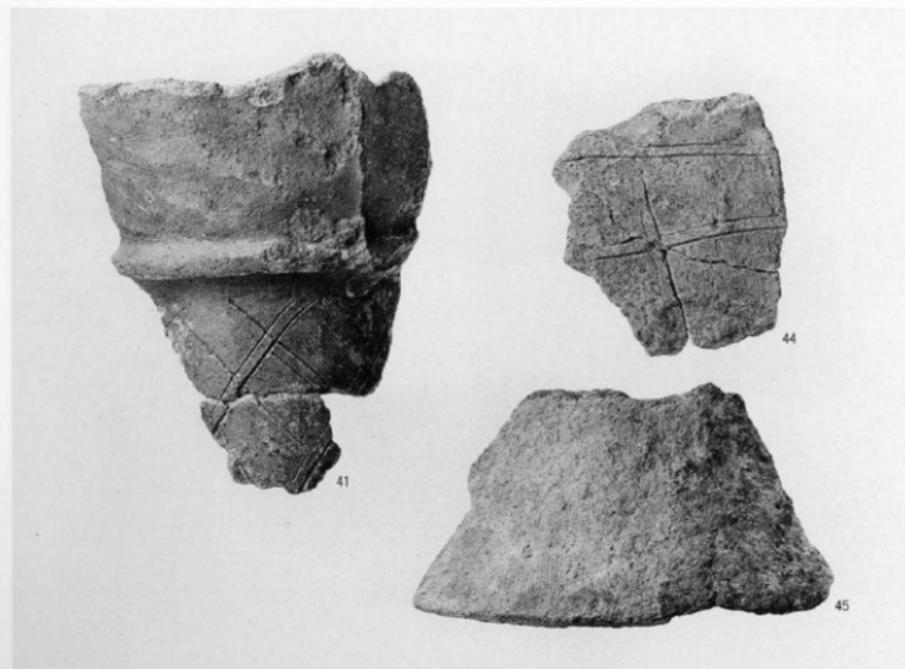
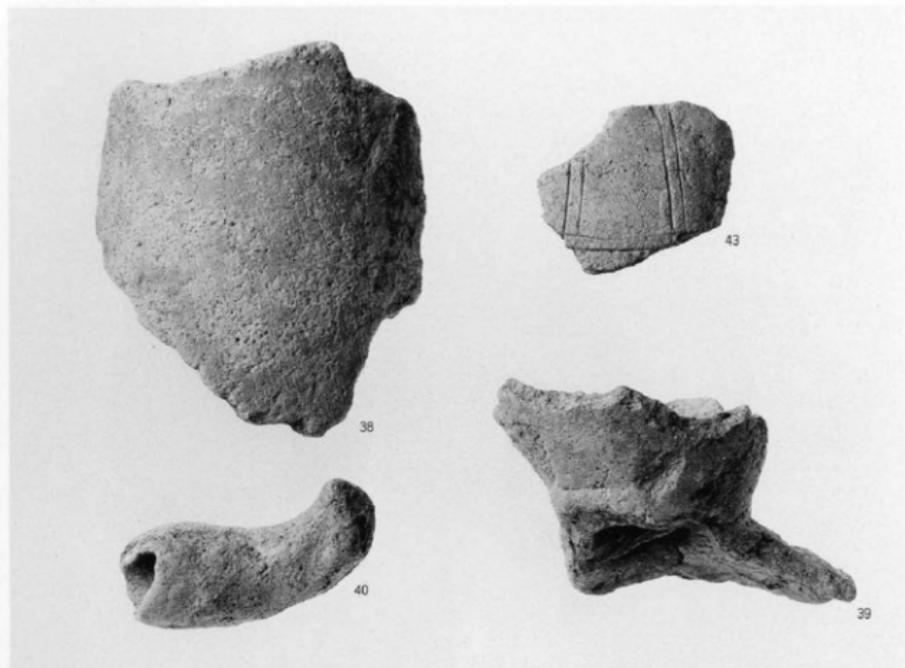


33

動物埴輪 (1)



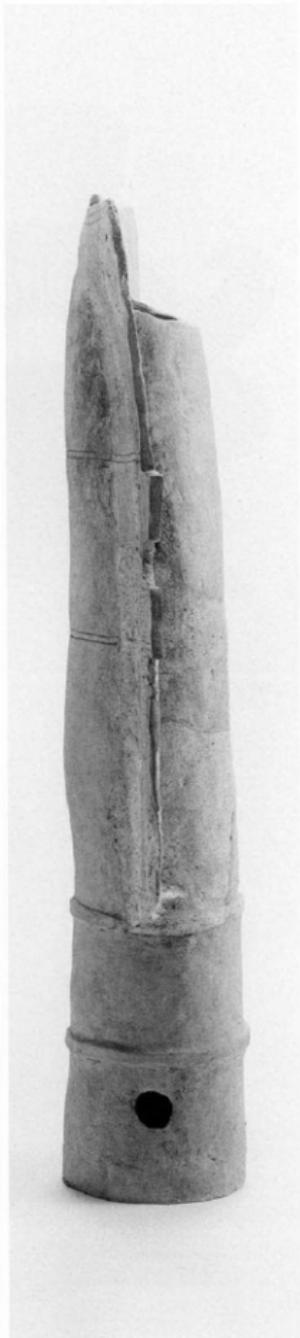
動物埴輪 (2)



人物埴輪



双脚輪状文形・盾形埴輪

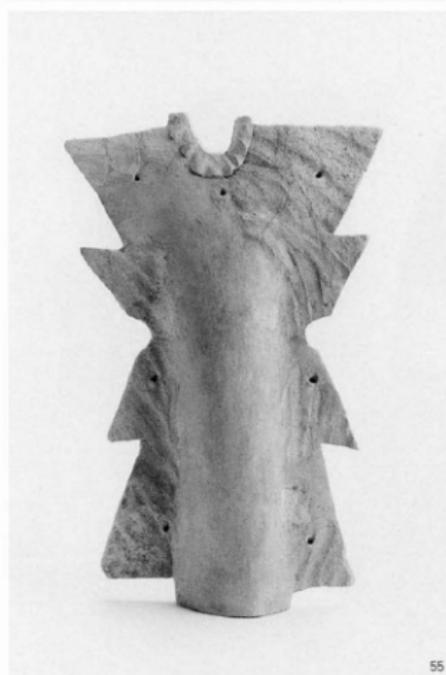
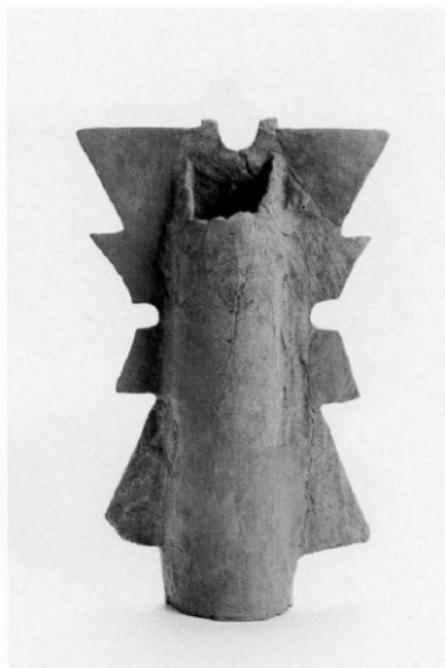


53

玉杖形埴輪 (1)



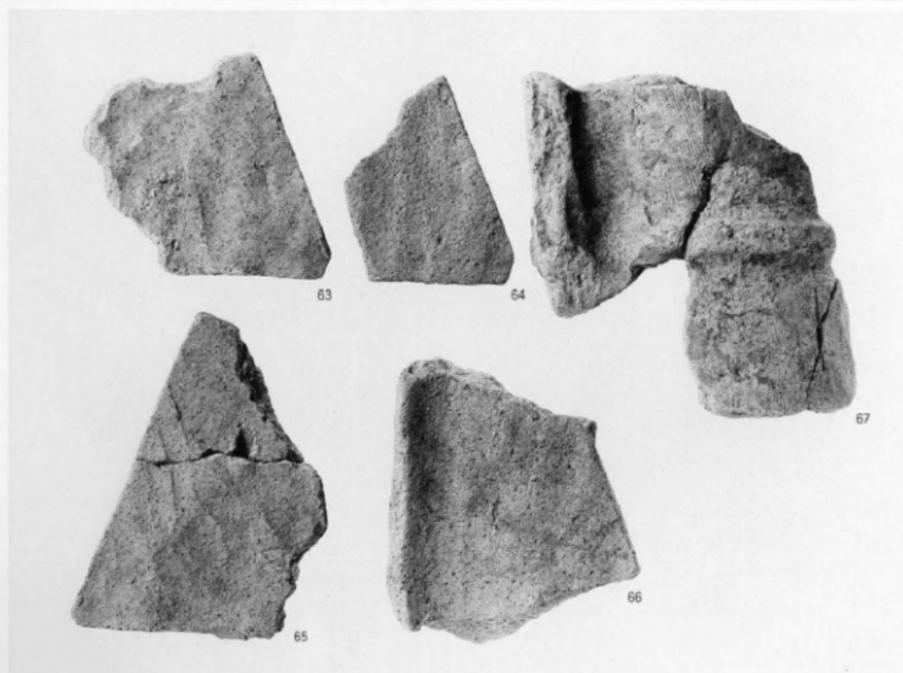
54



55



玉杖形埴輪 (2)



玉杖形埴輪 (3)



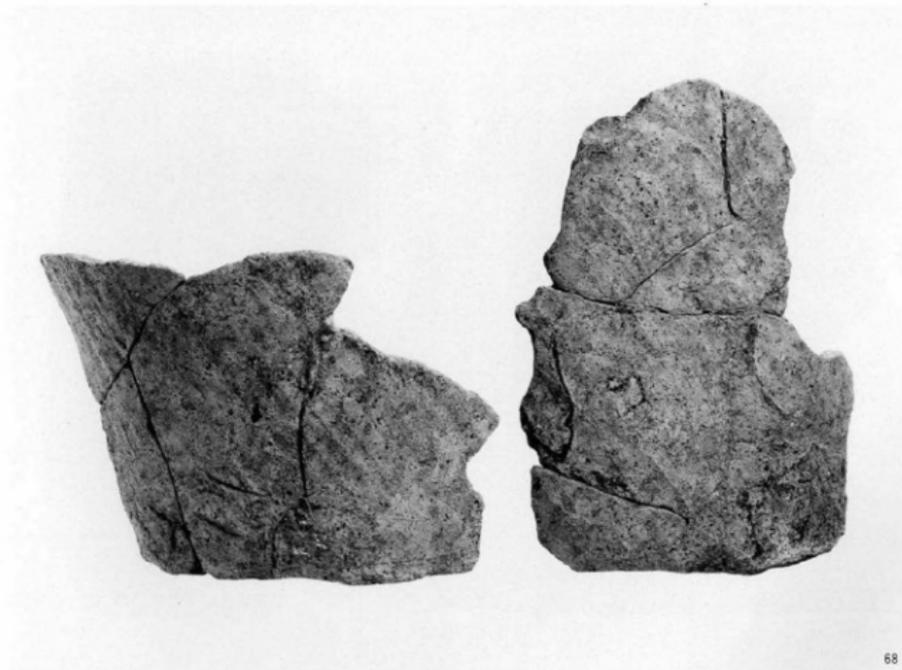
68



68

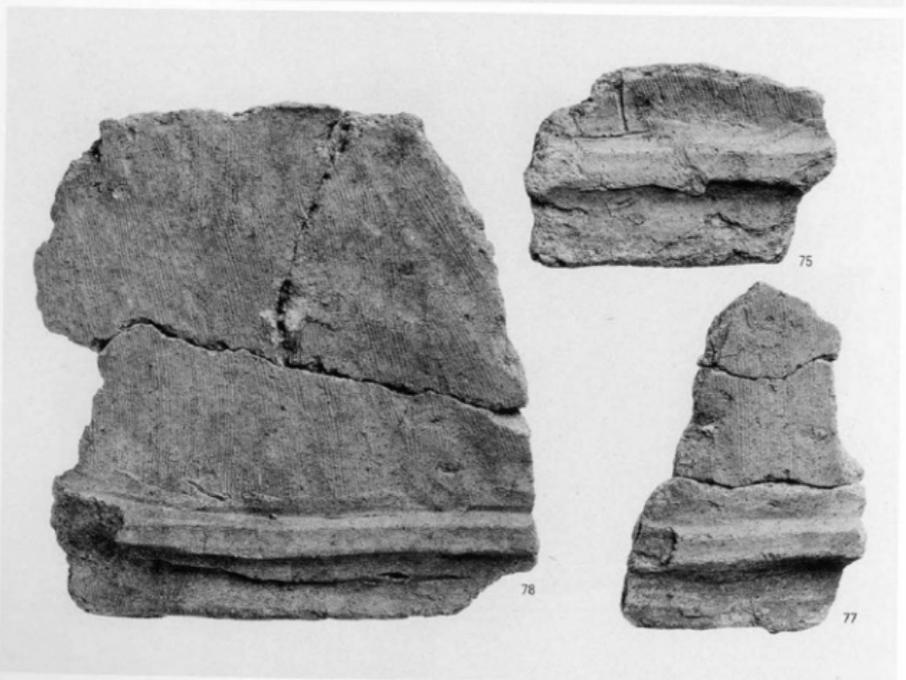
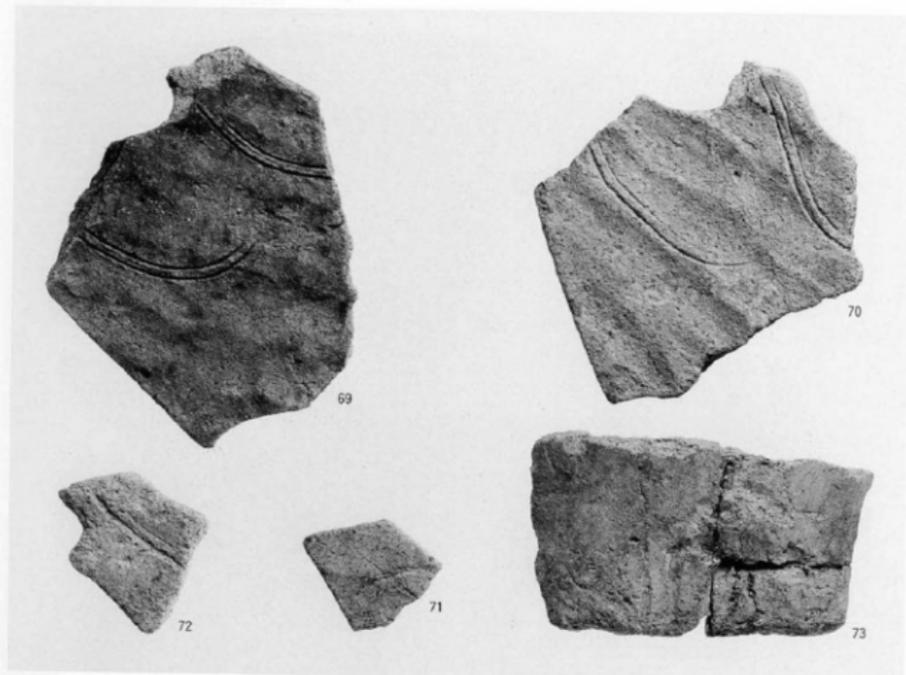


68

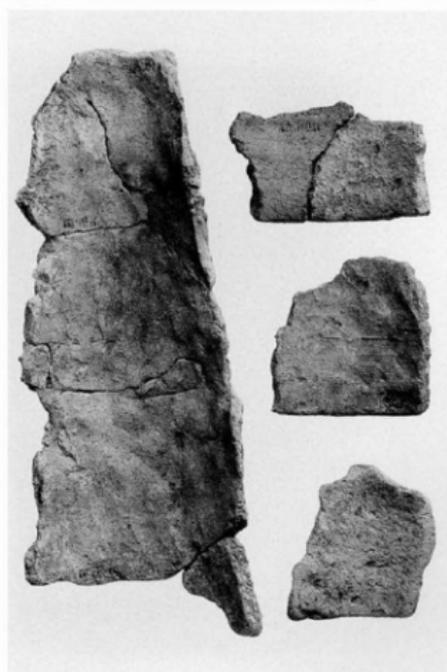
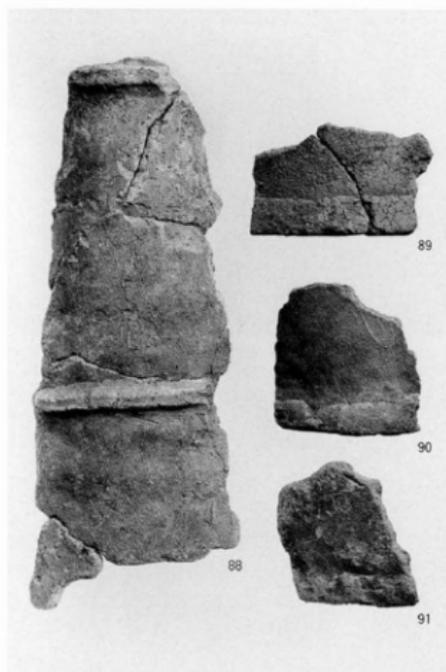
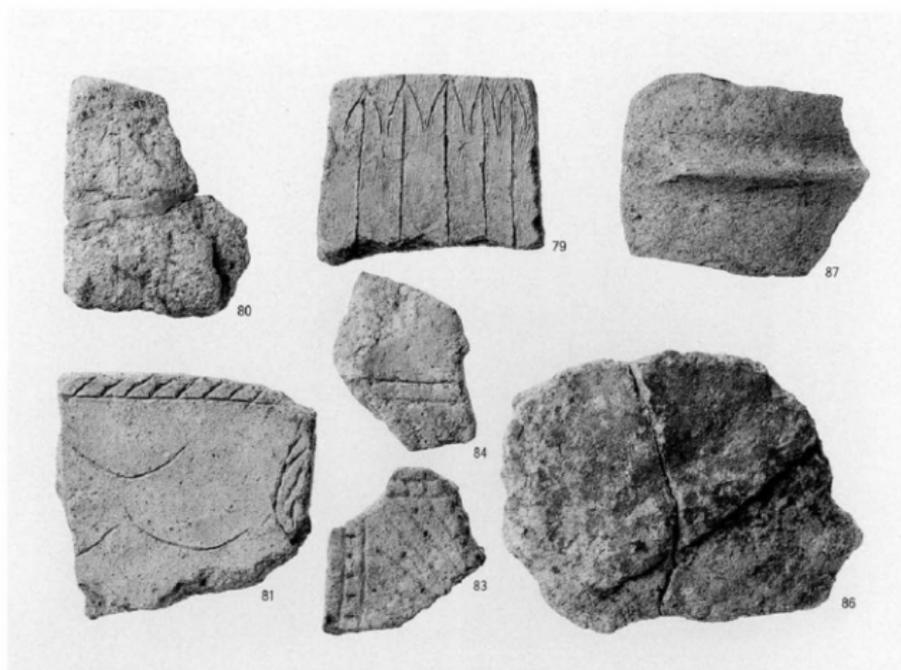


68

盃形埴輪



蓋形・家形埴輪



その他の形象埴輪



円筒埴輪 (1)



円筒埴輪 (2)



108



110



105

111

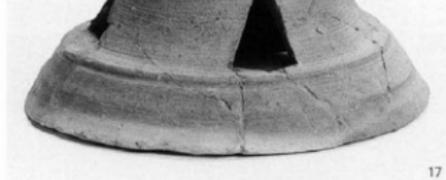
109

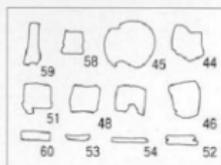
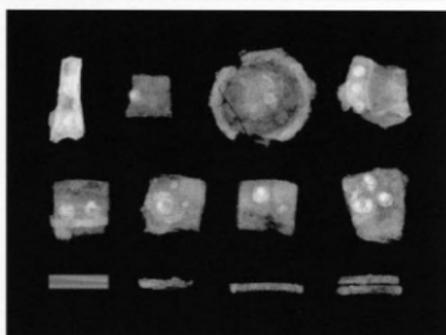
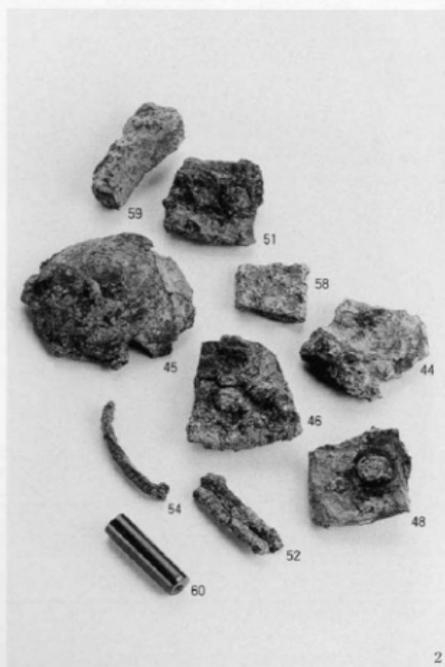
112



100

円筒埴輪 (3)





- 1. 武器・工具
- 2. 馬具・管玉
- 3. 馬具・管玉 (X線)

金属製品・管玉



1 調査区 (南西から)



2 周溝 (北西から)



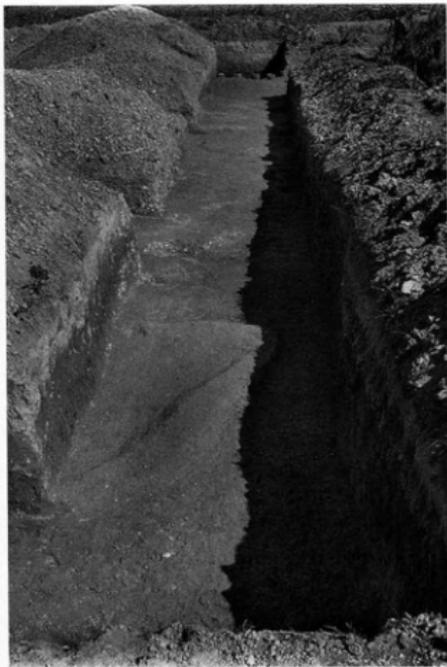
1 第5トレンチ (西から)



2 第4トレンチ (東から)



3 第3トレンチ (東から)



4 第1トレンチ (南から)



1 円筒埴輪列（東から）



2 円筒埴輪列（南から）



1



5



6



7



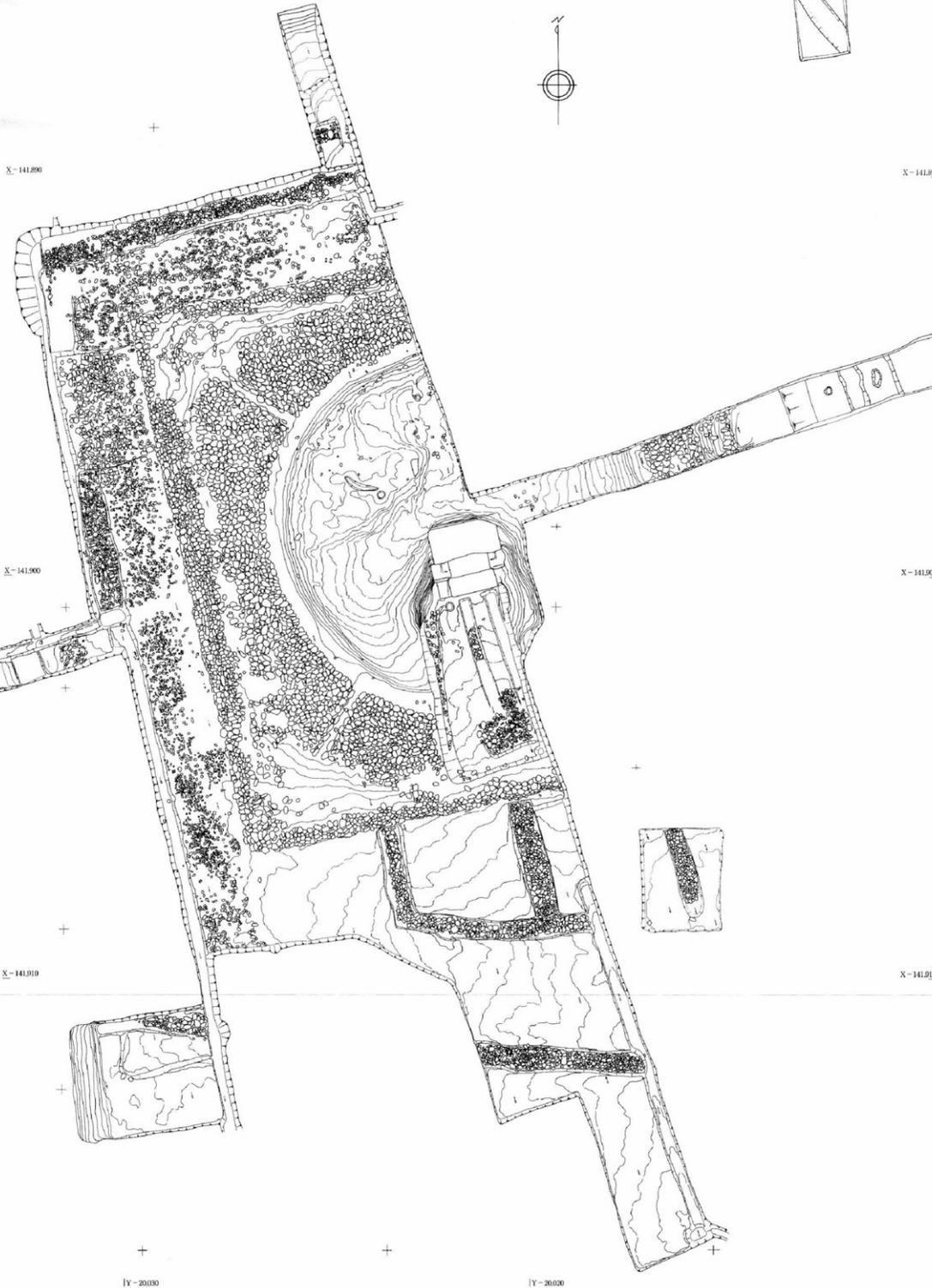
11



5



6



X-141,890

X-141,890

X-141,900

X-141,900

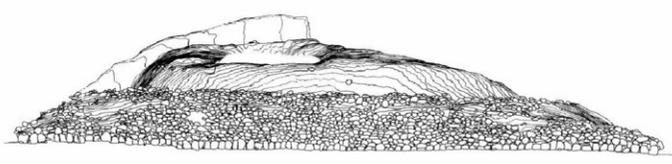
X-141,910

X-141,910

1Y-20030

1Y-20020

平面図



西面立面図

右のカタト古墳 80分の1透視図

報告書抄録

ふりがな	ならやまはくつちょうきほうこくいち						
書名	奈良山発掘調査報告Ⅰ						
副書名	石のカラト古墳・音楽谷古墳の調査						
巻次							
シリーズ名	奈良文化財研究所学報						
シリーズ番号	第72冊						
編著者名	高橋克壽・村上隆・佐藤昌憲・佐々木良子						
編集機関	独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所						
所在地	〒630-8755 奈良県奈良市二条町2丁目9-1 TEL 0742-34-3931						
発行年月日	西暦 2005年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東緯	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所取遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
いしのからとこじん 石のカラト古墳	なほんならしじんこう 奈良県奈良市神功1丁目 3丁目4丁目5丁目6丁目 京都府相楽郡和津町堂台2丁目	29201 26362	34° 43' 14"	135° 46' 53"	1979.1.9～3.29	313㎡	平城ニュー タウン予定 地の開発に 伴う調査
おんたよのたこじん 音楽谷古墳	おんたよのたこじん 木津町相家台7丁目	26362	34° 43' 13"	135° 48' 08"	1972.10.12～12.27	125㎡	
ならやま 発掘ごうちてんこじん 奈良山第15号地点古墳	さきよう 奈良市左京5丁目	29201	34° 42' 51"	135° 48' 53"	1972.9.25～9.27	60㎡	
ならやま 発掘ごうちてんこじん 奈良山第13号地点古墳	奈良市左京4丁目	29201	34° 42' 55"	135° 48' 43"	1972.9.26～9.29 1979.1.13～1.26	125㎡ 200㎡	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
石のカラト古墳	古墳	飛鳥～奈良時代	石櫓、墓道、墳丘、外周 平坦面、暗渠など。		大刀装具、金製玉、銀製玉、 琥珀玉、金箔、漆片、土師 器、須恵器。	凝灰岩切石で作られた横口 式石櫓を有する上円下方墳。 著名な高松塚、キトラ古墳 と似る。	
音楽谷古墳	古墳	古墳時代	石室、排水溝、墳丘、掘 削り、長方形土坑など。		円筒埴輪、形象埴輪、須恵 器、鉄器、工具、馬具、管 玉。	全長22mの6世紀前半に築 かれた前方後円墳。前方部 から転落した形象埴輪が数 百。	
奈良山第15号地点古墳	古墳	古墳時代	古墳時代		須恵器、埴輪、鉄斧、鉄釘。	5世紀後葉の小円墳。	
奈良山第13号地点古墳	古墳	古墳時代	古墳時代		円筒埴輪、形象埴輪。	墳丘の痕跡なし。埴輪は5 世紀末のもの。	

2005年3月25日 印刷

2005年3月31日 発行

奈良山発掘調査報告Ⅰ

— 石のカタ古墳・音乗谷古墳の調査 —

奈良文化財研究所学報第72冊

著作権所有
発行者

奈良市二条町2丁目9番1号
独立行政法人 文化財研究所
奈良文化財研究所

印刷者

京都市下京区油小路通仏光寺上ル
有限会社 真陽社

ISBN 4-902010-28-3

RESEARCH REPORT
OF
NARA NATIONAL RESEARCH INSTITUTE FOR
CULTURAL PROPERTIES, NARA, VOL. 72

NARAYAMA EXCAVATION REPORT I

INVESTIGATIONS
OF
THE ISHINOKARATO TUMULUS AND THE ONJOGADANI TUMULUS

INDEPENDENT ADMINISTRATIVE INSTITUTION
NATIONAL RESEARCH INSTITUTE
FOR
CULTURAL PROPERTIES, NARA

2005